# 1973年カンジロバ・ヒマール遠征報告書

## ——カンジェラルワ初登頂——



日本ヒマラヤ協会

HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

# 1973年カンジロバ・ヒマール遠征報告書

## ——カンジェラルワ初登頂——

日本ヒマラヤ協会

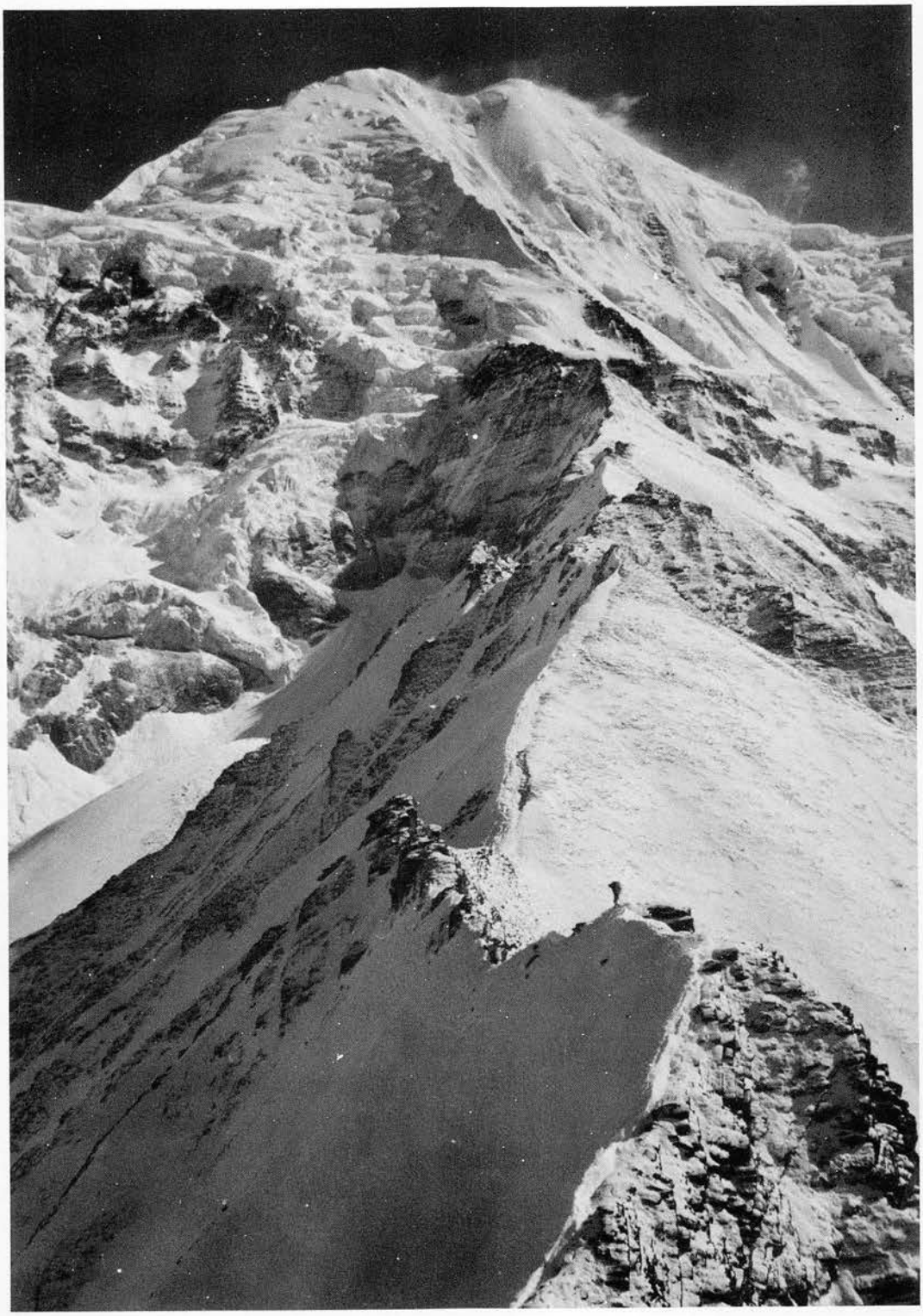
HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

# 1973年カンジロバ・ヒマール遠征報告書

## ——カンジェラルワ初登頂——

日本ヒマラヤ協会

HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN



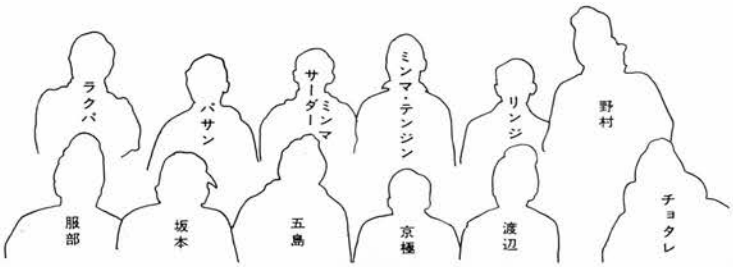
↑　C1からカンジェラルワ



スケッチ






スケッチ

## 隊長＆隊員紹介



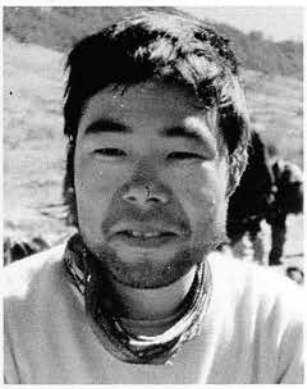
隊長　渡辺文仁



副隊長　服部　博



隊員　京極紘一



隊員　五島泰明



隊員　野村信昭



隊員　坂本真沙留

## リエゾンオフィサー＆シエルパ紹介



リエゾンオフィサー　チョタレ



サーダー　ミンマ・ツエリン



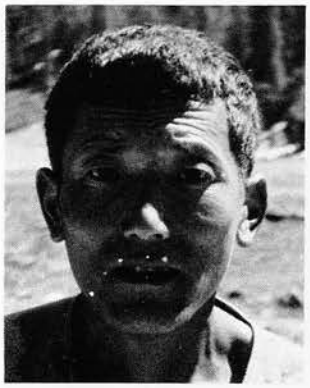
コック　ラクパ・ノルブ



シェルパ　ミンマ・テンジン



シエルパ　パサン・プルバ



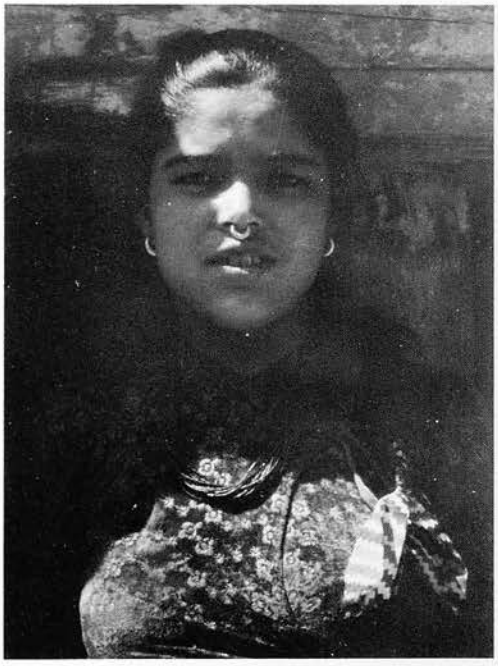
キッチンボーイ　リンジ・シェルパ



→ ジュムラ飛行場

ジュムラ飛行場にて隊荷再梱包 ↓





↑ ジュラム近くで出合った美女



← ジュラムのメイン・ストリート





↑ キャラバン４日目

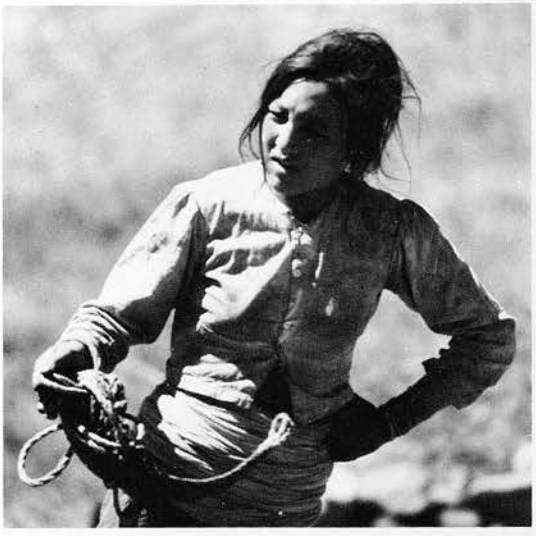
← ジュラム近くの村で



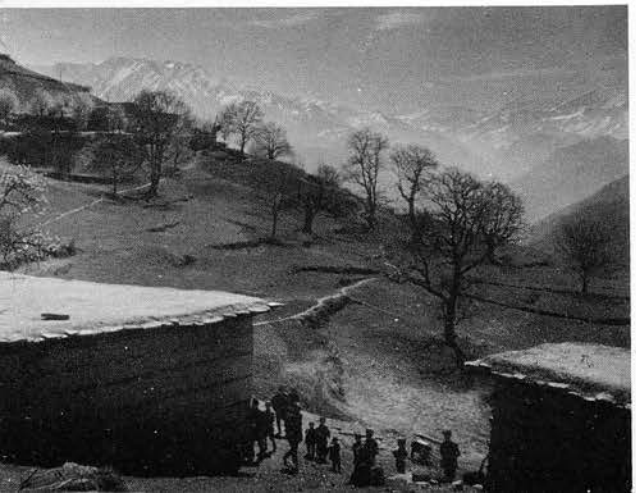
→ リミで



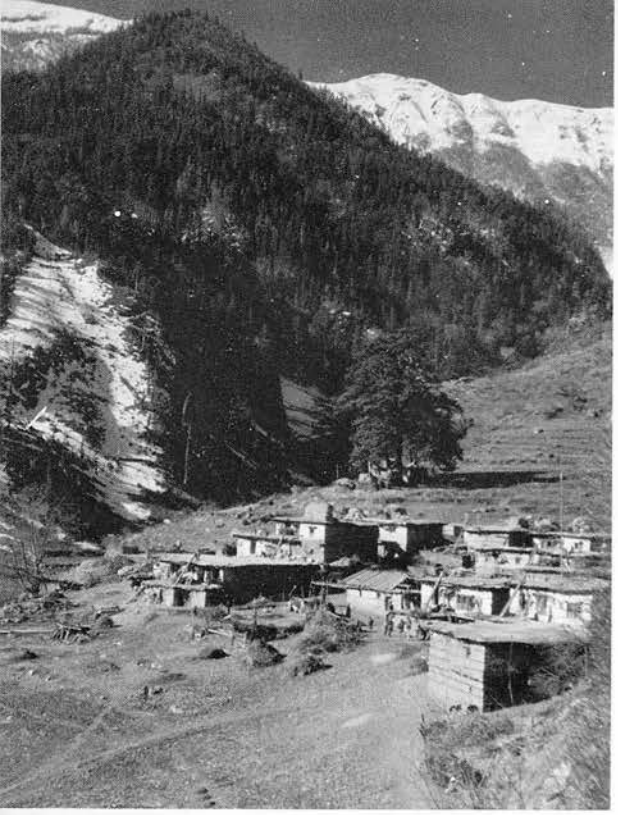
← チョッタで卵を売りに来た美少女



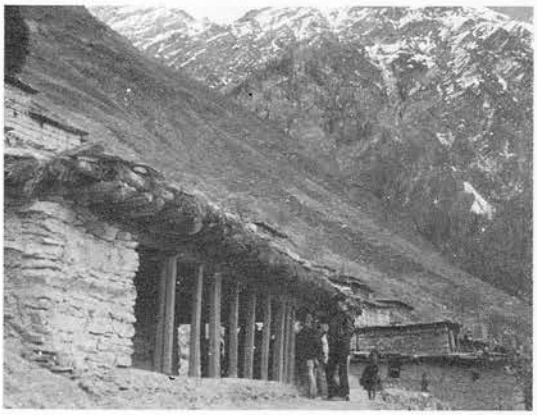
↑ ダーキンでマキを売りに来た年増美人



← ダーキン近くより遠くにダウラ・ヒマールを望む



↑　バンタリ



↑　ラハガオン



↑ スリ・カド、ドジャム・コーラ出合は真近い。



↑ B・Cでサレンギ（楽器）を弾く隊員

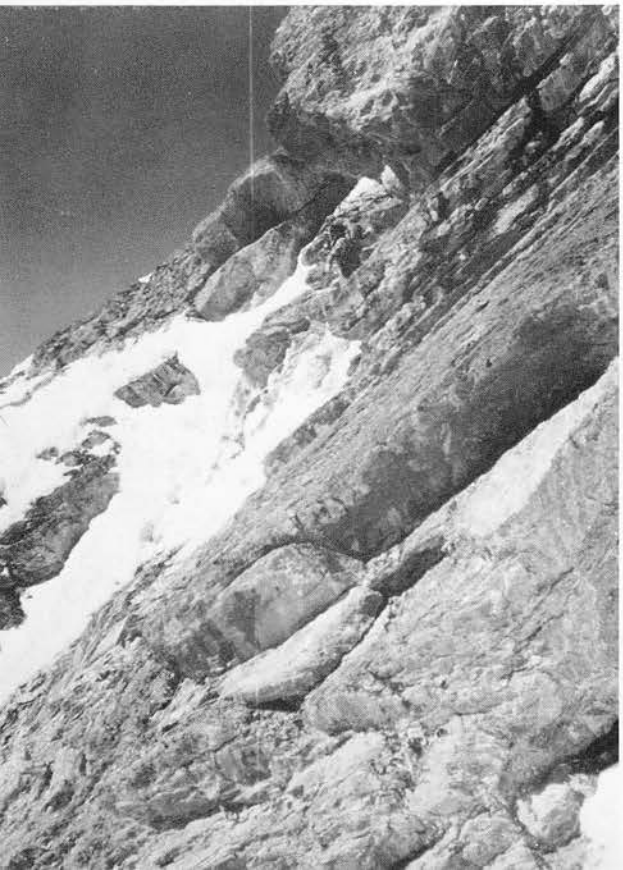


↑　C2～C3への岩稜



↑　C1～C2への荷上

↓　C2からC3へのキレットを巻くルート



↓　C3から直下のクルアール



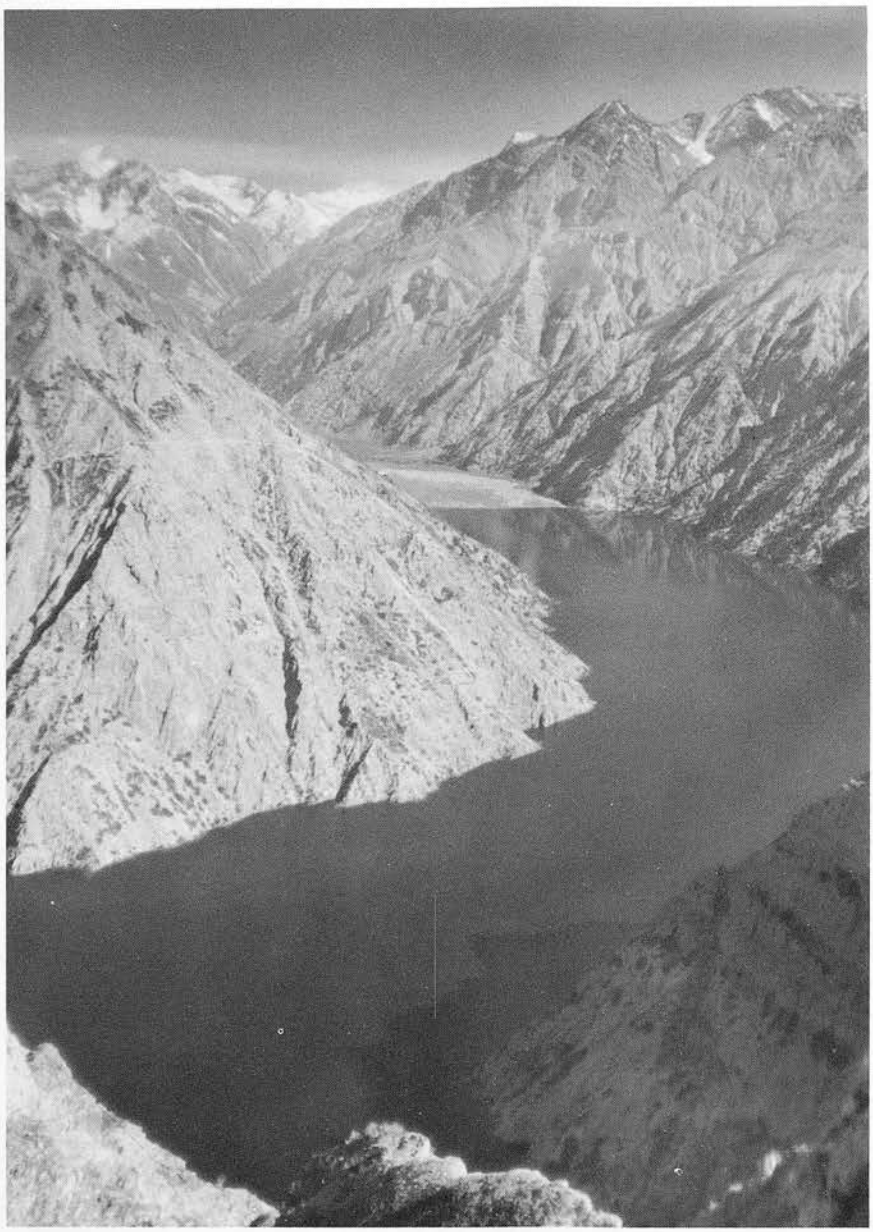
↑　C3 からC2へ下る

↓　C3 からC2 への帰途



↓　C3 からC4 への斜面





↑ フォクスンド湖とフォクスンド・コーラ上流の山々を望む



↑　プラトーからプンプンコーラ源頭を見る。左からラ・シャンマ、フルーテッ

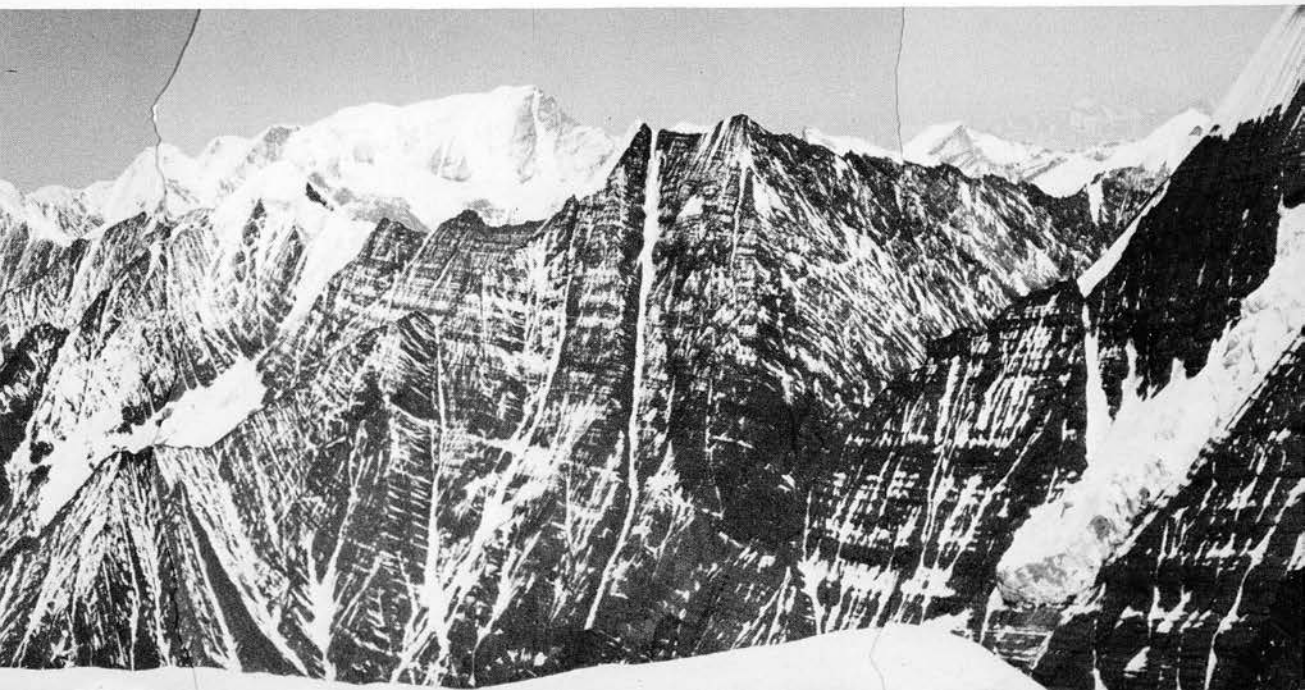
↓　$C_4$ 上部からのプンプン・コーラ源頭の山々と



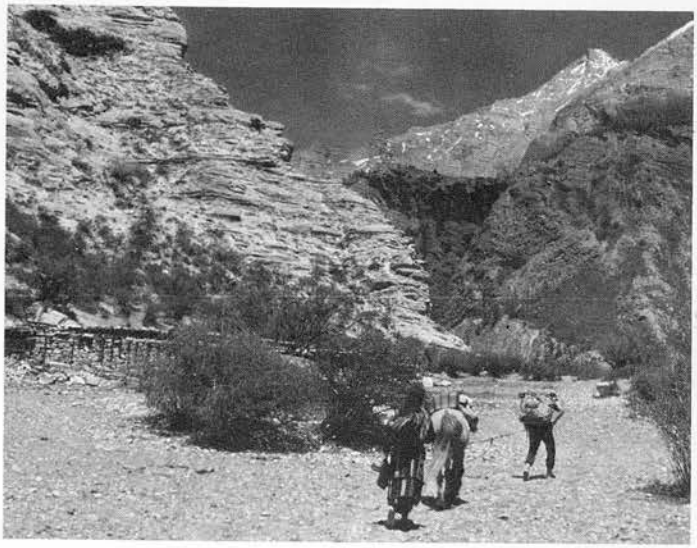


ークとプンプン・コーラ源頭の山々、中央遠方にカンジロバ主峰が見える

ハンギング・グレシャーピークス、ツオルポ・カン等

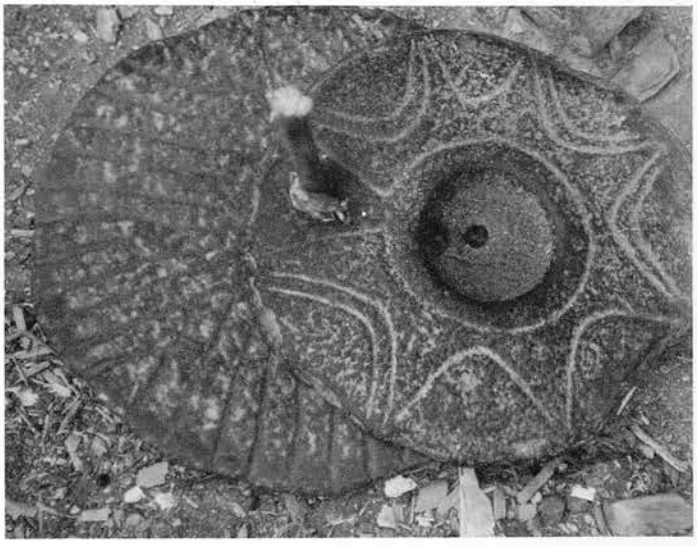


↓ リンモの冬村





↑ リンモからの帰路、カグマラの一部を望む



→ リンモで

↓ リンモの村近くからの
カンジェラルワ連山の南端のピーク





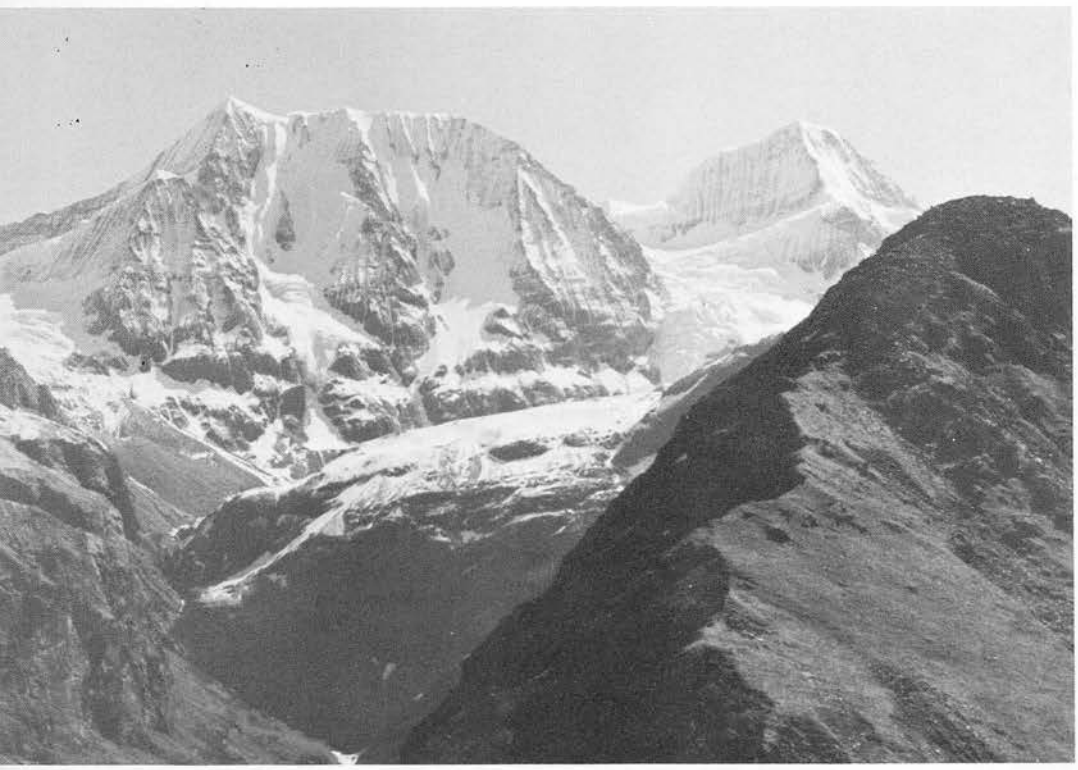
↑　帰路 カグマラ・ラへ向う



↑　$C_4$ からのカグマラ・レク 1



↑ C1か



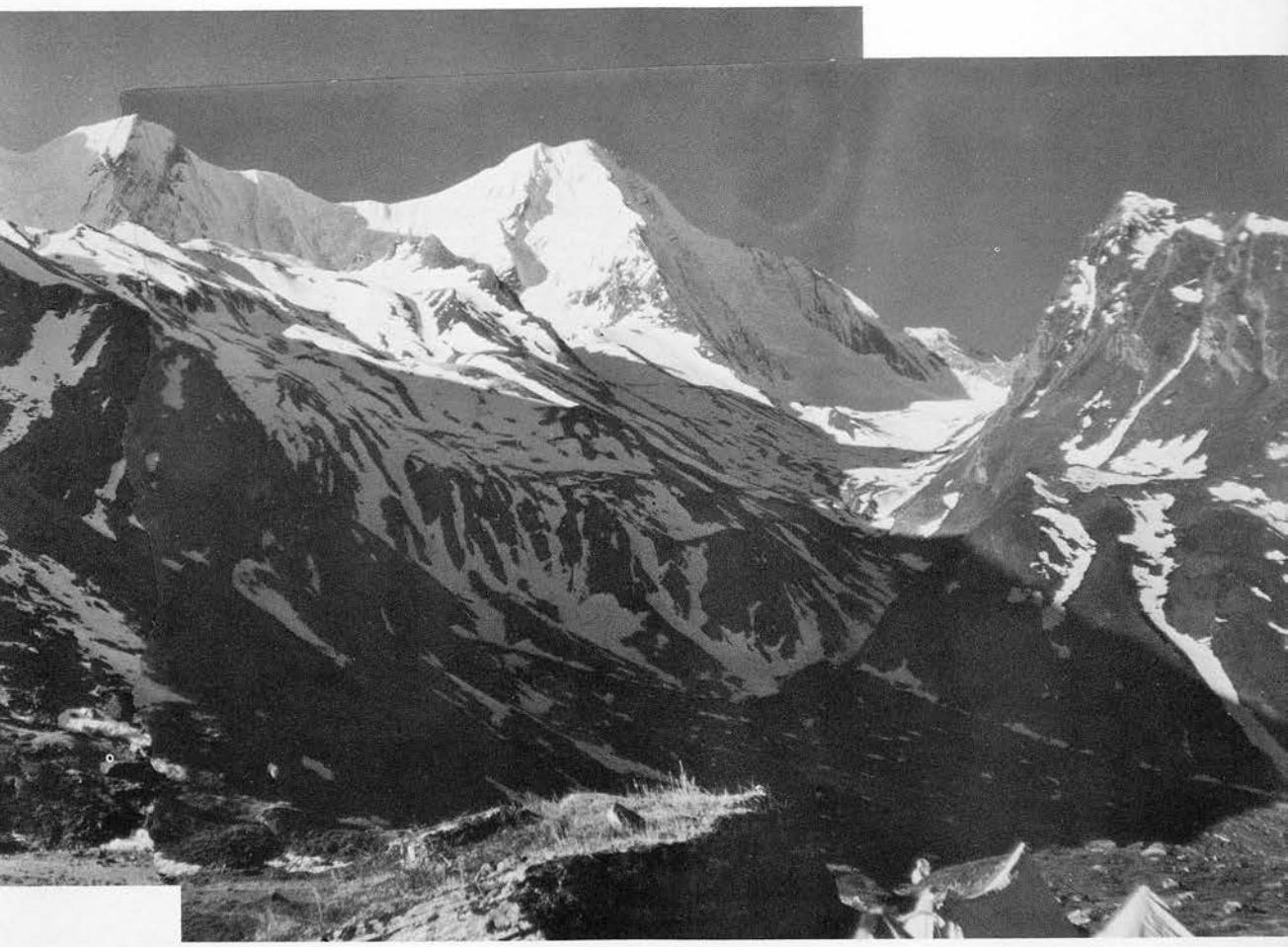
↑ ゴティ・ラからのギュウトンバ、マタトウンバ





プタ・ヒウンチュリ、チューレン・ヒマール等を望遠で撮る

↓　ガルプン・コーラ上流からのカグマラ連山



↓　プンプン・コーラ側からみたカンジェラルワ





↑　プンプン・コーラの内部

# ご あ い さ つ

日本ヒマラヤ協会（ＨＡＪ）
会長　柴田金之助

アンナプルナ連峰、マチャプチャレの朝日に輝く雄姿を眺めたのが、私のヒマラヤの山々とのはじめての対面でした。まだネパールがあまり一般に知られていない、１９６３年のことでした。ポカラからカトマンズへむかって飛び立った飛行機が、大きく旋回して方向をかえるとき、西の方にキラッと光った山脈が、小さく遠く見えました。あんなところまでネパール・ヒマラヤは続いているのだなあと思ったことでした。あれがカンジロバ・ヒマールの一角だったのでしょうか。

そして、それから10年近くたった１９７３年に北海道の会員が中心になってカンジロバ・ヒマールへ遠征を出したいという計画が立てられていると聞き、私は諸手をあげて賛成したのでした。日本ヒマラヤ協会としては、日本山岳協会の推せんを受ける、初めての遠征隊であっただけに、加盟団体である、東京都山岳連盟をはじめ、多くの方々のご援助は並々ならぬものでありました。これら多くの方々への感謝の気持を決して忘れることはありません。

本遠征隊は未踏峰であったカンジェラルワの初登頂をはじめとし、知られざる西ネパールの踏査などを成果とし、無事、終了いたしました。ここに遅ればせながら、公式報告書を発行するにあたり、ご協力、ご援助いただきました皆様に心からお礼を申し上げます。



# 発刊に際して

1973年日本ヒマラヤ協会カンジロバ遠征隊
隊長　渡辺　文仁



私達，カンジロバ遠征隊は，カンジロバ・ヒマール東部の未踏峰であったカンジェラルワの登頂に成功し，事故もなく全員が無事に帰国することができました。私達の“ヒマラヤに行きたい”という願望を有形，無形に支えて，ヒマラヤに送り出してくださった多くのかたがたに深く感謝もうしあげるとともに，私達は，計画どおり未踏の頂に立ち，全員が元気に帰国できたことをご報告できることを嬉しく思います。

7000 mに満たない山とはいえ，私達を最も引きつけた“未知”なるヒマラヤの魅力を持っていたカンジェラルワは，私達に夢とあこがれを具現化させてくれるところでもありました。山そのものの登攀は，結果としてはそれほどの困難はありませんでしたが，初登頂と，そして，ささやかながらも未知の地を探る喜びを持つことができました。

それはともかく，私達はこの遠征で登頂を第一義とするのは当然のことですが，シェルパ，ポーター，現地住民，そして，隊員間の結びつきを大切にし，遠征をより楽しいものにしようと考えておりました。各人の努力により，完全とはいえないまでもほぼ満足のできる結果を得たと思っておりますが，ヒマラヤ遠征一年生の集りにしては上できだったといえましょう。

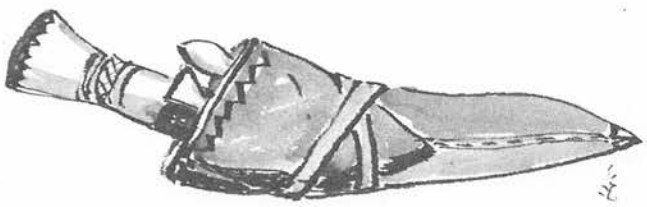
このつたない報告書から，私達がそれぞれに努力した経緯と結果をお読み取りいただければ誠に幸いと存じます。

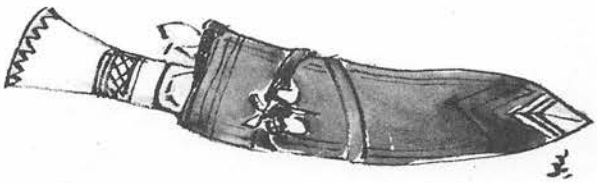
# □ 目　　次


□ ごあいさつ……21
□ 発刊に際して……23
□ 遠征隊組織……26

□ 第 I 部
□ 隊員紹介……29
□ 出発まで―計画・準備の経過……31

□ 第 II 部
□ 行動記録……39
□ 札幌―カトマンズ―ジュムラ……39
□ ジュムラ―ベース・キャンプ……44
□ 偵察隊の行動……50
□ ベース・キャンプ―登頂……52
□ 撤収―帰路のキャラバン……75
□ 登頂記　第1次登頂……79
□ 　　第2次登頂……83
□ プンプン・コーラ探査……85
□ フォクスンド湖行……87




□ 第 Ⅲ 部

□ 登攀計画と実際の行動 …… 93

□ 登 攀 行 為 …… 96

□ キャラバン・ルートの決定まで …… 97

□ シェルパについて …… 98

□ 輸送について …… 102

□ 通関について …… 103

□ 梱包について …… 104

□ ポーターによる隊荷の輸送について …… 106

□ 医療について …… 108

□ 装備について …… 112

□ 食糧について …… 121

□ 会 計 報 告 …… 134

□ 留守本部記録 …… 135

□ 第 Ⅳ 部

□ Kanjiroba–Himal 入山各隊の行動概要 …… 139

□ アプローチの検討・Kanjiroba–Himal 登山に要した日数&キャンプ数 …… 159

□ ご協力者名簿 …… 162

□ 英 文 梗 概 …… 165

□ 編 集 後 記 …… 172


カット　今村　朋信　　作図　京極　紘一



## 遠　征　隊　組　織

(1)　日本ヒマラヤ協会遠征隊本部

Himalayan　Association　of　Japan　（略称ＨＡＪ）

日本ヒマラヤ協会東京事務所内

日本ヒマラヤ協会

会　　長　　柴　田　金之助

専務理事　　沖　　允　人

東京理事　　植　竹　清　孝　（都岳連担当理事）

〃　　木　村　与　吉　（遠征隊担当理事）

(2)　日本ヒマラヤ協会遠征隊事務局

札幌市中央区南１８条西１２丁目　阿部　淳方

事務局長　　阿　部　　淳　（北海道理事）

(3)　カトマンズ連絡所

I. M. Sherchan　（ネパール理事）

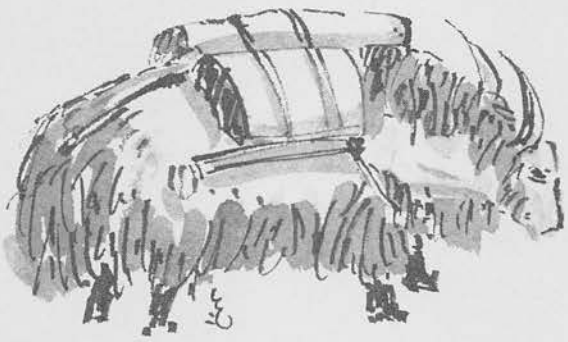
c/o Hotel　Lali　Guras,　Kathmandu－２１　Nepal

(4)　1973年日本ヒマラヤ協会カンジロバ遠征隊留守本部

遠征隊事務局内に置く。

注：役名はいずれも出発当時のもの。また、日本ヒマラヤ山岳協会は、昭和５１年４月より日本ヒマラヤ協会と改称したので本報告書ではこの名称を使うことにした。

# 第 I 部



# 隊員紹介

阿部　淳



この隊は二つの会の流れから成立している。えぞ山岳会と北海岳友会であり，古くから交流があって，隊員は互いに山や街での知り合いであった。隊長の誘いでスムーズに集ったのも，日本ヒマラヤ協会の存在はもとより，以上のような背景があった故であるといえよう。渡辺はえぞ山岳会を退会していたが，坂本を知っており，北海岳友会の４人のまとめ役は服部副隊長が一役買うことで意志の流れのパイプが自然とでき上っていった。みんな北海道の山を長く厳しく登ってきた仲間であるという意識のほかに，だれがどの山をどのように登ったかを容易に理解できる状態にあったことはチームづくりの上で大きなプラスになった。したがって山登りそのものは各母体となった山岳会で磨き，ヒマラヤに関する情報や知識や方法は日本ヒマラヤ協会で得て，ヒマラヤ隊の隊員として育ったと言える。そして 今回の遠征というプロジェクト（ディスカッションや合宿や研究準備活動）を通じて両者の融合と仕上げを行なったが，それもＨＡＪの機能を充分に活用することができた。

隊長　渡辺　文仁（３３才）　総括・渉外担当

北海道立図書館司書。小柄ながらラッセル車的性格の主。日高山脈を最も好んでいるが，夫婦岩北峰西壁北西カンテ冬期登攀，利尻岳仙法志稜西壁などの記録もあり，１９６８年エベレスト方面のトレッキングで今回の遠征の地固めを行なった。奥様にＪＡＣエベレスト隊の紅一点，渡部節子さんを迎え，ハネムーンに北岳バットレスを登った。よき副隊長とよきリエゾンを得，今回はペースに柔軟性をもたせて進めたが，山に取りついてからはほとんど休暇なしの登行を強調するセッカチさで登頂を急いだ。自らは足のネンザが再発したので，指揮に専念するために登頂を断念。

奥様と愛児の声を吹きこんだテープを内緒で持参し時おり外で聴いていたことがバレ，帰国後に話の種になった。

副隊長　服部　博（35才）　医療・輸送担当

札幌藻南郵便局勤務。北海学園大O.B。岩登りのベテランで温厚な人柄の中に炎のようなファイトを秘めている。悪絶で知られる大雪山・忠別川を36年ぶりに遡行（第2登），同白雲沢初遡行の記録をもち，また夫婦岩や赤岩の難壁に古い記録を残す。今回は全過程をとおして副隊長という女房役を完全に果たすとともに，若い隊員の苦情の聞き役も務め，隊長・隊員間のクッションという損な役目を全うした。体調も良好であったが，第1次登頂を若い隊員に譲って自ら二番手に回るなど兄貴分の貫禄を見せた。終始多忙な役の中で山や花の写真にも執念を燃やすなど，この遠征を最も大切にしたひとりである。

隊員　京極　紘一（28才）　装備担当

北海道教育委員会勤務。北海学園大O．B。氷や岩のベテランで，43年日ソ友好協会（RCC）のカフカズ山脈ウシバ南峰西壁凹角ルートで，後半をトップで通した技術の持主。利尻岳西壁Aフェース，芦別岳ﾌﾙﾝｾ奥壁ほか初登攀の記録も多い。今回はルート工作の先導的役割を果たすとともに，隊員間で気持の融和を心がけるなどチーム・モラルの向上に務めた。童顔も帰国時はいずこへか…，羽田の通関で東南アジア人に間違われた。当初，野村と共にヨーロッパを狙っていたが隊長に引き込まれてこのヒマラヤ行となった。帰国後1974年北海道カフカズ遠征隊隊長としてシヘリダ峰に京極ルートを拓き，1976年アラスカ・ブラックバーン峰にも遠征した。

隊員　五島　泰明（28才）　食糧担当

自営。北海学園大O.B。重厚な体格から，おうようなスケールの大きさと人情味が溢れる。積雪期の日高山脈縦走記録が多く知床連峰，大雪山塊への足跡も目立つ。岩登り，沢歩きの経験も長いオールラウンド・プレーヤーである。早朝から夜遅くまでの自営職の多忙な中でよく繁雑な準備にも耐え，隊員の義務を貫徹した。現地では野村と共に食糧係としてコックの指導に当たり，自ら登頂隊員になろうとせずパーテーの中の縁の下の力持ちとして尽くしたが，体調も無難で，第1次登頂隊員に選ばれ，重任を果たした。

隊員　野村　信昭（26才）　食糧・会計担当

札幌市役所勤務。北海学園大O.B。高校山岳部時代から活躍していたが，のち京極という良い兄貴を得て技を高めた。利尻岳西壁Aフェース，芦別岳ﾌﾙﾝｾ奥壁，ベテガリ岳ルベツネ直登沢の各初登攀のほか，利尻岳，芦別岳の登攀記録が多い。生来の楽天家であり，ネパールでその利点を遺憾なく発揮して現地人によく溶けこみながら，カトマンズのマーケットを荒し回った。キャラバン中は体力を持てあましてリェゾンを相撲で投げ飛ばし，シェルパを腕相撲で押し伏せて驚威の的となった。帰国後，京極と共にソ連カフカズ遠征，1976年はアラスカに遠征した。

隊員　坂本真沙留（26才）医療・装備担当

札幌東郵便局勤務。えぞ山岳会会員。入会後3年ながら技術的伸長めざましく，第1線として活躍しているところを渡辺に誘われて加わった。利尻岳西壁，同ローソク岩，夫婦岩ほか道内の岩場に多くの足跡を残している。前年の1972年ダウラギリV峰（中止）の隊員候補でもあった。今回，この隊に加わるのが遅かったせいもあり，チームワークの調整に苦労したが，キャラバン中は医務担当として村々で診療にあたるなど現地人の面倒をよくみると共に，隊員の血圧測定を日課として受け持つなど，ドクターサーブの役目を完遂した。登頂後ブンモ村の娘に慕われ涙ながらの惜別となったとか。

（年齢，勤務先はいずれも当時）

# 出発まで　≪計画・準備の経過≫

阿　部　　淳

この稿では出発までの課題，つまりヒマラヤへ行きたいという願望を，カンジェラルワ登山の実施にまで集約させてきたプロセスと考え方を中心に記しておきたい。

## (1) 発　　端

遠く溯ると昭和３９年，阿部，渡辺が参画していた「えぞ山岳会」の海外研究会に端を求めることができる。第１回の会合は９月に１１人が集まり，ヒマラヤ研究から実現までの５段階の課題設定とその具体案，およびヒマラヤ山岳概念と資料文献集を作成した。この研究会は数回もたれたが会の事業の繁忙などから個人研究の域に分散したままになった。

昭和４３年１０月，日本ヒマラヤ協会（ＨＡＪ）主催の会員トレッキングに阿部，渡辺らが参加し，当時，まだ日本人トレッカーのほとんど入らないエベレスト方面に入域した。その目的は「雑多に広がりすぎた頭の中を整理し，同時に研究成果を見出して現地で確認すること」（レポート「ヒマラヤの旅」昭和４４年発行・非売品）においたが，渡辺がそのあとがきで，「私のヒマラヤはこれで終ったのではなく，これから始まるのだと思っております」と結んでいるとおり，具体化への意志決定がなされたといえよう。

一方日本ヒマラヤ協会としては，このトレッキングののち「北海道地区会」をつくり，定例集会で，北大，札医大などの方々にも協力をあおぎ，ヒマラヤ登山経験者の報告や特定課題の講義と会員の研究報告などをもち，地道ながらも着実に歩を進めていった。余談ではあるが，今回のカンジェラルワをはじめ，昭和４６年のアンナプルナ内院踏査隊（ＨＡＪ），４９年マナスルの森美枝子（日本女性マナスル登山隊），ラムジュン（ＨＡＪ）の大崎正信副隊長もこの北海道地区会の熱心な研究者であった。

渡辺からヒマラヤ登山計画推進の強力な誘いを受けたのは昭和４５年春であった。まず準備委員会的な色彩のグループ４名（京極，野村が加わる）で課題を設定し，プロジェクトを推進させることにした。その主な項目はつぎのとおりであった。

イ　遠征にまつわる諸課題の体系づけ

Expedition の基礎となる諸データを検索し，できるかぎり体系づけをおこなう。

例：マネージメント，高度影響，タクティクス，気象，シェルパ，装備と食糧，通関輸送，医療。

ロ　登山計画に直接関わりはないが，遠征にとって欠かせない重要な課題

例：パーティ・モラル，事故防止と処理，トラブル（シェルパ，ポーターほか），ネパール人に関すること（国情，宗教，国民性，慣習），言語。

ハ　山岳研究

目標は，遠征期間，予算，小規模志向（はじめてのヒマラヤ登山として）から7000 m 前後の未登峰とし，探検的要素をもつことに一応定めて，ネパール全域から洗い直す。

ニ　パーティの性格など

パーティの責任体制に加えて，母体であるＨＡＪ本部の体制との関係を明確にすると共に，日本山岳協会（日山協）のルートを確立する。

以上，できる限り新たな課題を発掘して，単に登ることではなく，遠征の方法論の作成に寄与する研究を行うことをプロジェクトの理想とした。

## ⑵ 目標山岳の決定

対象選定のひとつを7000 m前後の未登峰とし，その当時，許可対象の山であった３８座とその山域内の山，および将来解禁される見込みのありそうな山を調査することにした。さらに遠征期間の制約を考えて主としてアンナプルナ周辺，ダウラギリ周辺，西ネパールを重点的に調査研究した。

摘出した山は・・・

アンナプルナ周辺ーラムジュン，アンナプルナⅡ，他

ダウラギリ周辺 ― ダウラギリⅡ，Ⅳ，Ⅴ，他

西ネパール　　ナンパ，カンジロバ

などであったが，小パーティの登頂可能性のほかに，単なる登頂よりもあまり登山隊の入らない未知の要素のある地域＝山群を求め，また山は小さくとも周辺を探査するだけの価値のある要素を考慮に入れ，最終的にカンジロバ山群に焦点を絞った。期間の関係から，ジュムラまたはドルパタンまでの空輸を前提とした。そのころは小型機のチャーターを，日本隊はまだほとんど利用していなかったが，ＨＡＪの組織及びカトマンズに滞在しておられた宮原氏の力で可能であると判断した。なおこの時点ではカンジロバ主峰も未登のまま残されていた。

### イ　カンジロバ入山状況

この段階での入山状況の主なものを拾うと，

1953年 Tichy ― ジャグドゥラ・コーラに入り，ジャグドゥラ・レクの5000 m峰３座に登る。

1961年 Tyson ― ジャグドゥラ・レクの１峰に登ると共に，第１回目の測量。

1962年英国女性隊 ― カグマラ主峰（5962m），ラ・シャンマ（6412m）ほか5000 m峰を含めて７座に登頂

1963年東海大 ― 学術調査の合間に，カンデヒウンチュリを試登。

1964年 Tyson ― カグマラ主峰とブルーラサ（6102m）に登頂。はじめて北面から入る第２回目の測量を行い，のち Geographical Journal にはじめてのKanjiroba Himal マップを発表した。これにより従来の標高は大幅に改定され，いずれも低くされた。

1967年東海大 ― 1963年の試登に続き，２回めのカンデヒウンチュリ（6627m）試登。

1969年 Tyson ― 再度北面から主峰を狙い，北東リッジを越えて南東リッジに到達。

1969年神戸商大 ― カンデヒウンチュリ試登。

1969年岩友会 ― カンジロバ南峰（6445m）に登頂としたが，これはカンジェラルワ山群の１峰で6000 m未満の山であることがわかった。

以上のとおり，このころ，Tysonがカンジロバ主峰を３回にわたり詰めていたほか，ジャグドゥラ・コーラ周辺の５～6000 m峰が登られ，日本隊が西側からカンデヒウンチュリとカンジェラルワ周辺に試登しているに留まっていた。これらの資料検索の過程にあった1970年秋，大阪市大は，パトラシ・ヒマールのコルを越えて南西稜から主峰を落とすという賭けを成功させた。

### ロ　未登の山

Tysonの測量に基づく地図の発表で，カンジロバ・ヒマールの標高は改定され，われわれの目標とする7000 m前後の山といえばカンジロバ主峰（6883m）だけとなったが，その他，未登峰を加えて，まず５峰を検討の対象とした。

①カンジロバ主峰（6883m）

Tysonが試みたジャグドゥラ・コーラは通過困難。北面の２つの谷は通過が厄介で時間切れの公算が強い。したがって，ガルブン・コーラからラシャンマとハンギング・グレシャーピークの尾根の裾を越えてジャグドゥラ・コーラ上流に達するか，また未知領域である東部からの接近に賭けられないか，後者に探索的興味を強く持ったが，1970年大阪市大隊により主峰が登頂され，目標から外した。

②カンジェラルワ（6612m）

地図上，この山群の他との関連性は不明で空白とされているが，北東部の空白領域を除くと，第２の高峰である。しかし1969年の岩友会が登った「南峰・6445m」はこのカンジェラルワ主峰かも知れない。少くともこの山群であることに間違いはない。（のち別の山であることが明確になった。）

③カンデヒウンチュリ（6627m）

登路も明確でジュムラからのキャラバンも短いが，既に3隊が試登しており登頂は時間の問題で新鮮味に欠ける。

④ハンギング・グレシャーピーク（6482m）

いまだに手をつけられていない山で北西氷河に入り込む余地はあるが，写真によると非常に鋭い山容で登頂可能性については不明。とはいえ最も魅力のある登攀を期待できる。

⑤ビジョラヒウンチュリ（6386m）

かつては6800 mに狙いを定めた。北東面，西面から登れそうである。標高や知られすぎた点でやや魅力に欠ける。期間やパーティ数などの条件によりカンデヒウンチュリと掛け持ち要素としても考えられる。

ハ　カンジェラルワの選定

大阪市大隊は主峰から東部を一覧する素晴らしいパノラマ写真を提供してくれた。この中では，ハンギング・グレシャーピークが魅力的であり，カンジェラルワはわずかにピークをのぞかせるだけで山容をつかめない。かつて川喜田隊が東部から遠望して名づけた「第2の高峰」も山容は良いが，標高は明らかでなく東面から接近して地図の空白を埋める魅力もあるが，それだけに「登頂」を主眼に置くと可能性の点で決定するにちゅうちょせざるを得なかった。

未登峰の登頂および未知の要素という2点から結局，第1候補をカンジェラルワに絞った。標高も，この山群のうちでは第2の高峰であった。未知の谷，ドジャムコーラを溯りカンジェラルワ北部の空白部およびハンギング・グレシャーピークの南東面を見る目標も持った。

明けて1971年大阪府岳連隊は，この山群に造詣が深く，さらに東部空白部の解明に意欲を燃やす吉永氏を副隊長として，川喜田隊のいう「第2の高峰」に登頂すると共に空白部を埋めた。この山は「ツオ・カルポカン」（6556 m）と名づけられた。

なお，カンジェラルワは6660 mから6612 mに改定された。のち南面からの写真や登山上のアドバイスについて，大阪市大，府岳連の両隊から情報をいただいたが，主稜にとりつく下部の状態は不明であった。

(注)　その後の登山は次のとおりである。

1972年秋　山旅クラブ，カンデヒウンチュリ初登
1973年春　HAJ隊（私達の隊），カンジェラルワ初登
1973年秋　北里大学，北東部のセルクドルマ（6227m）初登
1974年春　山形大学，ビジョラヒウンチュリ（6386m）初登
1975年秋　月稜会，カンジロバ主峰を北面から狙ったが事故で断念



## (3)　計画と準備の推進

メンバーは前記4名のほかに服部，五島，辻の内（のち勤務先の都合で中止）追って坂本が加わり6名が確定，あと医師1名を残すだけとなった。

登山時期は当初1972年プレを予定したが，HAJ本部との連携の強化，阿部の所属山岳会の事故，日本山岳協会（日山協）への申請時期の遅れなどから実施を1973年プレに延期せざるを得なくなったが，それは中だるみとなった反面，準備の余裕を生じたともいえよう。

定例集会は週1回持ち，与えられた課題に対する研究と検討をおこなった。時間の経過にしたがい一般的事項から具体的課題に進むにつれて情報の収集，加工と計画案決定が緊迫し遅れ勝ちになることも少くなかった。

以下おもな課題と作業内容について項目別に記しておきたい。

イ　山岳について

＜カンジロバ山群に関して＞

①　1970年6月，北大O.B安藤久男氏(1963ナラカンカール隊長）に面談。ネパールガンジからのアプローチ，ジュムラ周辺の食糧とポーター事情その他について情報収集，カンジロバへの興味を強める。

②　山域および登山隊の文献検策とまとめ

・外国文献の訳出　（H.J，Vol.26，コール；H．J，Vol.24,エバンス；H.J，Vol.29,タイソン；G.J，133，タイソン）

・山岳表，入山史，各隊行動概要の作成。

・G.J，タイソン作成の地形図から概念図作成（ただし東部は空白）。

③　1971年2月，大阪市大常慶和久隊長，佐藤一良副隊長から，カンジロバ山群についての情報収集（主にビジョラヒウンチュリについて。東部は依然不明）。

＜カンジェラルワ峰に関して＞

①　1971年12月，沢田宗博氏（岩友会，大阪市大両隊に参加）に面談。カグマラ・ラ周辺からの山容および岩友会の登頂峰について情報をいただく。

②　1972年6月，大阪府岳連阿部和行隊長，吉永定雄副隊長から写真の提供，南面登路その他についての最新情報をいただく。

ロ　遠征一般について

①　交通と輸送

・1970年10月，ネパールから一時帰国中の宮原氏と東京で面談，ジュムラまたはドルパタンへのチャーター機の状況をお聞きし，当時としては多難であった空輸の確信を得る。

・各隊のアプローチに関する情報をもとに，この山群へのアプローチ表を作成。本隊としてはジュムラ空輸をとることにした。

・1972年，在ネパール，ＨＡＪ会員ランジャン氏から，チャーター機に関する情報（機種，料金など）を得る。

・通関と輸送に関する作業表を作成
ＨＡＪ会員清水澄氏（1970ガンガプルナ隊長，他）から多くのアドバイスをいただく。

②　シェルパ・ポーターなど

・過去にこの山域に入山した隊の，シェルパ・リストを作成。

・シェルパ・ポーター・現地人論を作成
雇用上の注意，トラブルの予防と対処，リエゾンや現地人の扱い方などで統一見解をもつ。

・吉永氏から大阪府岳連使用のシェルパについてアドバイスをいただく。

・来道中のキラン・マン・シェルチャン氏からネパール語学習のための会話を録音。

③　気　象

・ヒマラヤの気象論作成。
従来発表されている文献の総括で，プレ・モンスーンの気象と登攀活動を研究。

・この山群についてのデータ上の予測。
（気温，降水量，風速などについて）

④　タクティクス

・高度順化に関しては，ＨＡＪ北海道例会で会員淡川舜平氏，橋本正人氏（北大O.B）に講義を受ける。その他集会で検討。

・カンジェラルワのタクティクス・モデル作成。しかし，下部不明のため一般的要素を濃くして対処する。

⑤　食糧・装備

・ランジャン氏からネパール購入可能品目のチェックと価格についての情報を得る。

・現地購入品を決定，ランジャン氏に依頼（主にケロシン，装備の一部など）。

⑥　医　療

・高所影響の症状と対処法一覧を作成。

・医薬品使用方法一覧作成。
以上，医師の随行を取りやめたため，隊員の注意事項をうながすために作成した。

以上，計画作成のための予備知識の習得，情報収集と，資料検策による実用資料の作成ということになろう。本来は遠征各論の方法論を集大成するつもりであったが一部に留まり，時間の経過にしたがい実用化にウェイトが移っていった。この間，ＨＡＪ北海道例会で多くの遠征報告やレクチュアをとり入れ一般知識や予備知識を得たが，現場でたいへん参考になったはずである。

## (4) 計画の概要

イ 目 標

① カンジェラルワ峰(6612m)の登頂

南面より，頂上から東南に延びる主稜に取りつく。当初は第3キャンプ（C3）までの予定であったが下部の状況がつかめず，余裕をもたせて第4キャンプ（C4）まで設置することにした。条件の許す限り全員登頂までアタック隊を出し，他は支援する。シェルパは3名の予定を1名増して4名（含むコック）としたのも，下部状況が悪くルート工作の遅れを見越したためである。登山活動は40日とし，登山終了後下記の調査を行う。

② プンプン・コーラ流域調査

カンジェラルワとフリューテッドピークの間の支流に入り，後者の東南稜の肩から北東山域や周辺の山を展望する。

ロ アプローチ

カトマンズからジュムラまで，チャーター機（ツィンオッターを予定）を利用し，約2週間のキャラバンでベースキャンプ（B.C）予定地入りする。キャラバン中に現地食糧（主に野菜・肉類）を購入するがあまりあてにはせず，カトマンズ調達を図る。

ハ 資 金

総額600万円の予定であるが，実際は食糧の寄付，装備食糧の低額購入，隊荷輸送費（日本ネパール間空輸）および隊員運賃の低額化で500万円で収まる見通しがついたのでほぼ全額を隊員負担（75万円）とした。

ニ 組 織

本 部 — 日本ヒマラヤ協会東京事務所
事務局・留守本部 — 北海道理事，阿部宅
現地連絡所 — インドラ・マン・シェルチャン氏
（ホテル，ラリグラース）

以上で連携を密にし，アクシデントなどが発生した場合は留守本部をHAJ本部に移管して処理に当たると共に，ネパールに処理要員を直ちに派遣できる実質的体制をとった。責任体制は，遠征隊→事務局→HAJ本部の流れで負うよう定め，万全を期した。

東京での事務は主として植竹（都岳連担当）と木村（遠征隊担当）両東京理事が協力した。

隊員はHAJ全体の公募も行なったが，最終的に変りはなく6名。医師は2－3名候補者も出たがこれも決定をみず，先に述べたとおり随行を断念した。

なおこの隊は，北海道教育委員会の後援を得た。

## (5) 日山協推薦状の取得まで

日本ヒマラヤ協会は，昭和43年発足して以来，各地での研究活動や分科会活動が活発になるにつれて，ヒマラヤ登山の実施の要望が高まってきた。当遠征もそのひとつであるが，45年秋ごろからHAJ本部で遠征隊を出す場合の責任体制の在り方について検討を重ねた結果，内部規定を定めると共に組織強化を図り，46年3月東京都山岳連盟（都岳連）に加盟した。しかし，日山協の推薦状を得るまでに若干の曲折があった。その経緯を挙げておきたい。

イ 昭和47年2月，都岳連に計画書を提出。

都岳連から，隊員が北海道なので北海道山岳連盟（道岳連）をとおすべきであるとの意向が表明された。これに対し，次の釈明を提出した。

①主要隊員が大学O.Bで，学生連盟に加盟しているが道岳連に加盟していない（現在は加盟した）。

②HAJは支部組織を作っておらず，今後支部加盟を考えてはいるが，そのためにはHAJとしての検討審議が必要で，日数を要する。

③当初，必ずしも北海道会員のみと考えず，全国的規模で考え，HAJ内で募集もしたが，結局，北海道会員だけとなった。

以上の理由で道岳連からの了承を得，都岳連宛の推薦状発行依頼をいただいた。この件に関し，道岳連速水理事長，阿地事務局長に多大なご尽力をいただいた。

ロ　47年3月，都岳連推薦状を得る。

ハ　47年4月，日山協海外委員会で審議されたが，新しい審査基準を適用するので追加書類を提出するよう連絡があり，基準各項についての説明書（資料添付）を送付した。

ニ　47年5月，日山協海外委員会で審査されたが，HAJの性格に旅行エージェンシー的プロ団体ではないかという疑問点があり，結論が延期された。

これに対し，釈明書を提出した。内容は，HAJのヒマラヤ・ツアーは会員のみに限って行うが（原則として6カ月前までの入会者），企画にとどまり，主催は別であることに尽きる。資料として会則，ツアーの条件，46年度の決算報告，旅行を主催する旅行社との関係などを添付した。さらに都岳連（小島会長）から日山協宛「アマチュア団体証明」をいただいた。

ホ　47年6月，日山協海外委員会で承認。

同年10月ネパール政府の許可を取得した。

以上に関し，日山協丹部海外委員長，天野事務局長，都岳連小島会長，高橋照副会長，遠藤登氏（海外委員）にたいへんご尽力をいただいた。

（文中，係名，役職名などはいずれも当時のものである。）

## (6)　出発まで

以上で対外的手続きも終了したので，さらに隊内部の充実を図ると共に，遺漏のないよう留意した。

イ　保険関係

隊員およびリエゾン，シェルパの保険は安田火災海上に依頼した。隊員は保険金額510万円で保険料約75,000円（100万円につき約15,000円）であった。一部の隊員は郵政省の傷害保険に加入した（永年）。被保険者が死亡した場合は受取り人が身元引受人になるので，その場合遠征事務局が保険金を使用させてもらうための「念書」を身元引受人となる人から提出してもらった。

ロ　会内部の書類

パーティ内の課題として，パーティシップのあり方について検討するとともに，意見の相違がパーティ内のトラブルになることなどを考え，お互いが理解し合うための努力も図ってきた。そのうえで，リーダー・シップ，メンバー・シップを確立するための話し合いを持った。その結果，現地での意見交換と集団討議を充分に行い，結論はリーダーに一任する合意を得た。このプロセスと結論を規律化するために隊員は隊長に対する誓約書を提出，隊長はHAJ本部に対する誓約書を提出した。これは遠征隊が残務を終え，解散するまで拘束するものである。単なる形式ではなく自覚を持つことの意味のほかに「責任」の重大さをかみしめ，それを果たすことを形で示したまでである。

ハ　最終作業

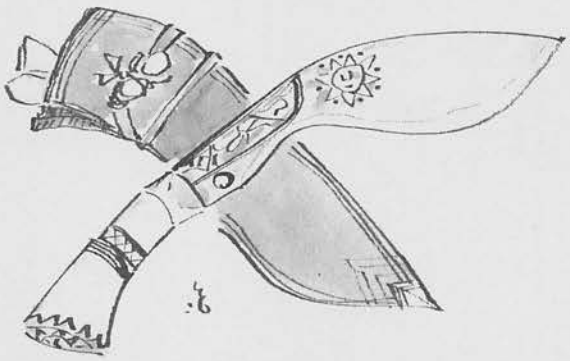
装備食糧の買付は47年初冬からはじめ，48年1月に梱包作業を終え発送した。札幌－東京間は定期便トラックに便乗，ネパールへは空輸した。

2月は各隊員の職場や所属山岳部の壮行会などで多忙となった。HAJ北海道部会の壮行会は3月2日，ホテルアカシヤ（札幌）で65名を迎えておこない，ムード的にも盛り上がった。

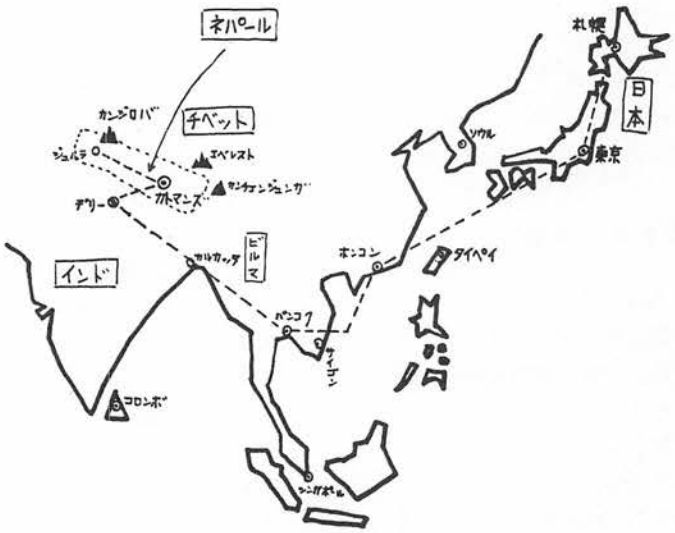
ところが出発間際になり旅行エージェンシーM社から，エアー・シートが確保されておらず今後努力するという電話があり，前日の3月8日に事務局でかけ合ったが未確定。東京で直接交渉をすることにして，予定通り3月9日，日航営業所を大勢の仲間や家族に送られて出発した。同夜，東京では，HAJ本部役員および東京集会に集った会員で壮行会が持たれた。

一方M社との直接交渉は同日行われた結果，全責任はM社にあり，フライトは1日遅れるがその差額および東京での宿泊費はM社がもつことで折り合いがついた。隊員一行は11日夜，羽田を出発したが，これは1973年のプレ遠征隊の中の最終便であった。最終登頂期日を定め一切を検討したうえのぎりぎりの出発日であったが，登山活動には，支障はなかった。

# 第 II 部



# 行　動　記　録




## 札幌からジュムラまで

渡辺　文仁

### 札幌からカトマンズへ

**3月8日　晴**

千歳から飛行機で東京へ。東京着後，腸チフス，パラチフスの予防注射をし，旅行エージェンシーのM社サービスへ行く。ここでは一大トラブルが待っているのである。と言うのは，数日前，札幌の方へ，昨年11月に計画書を送り，日程，隊員を知らせて，具体的に手続を依頼していたのにも関らず，「バンコックからカトマンズへの切符が満員で入手できない。それは，あなたがコンファームしなかったからであり責任はそちらにある。出発を延期してくれ」と言う内容の電話があり，いまだ問題が解決していなかった。約2時間の交渉の結論は，①責任はM社にある　②しかし，バンコックからのフライトはどうしようもないから，11日のエア・インデイアでインド経由のカトマンズのフライトを取るからそれにする　③差額および1日の出発が遅れたための、東京での宿泊費はM社が負担する，ということであった。北海道から来たからといって，ナメるなとやり合った結果であり，向うの言いなりになっていたら，責任までかぶせられ大出費をする破目になっていた。労組支部長5年間の経験が，とんだ所で役立った。

3月9日　晴

朝，再びM社へ。今度はエア・インデイアがストライキ中である。それで11日夜のパンアメリカンにしてくれとのことで，これはやむをえない事情なので了承する。その後，機内持込分の再梱包。夜，ＨＡＪ東京集会へ渡辺，服部，五島，野村が出席し，あいさつ。

3月11日　晴

19時30分，ＨＡＪ木村理事，その他，多くのかたがたの見送りを受けて羽田発。

## カトマンズ着

3月12日　快晴

早朝5時，デリー着。インドの入出国手続きをせずに，5個の機内持込み荷物共どもそのままロイヤル・ネパール航空のロビーに回ることができ，余計な手間が一つはぶけた。

8時20分，カトマンズへ向けて出発。5年前の1968年に来た時はプロペラ機だったが，今回はジェット機である。この時の記憶では右側の窓からヒマラヤが見えたようだったので全員一列に右側の窓に陣取って，はるかかなたを見つめていたが，いつまでたっても空ばかり。そのうち，ふと左側を見るとヒマラヤがそびえているではないか。あわててカメラの向きを変える。再び見るヒマラヤに感激している間にカトマンズ着。照りつける太陽がまぶしいばかりだ。

空港でＨＡＪ理事のランジャンさんの出迎えを受け心強くなるが，今年度から機内持込みの荷物にもインポート・ライセンスが必要になっているとかで，手荷物としてのザックだけをかついで通関する。別送荷物も未だ着いていなかった。

ランジャンさんの車とタクシーでわれわれの根拠地となるランジャンさんの事務所（以下，タクシーの運転手の言葉「エクスプレス・ハウス」という）へ向かう。私にはなつかしいカトマンズの街並も始めての隊員にはいろんな意味で驚きであるようだ。

さて，なかなか立派なエクスプレス・ハウスで一息つく間もなくランジャンさんを囲んで打ち合わせに入る。彼はＨＡＪのネパール在住理事としてわれわれに協力してくださる訳である。

羽田を発って以来ほとんど眠っていないが，快い興奮状態になっているのでまったく眠くない。事前の依頼事項と現状の問題，今後の問題を協議してから全員で日本大使館にあいさつに行く。その後，ニューロードで昼食をしたが，カトマンズのあの独得のすえたような匂いには2度目の渡辺にさえ，最初はちょっとたまらなくなる。京極は早くも大使が言われた，「戻って来たら日本食をごちそうしましょう」の言葉を楽しみにしている。

再びエクスプレス・ハウスに戻り，ランジャンさんと共に渡辺，服部は外務省登山課，商工省へ。京極等はエクスプレス・ハウスに保管しているＨＡＪ所有の装備品の整理にとりかかる。

まず外務省登山課では，みるからに有能そうな若手官僚のシュレスター課長に会い，あいさつの後，ビザの延長，トレッキング・パーミッションの許可の申請をし，機内持込み分も含めた輸入許可証の申請書に裏書きしてもらう。それを持って商工省へ。2カ所，書類を持ち回わり，待つことしばしで許可証を入手することができた。ランジャンさんの力，絶大である。

帰りに，ヒマラヤン・ソサエティ（以下「H.S.」という）に寄る。ランジャンさんに頼んでおいたシェルパがイタリア隊のエベレストに行ってしまっていたので，新たに選ばなければならないからである。責任者パラジュリ氏はイタリア隊と一緒にエベレストに行っているとかで弟のリトル・パラジュリ氏が留守番役をしていた。ここで紹介されたのはサーダーにミンマ・ツェリン，コックとして，カンジロバ経験者のアンテンバである。ミンマ・ツェリンは，ＪＡＣ東海支部マカルー隊のサーダーであった。“登攀技術は優秀だがマネジメント能力は無し”の評価がすぐに浮んできた。わが隊は西ネパールの地域性からマネジメント能力のすぐれたシェルパを望んでいたのだが。しかし，最後にカトマンズ入りしたため，他に適当なサーダーは残っていないようだ。シェルパ2名の選択を彼に任せて明日，再び来ることにした。

エクスプレス・ハウスに戻って来ると京極等が事務所の庭いっぱいに装備をひろげている。使え

る物が少ないようだ。夕方，ロイターの婦人記者が取材に来た。

夜，食事にニューロードへ。「リド」を紹介されたが見つからず「Symbol of Good Food」に入り5Rs(ネパール・ルピーは約30円)の定食を食う。ライス，チャパティが食べ放題である。

エクスプレス・ハウスの日本風風呂に入り，カトマンズ着を祝して，各自が1本ずつ羽田の免税店から買って持参した貴重な日本産一級ウィスキーを1本空けて祝盃をあげ，長い長い一日が終った。



## カトマンズにて

**3月13日** 晴

日本食の朝食後，朝のミーティング。私達の隊は朝にその日の予定を立て，夜にその結果報告・協議のミーティングをすることにしているのである。

午前中は副隊長はランジャンさん，同宿のアンナプルナサウスの「さがみの隊」と共に，機内持ち込み荷物を引き取りに空港へ。他は装備の点検の続き，野村はルピー交換の計算計画，渡辺は日本へのレポート，礼状書き等が午前中の仕事である。

ジュムラへのチャーター・フライトを2回にすることにし，その手続きをランジャンさんに依頼する。

午後，渡辺はH.S.へ。サーダーは自分の従弟というミンマ・テンジン，弟のパサン・プルバを連れて来ていた。それにキッチン・ボーイはリンジ・シェルパである。手数料1,000 RsをH.S.へ支払い，昨日紹介されたコックのアン・テンバを加えてエクスプレス・ハウスに戻る。

シェルパ達の正式契約は働き具合を見てからにすることにし，さっそく装備，食糧の買い出しにつけてやる。

夜，例によって各担当からの進ちょく状況の報告，協議をして一日を終える。

**3月14日** 快晴

今日の主な仕事は装備の点検，食糧の買出しだが，やって来たシェルパ達にも先ず装備を手伝わせ，その後，五島等の食糧買出しにサーダーとコック予定者のアン・テンバをつけてやる。

ところが帰って来たのを見るとシェルパ1人とキッチン・ボーイも一緒ではないか。隊員のだれもが隊長に言われてついて来たと思っていたという。そこで最初が肝心と思い，サーダーに「この買出しにはサーダーとコックが一緒に行き，他は残れといったはずだ。自分で勝手に判断してはいけない。もし，他のシェルパも必要だと思うのなら私に言ってからにすること」と厳しく言っておく。

また，買出しの途中で，キャラバン中に飲む紅茶にミルクを入れる習慣があるから，ミルクそれにシェルパはとうがらしが絶対必要だから買ってくれと要求したという。とうがらしは良いとして，ミルクを入れたら，そりゃあおいしいだろうが，重量はかさむし第一，計画外の出費が増えているのに，そんな要求は入れられない。結局，サーブがミルクを入れないで飲むのならサーブと同じで良いと彼等は妥協した。

この買い出しには，何カ月間もネパールにいるHAJ会員の今泉氏が手伝ってくれ、大いに助かったとのこと。

今夜の夕食はランジャンさん紹介の「Utse」でとる。ギョーザ，メンがおいしく，以後この店がもっぱら愛用された。

ジュムラへのフライトは18日に決定。タイ航空で別送した荷物も着いたし，まったく順調である。

**3月15日** 快晴

午前中は五島が，副隊長，ランジャンさんと共に空港へ別送荷物の引き取りに行く。京極，野村，坂本は装備の買い出し。

渡辺はシェルパとの雇用契約書の作成。シェルパ

には砂糖の買い出しをさせる。

さて，シェルパのことだが 今泉氏の意見によれば，コック予定者のアン・テンバは結核の疑いで今春のある隊からハネられたとのことである。それに彼はカンジロバ遠征参加経験者のアン・テンバではなかった。買い出しに従事させた時の態度もあまり良くないとの隊員達の印象である。とりあえずアン・テンバを雇わないことにし，代りのコックを見つけにH。S．に行く。ちょうどそこにいたのが，今泉氏との話にも出たラクパ・ノルブである。ただ彼は1972年のツクチェ・ピーク隊でサーダーを勤めているし，マナスル西壁で高橋照氏がそれなりに評価をしているシェルパでもある。そんな彼がコックとして加わって，サーダーのミンマ・ツェリンとうまくゆくか懸念されたが，彼等は同じ村の出身で小さい時から友人だから心配ないとのリトル・パラジュリの意見なので，これでコックとしての採用を決めた。

帰途，ラリグラス・ホテルへシェルチャンさんにあいさつに行ったが，仕事でポカラに行っていて留守。数年前，ホテル業の修業で札幌にも来たことのある息子のキランさんと再会した。

夜のミーティングは，久し振りに砂糖を入れた紅茶を飲みながら開く。別送荷物の通関は箱を4個開けられただけで割とスムースに運んだとのこと。

### 3月16日　快晴

シェルパとの雇用契約の日である。予定どおり朝10時半にそろってやって来た。タイプで打った雇用契約書を1人1人読みあげてOKをとり，隊長，シェルパ双方が署名する。署名の済んだ契約書をそれぞれが1枚ずつ持つことにし，握手をして契約の儀式は無事終了。

その後，渡辺を除く隊員全員とシェルパが装備，食糧の買い出しへ。

5時頃買い出しから帰って来たシェルパに昨日まで（正式契約前）のアルバイト代，装備代，それぞれの出身村からカトマンズまでの出向代の支払いをする。

昨日，役所関係の元高官が亡くなったとかで役所等が今日から日曜日まで休みになった。それでリエゾンの決定，ビザ，トレッキング・パーミッションの交付が遅れそうだ。月曜日にはオープンするそうだが19日の月曜日中にリエゾンが決まらないことを考えて，定期便でのジュムラへのフライト計画を変更する。しかし，渡辺を除く全隊員は予定通り18日の月曜日にチャーター機で飛ばすことにする。チャーター機の場合はパスポートの提示を空港で求められない。トレッキング・パーミッション取得のため，パスポートを提出中であったからこのことは都合がよいことだった。

## エベレスト登頂者がリエゾン・オフィサーに決る

### 3月17日　快晴

明日はいよいよジュムラへ飛ぶ日である。朝のミーティングでそのフライト計画を発表する。

1000kgの積載能力のあるツィンオッター機に私達の隊荷約1600kgを2便に分けて飛ばし，第1便に副隊長，野村，サーダーにシェルパ2人。第2便に京極，五島，コック，キッチンボーイである。

午後，明日のフライトに備えて荷物の梱包の点検をしていると，JACエベレスト隊の登頂者であるチョタレー氏が突然あらわれた。リエゾン・オフィサーになるかも知れないとの話を聞いていたが，それでやって来た訳である。1968年に渡辺が，ソロクンブをトレッキングをした時に彼に会っており再会を喜ぶ。また，非常に個人的な事になるが，やはりJACエベレスト隊のシェルパであったコックのラクパが「エベレストのワタナベ・メンサーブはバラサーブの奥さんだ」と彼に話したものだから，非常に打ちとけた話になった。もっとも，そのワタナベ・メンサーブは，そのころはミス・ワタナベであったが。チョタレー氏は，今，ネパール軍隊の少尉で山岳兵の訓練を担当するのだそうである。

※　　※　　※

なお，その後1974年頃，前記の今泉氏はランタン・ヒマール方面へ単独でトレッキングに出掛け，消息を断ってしまった。あの元気そうな顔が思い出されてならない。

## ジュムラへ飛ぶ

渡辺　文仁

**3月18日**　快晴

第1便で服部，野村，サーダー，ミンマ・テンジン，パサン，と荷物，約800 kgをジュムラに送る。第2便は京極，五島，ラクパ，リンジと残りの荷物と共に，渡辺はリェゾン・オフィサーが正式決定してから，チョタレ氏と定期便で飛ぶことにしていた。しかし，2回めのフライトの荷物を積み込んでいると，ジュムラの飛行場に軍隊が食糧を投下しているから今日はもう飛べないとの話。

この日，チョタレ氏が正式に決定した。

**3月19日**　快晴

定期便でラクパ，リンジをジュムラに飛ばす。1人360 Rs。

この日も航空会社の都合で第2便のチャーター機はジュムラへ飛ぶことができなかった。服部，野村達は荷物の整理をして待っていた。

**3月20日**　快晴

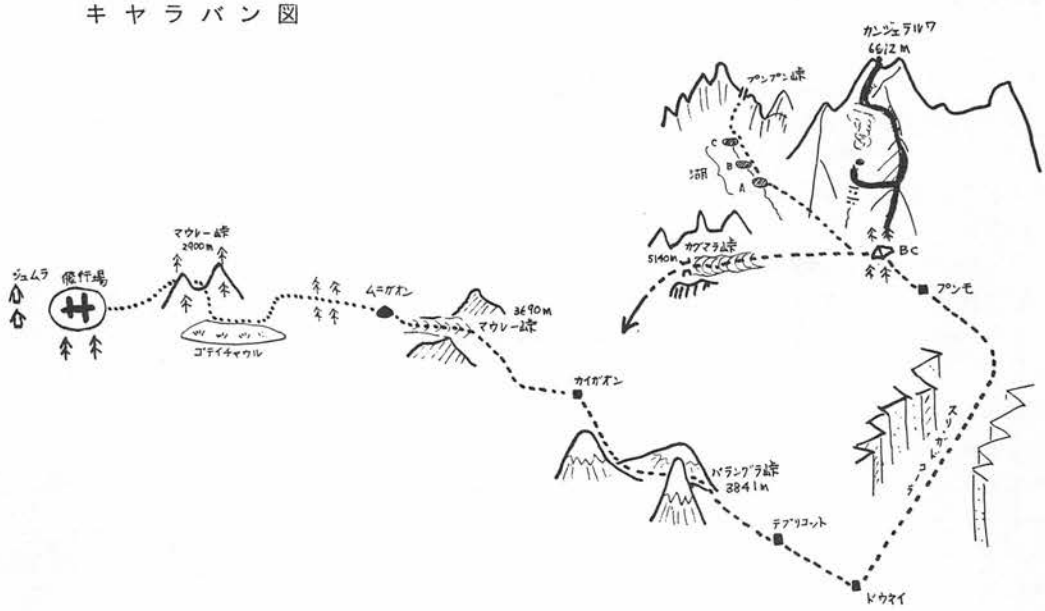
チャーター機で渡辺，京極，五島，チョタレ氏と残りの荷物をジュムラへ。途中のマナスル，アンナプルナ，ダウラギリと続くヒマラヤの山やまは一見に価する。約1時間半でジュムラ着。

服部達は，来るはずの第2便が18日に来なくて食糧に欠乏していた。この村は行政都市なのだが，貧しくて食糧も充分に買えないのである。すぐに23日のキャラバン開始に向けて準備を始める。渡辺，チョタレ氏は警察へ，パーミッション，ビザのチェックを受けに行く。

**3月21日－22日**　快晴

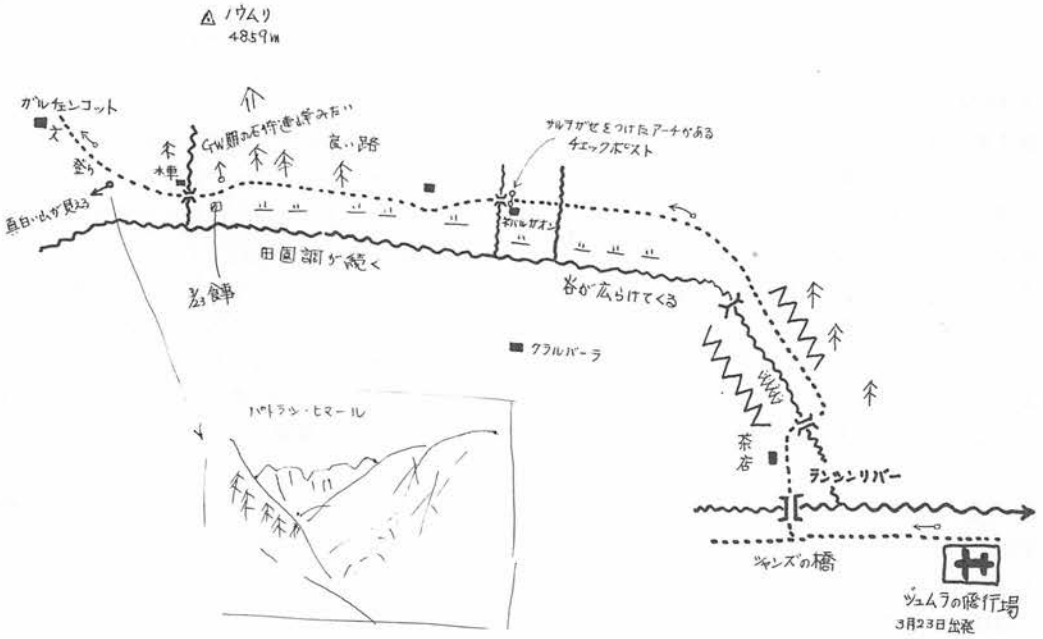
さっぱり釣れない釣りをしたり，ランニングをしたり，軍隊にバレーボールを挑戦されコテンパンに敗れたり，で1日を過した。渡辺とチョタレ氏は一夕，この軍隊の隊長に夕食を招待された。

キャラバン図



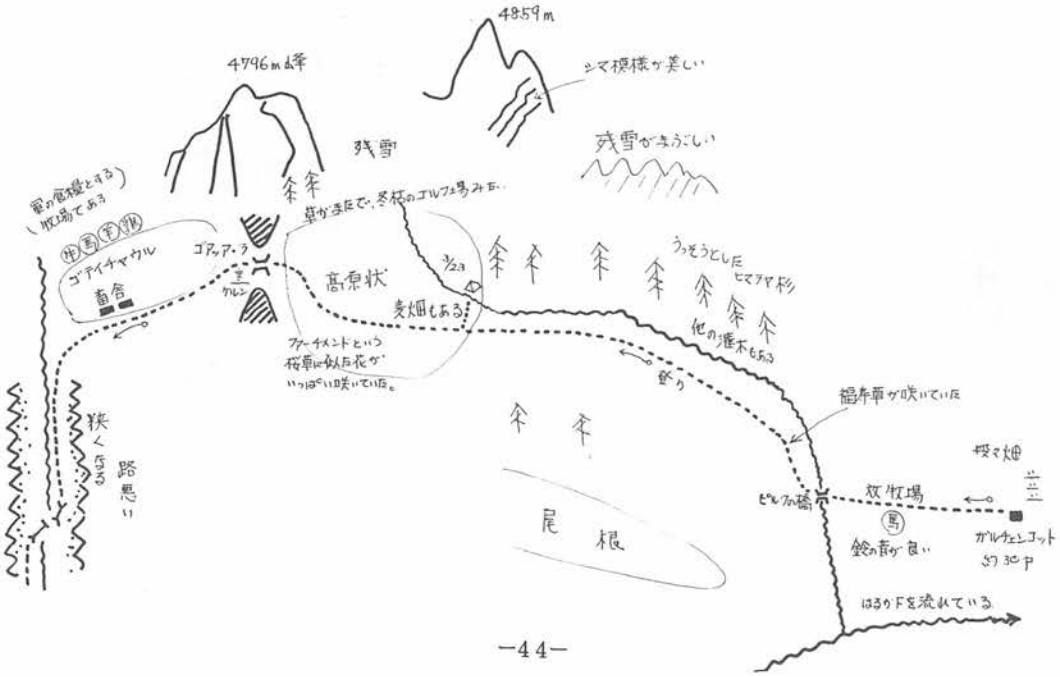
## ジュムラからベース・キャンプ

坂本　真沙留



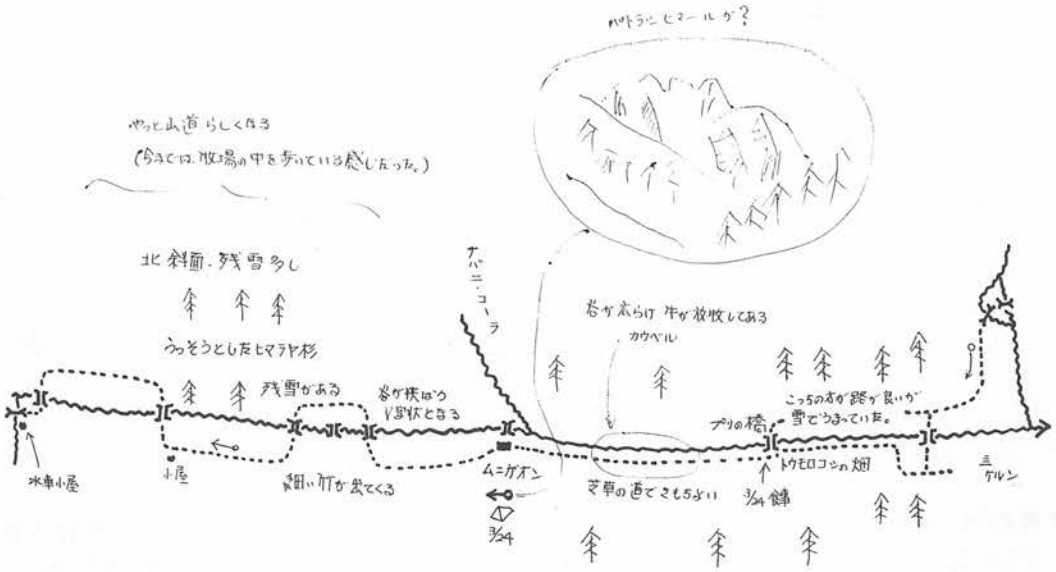

3月23日　快晴

52人のポーターと共にキャラバン第1日めが始まった。賃金は1人15Rs，ナイケはプラス2Rs。30分も歩くとテイラ川が2つに分かれる。左はチョーダビシ・コーラである。ネバルガオンのチェックポストでチェックを受ける。クルミで朝食兼昼食。ゴアッア・ラを越えると風が強いとの話で少し手前でキャンプ。



**3月24日　快晴**

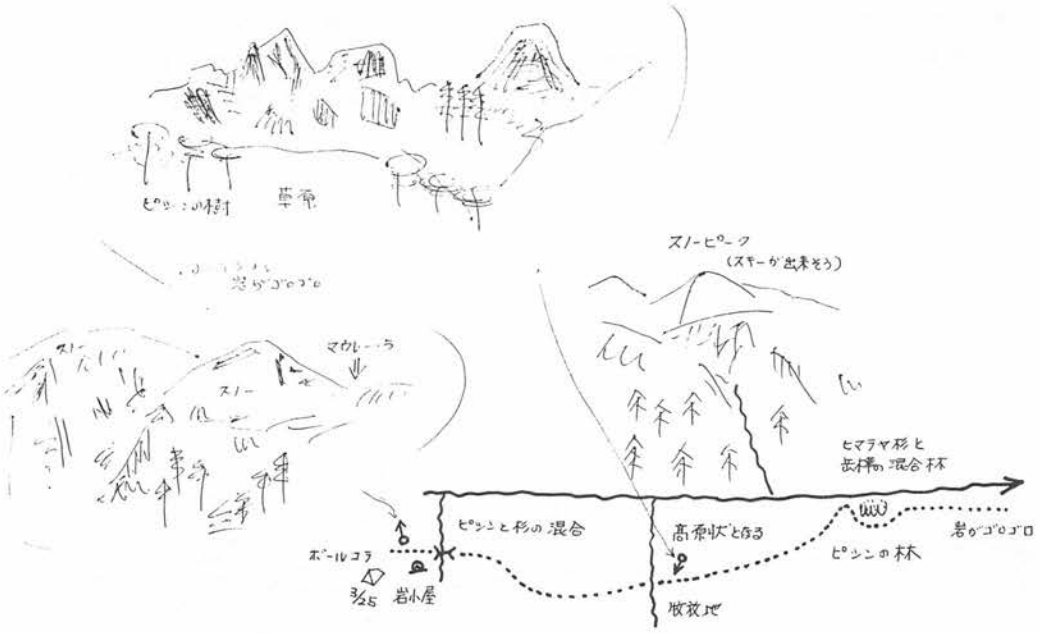
小1時間で峠着。すぐ下に政府の羊飼育場ゴテイチャウルが見える。クリガオンで昼食。14時ムニガオン着，チョルタ・コーラとナバニ・コーラとの合流点である。少し早いがポーターの食糧買出しのためにここでキャンプ。ジャガイモを買った。




**3月25日　快晴**

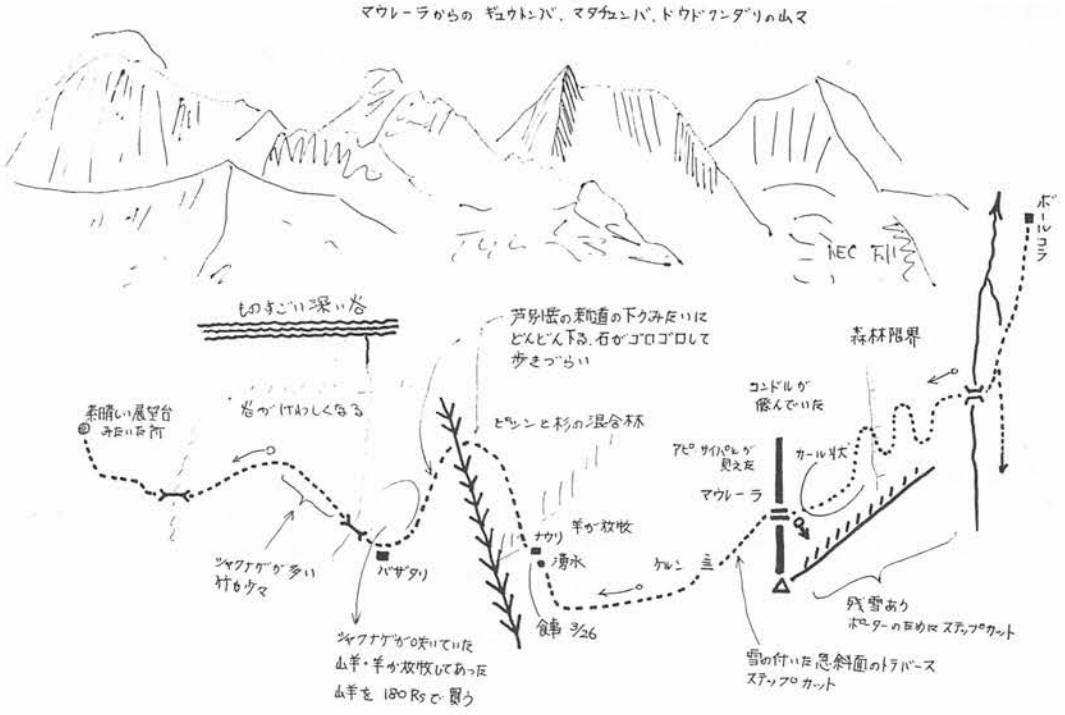
チョルタまでのせまい山間を流れるコーラ沿いの路は所どころ残雪に被われている。チョッタで昼食。美人が卵，チャンを売りに来る。シェルパ達はワイワイ喜ぶ。美人はどこの国でも得である。この辺りの村から生活様式がチベッタンとなる。マウレー・ラの下部でキャンプ。峠は雪がびっしり着いていて，最初の難関である。

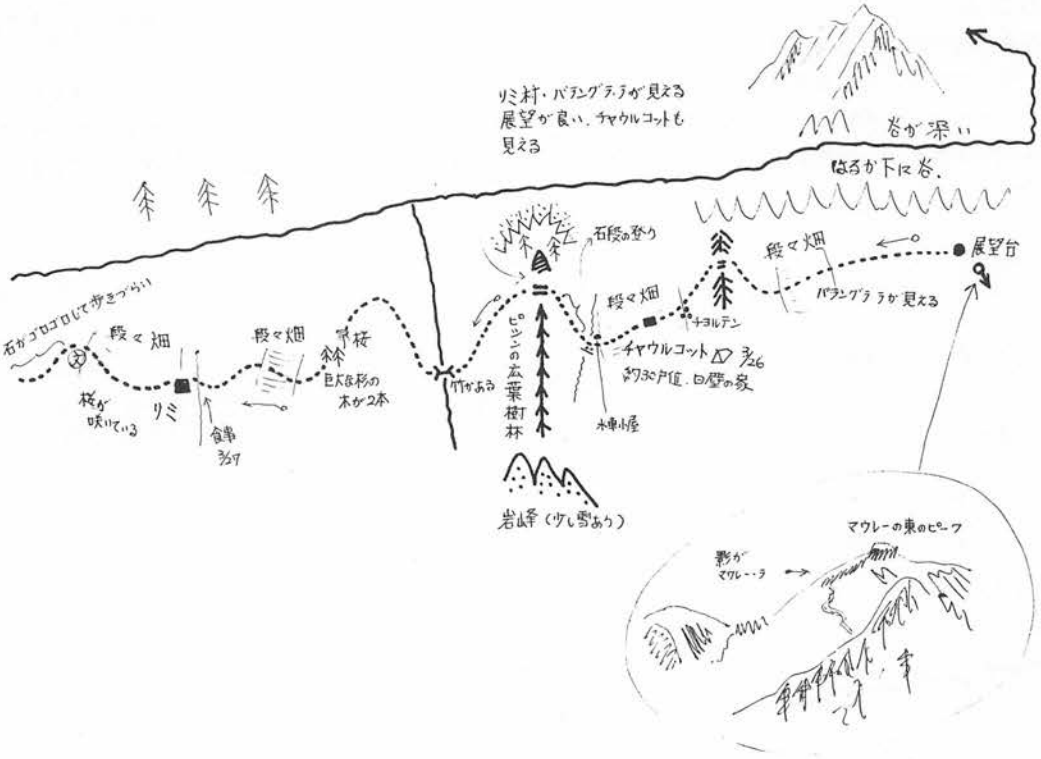




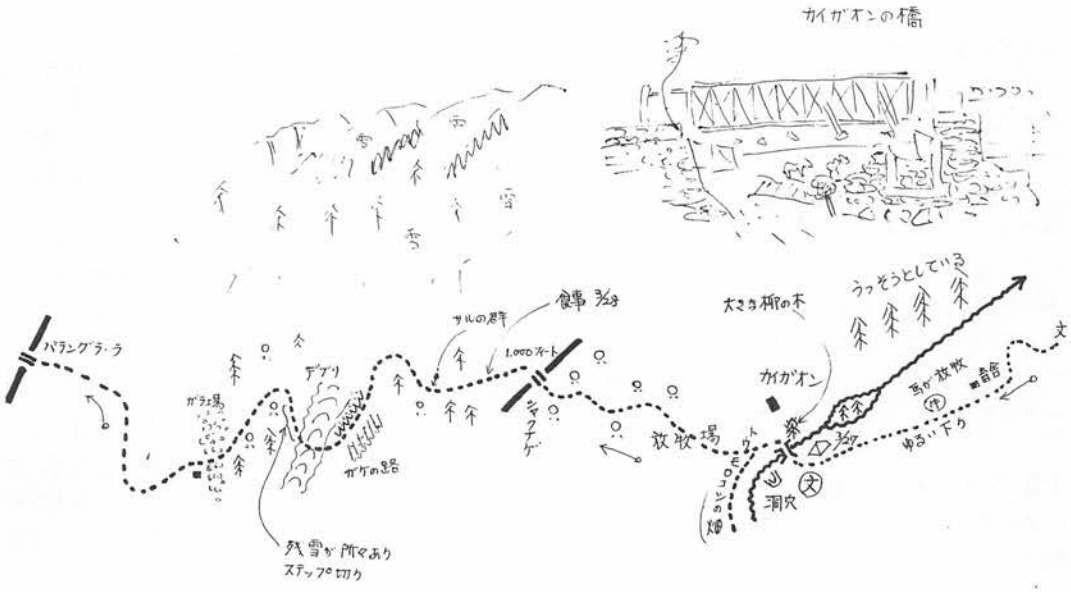

**3月26日　快晴**

京極隊員とミンマ・テンジンが先行し，要所要所をカッティングしたあとをポーターが行く。2時間あまりで峠着。振り返ると左手にアピ，サイパル，右手にギュウトンバが見え，峠の向こう側の山やまはアルプス的である。峠を1時間ほど下った所に小さな水場があり昼食，チャウリコットでキャンプ。途中で山羊を180Rsで買ったのをこ






こでつぶす。ムニガオンでもそうであったが，ここでも病人，怪我人が診てくれと続ぞくと来る。今にも死にそうな病人まで連れて来られ，お手上げ。帰りに，もし，死んでいたら大変だから，そのような場合はお引き取り願うことにした，彼らはにわかじこみの医務担当の坂本隊員を本当の医者だと思いこんでいるので怨めしそうに見つめて，なかなか帰らない。やり切れない思いであった。

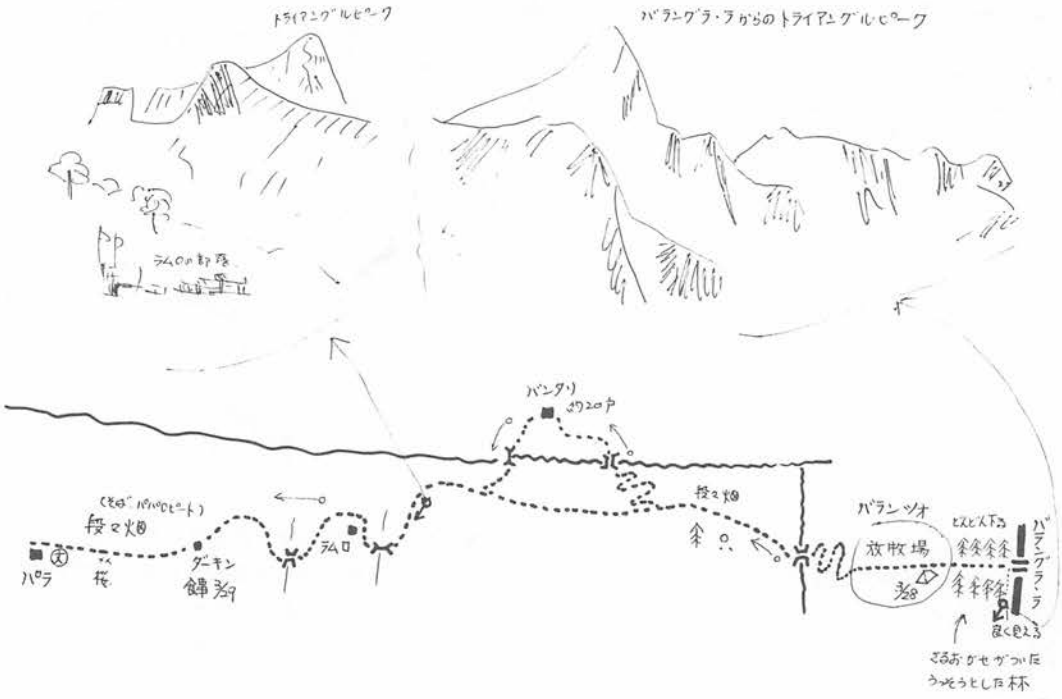


**3月27日**　快晴

昨夜の山羊の肉の故か，隊長，副隊長は下痢気味。リミで昼食。割と大きな村である。どんどん下ってカイガオン着14時。この先に峠が2つあり，キャンプ・サイト（以後C.Sと記す）の関係でここでキャンプ。

ガルブン・コーラの水は冷いが身体を洗ったり，洗濯をしたり。

ジュムラからのポーター25人が，もう帰りたいと言い出したが，代りのポーターが見つかるまではダメだとチョタレ氏が強引に説き伏せてしまった。




**3月28日**　快晴

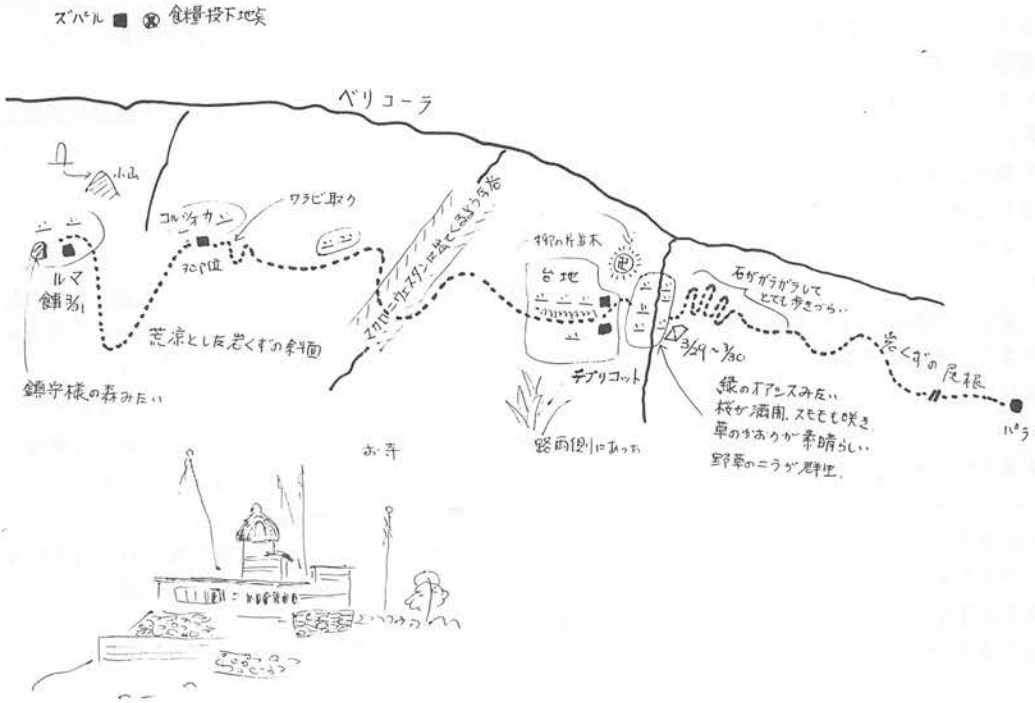
すぐに小さな峠への登り，きつくて意外にシゴかれた。この奥のパラングラ・ラには17時ごろに着いた。ダウラ・ヒマールがはるか前方にそびえている。雄大な眺めだ。30分ほど下った林が切れる所でキャンプ。しかし，ポーターがなかなか来ない。あとから来たサーダーが言うには，峠の少し手前の水場で泊るとゴネていたという。彼らが来なければメシにもありつけず野宿になる。シェルパを迎えにやらせようと思っていたら，薄暗くなりかけた林の中をやっとやって来た。

**3月29日**　晴夕方一時雨

ダーキンで昼食，卵が買えた。今日もきつい行動でテブリコットからポーターが何人か帰ると言いだしたり，ここからは食糧が高いので賃金を上げてくれとポーターが言いだしベース・キャンプ（以後B.Cと記す）に着いたら1人10Rsのボクシスをやる，とチョタレ氏，サーダーに交渉させたが結果的には1日17Rsとなってしまった。ここの美しい草原上のキャンプ・サイトにはニラが沢山あり，今夜はニラ料理だと五島隊員が張切る。夜，にわかに風が強くなり，一時雨が降った。

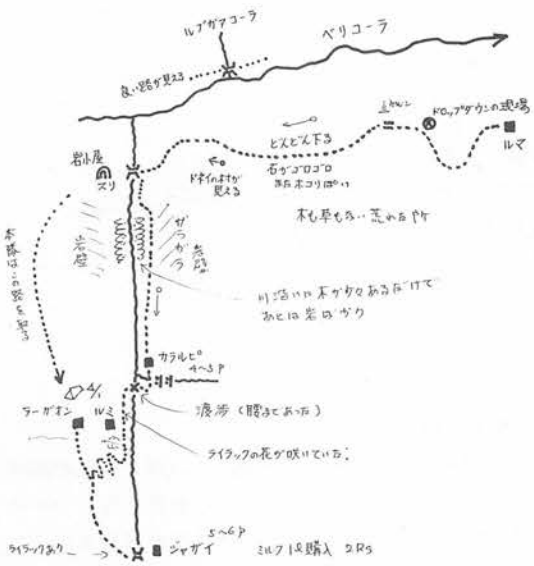
**3月30日**　快晴

結局，何人かのポーターがどうしても帰ってしまうので，補充するために本隊は停滞，京極，野村，ミンマ・テンジンの3名にポーター3名が偵察隊として先行する。夕方，村人がオレンジを売りに来た。この村で採れるという。




**3月31日　快晴**

熱帯性の植物が生い繁るテブリコットの村とも別れを告げてキャラバンは進む。ルマで昼食。ここで米を買えるかと期待していたのだが，ジャガイモしか買えない。少し先で食糧の投下をしていて，そこにドウネイの警察署長が来ているそうだから頼んでみるとのチョタレ氏の言葉に望みを託したが，それは無理な頼みだった。しかし，ここでチェックを受けたのでドウネイまで行かなくて済み，スリガドにそのまま入れた。スリガド出合の橋は荷物の通過料1個50パイサかかるとかで，C.Sにドウネイの村長が徴収に来た。偵察隊がポーターを4名手配していたので，帰りたがっていた者と交代。




**4月1日　晴**

偵察隊は右岸沿いの路を行ったが，渡渉があるので左岸を行く。急な山腹を巻きながらの路は相当に険しい。ニンバガオンで少し早いが水場の関係で昼食。この後，ラーガオンまで村はない。ラーガオンは40軒ほどの家があり結構大きい。小学校の校庭をC.Sに借りる話をラクパがつけたが水場が遠いので，少し水場に近い畑の中にキャンプ。ポーター9人交代。

**4月2日　晴**

この日，初めてわれわれの目指す山，カンジェ

ラルワと思われる山を見た。感激である。昼食地までは下り一方で快調だったが，ここからまた，高巻き。遅れるポーターにかまわず歩いていたが，いくら待っても来ない。水場もないので引き返し始めたら，チョタレ氏を先頭にポーター達がやって来た。ゴネるポーターをチョタレ氏がなだめて連れて来たのだ。ポーターもかなり疲れたようだ。大きな岩穴と，少しの水のある所をC.Sに見つける。

途中，偵察隊のポーターが帰ってきた。メモによると，地理に詳しいプンモの村人をポーターに雇いプンプン・コーラに入るとのこと。

**4月3日**　晴

やっと河に近づいてレヤンジで昼食。ここの村人に標識用の竹を採って運んでもらうことにする。この辺りからポーターの歩き方が極端に遅くなり，休む回数も多くなる。ドジャム・コーラに入ると，山間も広まり，のびのびとする。プンモの村を少し通り過ぎて畑のはしにキャンプ。偵察隊のポーターが戻って来てメモを渡される。プンプン・コーラ側からは絶望的のようだ。

ここでジュムラからのポーターは全員解雇し，プンモの村人と交代する。プンモでアタ，ツアンバ等を大量に注文した。

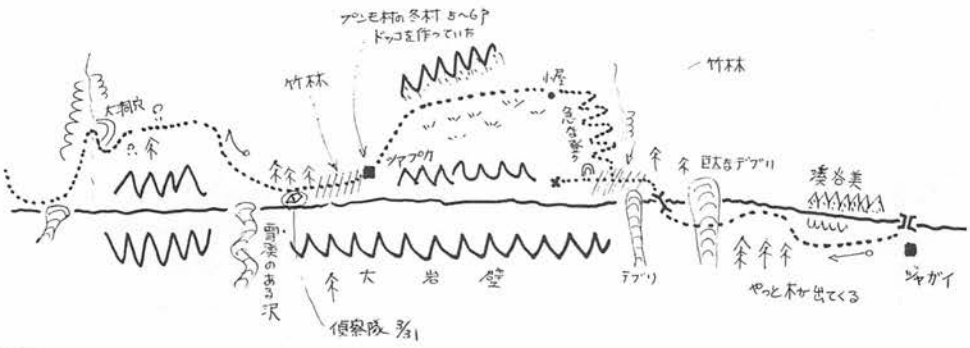
**4月4日**　快晴

隊長とチョタレ氏が，偵察隊と連絡を取るために先発する。残りは，新しいポーターの出発準備のために10時に出発。15時，ザラザン・コーラとナウリ・コーラとの間にあるカンジェラルワからの尾根の端でB.Cとなった地点で戻って来た偵察隊と会う。まもなく隊長達も戻って来て，とりあえずポーターを解雇する。

偵察隊の報告を聞き，最も登頂の可能性の高い，この尾根から岩稜となるルートを選ぶことになり，この場所をB.Cとした。

## 偵察隊の行動

野村　信昭

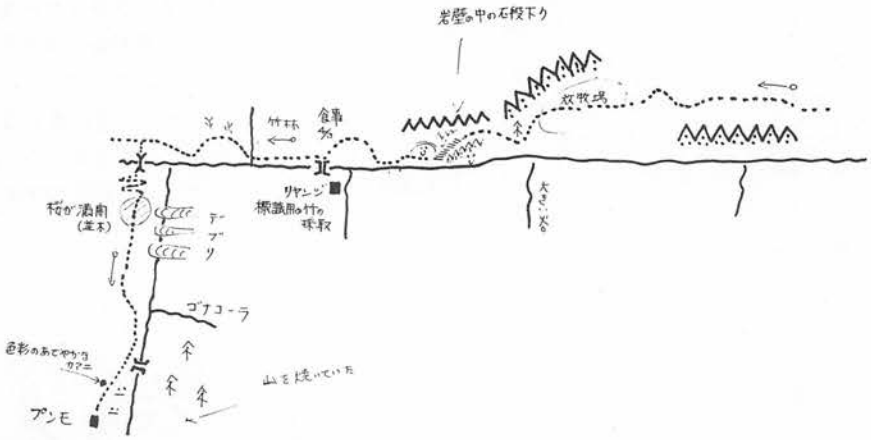



**3月30日**

12時にテブリコットを出て17時30分スリガド・コーラ出合，ここから，ポーターが言うには，路がはっきりしているが上下の多い左岸の路。腰までの渡渉があるが半日の行程を短縮できる右岸の路があるとの話。偵察隊の性格上，後者をとることにしてキャンプ。

**3月31日**

本隊にメモを残して出発。2㎞ほど河原の路を歩きカラルピ村を過ぎてすぐに渡渉する。ハラガオンとルミの対岸にあたる。腰までの渡渉も思った




より楽に終える。2時間ほどでジャガイ村である。ここで昼食。急斜面を登り下るとツアプカ村に出た。村を少し過ぎ林の中にキャンプ。

**4月1日**

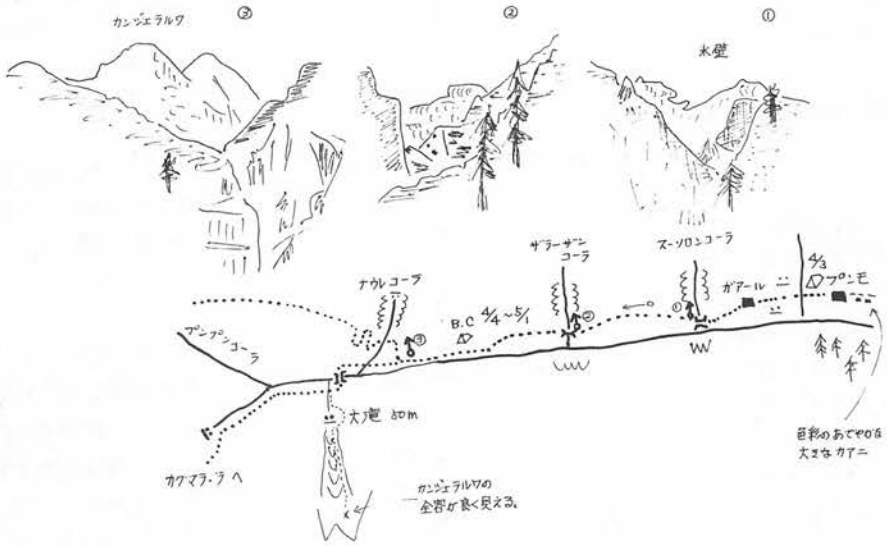
この日，やっとスリガド・コーラを通過し，ドジャム・コーラに入った。そして途中から一緒になったナイケの弟と共にプンモ村に着き彼の家の屋根に天幕を張らせてもらう。ポーターはこの先は寒くて行けないというので解雇し，村人3人と代える。

**4月2日**

ナウリ・コーラの出合の奥にカンジェラルワと思われる山が眺められ思わず足を止める。出合から右岸の尾根を巻いてプンプン・コーラに入ったのは15時。このコーラは広く明るく，周りの山々は岩と氷である。カンジェラルワだけが，高い故か雪をたくさんつけ，ヒマラヤひだを呈している。4000 *m*を少し越えた辺りにキャンプ。陽が沈むと寒さが羽毛服をとおしてしみてくる。

**4月3日**

プンプン・コーラ側から登頂ルートをとれるかどうかが偵察の目的だったが，雪崩の危険があり過ぎたり，急な岩壁だったりでこちら側からはほ



ぼ不可能。ただひとつ，コーラの支流から稜線に上がれるルートがとれそうだったが，これとて頂上へは長すぎ，ナイフ・リッジ上のC.Sの有無も問題である。さらに可能ルートをさがすためにナウリ・コーラに下り，これを偵察したが，大滝がありルートにならぬと判断する。出合にキャンプ。ポーター3人のうちナイケの弟を明日のガイドとして残し，他は解雇する。村へ帰る彼等に隊長あてメモを渡す。

**4月4日**

ザラザン・コーラ側に少し戻り，このコーラとの間の尾根に取り付く。ヤクの放牧に使われているとのことで，踏跡がかなり上まで続いている。急な登りを過ぎると尾根は広大になり，その上が岩稜になっている。2つめの小ピークまで登り上部を偵察する。ルートは2つとれそうだ。ピークから続く岩稜のルート，岩稜からナウリ・コーラへ下りアイス・フォールを経て上部雪田に出るルート，どちらも可能性がありそうだ。ザラザン・コーラからのルートは広大なナメ滝があり，また下部にゴルジュがあるので不可能と判断する。一応，登頂可能ルートを見つけて下山すると本隊と合流した。



## ベース・キャンプから登頂まで

渡辺　文仁

**4月5日**　晴後曇

採用したルートの性格から$C_1$がアドバンス・キャンプとなるのでタクティクスの再検討，装備，食糧の荷上げ準備で一日が終る。$C_1$へはポーター25人で一挙に荷上げすることにした。

**4月6日**　雪

昨夜からの雪が本降りになり停滞とする。ジュムラへメイル・ランナーを出す。往復200Rs。他にズック靴，ジャンパー，ポンチョ代わりにキャンバスバックを引き裂いて渡す。

**4月7日**　快晴午後一時曇

副隊長をB.Cに残し，全員が$C_1$に向けて出発する。チョタレ氏はポーター達の先頭に立ち，ククリでブッシュを切り，路を整備してくれる。急な登りを過ぎ，広大な尾根を左上してナウリ・コーラ側に立つと，カンジェラルワが立ちはだかっている。ルートを目で追う。なんとかなりそうだが上部雪田にぶつかる岩稜は，この尾根が邪魔になって見えない。渡辺はキャラバン中に少し再発した古い捻挫が痛み出し，山容をつかんだことでもあるのでここからB.Cに降りた。岩尾根に変る小高い所からはポーターは歩けないので，とりあえず$C_1$をその場所とする。チョタレ氏，シェルパはB.Cに戻り，隊員，ラクパは$C_1$泊まり。

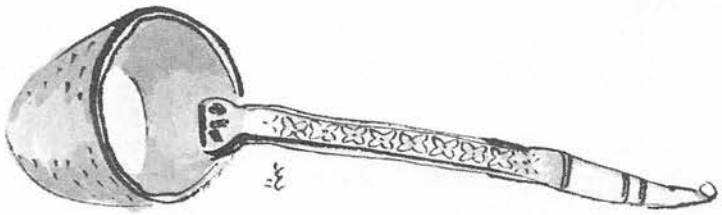
**4月8日**　曇時々小雪

$C_1$泊りの隊員達は$C_2$へのルート工作。$C_1$へ副隊長，シェルパが上る。12時のトランシーバー交信の時，雷が激しく鳴り，一時中断。雷には，これからも時々悩まされた。

**4月9日**　快晴

$C_1$をさらに上部に移動する一方，$C_2$へのルート工作を並行して進める。夕方の交信でルート工作隊から岩稜ルートは岩が脆く，また技術的に荷揚げには難し過ぎるから放棄して，明日はナウリ・コーラ側から偵察したいと言ってくる。

今日は久しぶりの快晴であった。



**4月9日　7時の交信　仮$C_1$とB．C**

服部　「こちら$C_1$，$C_1$，感度良好です。どうぞ」

渡辺　「ハイ$C_1$の感度も良好です。夕べは非常に寒かったですが，上の方はいかがでしたか？」

服部　「こちらの方も非常に寒くて，－15℃まで下りました。昨日はちょっと雷さわぎでもって中断されまして交信がうまくいきませんでしたが，今日は非常に良好です。どうぞ」

渡辺　「ハイわかりました。その後，高所影響とか新らしい体の変調はないでしょうか」

服部　「私，はじめて高いところに上ったのですが，まったく異状はありませんので安心しております。ほかの連中も元気で全然障害はでておりませんので，今のところ安心しております」

渡辺　「血圧の結果はどうですか」

服部　「血圧の結果はですね，五島だけがちょっと高いようで，あとはみんな平常のようです」

渡辺　「ゴンチャンは夕べよく眠ったでしょうか」

服部　「私のとなりで一緒に寝たんですが，何か寝返りを打ってたようで，あまりよく眠れなかったようにもみられますが，本人に聞いてみませんのではっきりしたことがわかりませんが……」

渡辺　「了解しました。それでは今日までに$C_2$へのルート工作が完了するという昨日までの判断でしたが，そのとおりですね」

服部　「工作隊により，だいたい$C_2$予定地までのルート工作を続けると，あとの残った者は，みんな当初$C_1$キャンプ予定地まで$C_2$用の装備から上げていく予定です」

渡辺　「了解しました。ガンバッテください」

**4月9日　17時の交信　B．Cと仮$C_1$**

渡辺　「応答して下さい」

服部　「こちら$C_1$，$C_1$，感度良好です。どうぞ」

渡辺　「$C_1$，$C_1$，ルート工作隊は帰って来ましたか。どうぞ」

服部　「ルート工作隊はちょっと前，16時半ごろに帰りました。みんな無事に帰りました」

渡辺　「ルート工作隊の状況はどうですか」

服部　「ただいまルート工作隊の京極と替って報告します。少々お待ちください」

京極　「京極です。B.C了解でしょうか」

渡辺　「声が少し遠いので，もう少し口をマイクにつけて話してください」

京極　「今度はよろしいでしょうか」

渡辺　「さっきよりは少しいい程度です」

京極　「それではお知らせします。今日の行動は15時の交信でお知らせしたとおり，ほとんどナイフリッジの終了点近くまで行きました。当初考えていたリッジの終了点近くから，左の氷河の下降は逆層の上

に雪が薄く乗っている程度なので，その代替ルートとして考えましたのは，ナイフ・リッジのはじまるピークのすぐのコル，そこから左側に降りて，登ることにしました。
１５時の交信の時に野村，坂本両君が，だいぶ疲れていたのですが，最後のガンバリで100$m$ほど下降して，見通しをつけてくれました。了解でしょうか」

渡辺「ハイ，了解しました。それでは，新らしいルートから$C_2$へは可能ですネ。どうぞ」

京極「エー，あのー，可能です。その下降する沢はですね，だいたい300$m$くらいなんです。100$m$下降してフィックスしてありますから，明日は200$m$ほどさらにフィックスを延ばし，そこから上へのルートを延ばそうと思っています」

渡辺「ハイ，それではいつごろ$C_2$のルートは拓かれそうですか。どうぞ」

京極「$C_2$のルートですか。明日，１日で何とか目どをつけようということで，今，話し合ってたところです。何とか頑張りたいと思っていますが，いかがでしょうか」

渡辺「そのてんについては了解しました。それと，３人はだいぶ疲れていますか」

京極「かなり疲れていますけれど，まだ気力でがんばっているようです。
野村，坂本両君は，まだ若いですから，明日も１日ガンバルそうです。
私とですネ，服部さんが入れ替って，明日ルート工作に回ろうということで検討しております」

渡辺「エーと，そのてんについて私も考えてます。
服部さんとちょっと替って下さい」

服部「服部です，替りました。どうぞ」

渡辺「今日，15時の交信で言っていた$C_1$を移動するということの問題ですが，どうしても上げなければならないということでしょうか」

服部「エー，ただいまのルートから考えますと，当初の予定地点に$C_1$を上げませんと……」
（テープ切れのため入れ替）

渡辺「その場合$C_1$の装備，食糧も一緒に上げなければならないわけですが，それだけ時間と労力をかける日にちがありますか。どうぞ」

服部「エー，当然ありますけど，こちらからその予定地点といいますのは，15$kg$の荷物をしょいまして，だいたい１時間ちょっとで行けますので，大丈夫だと思います。今日，$C_3$の一部を上げましたので，明日と明後日があれば間違いなくそこへ全部のものが上がると思います。どうぞ」

渡辺「ハイ，了解しました。それから天気が悪くなってきておりますが，もし明日行動可能であるならば，そちらで何か検討しているということですか。
服部さんと坂本君，それとシェルパ１名加えたらどうでしょうか。どうぞ」

服部「その件につきまして，ちょっとお待ちください。
エーと，野村君がもう１日ガンバってみたいということと、シェルパにはまだ荷上げするものがあるので，荷上要員として使用したいというみんなの意見なのですが，どうでしょうか」

渡辺「ハイ，それでは了解しました。ただし，気力でがんばっても先が長いので，ジックリ体を休めることを考えて行動してほしいと思いますので，その点，了解してください」

服部「そのとおりです。今のところ，確かに疲労というものがありますけれど，無理をしてまでやるというそういうことではありませんので，どうぞご了解ください」

渡辺「明日は，京ちゃんはなるべく体を休めるようにしてほしいと思います。
それと，私は明後日あたりに$C_1$に上ろうと思っていますが，$C_2$のルートとの可能性のからみ合いの問題で考えてみたいと思います」

服部　「ハイ，了解しました。もし明後日，渡辺さんが上って来られるんであれば，ここのテントは当然，明後日までこのまま置いておくことになりますし，そんなに早くは撤収できないと思いますので，ちょうどいいんじゃなかろうかと思います」

渡辺　「了解いたしました。それでは明日，また」

## 仮第１キャンプ（4,500m）より上部へむかう

**4月10日**　快晴夕方一時小雪

ナウリコーラの源頭のモレーンから岩稜へのキレットへの偵察。一方では$C_1$への上部移動。偵察隊は上部のアイス・フォールをも少し覗いて$C_1$へ戻る。渡辺の足も復調したようなので，明日$C_1$に上ることにする。

**4月10日　12時の交信　B・Cと仮$C_1$**

京極　「こちら$C_1$，$C_1$，B.C感度良好です。どうぞ」

渡辺　「$C_1$からもきわめて良好です。偵察隊の様子そちらからわかりますか。どうぞ」

京極　「エー，ただいま私達は2回めの荷揚げを終えて，40分ほど前から中間ピークのてっぺんで待機しております。さきほど，20分ほど前ですけれどルート工作隊は沢の中に降りましてですネ，$C_2$予定地までのちょうど中間地点を歩いているのが見えましたが，今は尾根の影になってちょっと見えません。だいぶ順調に進んでいるようです」

渡辺　「ハイ，了解しました。それでは見通しとしては，今日中に$C_2$辺りまで行けそうな見通しですネ」

京極　「エーと，あのペースだとおそらくは行けるんじゃないかと思われます」

渡辺　「了解しました。それから今日休んでいる京ちゃん，ノンちゃんは，あまり荷上げの方で体を使わないで休んでほしいと思いますが。どうぞ」

京極　「コンデションは，それほど悪いわけではございません。で，もう1度荷揚げしてですネ，下の$C_1$をこのピークまであげるような段取りをつけたいと思っております。ですからも1回やってしまうとですネ，ずいぶん楽になるんじゃないかと思います。で，午後からもう1度やって今日の行動は打ち切りたいと思いますが」

渡辺　「ハイ，了解しました。それでは特になければ，次は夕方の17時ということでよろしいですネ」

京極　「エーと，17時ですネ」

渡辺　「エー，そうです」

京極　「エー，了解しました。それから，バラサーブの足の状態はどうですか」

渡辺　「少しは良くなっているんではないかと思いますが，置きどころが悪ければ極端に痛みます。それで，今日の$C_2$予定地の到着ぐあい，そこらあたりを判断して，できれば明日，あるいは明後日あたりは$C_1$に入りたいと思っています。どうぞ」

京極　「エー，了解しました。シュラフとか荷物がありますので，隊員が取りに下ることも考えますが，そのへん考慮しておいてください」

渡辺　「エー，ありがとうございます。私のは，キッチンボーイのリジンをつれて上がろうかと思っていますので，そのてんの配慮は気持だけで充分です」

京極　「ハイ，了解しました」

渡辺　「それでは17時の交信まで，また」

京極　「それでは，17時まで」

**4月11日　晴**

京極，野村，五島，ミンマ・テンジン等が$C_2$へ。他は$C_1$の移動。ちょうど終ったころ，渡辺$C_1$着。早速$C_1$上の岩のピークに上って様子を見る。眼下に小さく$C_2$が見え，アイス・フォールがその上に立ちはだかっている。いかにも悪そうだ。一方，岩稜は確かに脆そうだ。そして，$C_3$となるであろう雪田に突き上げている岩稜へ，半分くらいしか工作できなかったこともわかった。偵察をせずに工作を先行した結果である。ここで，アイス・フォールの崩壊という危険よりも，難しさを取った方が安全であると考え，岩稜を$C_3$予定地へサーダーを加えて偵察し，荷揚げにもルートとして可能かどうかを調べることにし，$C_2$に泊る京極達は例のキレットに出るクロワールから岩稜に上ることにする。

**4月11日　17時の交信　$C_1$と仮$C_2$**

渡辺　「そちらは何時に着きましたか」

京極　「1時20分到着です。どうぞ」

渡辺　「ハイ，どうもご苦労さまでした。いわゆる中間ピークに立って，そちらのテントなども先ほど見ました。それから，リッジ上とかいろんな所も見まして，帰って来てから服部さんなどといろいろ相談をしました。その前に忘れないうちに聞きたいんですが，昨日，服部さん達がデポした装備類，これを取りに行ったでしょうか。どうぞ」

京極　「イイエ，まだ取りに行っていません。というのは，テントを張り終えて一段落したのが16時です。それからすぐ食事しまして，今，終ったところです。ですから，もう1度トランシーバー交信で確認してから今行こうと思っていますが」

渡辺　「ハイ，了解。取りに行くてんについては，この交信が終ってから判断してください。それと食糧についてちょっと聞きたいのですが，$C_1$，$C_2$，としては何人分ずつ上っているか，ちょっと食糧担当から聞いてください。どうぞ」

京極　「エー，了解しました。ちょっとお待ちください…… エーとですね。食糧はタクティクス表のとおりですが，$C_1$と$C_2$が逆になっています」

渡辺　「ハイ，了解しました。今ちょっと聞いたところが，$C_1$と$C_2$をそのまま持ってきたのではなかろうかという話があったので，ちょっと聞いたわけです。それでは，$C_1$が54人分，$C_2$が31人分ということで間違いありませんネ」

京極　「エーと，その逆です。了解でしょうか」

渡辺　「その逆ということはどういうことですか，$C_2$が54人，$C_1$が31人ですか？」

京極　「少し待って下さい。担当と変ります」

野村　「野村です。替りました，上っている食糧は，34人となっていますね$C_1$は」

渡辺　「$C_1$は，もとは31人になっていますが，3人くらいどうでもいいです。34人であってもいいですが，どうでしょう」

野村　「$C_1$と$C_2$が31人です。そしてですね，$C_2$の予備の分として20人分，$C_1$にあがっているはずです。了解でしょうか。どうぞ」

渡辺　「$C_1$が31人で，$C_2$の予備食として$C_1$に20食分上っているということですね」

野村　「そのとおりです。どうぞ」

渡辺　「ハイ，それで了解しました。それでは京ちゃんと替ってください」

京極　「エー，替りました。どうぞ」

渡辺　「それではですね，明日の行動について，こちらの方でいろいろ検討した結果について連絡します。これらの行動についてはですネ，アイス・フォール・ルートというのはですネ，危険性が充分ありそうだということで，今日サーダーに再確認したところです。したがって，アイス・フォール・ルートというものは，当面，偵察の対象としないということをまず前提として考えてください。ということは，1日，2日の遅れはたいした問題でなく，

まず危険度より困難度，あるいは安全度というものをこの場合考えたいと思います。あらゆる可能性から偵察して，あらゆる可能性を求めてから，１つのルートを見出したいと考えます。

そこで，明日の行動を連絡しますと，再度リッジ上のルートを確認する意味で，服部，坂本，サーダー，ミンマがリッジ上を偵察します。

これは，リッジ上にキャンプ・サイトがあるかどうか，これをもう１度再確認。それと，このリッジ上に荷揚げルートが本当に不可能なのかどうか，実際に荷揚げする立場であるシェルパに加わってもらって，もう１度判断してもらいたいということです。それと，現在$C_2$に入った京ちゃん達は，アイス・フォール・ルートを偵察せずに，昨日，服部さん達が偵察したリッジ上に出るクロワールに入り，リッジ上から現在$C_2$予定地として考えている所を偵察してほしいと思います。

これらは，あくまでもルート偵察であり，ルート工作ではありませんので，そのてん了解してください。以上ですがどうですか」

京極「ハイ，行動については了解しました」

渡辺「それでは明日必要なザイル類は，服部さん達が昨日デポした中に入っていますので，明日の朝取りに行ってもいいんじゃないかと思いますが。どうぞ」

京極「了解しました。昨日，服部，坂本両氏が偵察したルンゼはずいぶんひどいとこですね。これでしたらルンゼをひとつ登攀するようなものでしてね，あまり感心しないと思いますがどうでしょうか」

渡辺「エー，確かに相当きついらしいですが，そこらあたり京ちゃん，ノンちゃん，ゴンちゃん，ミンマがいれば大丈夫ではないかとこちらでは考えていますが。どうぞ」

京極「ひとつはジェードル状になっていましてですね，出口の所がずいぶん悪そうですヨ」

渡辺「これは荷揚げではなく，ルート偵察です。ということは，もしリッジ上にキャンプ・サイトがあり，それに加えて，シェルパ達が荷揚げが可能であると考えたら，リッジ上のルートを明日の偵察の結果とるということになるんではなかろうか，と思います。したがって，明日，京ちゃん達が入るクロワールというものは，クロワールからその上部の方，現在$C_3$予定地としている所までを偵察のポイントにしてほしいので……」

京極「了解しました。そうしますと，最終のリッジの所を通過可能かどうかを偵察すればいいわけですね」

渡辺「ハイ，それと$C_3$予定地のよりベターな所を探してほしいと思います」

京極「了解しました。明日はそのよう行動します」

渡辺「ハイ，それではよろしくお願いします。エー，あす７時半の定時交信で，再度確認すべきところがありましたら，確認したいと思います」

京極「エーと，次に偵察した時の準備のデポ地点をはっきりと確認したいのですが，お願いします」

渡辺「坂本君と替ります。その前に４人の体調はいかがですか」

京極「エーと，体調まことに良好です。それですね，食糧がこちら中途半端にしか上っていないんです。明日，食糧はこちらに全然上らないということでしょうか」

渡辺「エー，それについてはこれから検討して，明日の交信で連絡したいと思います」

京極「ハイ，了解しました」

坂本「あのですネ，京極さん方のテントを張った所から左の方へ行くと露岩の方へ出るモレーンなのですヨネ。それを逆，右側の方のモレーンに上ってください。モレーン伝いに上って行くと，モレーンの切れる所にザイル等デポしてありますから。わかりましたか」

京極「エーと，一番主稜線に近い方ですね」

坂本「エーとですネ，エ，そうです。京極さん方のテントを張ってある場所からクロワールが見えると思います。そのクロワールをめがけてモレーン上を歩いて行けばいいと思います」

京極「ハイ，了解しました。そうしたら，明日，私達が偵察するクロワールにステップが続いていますから，そのステップどおりにたどると荷物に行きあたるということですか」

坂本「ハイそうです。ぼくらの登っていったステップをたどって行けば，デポした所に着くと思います。そこにスノーバー3本ほど打ってありますからわかると思います」

京極「ハイ，了解しました。メインザイルは何本ありますか」

坂本「メインザイルは2本置いてあります」

京極「ハイ，了解しました。どうもご苦労さまです」

坂本「ハイ，どうも今日はご苦労さんでした。ゆっくり休んでください」

京極「ハイ，おやすみなさい。
エー，隊長よろしいですか」

渡辺「ご苦労さまでした。ゆっくりお休みください。それでは明朝まで……」

京極「エーと，隊長の足の具合を知りたいと思いますが，いかがですか」

渡辺「エーと，今日，リンジがほとんど私の荷物をしょってくれて，たいへん助かりました。どうやら登って来ました。ま，そのうちだんだん良くなると思います。どうぞ」

京極「エー，そうしたら頂上まで行けますネ。期待してますヨ」

渡辺「エー，まだわかりませんが，何とか頑張りたいと思います。どうぞ」

京極「エー，みんな待っていますからガンバって来てください。お休みなさい」

渡辺「おやすみなさい」

## いつ崩壊するかも知れぬアイスフォールをぬけ第1キャンプ（4,600m）、そして、岩稜上に第2キャンプ（4,900m）建設

**4月12日** 快晴

朝，京極との交信で，クロワールは落石が激しいとのことなので，彼等はアイス・フォールを偵察することになる。岩稜隊の副隊長達は意外に早く岩稜を終え$C_3$予定地へ13時ごろ着いた。片やアイス・フォール隊も頑張ったが，上部のクレバスに阻れて$C_2$へ戻る。

それぞれの偵察の結果は，岩稜は，途中に$C_2$の場所もある。アイス・フォールの方は崩れたクレバスも，それほど多くの時間を要せずに工作できるとのことだった。しかし，エベレストに参加5回の経験をもつラクパの意見でも，いずれ崩壊するかも知れないと言うので，前者をルートに決定した。

**4月12日　17時の交信　$C_1$と仮$C_2$**

渡辺「こちらの感度は良好です。
それでは，まず岩稜ルート偵察隊の結論をそちらの方に連絡しますと，一応，現在$C_2$，$C_3$キャンプ予定地は，充分に可能ないい場所であることがひとつ。それから，シェルパ等の意見でもそれほど困難なリッジでもないし，荷揚げも比較的容易に可能であるという意見です。
それから，キャンプ・サイトまで非常に長いので，安全の中継点が必要なのです

が，その中継点となるキャンプ・サイトが必要で，充分にあるということで，ルート工作にはだいたい，3日ないし4日かかって，4日めには上部にキャンプを設営できるであろう，ということが今日の偵察の結果です。
まず，こちらのこと連絡します。
次にそちらの方，連絡してください。どうぞ」

京極「エーと，良く聞き取れなかったんですけれど，だいたいのことはわかりました。エーとですね，こちらの方はですね，ほとんど$C_3$の予定地点の手前まで登りました。それでその前にクレバスでさえぎられたので，一応そこまでということで引き上げましたけれど，そのクレバスの乗っ越しは可能だという見方で帰って来ました。
エーと，そこに達するまで約4カ所ほどステップ切りがありましてですネ，そこにザイルフィックスが必要ではないかと，そういう判断にたって帰ってきました。
エー以上です」

渡辺「その内容についてわかりました。
クレバスのザイル工作ですが，それはどの程度かかりそうな見通しですか」

京極「エーと，それについてはですネ，さきほど長時間かかるようなことを言いましたけれど，それほどかからないという見解にたっていますが……」

渡辺「ということは，1日もかからないで通過，ザイル工作ができるということですか」

京極「1時間か2時間もあればという考え方にたっていますが，それとですネ，サーダーが確認しているらしいんですけれど，その奥に巨大なクレバスがあるということらしいです。そのあたり，私達は確認してませんから，そのへんちょっと詳しく聞いてもらいたいと思うんですが」

渡辺「エーそれはミンマと何か話をしたんですか」

京極「エーそうです。すぐ近くでお互いコールできましたから，そういう話をずいぶんしてたらしいです。サーダーに聞いてもらいたいと思います」

渡辺「エー，了解しました。
だいたいそちらの方の様子わかりました。
それからもう1点こちらから聞きたいのですが，アイス・フォールの崩壊の問題ですが，現在大丈夫でも，たとえばクレバスの問題，帰りの時，どうなっているかという問題，そこらあたりについてはどう考えますか」

京極「エーと，今は簡単に渡れます。だんだんとどの程度ひろがるかということはアイス・フォールの経験がないので……
若干，広がるということは予測できますけれど。下りは懸垂下降すれば簡単に下れますから，そのてんは心配ないんではないかと思います。
早いうちに荷揚げしてしまうと，あとはビルのてっぺんから懸垂するようなもので，楽だと思います」

渡辺「今日，ラクパに例のアイス・フォールを見せたところ，今のところは大丈夫であるが，帰りあたりはかなり日にちもたって暖くなっているので，次第に崩壊が出てくるのではなかろうかというような意見です。
彼はエベレストのアイス・フォールを5回，日本隊3回，インド隊2回で，経験があり，そこらあたりの意見はかなり貴重ではないかと考えてます」

京極「エー，了解しました。
氷の状態は，今のところは硬いです」

渡辺「エー，それではもう1度サーダーに今のクレバスの問題について聞いて，さらにこちらからの方としまして考えを固めたいと思います。
また同時に，そちらの方では今日の岩稜ルートについての質問ありませんか」

京極「エー，岩稜ルートのテント地はどの辺になるんでしょうか。もし，$C_2$を移すとし

たらどの辺に移せばいいのか。そのへんちょっと確認したいのですけれど」

渡辺「エー，例のクロアール部分のもっと手前の方です。そのリッジ上に上れる現在の仮$C_2$から上れるルンゼがあるとのことです」

京極「エ，それはあります。やさしいのがこの仮$C_2$の真横にありますから，それからだといいと思いますが，そこにあるのでしょうか」

渡辺「ハイ，その上です。どうぞ」

京極「ハイ，了解しました」

渡辺「それでは，次に18時に交信したいと思います」

**4月12日　18時の交信　$C_1$と仮$C_2$**

渡辺「JKE，JKE，こちら$C_1$，$C_1$。$C_2$，$C_2$，応答してください」

京極「こちらキャンプⅡ。どうぞ」

渡辺「こちら感度良好です。
さきほど，そちらの方から質問のあった上部の方のクレバスについては，サーダーいわくでは，今日の偵察隊が引き返したクレバスよりも小さいんではなかろうかという意見でした。どうぞ」

京極「ハイ，了解しました。それではそれを乗っ越すことは可能だということですか」

渡辺「エー，ま，そういうことになるんではないかと思います。
エー次に，さきほどこちらの方の岩稜ルート偵察隊の結果をそちらの方に報告したわけですが，それらについて2つのルートの対比についてそちらではどう考えていますか」

京極「岩稜ルートのことはよくわかりませんけれど，横から眺めたら素晴らしいリッジで，スカッとした感じのいい所だということだけです。あとはわかりません」

渡辺「それでは，そちらとしてはどちらのルートと，今，考えていますか」

京極「エーと，アイス・フォールの状態はさきほどのシェルパ等の話から聞きましてですね，私達としては素人判断しかできないというてんで，今ちょっと迷っております。それであのー，どちらのルートかと言われても，岩稜の上部の状態がわかりません。それからアイス・フォールの方は，クレバスの状態が，今後，どういうふうになるのかそのひとつの判断がちょっとこちらにまかせられても，今すぐには結論は出しかねるんですけれど」

渡辺「結論を求めたというよりも，さきほどこちらの方の偵察隊の話をして，今日そちらの方の行動と対比してみて，感覚的にどうとらえるかということが質問の主旨だったわけですが。ま，それは結構です。それではですネ。どちらのルートをとるかという結論を，あと10分後に連絡したいと思いますが。どうぞ」

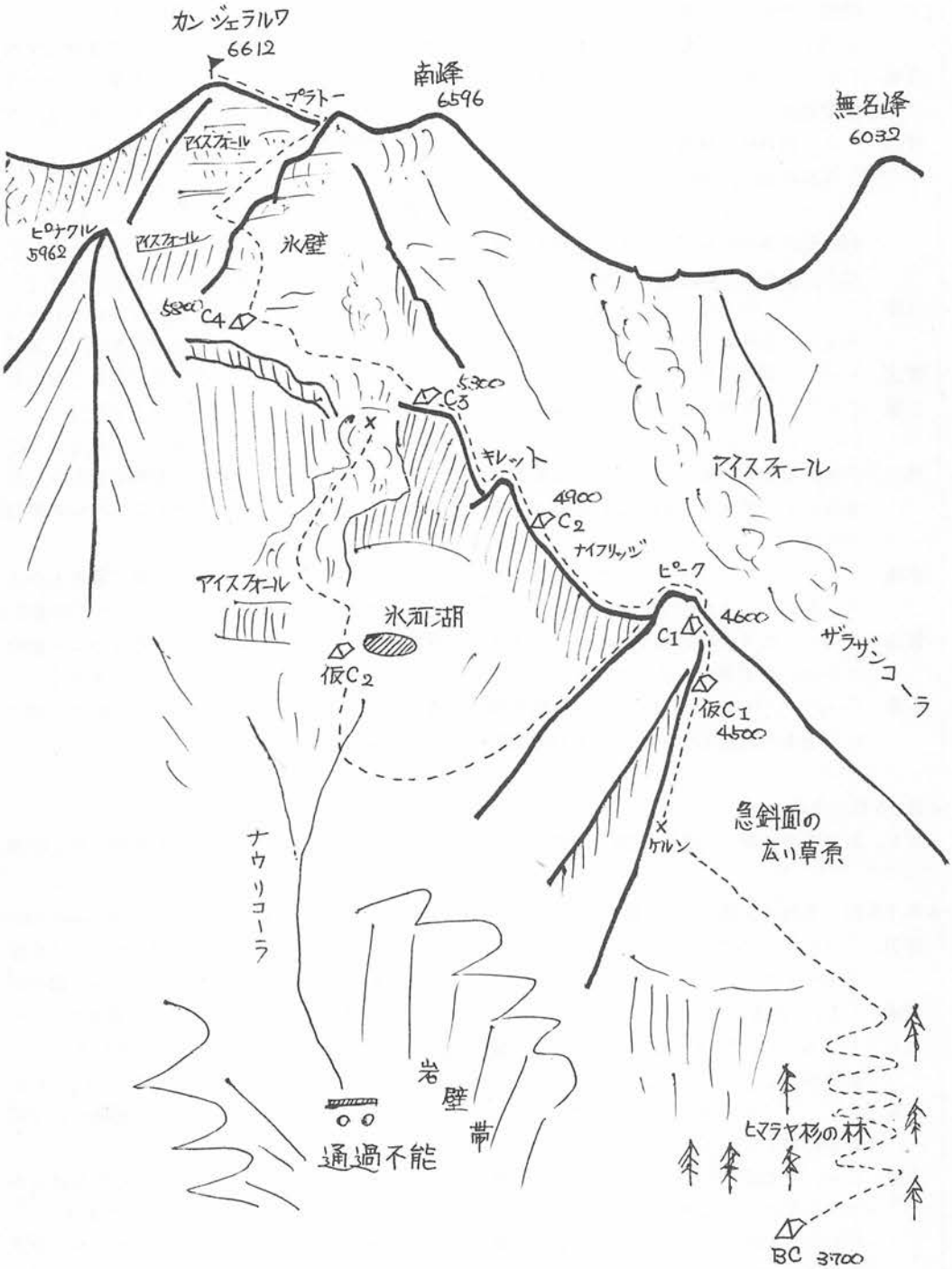
京極「ハイ，了解しました」

**4月12日　18時10分　ルート決定の交信**

度辺「JEK，JEK，こちら$C_1$，$C_1$。$C_2$，$C_2$ 応答してください」

京極「こちら$C_2$です。感度良好。どうぞ」

渡辺「こちらの感度も良好です。
それでは，どちらのルートをとるかの決定をお知らせします。
エー，岩稜ルートの方をとろうと思います。この理由を言いますと，アイス・フォールの問題，リッジの場合キャンプ数が1つ少なくて済むてん，キャンプ数が1つ少なくて済むということは，タクティクス上において非常に重要な問題であ


カンジェラルワ
6612
南峰
6596
無名峰
6032
プラトー
アイスフォール
ピナクル
5962
アイスフォール
氷壁
5800
C4
5300
C3
キレット
アイスフォール
4900
C2
ナイフリッジ
ピーク
アイスフォール
氷河湖
4600
C1
ザラザンコーラ
仮C2
仮C1
4500
急斜面の
広い草原
ケルン
ナウリコーラ
岩壁帯
通過不能
ヒマラヤ杉の林
BC 3700

ると思います。
それと，さきほどのアイス・フォールの問題，やはり安全度を考えたいということです。エー，了解でしょうか」

京極「ハイ，了解しました。今後の行動について連絡ください」

渡辺「エー明日は，休養してください。それと現在の仮$C_2$は明後日，リッジ上のキャンプサイトに上げることにしますが，それは細部を副隊長と打合せた結果を，明日また連絡したいと思います」

京極「エーと，明日はここで休養して，明後日テントを移動ということですか」

渡辺「ハイ，明日はゆっくり休んでください」

京極「エーと，食糧は全然こちらに来ないということですね」

渡辺「あ，それ忘れてました。エー現在たりませんか。明後日の朝あるいは昼までは。どうぞ」

京極「エーと，昼のレーションを朝に食べてですね，なんとか引きのばします」

渡辺「エー，たりなければラクパに持たせますから，必要個数を言ってください」

京極「エーと，そちらのレーションの箱を開けるとまた混乱しますから，そのままにしてください」

渡辺「ハイ，了解しました。それでは明日，8時に交信したいと思います」

京極「ハイ，了解しました。明日8時ですね。それとですね，マラリヤの薬，ヒマラヤボケか何錠のむのか忘れてしまいました。何錠飲むのか教えてください」

渡辺「ひとり2錠です ― 2錠ですヨ」

京極「ハイ，了解しました。1人2錠ですね。これから服用します」

渡辺「それから，健康状態はどうですか」

京極「私はちょっと頭が痛いです。それから五島君も少し頭が痛んでおります。野村君がビタミンC不足で唇が荒れて少し血が出ているようです。以上です」

渡辺「唇が荒れるのはビタミン不足というよりも，やはり，陽差しの問題もあると思います。したがってチョコラザーネをぬるようにしてください。
それから，こちらの方も坂本君なんか人並みに頭が痛いなんてうったえています」

京極「ハイ，了解しました。それでは一般的な傾向で安心してよろしいですネ」

渡辺「ハイ，そうと思います。それで，明日8時までさようなら」

**4月13日　快晴**

昨日，新高度を経験した坂本の調子が悪すぎるので渡辺と共にB.Cへ。他は休養のために停滞。

**4月13日　8時の交信　$C_1$と仮$C_2$**

渡辺「JKE，JKE，こちら$C_2$，$C_2$。$C_1$応答してください。どうぞ」

京極「$C_1$，応答してください。どうぞ」

渡辺「こちら$C_1$です。$C_2$泊りのその後の健康状態はどうでしょうか」

京極「エーと，今日は大変良好です。みんなのびのびしております。どうぞ」

渡辺「エ，安心しました。それでは今日と明日の行動について言いますと，
今日はこれから，渡辺，坂本がB.Cに戻ります。坂本君はちょっと風邪もひいたらしくちょっと調子が悪いようです。渡辺はB.Cに戻って，これはのちほど食糧担当の方から聞きたいのですが，調味料，砂糖等が$C_1$には欠乏しつつあるので，そこらあたりを補充したいと思います。
次に明日の行動ですが，明日，$C_1$から仮$C_2$には，ラクパ，パサンを荷揚げに下らせます。
それから，服部，サーダーの両名は$C_1$から$C_2$へのルート工作にあたります。
それから，仮$C_2$泊りの4人ですが，ラクパ，パサンがそちらに荷揚げに行って，そちらの4人は$C_2$に上るわけですが，そ

のうち五島は，ラクパ，パサンと一緒に$C_1$に戻ってください。
それから，京極，野村，ミンマの3名は$C_2$に泊まり，翌日の$C_3$へのルート工作にあたってください。$C_2$へはテント1張をはってください。以上です」

京極「エーと，ただいまの件，もう1度こちらから復唱します。
パサンとラクパが，こちらに荷揚げの手伝いに来るということ。
それと，私達4名で$C_2$の建設をし，五島は$C_1$に下ること，そしてミンマと野村，京極がそこに泊って，翌日は$C_3$へのルート工作にあたるということですネ」

渡辺「ハイ，そのとおりです」

京極「エーと，稜線上のテントは2張りということでしょうか」

渡辺「$C_2$のテントは1張りです。どうぞ」

京極「ハイ，了解しました。
明日のそちらに必要な食糧を何食分かラクパ等に持たせますが，そこらあたり食糧担当と替ってください」（以下省略）

## 岩稜上の雪原に第3キャンプ（5,300m）、さらに上部を偵察した

**4月14日**　午前中薄曇り夕方風雪が強まる

ナウリコーラの$C_2$をそのまま岩稜上に移動し，$C_1$に戻る五島を除く3人が$C_2$泊り。服部，サーダーが$C_1$から$C_2$へのルート補強。渡辺は$C_1$へ。

**4月15日**　晴後曇

$C_2$泊りの3人が$C_3$へのルート工作。$C_1$泊りは$C_2$への荷揚げの後，午後上って来たチョタレ氏と共に服部，五島はB.Cへ。坂本も回復して$C_1$に上る。

**4月16日**　快晴

朝の交信で，昨夜，メイル・ランナーが帰ってきたが隊員への手紙は皆無。京極，野村は$C_3$へのルートを補強した後B.Cへ。ミンマ・テンジンは$C_1$に戻り，再び$C_1$泊りと$C_2$へ荷揚げ。渡辺は$C_1$へ戻り，坂本，サーダー，ミンマ・テンジン，パサンが$C_2$泊り。

**4月17日**　快晴

$C_2$泊りの4人は$C_3$の建設。坂本，サーダーは$C_3$泊。シェルパ2人は$C_3$へ2回荷揚げし，B.Cから来た服部，五島と共に$C_2$泊。渡辺はB.Cへ。

**4月18日**　快晴

坂本，サーダーが$C_4$へのルート偵察。$C_2$泊りの4人は$C_3$へ荷揚げして戻る。京極，野村はB.Cから$C_1$に上り，$C_2$に荷揚げしてから$C_1$に戻る。渡辺，チョタレ氏は下降ルートとしてザラザン・コーラを偵察したが，ポーターが歩くのには若干の整備を必要とするので，使わないことにする。

**4月18日　17時交信　B.Cと$C_1$，$C_2$と$C_3$**

京極「JKE，JKE，こちらキャンプ1」

服部「エー，こちらキャンプ2。どうぞ」

渡辺「エー，感度が悪いのですが。今日は予定どおり$C_2$荷揚げの人は$C_1$泊りですか」

京極「こちらキャンプ1。$C_2$へ荷揚げしました。どうぞ」

渡辺「そうしますと，$C_1$に残っているのは，ルート旗だけですか。どうぞ」

京極「$C_4$の装備とルート旗です。明日，荷揚げすれば終ると思いますが」

渡辺「明日の荷揚げは何ですか。どうぞ」

京極「キャンプⅣの装備とルート旗です」

渡辺「ハイ，了解しました。$C_2$の食糧，予備食，これは上げてませんね。どうぞ」

京極「$C_2$に予備食上りました。どうぞ」

渡辺「それは上げる必要はなかったのですが，上げてしまったならばしょうがないでしょう。それから，2点ほど明日の連絡を

します。$C_1$からとりあえず，あと何かありませんか」

京極「エー，べつにありません。そちらからの指示を待ちます」

渡辺「それでは，明日，各キャンプの連絡をとって6時に交信したいと思います」

京極「ハイ，了解しました。この交信は録音してあります」

渡辺「それでは，明日までさようなら。
それから，$C_2$，$C_2$，応答してください。
どうぞ」

服部「ハイ，こちら$C_2$。感度非常に良好です。どうぞ」

渡辺「エー，そちら予定どおり荷揚げして，今$C_2$ですね。どうぞ」

服部「ハイ，そのとおりです。今日はだいぶ疲れましたが，$C_3$に荷揚げしまして，$C_3$のテント1張り張ってまいりました。そして，$C_4$のルート偵察隊が帰るのを待って，私達が帰りまして，ちょっと前に帰って来たばかりです。今日はだいぶしごかれました。エーそれで，今日，野村さん達が$C_1$から上げましたものは，$C_4$の食糧と$C_1$，$C_2$の予備食ひと箱分あがっていますので，私達は明日は，$C_4$の食糧と，こちらにあるスノーバーとかメインザイルとか，あとは何でしょうかね，アイス・ハーケンが若干残っています。これを荷揚げすればよろしいでしょうか。どうぞ」

渡辺「重量はどれくらいになりますか？」

服部「25—30*kg*くらいだと思いますが。どうぞ」

渡辺「エーと，現在$C_2$は，服部，五島，パサン，ミンマでしょうか。どうぞ」

服部「ハイ，そのとおりです。どうぞ」

渡辺「ハイ，了解しました。それでは明日の行動については6時に連絡したいと思いますので，$C_2$とはさようなら。
それから，$C_3$，$C_3$，応答してください。
どうぞ」

坂本「こちら$C_3$で，感度，ものすごく悪いです。どうぞ」

渡辺「$C_3$からの感度も悪いようで，$C_2$，中継してくれませんか。どうぞ」

坂本「$C_2$，$C_2$，感度あったら応答願います」

服部「$C_2$，感度良好です。どうぞ。中継しましてB.Cに送ります」

坂本「エーとですね，渡辺さんに伝えてください。今日は予定の鞍部，そのコルまで行かれなかったということ。それはなぜかといったら，ヒドン・クレバスが予想以上に多く，手こずったということを伝えてください。どうぞ」

服部「了解しました。エー，B.C，B.C，よろしいですか。$C_2$から中継します」

渡辺「エー，傍受しました。クレバスを乗越したのかどうか，それを聞いてください」

服部「$C_3$，$C_3$，クレバスを乗越したかどうかを聞いてくださいとのことですが，そちらから言ってください。どうぞ」

坂本「エーと，クレバス帯は完全に抜けました。そして，あの小さなクレバス，それの末端に今日持った装備を一応デポしました。どうぞ」

服部「エー，B.C，B.C，よろしいでしょうか，わかりましたか，こちらでもうしあげましょうか」

渡辺「中継してください」

服部「あのネ，クレバスは通過できたそうで，1番最終のコルまでは達し得ず，途中でハーケンとかフィックス・ザイルをデポして，もどって来たと，そういうことです」

渡辺「エー，コルまではあと時間にして何時間くらいかかりますか」

服部「坂本君，坂本君。コルまであと時間にしてどのくらいかかるとのB.Cからの質問ですが。どうぞ」

坂本「エーと，だいたい，ゆっくり行って1時間くらいもあればコルまで行けるんではないかと思います」

服部「エー，B.Cわかりましたか。ゆっくり行って1時間で行けるところまで達した

ということですが。どうぞ」

渡辺「ハイ了解。$C_3$の出発は何時で，帰着は何時で，坂本とサーダーの調子はどうか」

服部「エーと，坂本君，聞こえましたでしょうか。あの一$C_3$からルート工作に出かけた時間は何時か，帰幕の時間は何時か，それから体の調子はどうだか，そういう問いです」

坂本「エーと，$C_3$出発は8時30分です。$C_3$に帰って来たのはだいたい14時から14時半だと思います。どうぞ」

服部「それから体の方もお伝え願います。どうぞ」

坂本「エーと，体はこないだの，あの，$C_1$の状態とだいたい似たような感じで，とても頭が痛くて歩くのがやっとです」

服部「了解しました。エーとB.C，状況よろしいですか，中継します。
エー，朝出たのは8時半で，帰って来たのが，14時から14時半の間と，それから体の方は，頭が痛く，前に$C_1$にいた時と同じような状態だと，そういうことです。それから，あの…＜ 不明 ＞…ちょっと頭が痛い」

渡辺「……時間状況として考えたいと思いますので，そのてん了解してください」

服部「あの，B.C，もう1度お願いします」

渡辺「今日のザラザン・コーラの偵察の結果，時間かけてルートを作れば，ポーターの荷揚げ，じゃない，ポーターの下降も可能かも知れませんが，ちょっと時間がかかりそうなので，下山ルートは現在のルートを通ってB.Cに帰るということにしたいと思いますので了解してください」

服部「ハイ，了解しました。$C_2$，了解しました」

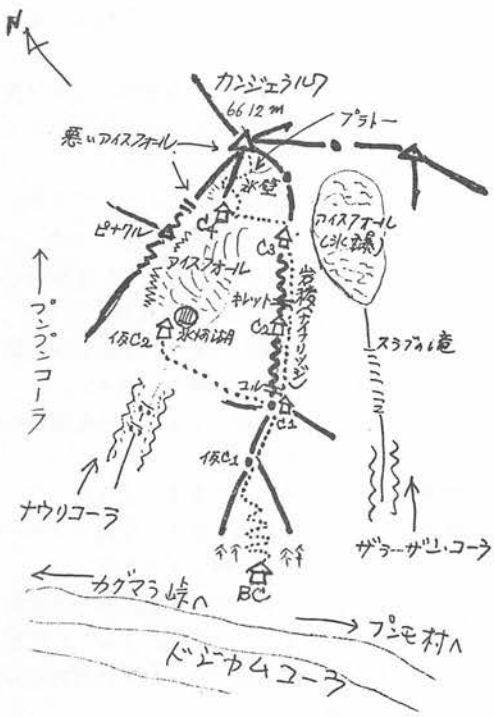
渡辺「$C_1$，$C_3$，聞えましたか。どうぞ」

京極「$C_1$，了解しました」

渡辺「ハイ，それでは18時まで，各キャンプともさようなら」

服部「ハイ，18時まで」

京極「$C_1$，18時まで」




**4月18日　18時の交信**

渡辺「$C_2$，$C_3$，聞えますか。どうぞ」

京極「エー，こちら$C_1$，$C_1$，他の隊と混信しているようですけれど」

渡辺「交信したいということですか。どうぞ」

京極「エー，できればチャンネル2を使っていただきたいのですが。どうぞ」

渡辺「ハイ，了解」

京極「こちら$C_1$，チャンネル1でもよくなりました。どうぞ」

渡辺「それでは，$C_2$，$C_3$ともチャンネル1がよいので，そのようにしてください」

京極「了解しました。今から切り替えます」

渡辺「……$C_2$に荷揚げして，$C_2$から$C_3$に上れますか。どうぞ」

京極「もう1度お願いします」

渡辺「$C_1$に残っている上部キャンプの荷上量を$C_2$から$C_3$まで上げれますか」

京極「$C_1$に残っている荷物をかついで，$C_3$に入るということですか。どうぞ」

渡辺 「エー，現在そこにあるのは，$C_4$の装備ですネ。どうぞ」

京極 「エー，そのとおりです。それをかついで$C_3$に入るということですか。どうぞ」

渡辺 「そうですが，それは可能ですか。どうぞ」

京極 「エーと，それは可能です。どうぞ」

渡辺 「それでは$C_3$にそれをかついで来てください。エー，シュラフは$C_2$に置いていってください」

京極 「エー，よく聞きとれないのですが，もう１度お願いします」

渡辺 「$C_1$の荷物を$C_3$に上げてください。それから，自分達のシュラフは$C_2$に置いていってください。どうぞ」

京極 「ハイ，了解しました。もう１度復唱します。$C_1$にある荷物を$C_3$へかつぎ上げ，自分達のシュラフは，$C_2$に持っていくということですネ，以上ですネ」

渡辺 「ハイ，そのとおりです。エー，明日ガンバってください。
それから，$C_2$，$C_2$，聞えますか。どうぞ」

服部 「ハイ，$C_2$。感度良好です。どうぞ」

渡辺 「エー，明日は服部，五島，両サーブは，自分達のシュラフは$C_2$に置いて$C_3$に上り，$C_3$でサーダーと一緒になって$C_4$のルート工作にあたってください。聞えますか。どうぞ」

服部 「ハイ，了解しました。反復します。服部，五島は，明日は自分のシュラフを$C_2$に置いて$C_3$に上り，サーダーとルート工作を一緒にすると，そういうことですネ。どうぞ」

渡辺 「そうです。そして$C_3$に泊ってください。どうぞ」

服部 「ハイ，了解しました。$C_3$に泊るということですね。了解しました」

渡辺 「ハイ，どうぞ頑張ってください。
$C_3$応答してください。どうぞ」

坂本 「ハイ，$C_3$です。感度あまり良くありませんが，聞えます。どうぞ」

渡辺 「それでは，$C_3$坂本君は，明日は$C_2$に下って，ちょっと休んでください。それから，サーダーは$C_3$で服部，五島両サーブが来るのを待ち，$C_4$へのルート工作にあたるように伝えてください。どうぞ」

坂本 「エーと，あのーですね，明日の朝になってみなければよくわかりませんが，エーまた少し回復してきました。それで，あのーできれば明日，あのー$C_2$に下らないで$C_3$にいて休養できれば，なおよろしいと思うんですが，どうですか。どうぞ」

渡辺 「あさっての行動の問題もありますので，エー，そのまま$C_2$に下ってください」

坂本 「エー，よく聞きとれません。もう１度お願いします。どうぞ」

渡辺 「エー，それでは，$C_2$，$C_2$，聞えますか。中継してください。$C_2$どうぞ」

服部 「ハイ，$C_2$感度良好です。どうぞ」

渡辺 「エー，あさっての行動があるので，坂本君は，明日は$C_2$に下るように伝えてください。
それから，サーダーには，服部，五島両サーブが行くのを待ってルート工作にあたるということも，併せて伝えてください。
エー，坂本君は$C_3$の自分のシュラフを下げる必要なし。この３点を$C_3$に伝えてください。
それから$C_2$のパサン，ミンマですが，これを言うのを忘れました。ミンマ，パサンは，$C_2$から$C_3$へ残っている荷揚げをして$C_2$にもどってください。どうぞ」

服部 「ハイ，了解しました。そのように伝えます。ちょっとお待ちください。
$C_3$，$C_3$，感度ありましたら応答願います。どうぞ」

坂本 「ハイ，感度あります。どうぞ」

服部 「あのー，中継します。今のバラサーブからの伝言を中継しますから。
明日は，あさっての行動もありますので，坂本君はとりあえず$C_2$に下ってください。その場合，自分のシュラフは持たなくても結構です。

それと私と五島は，サーダーと工作にあたりますので，私達が行くまでサーダーに待っていてくださいと，そのように伝えてください。
それから，テンジンとパサンはこちらに残った装備類を$C_3$にあげて，また$C_2$にもどります。そういうことで坂本君と一緒ですね，それだけです。以上です」

坂本「ハイ，了解しました。では明日はそのとおり行動いたします。了解しました。どうぞ」

服部「ハイ，承知しました。B.C，B.C，よろしいでしょうか？　私達は明日は空身で$C_3$に上るということですね。どうぞ」

渡辺「そうです。自分達に必要なものは上げて結構です。それから明日，渡辺はB.Cから$C_1$に上ります。
それで，12時までに$C_1$に着けると思います。だいたい各キャンプの交信は16時に状況を知らせてください。了解でしょうか」

服部「$C_2$，了解しました」

**大雪壁近くに最終の第4キャンプ（5,800m）を建設し、アタック態勢ととのう。上部の無気味に光る蒼氷の壁がキーポイントか**

**4月19日**　快晴夕方から雲が広がる

$C_2$から服部，五島，$C_3$からサーダーが加わって$C_4$と上部のルート偵察。坂本は$C_2$に戻り京極，野村が$C_3$入りする。ミンマ・テンジン，パサンは$C_3$の往復。渡辺は$C_1$に上る。

**4月19日　7時30分の交信　B・C，$C_1$，$C_2$，$C_3$**

服部「……食糧，米が全然無くなったんですがネ。5合くらいでもいいから上げてもらいたいと思うんですヨ。テンジン，パサンの食べる分が全然ないんですから。
食糧，われわれ食べられなかったんですよ。よろしいでしょうか」

京極「エーと，キャンプ2はα米ですよ。どうぞ」

服部「エー，キャンプ2はα米なんですが，そのα米が無いんです……」

京極「エー，予備食の箱を開ければ入っていますけれど。どうぞ」

服部「予備食の箱はわかっているのですが，開けてもよろしいですか」

京極「エー，そのための予備食で，こちらから上げる分はまったく無いんですヨ。どうぞ」

服部「エー，α米でなく，米はないんですか。どうぞ」

京極「エー，そのためにα米を上げているんで，α米を使ってください。どうぞ」

服部「了解しました。それではよろしいです」

渡辺「JKE,，JKE。こちらベース・キャンプ，ベース・キャンプ。$C_1$，$C_2$，$C_3$，聞えますか。どうぞ」

京極「$C_1$，聞えます。どうぞ」

服部「$C_2$，感度良好です。どうぞ」

坂本「$C_3$，感度あまり良くありません。どうぞ」

渡辺「$C_3$がちょっと良く聞えませんが，特に異常ありませんか。どうぞ」

坂本「エーと，頭の痛みがだいたいとれまして，もうなおっていると思います」

渡辺「$C_1$，$C_2$，特に異状ありませんか。どうぞ」

服部「異状ありません」

京極　「$C_1$，異状なし」
服部　「非常に天気もよくてよろしいと思います。そちらからの連絡事項，特になかったら出発しますから。どうぞ」
渡辺　「$C_1$，特にございませんか。どうぞ」
京極　「$C_1$，異状ありませんが。どうぞ」
渡辺　「ハイ，今日は夕べの連絡どおりに行動を願います。特にございませんので，16時までさようなら」
京極　「$C_1$，16時の交信までさようなら」
服部　「$C_2$，トランシーバーは，私達の分は，$C_2$にあるのはそのまま置いていって，$C_3$にあるのを私達が持って行動するということでしょうか。どうぞ」
渡辺　「そのとおりです」

**4月20日**　快晴

京極，野村が$C_4$上部のルート工作に出る。$C_2$，$C_3$からはそれぞれ$C_4$への荷揚げ。この夜，第1次，第2次の登頂隊員を決定。シェルパ連中は，かなりの技術を持っていたので，高度に強い彼等と隊員を組み合わせて確実に登頂が成功するようにした。したがって最も体調の良い隊員とシェルパとで第1次登頂隊を編成した。第1次隊・京極，五島，サーダー，ミンマ・テンジン，第2次隊・服部，野村，坂本，パサンである。

**登頂隊員決定の際の交信　－4月20日17時20分－**

渡辺　「JKE，JKE，こちら$C_1$，$C_3$応答してください」
服部　「どうもおまちどうさまでした。全員集りましたので，どうぞ発表してください」
渡辺　「ハイ，わかりました。発表の前にちょっと確認したいのですが，現在$C_4$には4人用テント1張ですが，この4人用テント1張に4人入ることは，ちょっと窮屈であると思いますが，そのへんどう考えますか」
服部　「私が全部テントを設営して，シュラフ，エアーマットを敷いてまいりましたが，そんなに窮屈で困るほどでなく，なんでもないです。それであとシュラフが1本と，カバーと食器が若干ですが足りないだけで，全部揃っています。大丈夫だと思います」
渡辺　「ハイわかりました。それでは，第1次，第2次攻撃隊員を発表します。第1次攻撃隊員は，京極隊員をリーダーとし，五島，サーダー，ミンマで第1次攻撃隊を構成します。ザイルオーダーは，京極－ミンマ，五島－サーダーのTWO，TWOで組んでください。
第2次攻撃隊員は，服部副隊長がリーダーとなり，野村，坂本，パサン以上の4名が第2次攻撃隊員となってください。
ザイルオーダーは，服部－野村，坂本－パサン以上のとおりです。
それから明日ですが，明日第1次攻撃隊員は$C_4$に入り，適時に頂上までのルート工作などをしてくれれば幸いと思います。
必要に応じて第2次攻撃隊員の人達は，第1次攻撃隊員のサポートをして$C_4$へ行き，再び$C_3$に帰ってください。了解でしょうか」
服部　「了解しました。第1次攻撃隊員は，京極をリーダーにしまして五島，サーダー，テンジン，第2次攻撃隊は，私，服部を頭にしまして野村，坂本，パサンということですね。
$C_4$の確認と，そして$C_3$に帰るということですね」
渡辺　「そのとおりです。この隊員の決定は，現在の体の調子，そこらあたりを総合的に判断した結果によるものです。
特に意見は求めませんし，これが決定ですので，したがってください。どうぞ」

服部　「了解しました。そのようにみんなに伝えます」

渡辺　「それから再び，ミンマの誕生日おめでとうと伝えてください」

服部　「了解しました。明朝，7時半の交信までさようなら」

**4月21日**　快晴後一時雪

第1次隊は第2次隊のサポートを受けて$C_2$入り。

**行動に関しての交信　－4月21日7時30分－**

服部　「$C_1$，$C_1$，こちら$C_3$応答してください」

渡辺　「こちら$C_1$です。オハヨウゴザイマス，今日は天気がいいようで安心しました。それでは，みんなの調子はどうですか」

服部　「今朝は，全員調子がいいようです。非常に天気が良く，何よりだと思っています」

渡辺　「昨日ちょっと言い足りなかったことについて補足しますので，了解でしょうか」

服部　「了解しました，どうぞ」

渡辺　「まず，昨日，パサン，ミンマは，昨日の段階で明後日は休みにするというふうに言っていたんですが，ミンマは第1次に入ったので休みは取り消し，パサンは今日，休みにしてください。

それからですネ，第1次攻撃隊は，今日さらに上部ルートの工作と昨日言ったのですが，だいたい，難しい所は過ぎて，あとは上部雪田の方を通り過ぎて，左の方に回り込んでしまえば，それほど難しいことは無いんではないかと思われます。したがって今日，なるべく上部ルートの工作はやめて，明日の行動に備えてゆっくりと体を休めた方がいいんじゃなかろうかと思います。

それから，昨日，プンモのヤクが崖から落ちて死んだそうです。その足を1本50RsでどうかということでB.Cに売りに来まして，それを1本買うことにしました。

それから私の8㎜撮影機を現在，坂本サーブに持たせているのですが，それを京極隊員に持たせてほしいと思います。

エー，そんなとこですが，どうぞ」

服部　「わかりました。まず，ルート偵察については，京極はもう少しで稜線に行けるので，もう少し工作をしたいと言っておりますが，なるべく休ませるようにします。パサンは今日，休ませます。8㎜の件，ヤクの件了解しました」

渡辺　「それからのちほど検討しておいてほしいと思うんですが，第2次登頂のアタックの日に関してですが，実は$C_1$付近の雪が急速に解けてきて，ラクパが冗談にあと2－3日したらB.Cから水を担ぎあげなきゃならんというふうなことを言っている状態です。

そういうこともあり，なるべくアタックを早めてB.Cへの撤収を早めたいと考えているわけです。

したがいまして，今2－3点ほど言いますが，できれば，もし，明日第1次登頂隊が早く頂上に達し得て，$C_3$に戻り得る状勢であるならば，$C_3$にいる第2次登頂隊は$C_4$に入るという考え方がまず1点。

それから，ちょっと今の考え方は時間的関係でうまくいかない場合もありますので，もうひとつの考え方は，明日第1次登頂隊員がステップカットなどをして，ルートを拓きますので，第2次登頂隊員は比較的，時間的に余裕をもって登頂できるんではなかろうかと，したがって明日第1次登頂が成功したならば，明後日第2次登頂隊員は，$C_3$を出発してそのまま$C_4$に入らず頂上に向う。そして，その日は$C_4$泊りということになると1日の間を置かずに登頂を連続させることができて，その分だけ早くB.Cに戻られるとい

うことになりますので，その点，服部さんどうでしょうか？
今でなくてよろしいですから，12時あるいは5時の交信の時に意見を聞かせてくれればと思います」

服部「了解しました」

渡辺「今の件よろしく検討しておいてください。あと何か，そちらの方からございますか？」

服部「明日の出発に関しては，これからまた指示があるわけですね，ヘッドランプなど$C_4$に2つしか上ってませんので，これについてどうぞ」

渡辺「大体今は，朝は5時ごろになると行動可能だと思っていますので，これは後ほど指示しようと思っておりましたが，大体朝5時ごろにはもうキャンプを出て，行動してほしいということ，できれば，やはりヘッドランプは全員に持たせたいと思います。$C_3$の方に余分ありますか？」

服部「エー，$C_3$には2つだけですね。京極サーブによると，有るはずだと言っておりますので捜してみます。ヤクの足は1本でしたネ！」

渡辺「エー，1本です。今日あたりチョタレ氏が$C_1$に上って来るということを考えておりますので，その時にでも持ってきてくれれば，$C_1$に置いておきたいと思います」

服部「了解しました。みなさん楽しみにしているようです」

## 第1次登頂成功！ 頂上（6,612m）は雪の塊だった

4月22日　快晴後曇

第1次登頂隊は頑張って$C_3$まで下ったので明日にそなえて$C_4$で待機していた第2次登頂隊はそのまま$C_4$泊りとなる。

**第1次登頂隊との交信　—4月22日7時30分—**

渡辺「エー，今日5時，私も少し早めに起きまして中間ピークから様子を見ていましたが，5時50分ころ，いい調子でテントをスタートしておりましたが，現在地どの辺りでしょうか？」

京極「エーと，昨日は雷で交信ができなくて，今日の出発をだいぶん危ぶんだんですけれど，とりあえず風が強かったんですけれど出発しようということで，様子をみるために取付点まで出発しました。その辺りまで，そちらで見ていたわけですね。エー，現在ですネ，昨日のフィックスの最終到達点に達しております。今，テンジンがスタートしました。あとワンピッチで左の尾根に出れるんでないかと思います。そういう状態ですが了解でしょうか」

渡辺「大変ご苦労様，夕べは雷で交信ができず非常に残念でした。かっこのいいメッセージを送ろうと思って，こちらも用意していましたが，それもできず非常に残念です。ま，ともあれ今日はいい天気になり，絶好のアタック日和と思ってます。がんばってください。みんな調子はどうですか？」

京極「エーありがとうございます。調子はいい方です。テントの中で，酸素不足みたいで，五島と私が眠れませんでした。そんなんで心配したんですけれど，今のところ快調に進んでます。
$C_4$を出発してから約1時間半で，ここまで来てますから，それほど悪くないんでないかと思います。尾根に出てからまた交信したいと思いますが，なるべく動きたいのです。日影で太陽は当らず寒いもんですから」

渡辺　「ハイ了解しました。それでは9時以降，$C_1$のトランシーバーを開局しておきますので適宜に状況を知らせてください。それでは，9時以降，開局しておきます。健闘を祈り，成功を期待しております」

京極　「それでは，9時からの開局了解しました。これで交信を打ち切ります。さようなら」

渡辺　「さようなら，頑張ってください」

渡辺　「$C_3$，$C_3$，こちら$C_1$応答してください」

服部　「こちら$C_3$，ただいまの交信，傍受しました。$C_1$の感度あまり良くありませんが」

渡辺　「そちらの感度もちょっと悪いのですが，どうしたんでしょうか？　はっきり聞えませんか？　どうぞ」

服部　「あのー，おたくの方の感度も非常に悪いようなんですが，私の方の感度も悪いようですネ，どうですか」

渡辺　「エー，そちらの感度も悪いようなんですヨ，今，私はテントの外に出て話をしてますがそちらはどうですか？」

服部　「今のは感度悪いでしょうか？」

渡辺　「エー，少し良くなりました。今のは傍受しましたネ，どうぞ」

服部　「今の交信は全部傍受しました」

渡辺　「そんな状態です。ですからそちらも9時以降，適宜に開局しておけば状況がつかめると思います，どうぞ」

服部　「了解しました。できるだけ私の方も開局して傍受したいと思います。
今後の行動についてですが，私達は$C_4$への出発準備をいたしまして，今後の交信状況及び登攀状況によりまして，行動に移りたいと思いますが，いかがですか」

渡辺　「ハイ，結構だと思います。だいたい12時以降になると見通しがつくようになると思いますので，待機していてください。どうぞ」

服部　「了解しました。本当に夕べは天気が悪くて心配したのですけれど，今日は，打って変っていい天気で，絶好の登攀日和だと思って，成功を心から祈っているものです。どうぞ」

渡辺　「ハイ，私も$C_1$で本当に，今日の日を待っておりました。それでは，9時以降適宜に互に話をしたいと思います」

服部　「エーと，それから11時ころから行動しまして，$C_4$に泊まるのも，$C_3$に戻って来てもどちらでもいいからということで，$C_4$に出かけたらどうかという意見もあるのですが，そのへん，バラサーブはどうでしょうか？」

渡辺　「エー，何時でしたか？　10時……11時と言いましたか，どうぞ」

服部　「そうです。10時から11時にかけてこちらを出発したいと思っているわけなんですが，どうでしょうか」

渡辺　「それも結構だと思いますが，大体12時ころになると見通しがつくんではないかと，それからでも遅くないんではなかろうかと思いますが，どうでしょうか」

服部　「了解しました。それでは，そちらの方の登攀具合をながめながら，あるいは交信状況を聞きながら，こちらでもって指示を仰ぎたいと思います」

渡辺　「じゃあ，よろしくお願いします。では，9時以降まで……」

**4月22日　10時の交信**

京極　「こちらアタック隊，ちょうど，そちらから見えるピークの裏側のアイス・フォールを回り込んで登っているところですが，今クレバスに阻まれまして，それをどうしようか思案中です。どうぞ」

渡辺　「相当深いクレバスですか？」

京極　「エー，ものすごく大きいですけれど，ブリッジがありますから，跳び越えれそうなんです。それが向こうに繋がっているのかどうか，それを確認したくて今，ウロウロしているんです。どうぞ」

渡辺　「こちらでは，とにかくなんにも見えま

せんので，そちらの行動にすべてを託すだけです。ガンバッテください」

京極「これを乗り越えると頂上は，わずかだと思います。もう被いかぶさるように見えていますから。エー，これを何とか消化したいと思います。もうちょっとお待ちください」

渡辺「それでは，次の朗報を待っています」

京極「エーそれでは，次までさようなら」

渡辺「さようなら」

**4月22日　12時40分の交信　カンジェラルワ頂上より**

京極「……」

渡辺「ハイどうぞ，それじゃあまず一息ついてから交信してください。こちらは開局状態のまま待っています。エーおめでとう」

京極「バラサーブありがとうございます。おかげさまで頂上に立つことができました。五島サーブと替ります」

五島「文ちゃん，ピークにやっと上りました。いやー助かりました，感激です！　ガスで全然見えませんけれど最高に素晴らしいです」

渡辺「ハイおめでとう，視界はともかくとしてよくやりました。調子はどうですか？」

五島「感激です！」

渡辺「エー未踏峰に到着した感じはどうですか？　どうぞ」

五島「エーなんとも言えませんネ」

渡辺「頂上隊，頂上隊，こちら$C_1$，隊員だれか出てください」

京極「替りました，どうぞ」

渡辺「その前に2，3聞きたいが，そこはまず間違いなく頂上ですネ」

京極「エエ，間違いなく頂上です。ここからあの北の方の稜線や，私達の登ろうとした稜線を確認しました」

渡辺「ご苦労さん，それから頂上でピッケルに旗を縛りつけて写真を撮りましたか？」

京極「登頂ポーズの写真は全部撮りました。それから回りの写真も8㎜カメラも一応回しましたが，どの程度写っているかは，・・・ちょっと？　全部済ませた」

渡辺「ハイよくやりました。頂上は全部雪で，石なんかまったくありませんか？」

京極「頂上は，スノードームで石は全然出ていません。雪の塊です。どうぞ」

渡辺「じゃあ，石はまったく無いんですネ」

京極「エート，石はまったく出ていません。それから北の方は，ナイフリッジが続いています。私達が登れば，ずいぶん面白いルートになったと思って今，残念に思ってます」

渡辺「そのことは，今，言っても遅い。ま，いずれにしても未踏峰に登ったんだから充分です。それでは下降には，くれぐれも気を付けて絶対スリップ事故をおこさないで戻ってください。どうぞ」

京極「ハイ了解しました。雪が降って来ましたので，急いで降りたいと思います」

渡辺「ゆっくりと，とにかくくれぐれも気を付けて下ってください。それから今，$C_4$には，第2次登頂隊が入ってます。なるべくなら$C_3$まで戻ってほしいと思いますが，それは$C_4$に到着した時点で考えていいことですから，とにかく無事に$C_4$に戻ってください。それでは，$C_4$に到着するのを待ってます。どうぞ」

京極「エーとですね……（聞きとれず）……もう1度交信したいと思いますがどうぞ」

渡辺「なんですか，もう1度どうぞ」

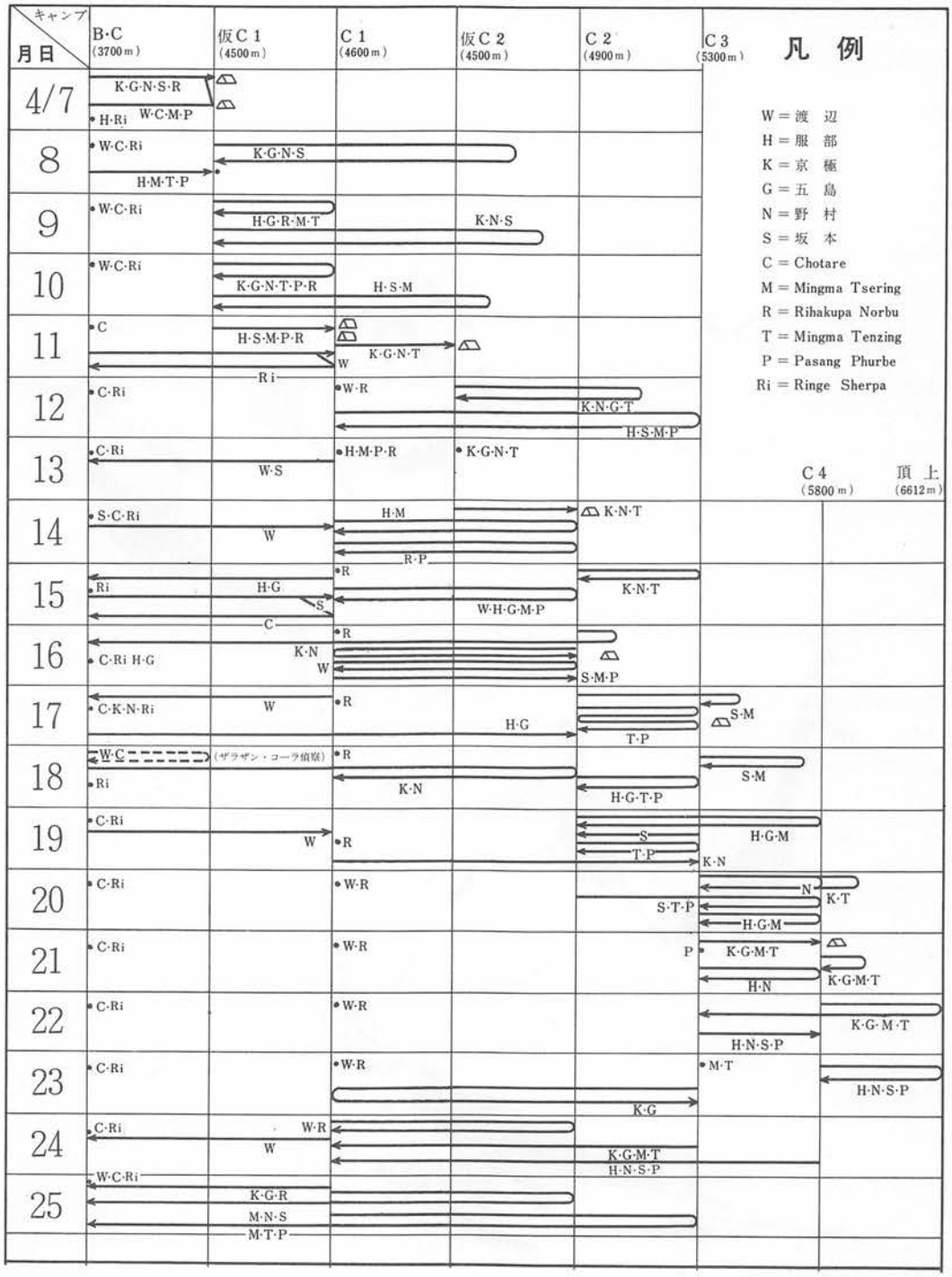
京極「エーとですね，$C_1$の見える所があるのです。そこでもう1度交信したいと思いますがどうでしょうか」

渡辺「ハイ了解，じゃあそうしてください。じゃあ気をつけて，さようなら」

京極「それでは，そのまま開局おねがいします。ただいまから下ります」

渡辺「ハイ，さようなら」

# 行　動　表


キャンプ
月日
B·C (3700m)
仮C1 (4500m)
C1 (4600m)
仮C2 (4500m)
C2 (4900m)
C3 (5300m)
C4 (5800m)
頂上 (6612m)
4/7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
K·G·N·S·R
H·Ri
W·C·M·P
W·C·Ri
H·M·T·P
K·G·N·S
H·G·R·M·T
K·N·S
K·G·N·T·P·R
H·S·M
C
H·S·M·P·R
W
K·G·N·T
Ri
C·Ri
W·R
K·N·G·T
H·S·M·P
H·M·P·R
K·G·N·T
W·S
S·C·Ri
H·M
K·N·T
R·P
H·G
S
C
W·H·G·M·P
C·Ri H·G
K·N
S·M·P
C·K·N·Ri
S·M
T·P
W·C
(ザラザン・コーラ偵察)
K·N
H·G·T·P
H·G·M
K·T
S·T·P
H·G·M
P
K·G·M·T
H·N
K·G·M·T
K·G·M·T
H·N·S·P
M·T
H·N·S·P
K·G
K·G·M·T
H·N·S·P
K·G·R
M·N·S
M·T·P
凡　例
W＝渡　辺
H＝服　部
K＝京　極
G＝五　島
N＝野　村
S＝坂　本
C＝Chotare
M＝Mingma Tsering
R＝Rihakupa Norbu
T＝Mingma Tenzing
P＝Pasang Phurbe
Ri＝Ringe Sherpa



## 撤　　収

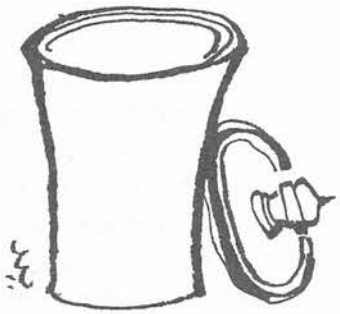
渡辺　文仁

**4月23日**　曇

上部はまったく視界のない悪天候だったが，第2次隊も登頂に成功，$C_4$に戻る。$C_3$の京極，五島はテント1張を$C_2$に下げるのを$C_1$まで来てしまった。そして再び$C_3$へ。

**4月24日**　晴後曇

$C_4$を撤収し$C_1$まで下げる。$C_3$も一部を残し$C_1$へ下げた。渡辺，ラクパは$C_2$の一部装備を$C_1$に降した。この後，渡辺はポーター手配の連絡のため，B.Cに下がる。



このようにして，4月22日，23日の第1次と第2次の登頂のあと，登頂メンバー8名が$C_4$から装備をおろし，他の隊員も$C_1$，$C_2$からサポートして一気に撤収を終えてしまった。初登頂後2日間で，ほとんどの荷を$C_1$へおろしたことになる。これは全員のファイトとスタミナが最後まで旺盛だったことを物語っているといえよう。

中でも，22日に初登頂したメンバーのうちの2人，京極と五島は1日で，$C_3$（5,300$m$）から$C_1$（4,600$m$）まで下り，再び，$C_3$へ登るという行動をしている。

**4月25日**　晴夕方一時雪

シェルパ達が$C_3$に残した物を取りに上り$C_1$に下げる。$C_1$へは12名のポーターを上げ，一気にB.Cへ降すことができた。ポーターはそのまま村へ帰らず，カンジェラルワ登頂成功を祝って唄と踊りを飽かず続け，夕食時，私達を見物するために一時中断しただけ。ロキシーに酔払った私達もその輪の中に入り，いいかげんなステップで踊りまくった。

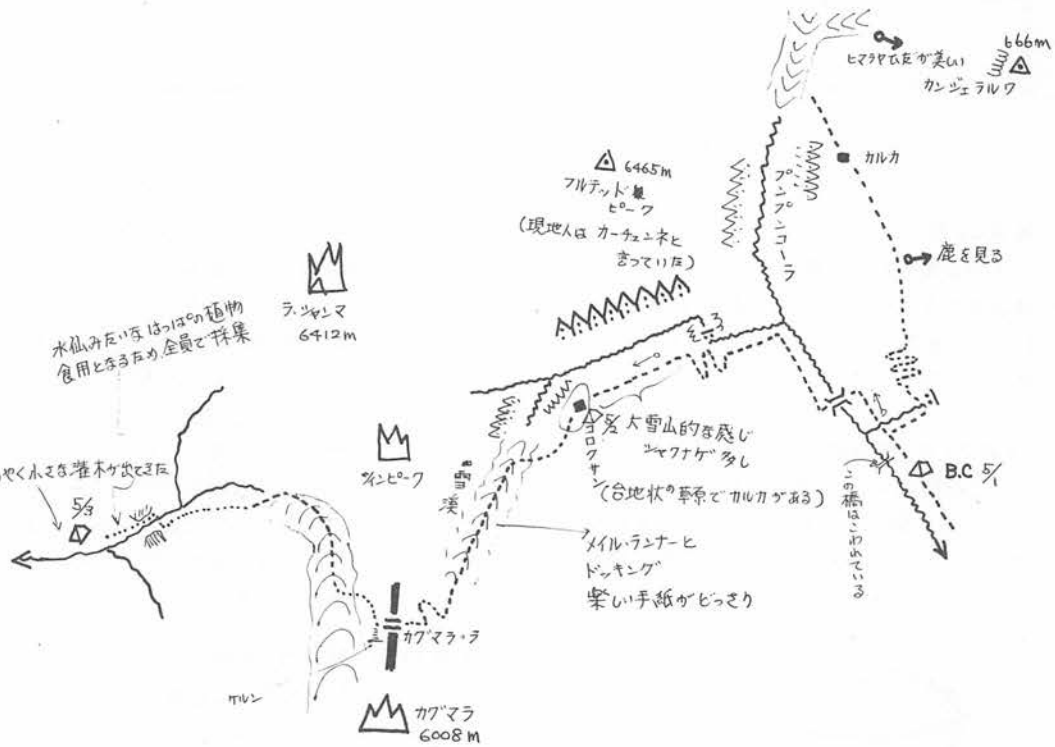
## 再びジュムラへ　ー　帰路のキャラバン　ー　そしてカトマンズへ

渡辺　文仁

**5月1日**　曇

もうモンスーンの影響なのか天気が悪い。チョタレ氏が言うには，今年は早いそうだ。モンスーンが始まりヒルが出るといやだし，ジュムラからのフライトも心配なので，明日帰りのキャラバンを開始することにする。

カグマラ・ラを通れそうだ。これだと2，3日短縮できる。プンモのナイケに，またポーターのあっせんを頼む。このナイケは若いが，なかなかの人物で好青年である。時どきB.Cに遊びに来ていて，すっかり親しくなった。一部には，非常な商売人もいるがプンモの村人には良い印象を持っ




ている。

ポーターの賃金だが，1日17Rsで8日分払うから1週間で行けないかと交渉を始めたが，カグマラ・ラは雪が多いので，もっと欲しいと言う。結局，10日分で落着いた。

**5月2日　曇後雪**

いよいよ帰りのキャラバン開始。今日のC.Sは決っている故かポーター達はのんびり集り，出発は10時。プンプンコーラ出合で昼食。カグマラ・ラへは最初は急だったが次第に開け明るい感じ。コロクサンという放牧場でキャンプ。雪が降り出し，ポーター達は薪が無いので大変だった。

**5月3日　薄曇後一時雨と雪**

昨日の雪は周りをまっ白にした。ここからは残雪も多いので登山靴を出す。京極，野村をステップ作りに先行させたが，地形に詳しいナイケは，すぐにコーラを埋めるデブリの上を先導する。ポーター達，盛んにスリップするのを隊員，シェルパで助けながら歩く。可愛い女の子のポーターは人気があり，リンジは自分の荷物と交代して背負ったりする。カグマラ・ラは5100 mあり，高くなるのにしたがって苦しくなるが早いピッチで進む。ポーター達もがんばる。8時30分，メイル・ランナーが帰って来る。B.Cを出てから丸7日である。非常に早い。振り返って見るフルーテッドピークはすっかり形を変え，絶望的にさえ見えた針峰ではなく，どこが頂上か分らないほど，長く稜線が延びている。カンジェラルワは雲の中で，ついにこちら側から見れなかった。カグマラ・ラに着いたころは風雪。早々にガルプン・コーラ側に降りるが，少し陽が差すと雪の照り返しで強烈に暑い。峠からは一気に雪面を滑り降りる。すぐに雪はなくなり広い河原。14時30分，雨がひどくなりキャンプ。

**5月4日　晴一時雨**

ポーターが10人，雪眼になってしまった。何人かにサングラスを貸したのだが絶対数が足りなかった。手落ちである。治療，回復に午前中をあて，ナイケがもう充分だと言うので12時30分に出発

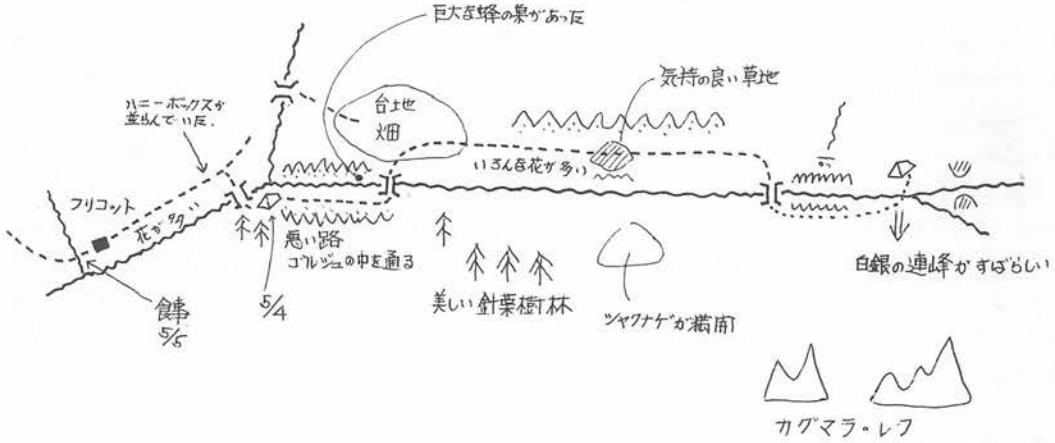
する。広かった河原も次第にせばまる。ジャグドゥーラ・コーラの少し手前で左岸に渡り大きな杉林の中でキャンプ。

**5月5日**　雨後晴後雨

雨が降っていたので今日はダメかなと思ってテントを出ると，なんとポーター達はいつもと同じく5時半の出発準備をしている。驚いてしまうが結構な事である。フリコット（現地の人達はユリコットと言う）に着くころは完全に晴れる。ここで昼食。ガルプンコーラに沿って下るとカイガオンだが，ここから尾根の路を左手にカイガオン，リミを見下しながら進むのは快適である。

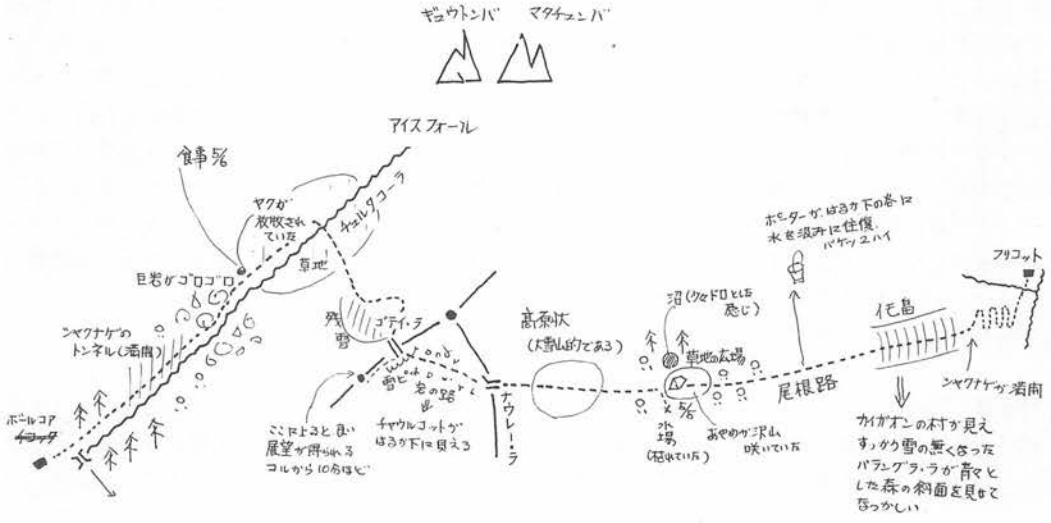
マウレー・ラに続く尾根上にはナイレー・ラ，ゴテイ・ラがあり，これを越えて今日中にチョッタに行くとナイケは頑張っていたが雨が降り出し，峠の手前でキャンプ。夕方，雲が切れナウムリ，マタトウンバが全容を現わす。

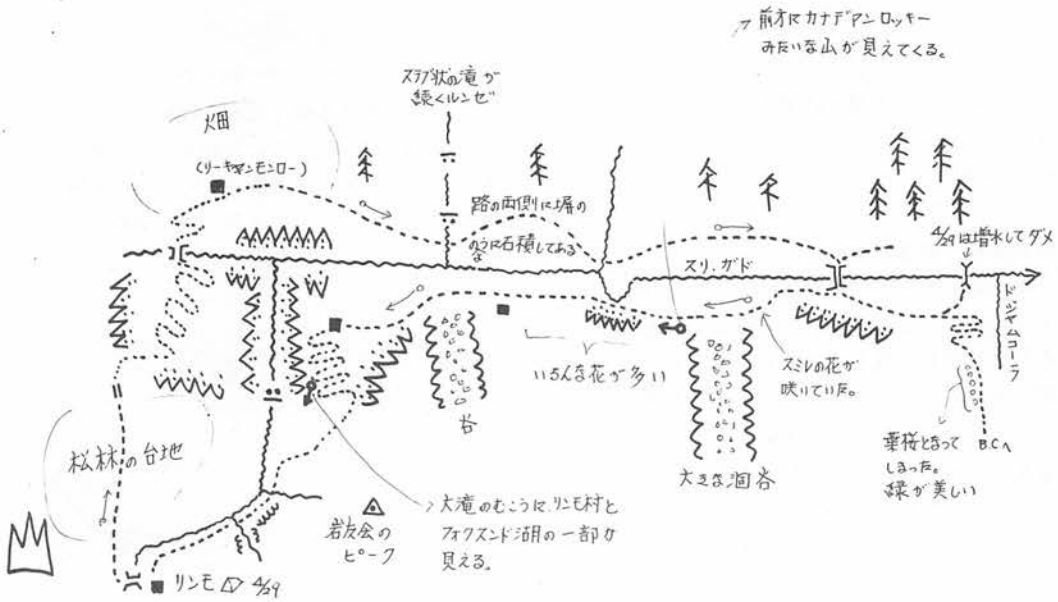





**5月6日**　快晴

二つの峠の中間で，眼下にチャウルコットを見






る。ゴテイ・ラに立つと広い草原を縫ってチョルタ・コーラが流れ，その奥にギュウトウンバが立派な姿でそびえている。コーラに降りて昼食。道端には赤，ピンク，白のシャクナゲが咲き気持良くどんどん下る。ポーターが非常に早いペースなので，ゆっくりも休めない。行きに少し苦労したマウレー・ラは雪もすっかり消え緑におおわれていた。いいかげん疲れてムニガオン着。川の水もぬるんでいた。明日はジュムラに着くというが半信半疑。

**5月7日**　快晴

今日は木曜日なので定期便が来る日。だから，もし今日，ジュムラに着くのなら午前中に着きたいのだがそれは無理。となれば今日中にジュムラに着かなくても良いのだが，ポーターはどんどん進む。ゴウツーア・ラを越えて昼食となった。間違いなく今日中にジュムラだ。しかし，定期便はさっきカトマンズに向けて飛んで行った。15時過ぎジュムラ着。また，飛行場の横にキャンプ。渡辺とチョタレ氏はすぐに警察署に行き，帰って来たチェックを受けに行く。夜，ポーター達とのお別れパーティがいつまでも続いた。

**5月8日**　快晴

朝早く，振り返り振り返りポーター達は帰って行った。私達も手を振って彼等を送った。彼等とはB.Cを張ってからのつき合いである。もう2度と会う事がないだろうと思うと一層彼等への惜別の念は強かった。

日本に持ち帰る物，カトマンズに置いて行く物等の再梱包を終え，暑くてグッタリしていると6人乗り飛行機が来た。ジュムラの商人がチャーターしたものである。早速交渉し服部，京極，野村と日本へ送り返す荷物がカトマンズに帰る。今月から定期便は1人260 Rsに値下げしたのでその値段である。

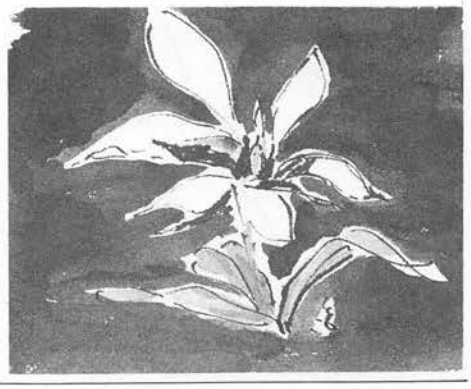
**5月9日－21日**

ジュムラでの待機組は，次第に雲の広がりが早くなる天気をにらみながら飛行機を待つ。5月14日，坂本が，17日，渡辺とチョタレ氏が，21日，五島，シェルパ達が帰って来た。21日夜，ラリ・グラース・ホテルで現地での解散式を行なう。この間，カトマンズに先行した3人は日本への荷物を送ったり，ポカラへ行ったりして日を過した。渡辺はカトマンズに帰着後，日本大使館，ネパール政府外務省にあいさつに出向いたり，報告書の作成を行なう。

※　　※　　※

6月8日までに適宜，帰国し遠征はひとまず終った。この間，阿部事務局長等がネパールへツアーで来られ，遠征に楽しさを添えてくれた。

# 登　頂　記



## 第　1　次　登　頂

京　極　紘　一

4月22日　4時に起きるが強風がテントをゆすり、やけに寒い。でも空は満天の星空だ！　様子をみる形で準備を進め、プロパン・ストーブに点火し、青白い炎をあげ静かに燃える横で、サーダーが、今日の私達のアタックが無事に行なわれるようブツブツとお経を唱えてくれている。
私もふざけ半分に「風よ止め、オンマニペメフム」とやったら、サーダーも喜こんで、今度はみんなで唱えあった。

その甲斐があったのか、だんだんと風が弱くなり、6時にようやく出発することができた。

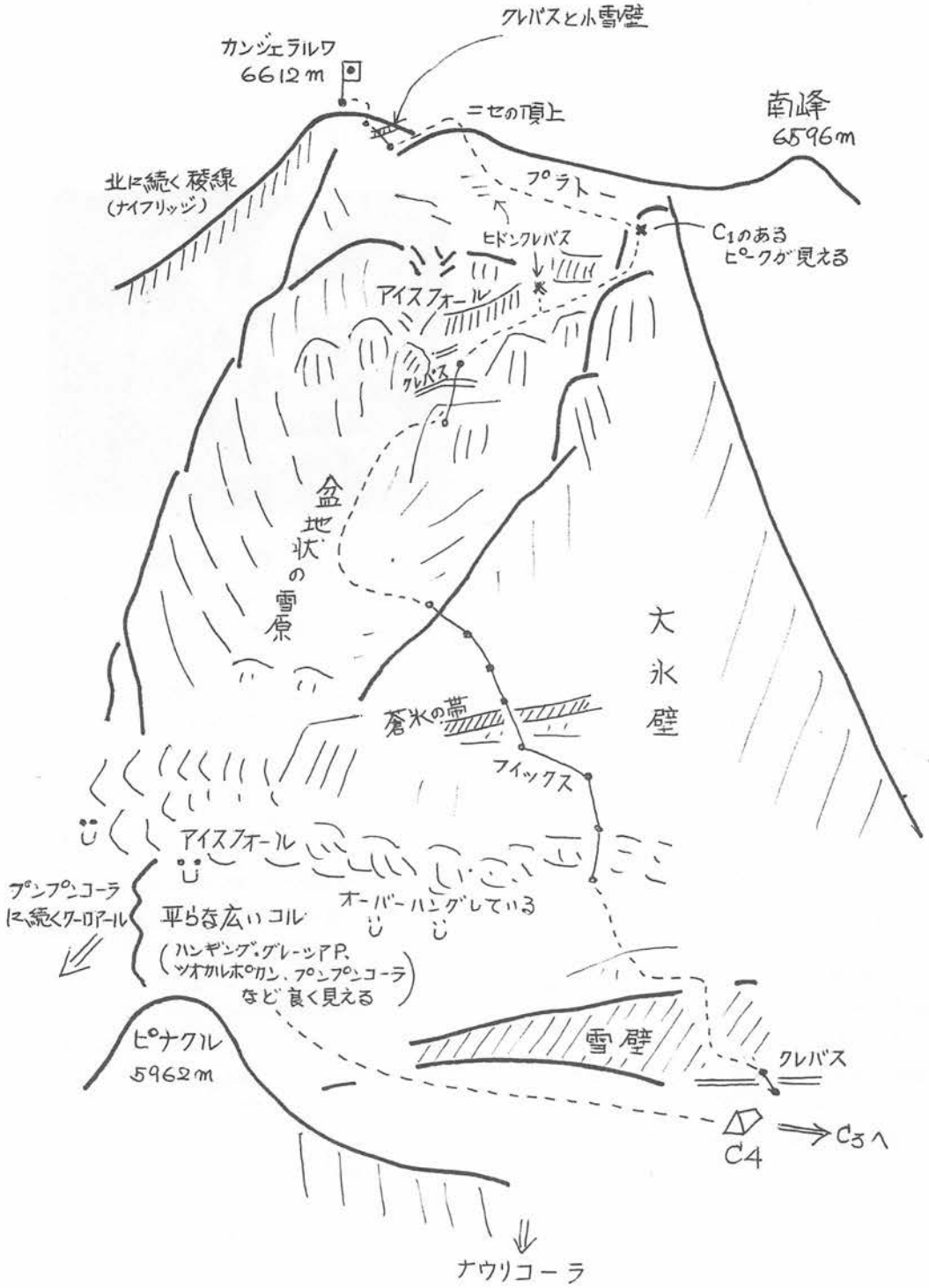
小クレバスを渡り、大氷壁の下にデポしてあった登攀具を担ぎ、氷壁を登るも、昨日切っておいたステップは、雪で埋っていたが、フイックス・ロープを頼りにグングン高度をかせぎ、7時半にはフイックス・ロープの終了点に着く。C1の隊長と定時交信。6時にはもう双眼鏡で覗いていたとのこと、9時以降トランシーバーをオープンにしておくとの連絡を受けると、寒さから逃れるようにすぐ行動を起す。

今日もチューレン・ヒマール、プタ・ヒウンチュリに朝日があたり橙色に染った山々を背に、40mほど氷壁を登ると頂上から派生するリッジに出ることができた。

リッジは、右上にさらに急になり階段状の大きな氷壁をもっていて上部が良く見えない。左手は、広い盆地状の雪原があり、ずっと上にアイス・フォールがあり頂上へと続いている。ここで、私とミンマ・テンジン、五島とサーダーでオーダーを組み、左の盆地状の雪原にためらわずに入った。

陽の当らない雪原の中は寒い。ゆっくりと歩むが、間もなく斜面が急になり大きなクレバスが行手に現われた。左右とも横縞のアイス・ビルデングみたいな壁で、簡単に乗越せそうもない。正面はクレバスをはさんで凹状部があり氷柱を利用すると突破できそうだ。クレバスの一個所に私達の側から、剝れたような形で、幅30cmぐらいのスノー・ブリッジがあった。向側には届いておらず、あと50cmぐらいというところで終っている。

シェルパは危険だと、しきりにバックをすすめるが、他にルートも無く、とりあえず私が渡ることにする。クレバスは、とても深く下は真暗で不気味だ。気持が悪く、ビクビクして渡ったが、ブリッジは意外と堅く心配したほどのことはなかった。


クレバスと小雪壁
カンジェラルワ
6612m
ニセの頂上
南峰
6596m
北に続く稜線
(ナイフリッジ)
プラトー
ヒドンクレバス
C1のある
ピークが見える
アイスフォール
クレバス
盆地状の雪原
大氷壁
蒼氷の帯
フィックス
アイスフォール
プンプンコーラ
に続くクーロアール
平らな広いコル
(ハンギング・グレーシアP.
ツオカルポカン、プンプンコーラ
など良く見える)
オーバーハングしている
ピナクル
5962m
雪壁
クレバス
C4
C3へ
ナウリコーラ



$C_1$ からの岩稜とカンジェラルワ

やっと太陽に当ることができたが、8㎜カメラのフィルムがちょうど切れ、扱い方の知らない2人がアタック隊となったため、トランシーバーでフィルム交換の方法を教えてもらう。

左手の凹状部に行こうとするが、その手前にさらに大きな段違いのクレバスがあり、氷柱が崩れるようにひっかかっていて絶望。目前の巨大な縞状の壁が右手に長く続いているが、その下にうまいことにバンドがあるではないか。不安な気持で回り込んでみると、どんどん上に続いている。だいぶ右に寄りすぎたが、どうやら上に抜けることができた。

もう太陽はまぶしく暑い。またも目の前に30mの帯状の氷壁が現われたが、左手の少し低くなった所が崩れたようになっていて、その奥にノッペリとした頂が見えた。

見透しがついたのでようやく小休止となったが、気が急き、低い所から突破しようと近づくと、ヒドンクレバスがひどくて結局断念する。またも右へ右へと回り込みついにリッジの上に出てしまった。

このリッジもこの下は段状になっていて、ひとつの段が50mぐらいもある壁でルートに取らなくて良かったと下を眺めながら思った。はじめて$C_1$のあるピークがはるか下に見え、トランシーバーが良く入る。

ちょっとした氷壁を越えると広い雪原となり、頂上は、その奥にのっぺらと高くある。雪原は、プラトーといった方がピッタリの感じである。台地の真中で休憩。囲りの山々はもう同じくらいか、低くなってしまった。ラ・シャンマ、カグマラの連山は、まだ午前中だというのに雲を呼んでいる。あの研ぎすまされたようなフリューテッド・ピーク（6443m）の右奥に、カンジロバの主峰（6882m）が、はじめて私達の前に姿を見せたものの、頂上附近は雲に包まれていた。さらに右にハンギング・グレーシア・ピークスが続き、ツオカルポカンは、今私達が登ろうとしているカンジェラルワの頂の影になって肩だけをのぞかしている。そして手前には、ウエッジ・ピークやブンブン・コーラの源頭、6139m峰が一望に……。

カンジロバヒマールの素晴らしい山々を眺めながら、ゆっくりと食事をとった。とっておきのパイン缶を開けるが食欲なく、無理に押し込み、生温いミルクティは、甘ったるくて飲めたものでなかった。さすがシエルパは、喜こんで飲み、食っている。五島も、かなり苦しそうでやっぱり食わない。ただシャッターをやたらと押している。

ここで登攀用具をデポし、8㎜・50mのフイックス・ロープに全員がつながって行くことにした。カグマラにあった雲は、もう私達の所までやって来て、周辺の山々をどんどん隠していく。

疲れてきたのか、空気が薄いせいなのか、行こうとする気は強いのだが、足が重く苦しい。台地から見えたピークに立ったが、なんとその先にさらに高いピークがあるではないか。ガッカリした気分になり、気力を奮い立たせてガスの流れる中を進む。少し下って、小クレバスを渡り小さな雪壁を越えると、頂上はすぐ目の前だ。シェルパが右の崖の方に行き、吹き上げるガスの合間から下を覗き込んで、リンモ村が見えると騒いでいるが、私には良く見えなかった。

そのままドームの頭へ進み、12時30分、カン

ジェラルワ（6612m）の頂に立った。頂上であることを確認するために、北へ少し下りナイフリッジに雪庇が輻湊する北に続く稜線や、フォクスンド・コーラなどをガスの合間に見ることができたし、写真も撮ることができた。それでようやく交信だ！

「JKE、JKEこちらアタック隊、ただいま頂上に着きました」と、$C_1$にいる隊長に第1報を送る。

「こちら$C_1$、よくやった。おめでとう、頂上はどんな具合ですか？」

「残念ながら、ガスが流れてあまり良く視界が利きません。頂上はスノードーム状で広いです」

「もう一度聞くが、そこは頂上に間違いないか」

「ハイ間違いありません。北への移線の特徴あるナイフ・リッジやピーク、それにプンプン・コーラもガスの合間から確認できましたので、間違いなく頂上です」

「よしわかった。本当によくやった。おめでとう。頂上に石はありませんか？」

「頂上は全部雪で、残念ながら石はありません」

頂上でカッコのいいことを言おうと、アタックの前夜、寝袋の中であれこれ考えていたのに、今は何ひとつ出てこなかった。

計画を進めてから3年目にようやく目的の峰を足下にすることができ、また、職場の人びとの遠征に対する理解と温い援助に、そして多くの山仲間の期待に応えれたということで、ホッとしたというのがその時の偽わらざる心境であった。

五島隊員はしきりに感激し、目を涙でいっぱいにして私の手を握ってむせんでいたし、トランシーバーで、隊長にありがとうと涙声で連発していた。どの遠征隊もやったように、ピッケルに旗を付け、シェルパと登頂のポーズをカメラに納めると、あとは友人にたのまれた小品を、ブルーのナイロン袋に入れ、頂の雪の中に埋めると、もう何の未練もなく、2度と来ることの無い頂上を後にしたのは、30分後であり、小雪の降る中であった。

帰りは頂上直下のクレバスと壁に1本、中途半端なブリッジのあるクレバスに1本、明日の第2次アタック隊のためにそれぞれロープをフイックスして下る。

大氷壁を懸垂で下って$C_4$に帰ると、副隊長がヒゲと日焼で汚なくなった顔をクシャクシャにして喜こんで迎えてくれた。　野村も坂本も祝福してくれ、差し出してくれたインスタント・ラーメンがやけにうまかった。

疲れてはいたが私達は$C_3$に下ることにし、第2次登頂隊の彼らに私たちが頂上で撮れなかったパノラマを、期待して分れた。

頂上に立てたという、いいようのない喜びと、また一段と増えた想い出を背中のザックの重みに感じながら$C_3$に帰った。



# 第 2 次 登 頂

服 部 博

4月23日 曇り時々晴

夜中の2時30分、〃おきれ〃の声にびっくり、待望のアタックのため緊張してか野村に早くから起こされる。外は真暗で、どうしようもない。その上天候はあまりよくないらしく気分沈滞。簡単な食事で一応出発準備をして、明るくなるまで、うとうととする。何か口実を見つけ登頂を延ばすことはできないだろうかと考へながらいい気持になりはじめたころ、また〃もう5時だ。おきれ〃と起され、野村を恨めしく思うことしきり。坂本、野村は、一刻も早く登りたい様子でパサンと共に行ってしまう。私も仕方がないのでみんなより遅れて腰を上げる。

外もやっと薄明るくなってきた。出発後すぐ、幅の大きなクレバスに雪がいっぱいにつまり浅くなったところを通過するが、上部へでる壁の足場を崩してしまい、上に出るのに出端から消耗する。

朝の冷え込みはきつく、二重靴でも足が冷たかった。出発後30分くらいで急な堅雪から氷壁になる所でみんなと一緒になる。ここは前にフイックス・ロープを張った個所で、フイックス・ロープを頼りにアイゼンの爪先を氷に蹴りつけながら登るが、前に登っている者の靴底がまる見えだ。ピッケルで氷を切る音が小気味よく伝わり、氷のかけらが乱れ飛ぶ。

夢中で登っている間に風が強くなり吹雪となった。手もすっかり凍こえてしまう。天気はだんだん悪化しているようで、視界もなくなり恨めしい限りだ。氷壁の途中から、左肩へ長いトラバースがあり、出たところは急に開けた、大きなアイス・フォール帯で上部と下部を分ける棚になっていた。こんな上部にもまだあったのかと驚きながら互いに顔を見合わす。

あまりにも視界が悪いので、一息入れながら様子を見る。今までの緊張する氷壁から広いところへ出てほっとするが息が苦しい。パサンはこんなに天気が悪いのにまだ登る気かと不満顔である。

視界が少しずつよくなり、前日のアタック隊のトレールをところどころ見つけながら登る。巨大な氷壁、氷塊が辺りを圧倒している。



$C_4$ への雪原を行く

アイス・フォールのほぼ真中を登りつめると、上部に底の見えない深いクレバスにあたり、対岸まで3mくらいで1個所だけスノー・ブリッジが対岸の途中まで延びているが。ちょうど船首のような形で先細りのため、今にも崩落しそうに見える。**そこをショックをあたえぬよう進み対岸へ跳び移る。まったくいやな気分だ。**

ここから正面は巨大な氷壁で、右側へルートを取るが左側の巨大な氷壁はへいのように続き、まるで氷の宮殿を行くようないい気分だ。人工の彫刻のように整然として実に見事だ。多分長い間の日中の太陽熱と夜の冷え込みで美しい模様になったのだろう。まさに自然のおりなす芸術であった。天候も少し持ちなおし上部へ出ると南へナイフ・リッジとなって続くヒマラヤひだの稜線から、$C_3$の横に堂々と聳える6000mくらいの無名峰も今は低いものになっていた。プンプン・コーラも雲間に望まれ、小さな湖が点々と見える。やっと頂上への稜線に出たことがわかる。ここは下部からまったく見えなかったところで、ゆるやかな大雪原の斜面を雲の切れ間に見ながら進む。前方にピークが見えるが、あれが頂上か？

高度の影響で体がだるい。少し進んでは休み、また進むといった状態で、じれったく実に長く感じる。高度は6500mぐらいか、さっき見えた一番高いところへきたがまだ先があった。また大きなクレバスが出てきた。そこですっかり視界がきかなくなり、どこが頂上かもわからない。しかし、もう近いことは確かで、小休止し、必需品のみ持ち、他はデポする。坂本は嘔吐し具合が悪そう。他の者も食欲がないと言って何も食べない。せっかくとっておきのパイン缶を開けたのだが、私一人だけが食欲があり何でも手当り次第に食う。私の体は少しみんなと違うのかと思ったりする。

なおも視界のよくないところを高い方へと登るうち、クレバスの割れ目かと思われる氷壁に赤いザイルがぼんやり見え、頂上であることがわかる。ザイルを頼りに氷壁を登ると上部は雪原で、まもなくそれ以上高いところはなかった。残念ながら視界は悪く何も見えない。そのせいか、たいして感激もなく、拍子抜けの感じであった。

トランシーバーで$C_1$の隊長へ登頂の報告をする。下りは高度の影響でみんなふらふらし疲れきった様子。危険な個所はさすが緊張するが、あとはのらりくらりで、パサンも最後は幾度か転び、ザイルに助けられていた。





京極紘一

# プンプン・コーラ探査

すっかり見なれたフリューテッド・ピークが、今日も研ぎすまされた様姿で、ツンとすましたように蒼空にあった。

6時の出発予定が少し遅れてしまい、食堂テントに飛び込んであわただしく朝食を終えると、順次サブザックをひっ担ぐように各自飛び出ていく。

ヒマラヤ杉の林を抜けると、ナウリ・コーラの出合だ。深く切れ込んだナウリ・コーラの奥に白くカンジュラルワの頂があって、もうその頂を踏んだという、言いようのない親しみと、ちょっぴりと勝利者のような快感をもって、頂に視線を送った。コーラの右岸を遡り、すぐピナクルからの尾根に登るが、これがまたすごくきつい。これを登りきると冷たい風がほおにここちよく、プンプン・コーラから流れてくる。

今日の探査はプンプン・コーラからプンプン・ラをフォクスンド・コーラへ容易に越えられるかどうかを探るのが大きな目的である。

ナウリ・コーラの出合から3時間も歩くと、路は自然とプンプン・コーラに入り、小さなカルカで終る。正面にウェッジ・ピーク、ジャンクション・ピークが岩肌に雪の縞模様をつけて連らなっている。すぐ右に、カンジェラルワがヒマラヤ襞を朝の陽をテラテラと輝やかして豪快に切り落ちてきている。その北壁から、大きな雪崩がまるでスローモーション・カメラでとらえたように、ゆっくりと流れる。

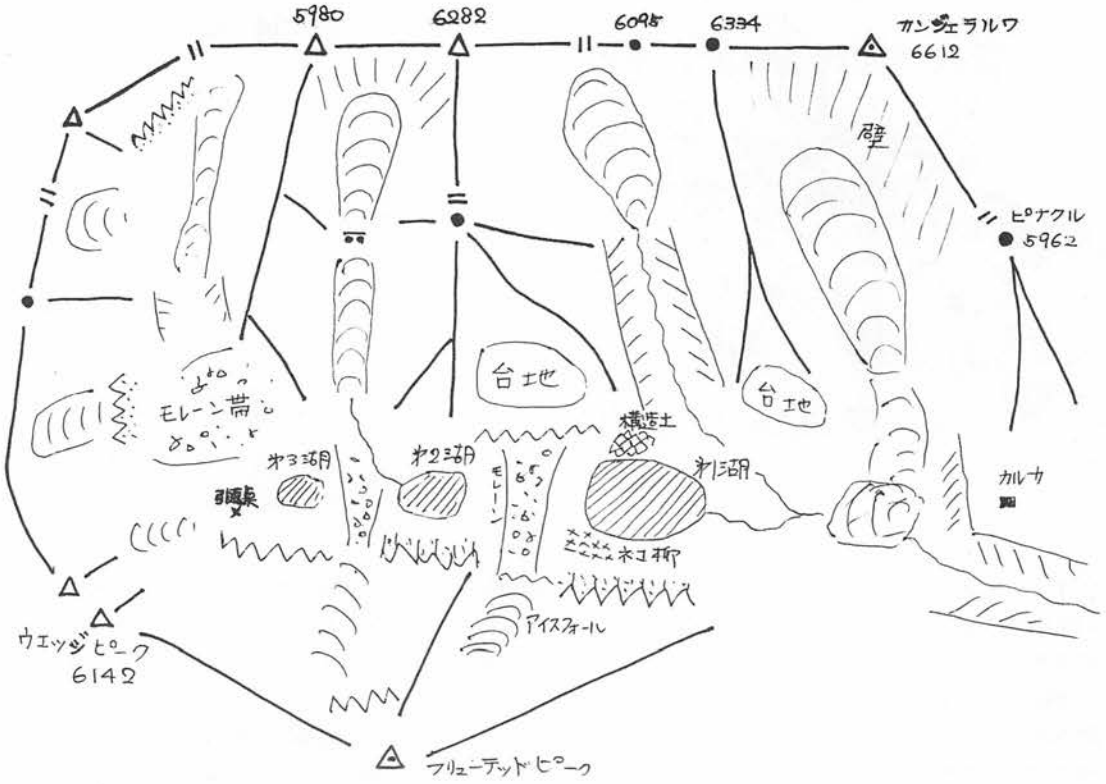
広く明るいこの谷も最初偵察に来たころに比べると、すっかり雪が消え、木々は芽をふき、ここにも春がやってきていた。

カンジェラルワから北へのびる稜線の方から二つの支流が入ってきて、その出合の氷をすぎると大きな湖に出合った。

まるで庭園のような湖でカンジェラルワや北方の山々が、静かな湖面に姿を写していたし、ネコヤナギも咲いていて、ここがB・Cだったらなあと、そんな気持にさせられる。

みんな写真を撮るのに忙しいので私ひとりどんどん先を急ぐ。フリューテッド・ピークから落ちこんできたえん提のようなモレーンを越えると、少し小さいがまた湖が出現。窩りはじめた雪の上をひとりさらに進み、同じようなモレーンを越えると、今度は半分凍った湖があり、青色で不気味に深そう。

フリューテッド側は一連の大岩壁となっていて、その下の雪田を午後の1時まで歩いて、ようやく




プンプン・ラを確認することができた。

眼前は段々のモレーン帯で、やや急な斜面は上部に行くと少し雪をつけ、コルに続いていて、容易に登れそうである。しかし、時間がなかったので写真を撮っただけで引き返す。

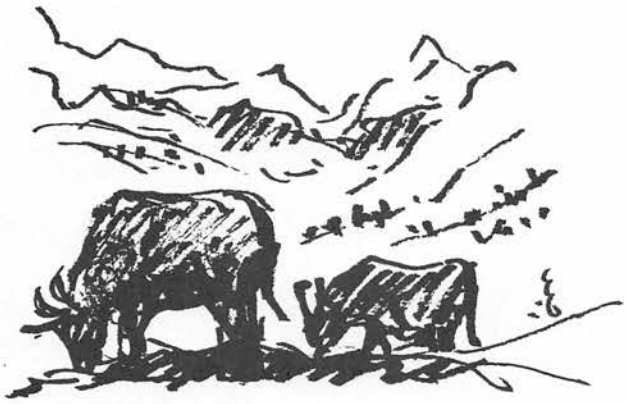
カンジェラルワの頂は午後になると雲を呼び、一段と迫力を増してきた。

第2の湖の辺りで、野村、服部サーブと合流。この谷にB・Cを設けてたら面白かったろうし、楽しいことができそうな、いろんな夢をかなえてくれそうな谷だなんて、お互いに話しながらのんびりと下る。

最初の湖は今度は左岸を行く。すると構造土があるではないか、内径約1.5 m前後の網目模様で大雪山のトムラウシ山にあるのと同じ形態である。思わぬ発見に喜こんだものの、山々はもうすっかり雲におおわれ、小雪まじりのおっそろしく冷たい風が、谷の中を吹き抜けて、私達の足を急がせる。

ともあれ、プンプン・コーラは岩と氷の未踏峰群に囲まれ、3つの湖をかかえた美しい谷である。

# フォクスンド湖行



服部　博

4月29日　快晴、午後から曇一時雨

今日は、素晴らしくきれいだというフォクスンド湖行きで、みんなはりきって起きる。ミンマ・テンジン、パサン、リンジの3人をB・Cへ残し、他の9人と2人のポーターを雇い7時出発。

B・Cから往路キャラバンで歩いた道のりをスリガドの出合まで下ってみて、こんなにいろいろの所を歩いたのだなあと、改めて感心する。来た時の記憶が登攀期間中の25日間あまりの間に、だいぶん薄れてしまったようだ。辺りは来た時とは異り、春の色が濃く、名も知らぬいろいろの花が咲き乱れ、とても気持よい。10時30分ごろスリガドの出合でポーターと一緒に食事をする。メニューはホットケーキで日本を出発してから初めてパンらしい味のものを食べたような気がした。スリガドは来る時よりも水が増し、すごい勢いで流れているが青く澄んだとてもきれいな流れだ。リンモ村への道はこの川に沿って両岸にあったが、私達は近道だという右岸の道を行く。途中の道には数多くの高山植物が咲き、公園を歩いているような気分だ。道がフォクスンド湖へ向かって大きくカーブする付近に赤褐色の西部劇に出てくるような岩山があり、ここにきれいな無人の村があった。聞くところによるとリンモの村人が越冬のために住む所だという。チベット系の人は冬は暖い所で生活し、夏になると自分達の土地へ戻るという生活をしているようだ。私達のキャラバン中もそういう人びとを見かけた。

この付近から道は急なジグザグとなり、上部に出ると眼下に大きな滝が望まれ、上部台地の奥に目ざすリンモ村とフォクスンド湖が遠望できた。リンモ村は広びろとした大きなゆるい傾斜の土地で、ジュムラ以来初めて見る広びろとした感じで豊かそうに見えた。人口200人ぐらいという。今日の泊場は、私達の雇ったポーターの親戚の家でその屋根上にテントを張る。

その日の泊場となった家はリンモでも大きな家で、中に親族関係のものが数家族住むという。通常1階は家畜用となっているようで、人は2階に住むようだ。部屋の内部は真暗でよく見ることはできなかったが、まったく簡素なものであった。

4月30日　快晴後曇り雨

今日は、8時30分まで自由行動ということで、お茶を1杯呑んだだけで早々に出発したが、結局、隊員1人を除いてみんな左岸に見える岩尾根に登ることになった。そこに行けば私達の登ったカン

ジェラルワが別の角度から見られると思ったからだ。

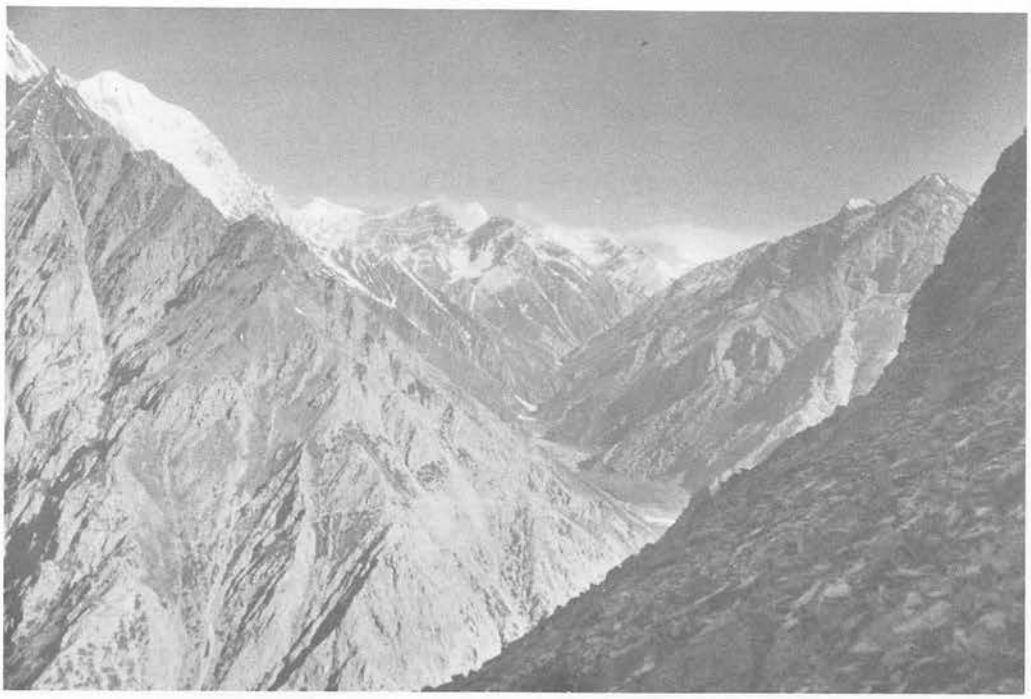
岩尾根に登る途中から眼下に見るフォクスンド湖は素晴らしいものだった。岩尾根には各自のめざす所へそれぞれ登ったが、一番高い所まで登った服部だけがそれらしい山々を見ただけに終った。岩尾根の真正面に見える西側の氷河をもった6180 mピーク（カンテンバ）から続くカンジェラルワ連山の上部が見えただけで、ここの位置からでは、どれがカンジェラルワなのか確認するまで至らず残念であった。湖のずっと奥にはツオカルポカンと思われる山が遠望できたが、時間もなく引返さねばならなかった。

この上部からのフォクスンド湖の展望は一段と素晴らしく、その水の色は澄んだ紺碧というか、たとえようのないような素晴らしいものだった。写真を撮り早々に引き返す。約束の時間に大幅に遅れ１０時近くに戻る。

帰路は往路と別の左岸の道を行く。すでにみんな出発していた。この道はなかなかの展望で、西のずっと奥にカグマラの山々が連らなり、南には６０００ mくらいの山々が見られ、往路と異った道のせいもあり、より目を楽しませてくれた。１２時頃、マンドウアという村でみんなにやっと追いつくが、のんびりもできぬまま出発し、ドジャム・コーラ出合近くの橋の所で右岸を行ったシェルパらと合流し、２時ごろやっと昼食にありつけた。以後B・Cまでの道のりはなれた道とはいえ、今日１日の行程がひびいてつらいものだった。

リンモの村では村人が農耕にヤクを伴っていそしむ姿が見られた。夕方B・C真近で雨となり、今までの中で一番の降りとなった。天候は日ごとに悪くなるようで私達は早く登攀が終ってよかったと改めて思う。京極らはすっかり遅れてしまい、雨やどりかたがたプンモでチャンでも呑んできたようで、ごきげんである。

その夜、ネパール放送で私達の登頂のニュースを聞いた。メイル・ルランナーが思ったより早くジュムラに着いたことを物語り、日本にもすぐ伝わることだろうと話し合った。



フォクスンド湖東側岩尾根から北西方面を望む

# 第 III 部



# 登攀計画と実際の行動

渡辺文仁

## 1 留意点

(1)各キャンプ間の高度差を約500mとする。
(2)B・Cを大体4000mの地点に置くとして、頂上までの高度差約2600mに対して前進キャンプを4つ設ける。
(3)まず偵察を先行する。
(4)各隊員の行動の原則は、経験高度を得てからキャンプ入りをする。すなわち、偵察、ルート工作、荷上等の行動をとおして、そのキャンプの高度を1度経験してからキャンプ入りをする。
(5)自覚、他覚症状の有無に関わらず、1度は必ずB・Cに戻り高度順応への対応を図る。

## 2 登攀日数

6000mクラスの山の、B・C設営から登頂までの日数は、他隊の例からみて20〜25日前後であるが、私達の場合も最終行動表の作成の時点で23日間となった。

実際の行動を別表として次項に再掲しておいた。

## 3 実際の行動

各キャンプの高度、高度差および各隊員の行動は別表のとおりである。ただし、高度は、手違いから高度計を忘れたため推定によるものである。

(1)各キャンプの高度差および前進キャンプ数について

カンジェラルワの全容を計画の段階では把握できなかったため、ツォカルポカンに初登頂した大阪府岳連隊の阿部隊長、吉永氏から寄せていただいた資料に基づいて、予想登攀ルートを考えた。

これで行くと、下部の岩の部分で計画どおりの高度差を取れるかどうか不明であったが、一応原則は原則としてとらえることにしておいた。

さて、実際面であるが、偵察の結果、予想した登攀ルートの上部に結びつく岩稜を発見し、これを下部のルートとした結果、$C_2$ が少し低めに作られることになってしまった。これは、この岩稜上のキャンプ・サイトが限定されたことおよび$C_1$の上から岩稜が大きく落ち込んでいることの結果である。

また$C_4$の位置も限定されたため、$C_3$が低くなってしまった。この結果、$C_3$までの高度差が少なくなった反面、$C_4$から頂上までが予定以上に長くなった。

$C_1$のことが最後になったが、最初に設けた$C_1$の位置が、$C_2$には遠すぎること、水を作るための雪の不足が考えられたことなどから、これが仮$C_1$となり、後に$C_1$が正式に作られた。B・Cが低く、$C_1$との高度差と距離がありすぎたため、休養のためにB・Cに戻ることを各隊員は好まなかった。$C_1$は格好のキャンプ・サイトに作られた。

(2)各隊員の行動等について

経験高度を得てからキャンプ入りの原則は、$C_1$の場合を除き完全に守ることができた。$C_1$入りの場合、偵察隊の2名はすでにこの高度を経験済みであったから問題はなかったが、他についても、キャラバンで約3900mの峠を2つ越えて来たことから、ある程度の順化がされているものと考え、原則を崩すことにためらいはしなかった。

4月4日にB・C地に到着し、4月7日に行動を開始して16日後の4月22日に第1次登頂に成功するまで、別表の行動表のとおり、$C_2$ 設営までに若干のもたつきがありはしたものの、各隊員のB・Cでの休養を含め、まったく原則に基づいた行動をつらぬくことができた。天候にも恵まれ、高度の影響にもそれほど災わいされずに行動できたことが、この表の結果となって表われているといえるが、少し遊びがあっても良かったのではないかといえるかも知れない。

(3) 偵察とルート工作について

まず偵察を先行し、ルート工作は偵察の終了後におこなうという、ごく当り前のことであるがヒマラヤ登山上の大原則を、私達は前半に忘れてしまっていた。

これは、$C_1$ を設けた後、これを仮の $C_1$ としさらに上部に $C_1$ を設け直しながら $C_2$、さらには上部の雪壁へのルートを求める行動の中で生じたことである。

上部の雪壁に至るルートをどうするかが計画段階では不明であったが、それがキャラバン途中から先行した偵察隊の偵察の結果、この雪壁に結びつく岩稜にルートの可能性を発見したことは前述のとおりである。

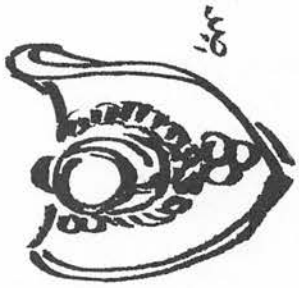
結果として、これをルートとしたのであるが、この岩稜を即ルートとし、偵察をせずにフイックス・ロープ等のルート工作に入ってしまったわけである。その結果、岩壁のごく前半部のみで荷上げには不向きとの判断がなされ、ナウリ・コーラ源頭に $C_2$ を作り、上部へのルートを求めることになった。

このころ、私はキャラバン中に少し再発していた捻挫が、初日の $C_1$ への行動中に痛み出して、B・Cでトランシーバーで行動の報告を受け、指示を出していたのだが、私自身、ルート偵察をせずに、すぐにルート工作に入っている行動に何らの疑念を持たなかった。

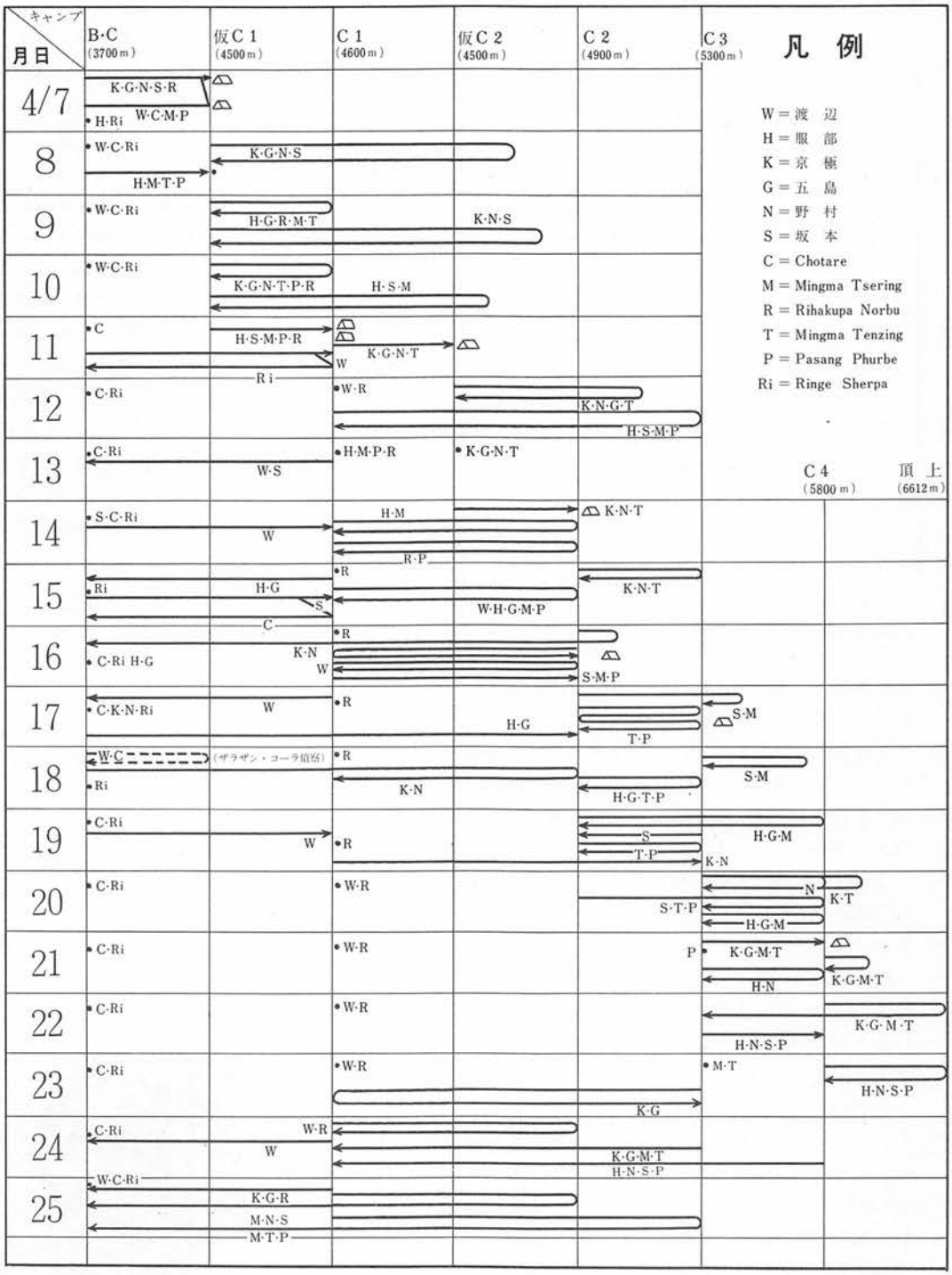
後に撤収することになるのだが、ナウリ・コーラ源頭の $C_2$ の建設見込みの報告を受け、足も復調したようなので4月11日、私は $C_1$ に上った。ここで、岩稜を直接に眼で見、岩稜のごく前半部しか歩いていなかったことを発見した。そして、これからルートにしようとしているアイス・フォールの悪そうな様相を初めて知った。

ここで、岩稜に再びルートを求めるべく偵察隊が出るのだが、このあたりについては本文中に記してあるとおりである。

やはり、ヒマラヤ登山1年生では、出発前の知識としては理解しているつもりであっても、局部的な判断に走ってしまうものだと後で自戒した問題であった。



# 行　動　表


キャンプ
月日
B·C (3700m)
仮C 1 (4500m)
C 1 (4600m)
仮C 2 (4500m)
C 2 (4900m)
C 3 (5300m)
C 4 (5800m)
頂上 (6612m)
4/7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
K·G·N·S·R
H·Ri
W·C·M·P
W·C·Ri
K·G·N·S
H·M·T·P
H·G·R·M·T
K·N·S
K·G·N·T·P·R
H·S·M
C
H·S·M·P·R
W
K·G·N·T
Ri
C·Ri
W·R
K·N·G·T
H·S·M·P
H·M·P·R
K·G·N·T
W·S
S·C·Ri
H·M
W
R·P
K·N·T
Ri
H·G
S
C
W·H·G·M·P
C·Ri H·G
K·N
S·M·P
C·K·N·Ri
S·M
T·P
W·C
(ザラザン・コーラ偵察)
K·N
H·G·T·P
H·G·M
S·T·P
N
K·T
P
K·G·M·T
H·N
K·G·M·T
H·N·S·P
M·T
K·G
W·C·Ri
K·G·R
M·N·S
M·T·P
凡　例
W＝渡　辺
H＝服　部
K＝京　極
G＝五　島
N＝野　村
S＝坂　本
C＝Chotare
M＝Mingma Tsering
R＝Rihakupa Norbu
T＝Mingma Tenzing
P＝Pasang Phurbe
Ri＝Ringe Sherpa

# 登攀行為

京極紘一

カンジェラルワ登頂にあたっての氷雪および岩登の技術的なこと、フイックス・ロープやハーケン等のことについて若干述べてみたいと思う。

氷雪を主体とする上半部と岩を主体とする下半部にカンジェラルワのルートは大別され、それぞれ違った技術を要求されて、この山の登攀を一層興味深いものにしてくれた。

岩稜での登攀は3級程度のグレードで、一部4～5級の個所があったくらいで、そんなに難しいものではない。スレート状の岩で構成されていたため、快適さは無く、脆く、ハーケンの利くリスが少なく、フイック・スロープは、大きな岩魂や突起にようやく固定したが、上部は岩が安定したし、いくらか良かった。

氷雪の部では$C_4$の上部の氷壁突破が鍵となった。オーバーシューズ着用、12本爪出歯アイゼンを使用、ピッケルとアイス・ハーケン（メスの代り）のコンビネーションで、6000mという高度で走るように登攀したら、心臓がバンバンと音がするほど高鳴り胸が壊れるかと思ったほどだったが、結構登れ、シェルパもビックリしていたが面白い登攀だった。この壁は、完全な氷（蒼氷）ではなく、氷化した雪壁といった方が良いだろう。ルート工作がしやすくスノー・バーも1mのパイプのものがよく雪中に入ってくれた。が、一部帯状の蒼氷があって、そこはアイス・ハーケンと、アングルの60cmのスノー・バーでなければダメであった。

次にフイックス・ロープであるが、岩稜の部分は岩角で消耗するのを考慮して、8mmのナイロン・ロープを1000m 用意したが、計算したようにピッタリと間に合った。氷雪の部では、6mmのナイロン・ロープを1000m 用意したが、使ったのは600mであった。 いずれも、50mの単位に切断して持って行ったが、扱いやすく行程を計る目安にもなった。しかし、ナイロンの登山用ロープを使用したが、それほど痛める登り方をするのでなければ、荷物用や漁業用として安価で売っているロープで充分のようであり、同時期に入山していた他の遠征隊はそうしていた。



# キャラバン・ルート
# の決定まで

渡　辺　文　仁

カンジロバ・ヒマールへのキャラバン。ルートはいろいろ考えられるが、おおよそ次のとおりとなろう。

## 南面からのルート

(1)ネパールガンジージャジャルコットージュムラ（1963年、ナラカン・カールの北大隊等の例、26日間）
(2)ネパールガンジーダイレクージュムラ（同上北大隊等の帰路の例）
(3)ネパールガンジージャジャルコットーカイガオン（1961年、タイソン等の例、24日間）
(4)（カトマンズ）ー（飛行機）スルケットージュムラ（1970年、カンジロバ主峰の大阪市立大隊の例、11日間）
(5)（カトマンズ）ー（飛行機）ジュラム

以上のとおりとなろうが、主としてインド側から（この場合、ネパールガンジ・ロード）直接に西ネパールに入りこむ場合と、カトマンズから飛行機でスルケットないしはジュラムに飛び、ジュラムをキャラバンの起点あるいは基点とする例が多くなっている。

## 東面からのルート

(1)ポカラーツァルカードウネイースリ・ガドに沿ってカンジロバ・ヒマール東面、またはドウネイーテイブリコットーカイガオンージュムラ（1953年、ティッヒー等の例）
(2)ポカラードルパタンードウネイ以降は「(1)」と同じ（1967年、ノルディック等の例、ポカラードウネイは約20日、ドウネイーフオクスンド湖は4日）
(3)（カトマンズ）ー（飛行機）ドルパタン（ドルパタンードウネイは約10日）

（東面からは、他にポカラーツアルカーポエのルートが、カンジロバの北面を計画する場合に考えられよう）。

## キャラバン・ルートの決定まで

当初、私達が考えたのは(1)インド側のネパールガンジ・ロードからネパールガンジに入ってキャラバンを進める、(2)カトマンズからドルパタンに飛び、ドルパタンをキャラバンの起点にする、の2通りであった。

その後、隊荷の輸送方法（日本から空路カトマンズに輸送する）の決定にともない、上記(1)のネパールガンジからのキャラバンの計画は消え去り、(2)のカトマンズからドルパタンに飛び、ドルパタンからのキャラバン・ルートの具体的な検討を始めた。その結果、このルートの途中にはジャングラバンジャンなど、4500m前後の峠を2つ越えなければならないことがわかった。プレ・モンスーンのキャラバンでは、まだ相当の積雪が予想され、峠越えはあるいは無理かも知れなかった。

いろいろ調べているうちに、ジュラムの飛行場への定期便（ツィン・オーター機）の利用とチャーター・フライトの可能なことが判明した。

このころには目標の山も東部のカンジェラルワに決めていたので、ジュムラをキャラバンの起点とした場合、キャラバン日数が多くなるマイナス面はあるが、輸送の確実性から後者をキャラバンの起点とすることにした。

次に、ジュムラからのキャラバン・ルートであるが、カイガオンまでは一本道である。問題はカイガオンンから、(1)カグマラ峠越え、(2)ティブリコットを経由し、スリガドを溯る、の2つのルートの選択である。

日数的にはカグマラ峠を越えた方が短かくて済むが、この峠は5500 mの高さであり3月中の峠越えは積雪でほとんど不可能であろう。1963年のイギリス婦人隊がラ・シャンマ等に初登頂した時の報告にも、カグマラ峠の雪の深さが記されている。

となればルートはおのずから決まってきた。多少の日数の増加も、ヒマラヤのキャラバンの楽しさであり、行きも帰りも同じルートでは面白みがないではないか。カグマラ峠は帰りのために残しておくことにした。

以上、私達はあちこちと回り道をしながらキャラバン・ルートを決定したが、キャラバンの様子等は本文にあるとおりである。



## シェルパについて

渡 辺 文 仁

### 雇用したシェルパ

私達の雇用したシェルパ等は次のとおりである。

| | |
|---|---|
| サーダー | Mingma Tshering |
| コック | Lhakpa Norbu |
| シェルパ | Mingma Tenzing |
| シェルパ | Passng Phurbe |
| キッチン・ボーイ | Ringe Sherpa |

### プロフィル等

人物評価というものは非常に一方的なものであり、正しく人間を評価することはほとんど不可能に近い。誤った評価をされたがために、以後のそのシェルパが仕事にあぶれたりすることもあろうかと考えると、軽がるしく評価する事の恐ろしさを感じるのである。したがって、彼等の遠征参加歴、秀れた点等を記すことにしたい。

## Mingma Tshering

1933年、タメの生まれ。

遠征参加歴　1954年・マカルー、1955年・マカルー、1959年・ジャヌー、1960年・ヒマルチュリ、1961年・ランタンリルン、1962年・ニルギリ、1963年・ヌンブール、1964年・ランタンリルン、アンナプルナ南峰、1965年・ゴジュンバカン、1969年・グレーシャードーム、J。A。Cエベレスト偵察隊（サーダー）、1970年・マカルー（サーダー）、1972年・グルジャヒマール（サーダー）。

短　評

遠征参加歴からもわかるように、いわゆるビック・エクスペディションへの参加も多く、非常に経験豊富なシェルパであった。彼に対する評価はJ。A。C東海支部のマカルーにおいてコンパクトになされているが、これが頭の中に焼きついていて、彼を紹介された時、このことがまず頭に浮かんできた。

したがって、西ネパールの地域性を考えたとき、彼を雇用することにためらいがあったが、他にサーダーがいなかったので止むを得ず雇用した。

確かにマネジメント能力は良いとはいえないが、登攀技術の優秀さは全員が一致して認めるところであったし、固定ロープ工作の経験が少ない私達よりも、彼のそれは秀れていたかもしれない。

彼の欠点は、あまりに自分で働きすぎることであろう。もっと部下のシェルパを使うと良いのにと思う場面も多々あった。しかし、これも逆にみれば小規模な遠征隊には良い場合もあろう。遠征隊の規模、目標とする地域によっては彼は秀れたシェルパ、あるいはサーダーであるといえよう。

## Lhakpa Norbu

1937年、タメの生まれ。

遠征参加歴　1959年・ヒマルチュリ、1961年・P－29、1962年・エベレスト、1964年・バルン、1965年・エベレスト、1969年・エベレスト（第1次、第2次）、1970年・エベレスト、1970年・P－29、1971年・マナスル西壁、1971年・ダウラギリV、1972年・ツクチェピーク（サーダー）

短　評

エベレストの経験が多く、サーダー級のシェルパである。今回はたまたまコックとして雇われたが、$C_1$設営後はそこに常駐して$C_2$への荷上げにも何度か従事した。技術も確かだし、人間味のあふれたシェルパであった。今回のシェルパの中で最も好感が持てたとは隊員一同の印象である。今後、サーダーとしての活躍を期待したい。

## Mingma Tenzing

1940年、タメの生まれ。

遠征参加歴　これまではほとんどがトレッキングであった。その後1973年のポストに、立教大のカンバチェン、1975年にダウラギリⅣに参加したらしい。

短　評

カトマンズに居を構え、英語の読み書きのできる才人である。それだけに、いわゆる世なれていて、私のような反体制的人間には好まれないが、これは個人のし好である。隊員の中には、彼の才能（?）を高く評価していた者もあったが、遠征終了時にはその商才に幻滅していた。しかし、これも個人的感情である。技術的にはひととおりのことはこなすが、きびしい経験には欠けている。

## Pasang Phurbe

1946年、タメの生まれ。

遠征参加歴　1971年・ダウラギリV、1972年・グルジャヒマール。

短　評

これといった特色のないシェルパである。遠征経験を多くすることによって特色の現れる、これからの人間なのであろう。性格はおとなしく、無口である。

## Ringe Sherpa

1935年、ジュンベシの生まれ。

遠征参加歴　1970年・P－29（メイル・ランナー）

短　評

私は、いわゆる昔気質のシェルパを書物の上でしか知らないが、私はそれを、このキッチン・ボーイのRingeにみた。英語を解さず、言葉でのコ

ミュニケーションは成し得なかったが、彼の動作から、心あたたまる人間性が感じられるのである。彼の年齢からいって、シェルパとしての大成を期待するのは無理かもしれないが、地道な成長を私は望んでいる。

## シェルパの雇用について

私達は当初、西ネパールのジュムラを中心とした地域の経験があって、ポーター・アレンジ能力が秀れ、さらにできうれば人柄が良いシェルパを望んだ。地域性からいって、これらが必要条件であった。登攀技術の点に関しては、最初の時点でシェルパの位置づけをB. C以上からは荷上げ要員として考えていたので、第2次的なものとしておいていた。

このような観点から内外の文献からカンジロバ・ヒマール参加歴のあるシェルパをリスト・アップし、最終的にはサーダーに、大阪府岳連隊の吉永氏等に照会した結果その隊のサーダー格であったAnuをサーダーとして、シェルパ等は彼に選択を一任することにして、その手配をHAJ ネパール理事のランジャン氏に依頼した。Anuは H. S. 所属のシェルパではないと聞いていたからである。ところが現地に着いてみると、彼はイタリアのエベレストに参加してしまっていた。やむをえず、H. S. にシェルパのあっせんを依頼したという訳である。

このあたり、シェルパの雇用については単なる口約束ではシェルパに対する拘束力もないし、H. S. をとおしてもその効果は皆無のようである。というのは、私達の雇用したシェルパの1人を、この年のポストのサーダーに雇用することを本人の了解のもとに、H. S. に話しをし、その約束を口頭で得ていたのにも関らず、そのシェルパはその隊の前に現れず、H. S. もまたそれについての責任をまったく負わなかったような事実があるからである。この場合、口頭でなく文書での契約をかわさなかったという問題はあるが、契約は当事者同志が交わすのが原則であるから、その効果のほどは、やはり定かではないであろう。間違いなしに、目的のシェルパを雇用するには、早手まわしに内金などを入れ、そのシーズンの始まる以前に当事者が直接現地に出向いて、しかるべき手を打つしかないようである。

## シェルパの雇用賃金

1976年に新しいネパール登山規則が発表され、それには詳しくシェルパ等の賃金などが記載されているが、私達の隊のときは明確でない部分もあった。以下に私達の隊のときのことを記しておく。

1日当りの賃金

サーダー　25Rs

コック及びシェルパ　15Rs

キッチン・ボーイ　13Rs

出身地からカトマンズまでの出向賃

それぞれの1日当りの賃金に必要日数（私達の雇用したシェルパの場合は、タメからで16日が必要日数としてH. S. から指示される）を乗じた額に食物費として80Rs。

これは非常に労働者側にとって有利な制度である。しかし、カトマンズに常住しているシェルパにまで、これが適用されることには問題があると思われるが、H. S。に意見を言ってもとおらない。何故なら、H。S. はそれぞれのシェルパからも。あっせん料として、その全受け取り額の数パーセントを、手数料の名目（であろう）として徴収するから、シェルパの受け取り額は多ければ多いほど、H. S. の歳入も多くなるからである。

## H. S. への手数料

これは雇用したシェルパの数に関係せず、1件につき1,000Rsとして徴収された。

以上については1973年当時の額であり、その後、大幅に額が改訂されているので参考にはならないであろうが、支払い科目に変化はないはずである。

## シェルパへの接し方

出発前に私たちはシェルパについて概括的に学習をし、彼等への態度、接し方を確認しておいた。登山の成功と遠征の楽しさを期すには、彼等の良

き協力が必要であり、そのためには正しい意味での人事管理が必要だからである。

それらは次のとおりである。

1　命令系統をはっきりさせる

全体的なことに関しては、隊長以外は指示・命令を出さないことにした。これは、命令系統の混乱をきたさないためである。シェルパに対する指示・命令はすべて隊長からサーダーを通じておろすことにした。ただし、例えば食糧担当者とコックとの間の、日常的な指示等は担当者の間で行なわれるのは当然とした。

2　隊の団結を、シェルパ管理の鉄則とする

隊員間に、チームとしての乱れがあると、シェルパへのしめしもつかなくなり、彼等に乗ぜられる原因にもなる。これは、単にシェルパへの問題ではなく全体的な問題であるが、チームの団結をこのためにも必要とした。

3　秩序をくずさないで接すること

彼等を仲間として接することは大事であり、人間としてのつながりを基本において考えるが、主従の関係の秩序がくずれるようなことがあると、それは隊運営上に問題が生ずる。また、安易な妥協をしたり、必要以上に放任したり、甘やかせたりすることは、決して良い結果にはならないであろうことを確認した。

4　平等に扱うこと

上記「3項」と矛盾するようであるが本質的に異なる。彼等の待遇を隊員と同じにすることによって、ささいなことが原因となるトラブルは生じないはずである。例えば、食物もキャラバン中を含めて、まったく同じ物を同一テーブル（ビニール・シーツの上に、輪になって座るのだが）で食べた。また酒を飲む時は、必ず彼等を加えて飲んだ。

こうすることによって、隊の食糧事情、財政事情も説明しないでも、彼等にわかってもらえたようだし、隊員、シェルパ間の人間関係も自然にうまくいったと確信できる。

もっとも、メシを席を同じくして食うことに、彼等は最初は窮屈であったようではあるが・・。

5　言い分があれば充分に聞く

例えば彼等の言動に対する注意等には、隊側の誤解に基づく場合もありうる。その場合にも、一方的な服従を強いることは好ましくないから、彼等なりの言い分を充分に聞くことにした。

以上を基本的な事項として現地に出向いた。当初、私達が予定していたサーダーはAnuで、ポーター・アレンジに勝れ、人柄は良いが、遠征参加歴も少ないという話なので、扱いに大した難しさはないであろうと思っていた。ところが、前述したような理由で、サーダー、コックに、私達ごとき小パーティに、私達にしてみれば超大物のシェルパがなることになってしまった。卒直なところ、これは大変だなあと思ったが、前記確認事項を、再び確認し合い、隊員各自がこれを完全に守ったことで、シェルパ管理は成功したといえよう。

また、隊員が隊長を権威づけてくれ、カトマンズでの買出しや梱包作業、キャラバン中の諸作業等に一切、携わらせないでくれたことも、大きな効果があったようである。小パーティにあっては、作業をする者が1人でも欠けることは、その面では損失になるが、遠征に占めるシェルパの役割とのかねあいを考えることが、大切なのであろう。

以上は私達のような小パーティだから、うまくいったとも考えられるが、基本的なことをきちんと押さえておけば、あとはその隊の規模、目的等に応じた運用の問題となろう。

ともあれ、私達はシェルパとのトラブルをまったく起こさず、彼等の良き協力を得て、楽しい遠征をすることができた。



# 輸送について

服部　博

## 輸送方法・往路

### 札幌 ― 東京

国内輸送については、東京ー札幌間の急行トラック（コンテナ）の帰路空車となるものを利用し、約1トンの隊荷を航空代理店の倉庫に運んだ。費用は12,000円。

### 東京 ― カトマンズ

タイ航空により、バンコック経由でいわゆる別送としてカトマンズに輸送した。輸出時の諸手続きは、われわれが作成したパッキング・リストに基づいて、すべて航空代理店が代行したので、われわれの手数は不要であった。別送料金は200Kgで約30万円であった。

### カトマンズ ― ジュムラ

カトマンズからジュムラへの輸送は、日本から輸送した隊荷、1トン（別送900Kg、機内持込物100Kg）に加えてカトマンズで購入した装備、食糧等約600Kgをツィンオッター機（積載能力1100Kg）をチャーターして輸送した。1日2フライトで1日で輸送が完了する予定であったが、1回目のフライト後、急にジュムラの飛行場の関係で変更を余儀なくされた。翌日定期便でシェルパ2名を飛ばし、翌々日、2回目のフライトで残りの隊荷をジュムラに運んだ。

日本からの別送品はカトマンズ到着の際、繁雑さを避けるため必要なボックス以外、ほとんどそのままカトマンズの空港倉庫に保管し、そのままジュムラに輸送した。そして、ジュムラで初めて全荷物を開包しなおし、30Kgずつに計量の上再梱包し点検を行ったが、その時間はシェルパを含めた全員で4時間たらずで完了した。荷物の総個数52個となった。

ツィンオッター機のチャーター料は1フライト約8000Rsであった。定期便はカトマンズージュムラ間は毎月曜日と木曜日で、1人260Rsであった。

## 輸送方法・帰路

### ジュムラ ― カトマンズ

帰路は隊荷も約600Kgに減ったので、ジュムラに飛んで来たセスナ機（積載量500Kg）を交渉により800Rsで頼み、隊員3名と300Kgを輸送し、他は定期便により何回かに分れて、隊員、シェルパが機内持込重量の範囲で輸送した。

### カトマンズ ― 東京

帰路、カトマンズからの登攀用具等の返送は入国の際に許可された申請書リストどうりの内容でなければならないことは知っていたが、実際にはかなり繁雑になるし、リストどうりの品目にならないとさらに課税されるし、大変だとのアドバイスから、急拠一般旅行者としての荷物の発送に切りかえ、簡単なパッキングリストを作成して別送した。輸送料金は約200Kgで300ドルであった。料金支払の際私達はルピーの用意しかなかったのでドルを取りに戻らねばならなかった。また、返送の際使用代表者のパスポートは、隊員の帰国が別々になったため、日本入国の際、受領者のパスポートと別になってしまったので、受取に手間であった。今後は注意したい。

# 通関について

服部　博

**機内持込分**

羽田からの機内持込荷物の120Kgは、遠征隊の場合は今年から輸入許可証が必要となっていてすぐ荷受けできず、やむなく手荷物だけで通関し、急きょパッキングリストを作成し、輸入許可申請書に外務省登山課長の裏書きをもらった後、商工省に出向いて即日許可証を入手した。荷受けは翌日すぐできたが私達の場合開包検査もなく簡単であった。

**別送分**

別送分は私達の出発の3日前に発送済みで、すでに到着しているはずであったが、実際は私達の到着後3日目にカトマンズに着いた。

通関は輸入許可証、登山許可証、パッキング・リストを提出し書類のチェックを受けたが、パッキング・リストによりトランシーバーの入ったボックスが全部開包され、入念に検査を受けたほかは、任意に食糧、装備のボックスから2個ずつ検査されただけで、形式的なものであった。

課税額は消耗品総計約3000Rsに対し750Rs、持帰品約3200Rsに対し420Rsであった。

税　率

| | | |
|---|---|---|
| 物品総額 | 100 | |
| 輸送保険料 | 25% | カトマンズ価格125とする |
| 関　税 | 10% | ＝ 12.50 |
| | 12.50の5% | ＝ 0.63 |
| | | 13.13 |
| Sales Tax | | 125 |
| 関税 | | ＋ 13.13 |
| | | 138.13 |
| Sales Tax | 10% | ＝13.82 |

支払税額　13.13＋13.82＝26.95%

なお、上記税率は1975年から大巾に変更になっている。



# 梱包について

服部　博

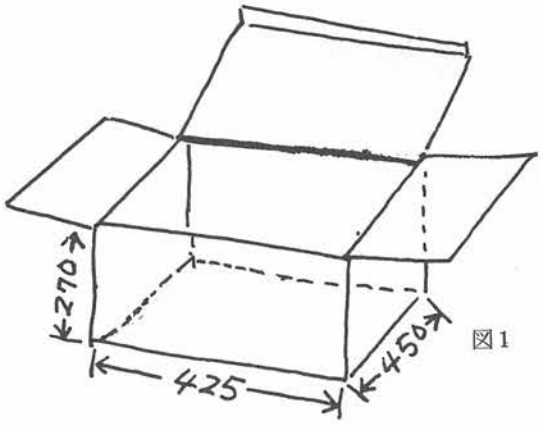



図1

図1　カートンボックス（小）270×425×450（㎜）の内側にちょうど入る補強用ダンボールを使用した。

カートン・ボックス小（図1）、大（図2）を発注、使用した。カートン・ボックスはダブルになるようにし、内側に補強用ダンボールを使用、外側を防水加工した。重量は大3Kg、小1.6Kg。費用は大1個630円40個、小は1個380円10個で大小合計で約29,000円。

キャンバス・バック（図3）は当初カートン・ボックスの保護を目的とし作成したものだが、実際には、ごく一部の雨にぬれては困る物のみに使用しただけで、他はキャンバス・バックのみで使用したものが多かった。

隊荷が日本からベース・キャンプ等に運ばれるまで、相当の日数を要するので梱包には気を使うところであるが、遠征隊の規模、時期等によっても異なろう。私達は空輸ということとキャラバン日数も2週間くらいなので前記カートン・ボックスで充分使用に耐えうると考え梱包にあたったが、費用、重量の点からもわれわれの隊に適当なものであったと思う。

私達のキャラバンは2週間で雨にはほとんどあわず、最良の条件であったようだ。

カートン・ボックスがキャラバン中に破損するのは、主として出し入れの激しい物が入っているボックスで、B. C に着くまでにもかなりのいたみが見られるものもあったが、これらはやむをえないものだった。これらいたんだ時の予備として、折りたたんだスペア用のカートン・ボックスとキャンバス・バックを別に少し持参した。ポーターの汗、背負ロープによるいたみの他、内容品の相違によるいたみの差も目だった。

石油、薬品などで取り扱いに注意を要するものについては、ボックスに矢印で上・下を示したり、㊟の表示をするなどしてポーターにも注意させた。キャンバス・バックに入れた穀類等で破損するのはポーターが引きずるために生ずるものが多く、これらはダブルにして使用した。

盗難防止用の錠については一応用意はしたが、私達の荷物の数は隊員、シェルパの目がとどく範囲の数であったので、錠は現金の入ったトランクのバックのみで他は使用しなかった。

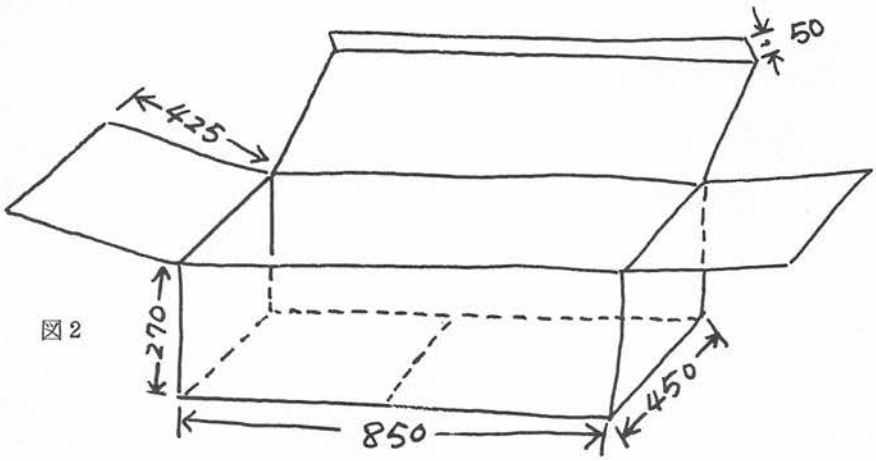



図2

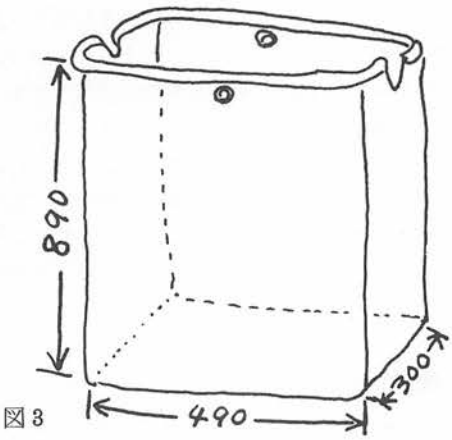



図3

図2　カートン・ボックス（大）
２７０×８５０×４５０（㎜）の内側に小型と同じく補強用ダンボールを使用し、ふたには５０㎜の折り返しをつけた。

図3　キャンバスバック上部には、ひもを通せるようにし、しっかり結ぶことができるようにした。



# ポーターによる隊荷の運送について

服部　博

## 往路

サーダーを通じて50人のポーターを集めたが、ジュムラを中心に周辺の村（テクリー、ムグ、シンナーコート、ルマガオン）から集めるための集結に4日を要した。しかし、隊員やシェルパら全員揃うのに3日を要したので、ポーター集結のためのロスはなかった。ポーターが集結するまでの間に、各30Kgに隊荷の再梱包をしたが、2名の飛び入りポーターが加わり、結局ポーター数はナイケも含めて53名となった。

ジュムラのポーターは悪質だとの評判であったが、キャラバン開始後3～4日目まではシェルパ達もジュムラのポーターはよく働き、とてもよいといっていた。しかし、キャラバン6日目に3つ目の峠バラングラ・ラ（3841$m$）を越えるころから苦情が多くなり、一部のポーターが帰ると言うのを、代りのポーターがみつかるまではだめだと、リエゾンがなだめたりおどかしたりしてきたが、7日目のティブリコットで、ついにみんな帰ると言いだし、停滞。ごねるポーターにやむなく賃上を承諾させられた。その後も大きな峠こそなかったが登り下りの激しい、きついキャラバンのせいもあり、ドジャム・コーラ入口付近から明らかなサボタージュを始めた。幸いプンモ村の近くで、村人をポーターに雇ってくれるよう要望もあり、プンモ村の入口でジュムラからのポーター全員解雇した。

## 帰路

すっかりなじみになったプンモ村の村人をポーターにすることにし、往路、通れなかったカグマラ・ラも帰路には通れそうで、この峠を通れば1週間でジュムラに行けそうなので、賃金1日17Rsで8日分払うから請負い制でどうだと、ナイケと交渉したが、カグマラ・ラは雪がまだ多く大変なので、もっと欲しいという。スリガドを降り、ティブリコットを経由すればもっと日数はかかるので、結局10日分1人170Rsを出すことにした。

往路に比べポーター達は常に私達より早く、走るように急いで歩き、ついて歩くのが大変だった。往路は2週間もかかり、苦情をいわれながらだらだら歩かれ、高い賃金を支払うのとは大きな違いだった。

## 賃金の支払について

別図のようなノートの1ページに必要と思われる事項を書いてボックスのナンバーとポーターの首にかけさせた番号札のナンバーと同一にして、適宜キャラバン中テント地等で荷物のチェックをした。またボックスの内容品で特に注意を要するものなどには適宜(注)の表示をしたり、内容品のメモを記したため後に内容の出入、入替等複雑になった際、わかりやすく便利であった。

賃金の支払いについて当初15Rsで途中17Rsに上がったり、停滞があったり、また1つのボックスで多いのは4回もポーターが変ったりしたので複雑であった。またポーター達は2～3日ごとに食糧を買うので金を支払ってくれというので支払ったがそれらは全員にではなく、申出の者がばらばらのため繁雑な支払いであった。

No.２３ （荷 物 番 号）

**氏　　名**

1. ハリラン（ルマガオン）→出身地
2. ザイ・ラン（ラ・ガオン）
3. プルワ・ヤンツン（プンモ）

**雇用期間**

1. １０日（3／23 ～ 4／1）
2. 　２日（4／2 　～ 4／3）
3. 　１日（4／4 　　）

} 13日（3／23 ～ 4／4）

**支払賃金**

1. １４６Rs
2. 　３４
3. 　１７

} →１番目ポーターへの支払 １９７Rs → No.２３の荷物のベースまでの輸送代金

| 月 / 区別 / 日 | 3 | | | | | | | | | 4 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| チェック運送雇用等 | 30 ○ | ○ | 30 ○ | ○ | ○ | | 86 ○ | ㊡ 7 | ○ | ○ | 34 ○ | ○ | 17 ○ | | |
| 支払月日 受領栂印 | | 3/26 | | 3/30 | | | | | | 4/1 | | 4/4 | 4/4 | | |

**賃金支払内訳**

3／26 ① 2日分（15Rs×2＝30Rs） 食費として一部支払
3／30 ① 〃 （ 〃 ） 〃

停滞 ↓ 途中から賃金アップ ↓

4／1 ① 6日分（（15×3）＋7＋（17×2）＝86Rs）
4／4 ② 2日分（17×2＝34Rs） 解 雇

4／4 ③ 1日分（17×1＝17Rs）

賃金支払いの際はリエゾンオフイサーのチョタレーかサーダーの立会いの上、支払いのつど受領ポーターの栂印を徴し、金の受け取りを認識させた。

賃金の支払いを明らかにするため上図のとおり表を作って行った。

# 医療について

服部　博

## 1 計　画

過去のヒマラヤ遠征隊の例を参考にし、また多くのかたがたからアドバイスをいただいたが医者がいなく、にわか仕込みの知識の隊ではあれこれ心配事が多く、必然的に多くの薬品類を集めることとなった。しかし、持参に際してはわれわれが得た知識内で使用しうる範囲の医療品にとどめることとした。

量も私達隊員を主とし、シェルパ、リエゾンのみを対象とし、現地住民の治療等は医者でもない私達にできようはずもないので考慮せず、また国内からの持出荷量の関係もありポーター1人分の担荷量の30Kgにとどめた。

## 2 事前の予防策

全隊員が健康診断を受け、既応症等については軽微なるものにも充分注意をした。

渡航の際に必要な伝染病の予防注射(種痘、コレラ)の他、破傷風、腸チフス、パラチフスおよびインフルエンザの予防注射も受けた。

西ネパールの医療事情は特に悪いと聞いていたので、もし病人がでた場合医療施設のあるジュムラかカトマンズに病人を移送することは困難なので事前の予防策に万全を期した。

## 3 キャラバン期間

(1)現地住民の治療

キャラバンの各村で、必ず病人や怪我人が私達を頼りに集まってきたが、一般に咳、頭痛を訴える人が多かった。その他、皮膚病、化膿症の人も多かった。中には、倒れてきた木に足を潰され、足の半分が腐乱している人など、私達には見当もつかない、血管が飛び出たようになって血が滴っている子供がいたりして、私達にはどうしようもない有様で医者の必要性を痛感した。

キャラバン4日めのチャウルコット村のことであるが、今にも死にそうな病人を連れてこられ、私達が断わるときも怨めしそうにいつまでも見つめられたが、その後彼らは鳴り物入りで何か判らぬ念仏のようなものを唱え祈祷していた。私達のだれもが、再びこの村を通りたくないと思ったほどいやな気持だった。

私達の歩いた地域はほとんど急峻な山間部で、その斜面を利用した荒れた段々畑と、わずかの牧畜とで自給自足の最低ともいえる生活をしている。自分達の食べるものすら満足に収獲できない様子で、栄養、衛生状態も悪く、これらの事は地方病的な甲状腺腫と思われる喉の腫れあがった人びとがどこにも見うけられることからもうかがえる。いったん病気になれば、自然治癒以外に方法もなく、前述のような重症になれば死を待つしかなく、悲惨な状態であった。

(2)隊員の健康状態

遠征期間を通じ隊員全員の体調は非常に良好で、心配した病気や怪我は予防等に注意したこともあり皆無であった。

マラリヤについては、レゾヒンを1週間ごと全期間投与したが、私達の歩いた地域はジュムラでも2000 m以上の高度であり心配がないと思われた。

全期間をとおして、日中と夜の気温差が30℃以上もあり、そのためどうしても風邪をひきやすい状態にあったので、風邪のひきかけ時に早期に薬を服用し予防した。赤痢、下痢等消化器系疾患については生水の飲用を禁止し、朝晩、煮沸した水を水筒に入れ、行動中やテント内でいつでも飲用できるようにする等、隊員各自の注意により完全に防止できた。

ビタミン類については食糧事情の極端に悪い地域なので、食物からの摂取は不可能と考え、全期間を通し総合ビタミン剤とビタミンC剤を全員が毎日服用した。

ビタミン剤のように毎日服用するものや、その他消化剤、肌荒れ止め用クリーム、リップクリーム、軟膏類、逆性石鹸、救急伴創膏等を一定期間分、事前に隊員各自に小袋に入れて渡し、簡単な傷等にいちいち医療係を煩わすことのないようにしたが、非常に便利で好評だった。

## 4 登攀期間

登攀期間中は、各キャンプに1個ずつ救急箱を備え、症状別に使用薬品名、量、使用法を一覧表にし各種医療品を用意した。実際に使用したのはわずかであつたが、鎮咳剤は高度のせいと気温差が大きいせいかよく服用した。その他凍傷予防にビタミンE剤、末稍循環調節剤を$C_1$以上で服用した。また高山病症状を呈した一部の隊員が鎮痛剤、精神安定剤をわずかに使用した。

高所における身体のはっきりした反応はB・Cから登攀開始6日め、5300 mくらいの高度に初めて到達し、$C_1$に戻ったとき、全員が頭痛等を訴えた。これは連日の荷上げとルート偵察等による疲労に、高度の影響が重なり全員にはっきり現われたものと思う。翌日は1日休養となったが、特に体調の悪い1人がB・Cに下った後、3日間くらいの間に全員交替でB・Cに下り休養した。

その後、順化は比較的順調であったが、一部の隊員で新高度へ達するつど不調を訴えたり、$C_3$から上部で急に体の調子が悪くなったりした隊員も出たが、たいしたことはなくその後も続けて登攀できた。頂上アタックの際は全員、頭痛や食欲不振等を訴えた。

## 5 その他

酸素は万一のために医療用として3.5 l、2本用意したが、全然使用しなかったのは幸いであった。顔や手の荒れ止め用にチョコラザーネを全期間を通じ毎日使用したが非常によく、登攀中にも別に用意の日焼け止めクリームも全然使用せず、これのみを使用したが皮膚が斑にはげるようなこともほとんどなく、唇の荒れもほとんど見られなかった。

帰路のキャラバンでカグマラ峠を越えた際、多くのポーターが雪盲になり、それまで使用しなかった目薬も一度に使用しつくしてしまい、あとは湿布のみで治癒した。これはポーターの分までサングラスの用意がなかったからでもあるが、事前の防備に欠如していたことは反省しなければならない。

遠征期間中、全薬品の半分にも満たない薬品の使用量であったが、前述のように何かが起れば薬品類も1度に多量の薬品を使用することになるであろう。

私達の多量に残った薬品類はジュムラの病院へ寄贈するつもりであったが、出発時に重量等の関係から包装類を廃棄したものや他の容器に入れ替えたりしたため、寄贈された方も薬品名や使用法も詳細でないものをもらっても困ると思い焼却した。

持参した医療品は別表(1)、(2)にある通り、抗生物質、鎮痛・解熱剤、感冒・鎮咳剤、消化・下剤、ビタミン剤、利尿剤、精神安定剤、造血剤、マラリヤ予防薬、眼用薬、末稍循環調節剤、回虫駆除剤、防中剤、消毒剤、湿布剤、など55品目に加えて、衛生材、包帯、脱脂綿なども持参した。それらの使用の結果や今後の参考になると思われることも、別表に記しておいた。

血圧計や体温計は隊員の体調をみるのに使い、その結果は各自ノートに記録した。

# 医　療　品　一　覧　表　（1）

| 薬品名 | 数量 | 使用の結果 |
|---|---|---|
| 抗生物質 | | |
| クロロマイセチン | 100 T | 主として下痢、腸炎に用意したが実際に使用せず。 |
| シントマイセチン | 400 T | いずれも高価な単位の薬品にて高所の肺炎、ヘントウセン炎、咽頭炎等発熱時に使用するため用意したが高所での風邪のひきかけ時に使用し大事をとった。 |
| ゲオマイシン | 200 T | |
| ケフレックス | 100 T | ケフレックスについては他の抗生物質で効果がない場合のためにとっておき、結局使用せず残した。 |
| 鎮痛、解熱剤 | | |
| バッファリン | 400 T | 高所での頭痛に主として使用効果あり、またキャラバン中現地住民に投与し非常に効果があった。 |
| セデス | 50包 | 歯痛、腰痛に用意、使用せず。 |
| バルピン | 100 T | 主として腰痛に用意、使用せず。 |
| バレート | 100 T | |
| アスピリン | 200 T | 風邪用にごくわずか使用。 |
| 感冒、鎮咳剤 | | |
| ダンリッチ | 200 T | 総合感冒薬、風邪のひきかけ時よく使用。 |
| メジコン | 120 T | 気温差、高所の影響でよく咳が出たため全部使用した。 |
| アクロマイシントローチ | 130 T | 鎮咳 |
| イベルザールトローチ | 150 T | 特にトローチは服用しやすいので早くに使用しつくす。 |
| 消化、下剤 | | |
| ビフテノン | 1,500 T | 消化 |
| ワカマツ | 1,000 T | 隊員各自にあらかじめ渡し適時使用したが2／3位の量であった。 |
| サラリン | 100 T | 下剤 |
| テレミン | 100 T | 便秘は多少あったが薬を使用する程でなくまったく使用しなかった。 |

| 薬品名 | 数量 | 使用の結果 |
|---|---|---|
| ビタミン剤 | | |
| アリナミン | 800 T | アリナミン、ハイシーAは各自に渡し毎日服用した。効果のほどは、測り知れないが全期間、身体の不調はなかった。<br>少なくともハイシーAは野菜不足を補ったと思う。 |
| アスパラ | 500 T | |
| ビタノイリン | 120 T | |
| ビタメジン | 100 T | |
| ハイシーA | 840 T | |
| 利尿剤 | | |
| ポリレグロン | 100 T | むくみのひどい時のために用意したが、強い薬と聞いていたので、使用に際しては注意を要するが、それ程のむくみは現われなかったので使用せず。 |
| 精神安定剤 | | |
| ホリゾン | 100 T | 高所での使用の際は脱力症状があるので使用には特に注意し、行動の終った後睡眠の目的で使用したが一部の隊員だけで、ほんの少量であった。 |
| セルシン | 100 T | |
| コントール | 100 T | |
| 造血剤 | | |
| フェログロヂュメット | 100 T | 鉄分不足による貧血用や、むくみのひどい時に利尿剤と併せて使用するために用意したが使用せず。 |
| 眼用薬 | | |
| 大学目薬 | 10本 | 主に雪目に用意したが、隊員の使用は僅かであった。現地住民の治療にも使用したが、帰りのキャラバンでカグマラ・ラ5,000mを越える所で10名程のポーターが雪目となり治療に全部使用する。 |
| クロマイ点眼薬 | 10本 | |
| 予防薬 | | |
| レゾヒン | 210 T | マラリヤ予防に出発前国内から使用し帰国まで、初回4T次回から2T毎週一定日に服用、副作用はなかった。<br>ネパールでは、1,500m以上の所にはマラリヤはないといわれているが、私達のキャラバンはジュムラ（2,200m）からであったので心配は殆んどないと思われる。 |

# 医　療　品　一　覧　表　（2）

| 薬品名 | 数量 | 使用の結果 |
|---|---|---|
| 末梢循環調節剤 | | |
| ビタミンE | 100 T | 凍傷治療、予防に用意した。 |
| ヘクサニシッド | 100 T | $C_1$ 以上の高所で循環機能促進剤として凍傷予防に使用。末稍機能循環によかったと思う。軟コウは凍傷にならなかったので殆んど使用せず。 |
| カピラン | 100 T | |
| ユベラ軟コウ | 5本 | |
| チュコラザーネ | 1Kg | 荒れ止用クリームとして用意したが全期間毎日、手、顔に用いて非常によかった。高所でも日焼止めクリームは殆んど使用せず、これのみ使用したが斑に皮膚がはげるようなことはなかった。 |
| 軟膏 | | |
| プロパデルム | 20本 | シモヤケ、虫さされ、湿疹等に用意した。隊員も種々利用したが現地住民の治療等により多く使用した。隊員にはプロバデルム、メンソレタム等あらかじめ渡し各自適時使用。 |
| ヒルドイド | 6本 | |
| リンデロンVG | 3本 | |
| レダマイシン | 5本 | |
| エアゾリン | 5本 | |
| メンソレタム | 7個 | |
| 回虫駆除剤 | | |
| マクニンS | 36 T | 原始的な貧困生活環境で現地で一緒に行動しようと思う私達に当然回虫の発生もありうると用意したが食べ物に注意したせいか発生の心配はなかったので使用せず、一部現地住民に服用したのみだった。 |
| その他 | | |
| エントロノンR | 370包 | 多剤耐性腸球菌製剤で主に高単位の抗生物質等服用の際副作用等避けるために同時に必ず服用するようにした。 |
| ウメジンタン | 60包 | 全期間適時使用、口の浄化気分をさわやかにする等よかったと思う。 |
| 痔薬 | 30本 | 国内の山行でも、不調を訴える者もいるので用意したが一部の隊員が僅か使用しただけであった。 |

| 薬品名 | 数量 | 使用の結果 |
|---|---|---|
| 防虫剤 | | |
| フマキラエアゾール | 5本 | 私達のキャラバンは高所で山岳地帯ばかりだったので日中は30℃を越える暑さだったが朝夕の冷え込みはきびしく0℃以下になった。その為か防虫剤は殆んど使用しなかった。僅かにスプレー式のフマキラエアゾールを使用したにすぎなかった。 |
| メルトンエアゾール | 1本 | |
| バルサンジェット | 4箱 | |
| 蚊取線香 | 3箱 | |
| 消毒剤 | | |
| マーキュロ | 410 ml | 殆んど現地住民の治療に使用する。オキシドールはポリ容器に移したため輸送中漏れたのが一部あった。 |
| オキシドール | 480 〃 | |
| ヨードチンキ | 100 〃 | |
| ハイレン石ケン | 12ケ | 事前に隊員各自に渡し有効に使用した。洗濯にも始終使用したので不足であった。 |
| 湿布薬 | | |
| カオリップ | 30枚 | 打ち身、捻挫等に使用の他、現地住民にも使用。不足であった。 |
| 衛生材 | | |
| 包帯 | 30本 | 救急絆創膏類はあらかじめ各人に渡し適時使用し非常に有効であった。救急箱は $C_1$ より各キャンプ用に備え有効に使用した。血圧計は国内より使用し殆んど毎日全期間測定し隊員各自の体調を記録した。その他は殆んど現地住民の治療のため使用したものが多かった。 |
| 弾性包帯 | 6本 | |
| ガーゼ | | |
| 油紙 | 4袋 | |
| 脱脂綿 | 8〃 | |
| サラシ布 | 1反 | |
| 眼帯 | 30 | |
| 絆創膏 | | |
| 紙、救急、ヤール | 20.13.16. | |
| 体温計 | 15本 | |
| ハサミ | 4本 | |
| ピンセット | 4本 | |
| 救急箱 | 3ケ | |
| 血圧計 | 1ケ | |

# 装備について

京極紘一

## 1 基本

カンジェラルワの山容について、大阪市立大学隊沢田氏、大阪岳連隊阿部隊長（ツオルポカン）、吉永氏に、アドバイスや、写真などの提供をいただいたが、上半部の氷雪の部分しか判明しなかった。しかし、下半部は前尾根に遮られて不明のままだとはいえ、両氏のアドバイス等から岩の部分が多いと判断して装備の計画を組み立てた。

また、気象についても、各隊のプレ・モンスーン期のデーターから、キャラバン中は最低－5℃、B. C付近では最低－10℃、高所については最高－5℃から最低－20℃（平均－10℃）と考えられ、高所だけ取り上げても北海道の冬山の気温と大差なくこの時期のヒマラヤの湿度も50％以下であり、雪は乾燥していて扱いやすいことなどから、特別な装備を用意することなく、北海道の冬山の延長と考え、現在使っている装備をそのままヒマラヤに持ち込むこととした。

さらに、ライト・エクスペディションを前提に現地で手に入るものはなるべく現地で調達することとし、カトマンズにあるHAJのデポも最大限に利用することで、日本から持ち出す量を極力おさえることとした。

## 2 装備の短評

(1) 露営用具

冬テントは、移動しないので内張縫い付けとしたが快適で良かった。ただし高所用のベンチレーターは、直径15cmしか取らなかったので換気が多少悪かったようである。多少の寒さより酸素不足による睡眠不足の方が行動に影響が出ることを考えると、ベンチレーターを大きくする必要がある。

**キャラバン中のテント**は夏用テントとし耐気候性を考慮してビニロンを用いた。底付の5人用を3人で使用したので、ゆとりがあり丈夫で扱いやすかった。

大シートはビニロンの5m×6mのものを2枚持ったが、キャラバン中は食事時のシートや雨の時のポーター用テントに、B. Cでは食堂や倉庫のテントなど多種多様に使用でき重宝であった。

**ローソク**は隊員はあまり使用しないが、コックが暗いうちから活動していたので、その分だけを考えれば良いように思う。かなり残った。その他にインド製の加圧式石油ランプを1個持ったが、明るくて非常に好評で、もう1個あってもよかった。

**その他、テント・シューズ**を用意したが各テントで重宝した。

テントブラシとして日本でも冬山によく使用している亀の子タワシを持参したが、降雪がなかったので、雪おとしのためには使用しなかった。そのかわり、キャラバン中はテントの中をきれいにするため、ホウキがわりに使用して重宝であった。

工具はペンチ、ドライバーなどを4セット持参し、各キャンプに配置しておいた。ちょっとした修理に手軽に使えてこれも便利であった。接着用ボンドは各種の修理に使え、ネパールでは良質なものが入手しにくいので、いろいろな用途のため多目に持参しておくとよいであろう。

(2) 炊事用具

高所キャンプ（$C_3$、$C_4$）での炊事は、面倒な手間を省くため、簡単な操作で扱えるプロパンガス・ストーブを使用したが、音が無く張り合いの無い感じはするが好評だったし、石油の消費量と比較すると大差ないが軽くてよい。

石油ストーブは、インド製のものを使用したが（B・C、$C_1$および、$C_2$）、缶ケースを値切ったので段ボール箱に変り、そのために荷上時や輸送時の保護が弱く、故障の原因となった。一般に火力は良いが、高所に行くと不完全燃焼するものが多い。

コッヘルは通常のものを使ったが、乾燥食品を主体とした食糧だったのでこれでよかったが、カトマンズで売っている鍋でも充分であろう。

また食器が1人に2組しか用意しなかったので、各テントで不足した。3組あるいはそれ以上あると楽である。

テルモスはHAJの デポ品でインド製を使用したが、保温力が無くまったく用をなさなかった。

(3) 登攀用具

これは全部、日本から持って行った。

まず、フイックス用ロープは、8㎜と6㎜をそれぞれ1000 m（50 mに切断して）ずつ用意した。8㎜は下部の岩を、6㎜は上部の氷雪を想定して用意したのだが、岩場は1000 m全部、氷雪は600 mと理想的であった。ただし、他の遠征隊は安価な漁網用、荷物用のロープで充分間にあっていたのだから、登攀用ナイロンのフイックス用ロープはちょっともったいないようであった。

ロック・ハーケン は全部使用。アイス・ハーケンは10本ほどしか使用せず、スクリュー・ハーケンはまったく使わなかった。またスノーバーはジュラルミンのパイプ1 mを50 m間隔に1本と計算して用意した。

(4) 個人装備

道内の冬山で着用する一般の服装で充分であり、羽毛服などは無くてもよかったし、ウィンド・ヤッケとセーターの組合せで間に合う。オーバー・シューズ、ロング・スパッツもスタンダードのものだし、これらは岩稜ではロング・スパッツ、上部氷壁ではオーバー・シューズと使い分けて活用することができた。登山靴はシングル、ダブルとまちまちであったが、シングルでも充分のようである。ただし靴クリームが全部で小缶5個とはあまりにも不足であり、大缶で用意する必要がある。

キャラバン中は各自トレーニングウェアを着用し、中国製の運動靴をカトマンズで購入して履いて通したが、往復のキャラバンにも耐える丈夫なものであった。夜は少し冷え、セーターが必要である。

(5) その他

トランシーバーはソニーの500mw の出力のものを使った。2チャンネル方式で強力であり、B・CとC2の間にピークがあり、それを越えて交信できたのであるから大変よかった。チャンネルを切り変えることにより混信をさけられた。

さらに、トランシーバー・ ケースをカイロ入で作ったが、カイロは1度も使わず。電池も登攀中に1回入れ替えただけである。交信は朝昼晩の1日3回。

ヘッド・ランプ用の電池は大量に残った。これは、夜遅くまで起きていることが無かったことによるもので、暗くなるともう寝ていたことによる。また、テープ・レコー ダ付ラジオは、ラジオとしての機能よりも、テープを聞く方が多かったので、電池の消耗は激しく、多く用意する必要があった。これは、日本のミュージックなどを聞くことによりストレス解消にもなることからである。

マッチは、タバコの関係から、1人1日に1箱と計算したが、使いすての安価なライターを使うことにより多量に残った。

なお、装備一覧表は別表1のとおりである。

## 3　シェルパの装備

シェルパの装備については全部支給することで検討したが、一番のトラブルの元になることでもあり、私達が入手した情報では、シェルパ自身が良い装備を持っていることから、借用する予定でいた。日用雑貨及び一部の装備を支給することで、1人200Rs(入手した資料から)を予定したが、実際には1人2000Rsで、すっかり予算が狂ってしまった。

シェルパが持参した装備をチェックしたが、私達のものと同じくらいか中には良いものもあり、私達が用意しなかったユマールまで持って来るなど問題はなく、装備に関するトラブルは一切なかった。

シェルパ支給品一覧は別表2のとおりである。

## 4　現地(カトマンズ)購入品

現地で購入したのは、石油と炊事用具が大半である。ネパールでは、カトマンズ以外ではほとんど手に入れることができないか、またあっても非常に高いものであり期待できないことから、全部カトマンズで購入した。

炊事用具、日用雑貨は、ほとんどの品が揃う。製品はインド製が多いが、中国製も出廻っていてこちらの方が丈夫で良質である。

現地購入品一覧は別表3のとおりである。

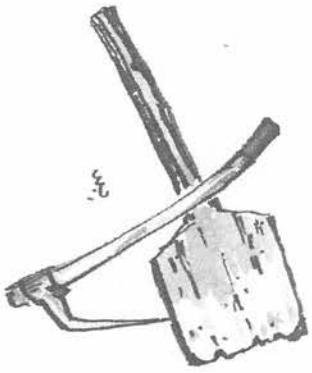
## 5　HAJデポ品

HAJのカトマンズデポを最大限に利用する方針で計画が進められ、HAJもこの時期の貸出を中止して私達の遠征に備えてくれた。

HAJのトレッキング・パーティから、私達が出発する3カ月前のデポの実質品名および数を確認して現地に行ったが、デポしてあったランジャン氏の事務所が移転したのに伴い、バラバラになっていたり他の遠征隊のデポと混同していたりして、整理に手間どった。

カトマンズ・デポがあることにより、私達のような小遠征隊は経費や輸送の面からも楽であり、今後、整備して使いやすくしていくべきであろう。

デポ品一覧は別表4のとおりである。



別表1　装備表（現地購入品を含む。）

(1) 露営用具

| 品　名 | 数量 | 規　格 | 短　評 |
|---|---|---|---|
| 夏用テント | 3 | ◦5人用ビニロン底付 | ◦キャラバン中とB・C、$C_1$に使用<br>◦5人用を3人で使ったので快適 |
| 冬用テント | 1 | ◦4人用ナイロン内張縫付<br>◦グラスフレーム・オレンジ | ◦$C_4$・ベンチレーター$\phi$15cmは小さい30cm必要 |
| 〃 | 2 | ◦　〃　〃 | ◦$C_3$ |
| 〃 | 1 | ◦3人用ナイロン内張縫付 | |
| 〃 | 1 | ◦6人用内張縫付、竹フレーム | ◦$C_1$、デポ品。内張がボロボロで不快 |
| 夏用テント | 1 | ◦2人用底付アルペン型 | ◦リエゾン用 |
| ツエルト | 1 | ◦4人用ナイロン　オレンヂ | ◦使用しなかった。 |
| 大シート | 2 | ◦ビニロン　5m×6m | ◦キッチン用、倉庫に。キャラバン中はシートに、ポーター用大幕など多用 |
| スコップ | 3 | ◦ジュラルミン | ◦$C_4$で、雪を除く程度に使ったのみ |
| テントシューズ | 5 | ◦ナイロン、底にアザラシ張 | ◦各テントに配置。綿など入れて保温する必要あり |
| のこ | 3 | ◦薪切のこ | ◦使用せず |
| 石油ランプ | 1 | ◦インド製、加圧式 | ◦明るくてよい　B・C |
| テントブラシ | 6 | ◦タワシ | ◦降雪がなかったので使用せず<br>◦キャラバン中は、テント内のホウキがわりに使用 |
| 工具 | 4 | ◦ストーブ交換品<br>◦ペンチ、ドライバー、ボンド、布地 | ◦各キャンプに配置 |

(2) 炊事用品

| | | | |
|---|---|---|---|
| ガスストーブ | 2 | ◦円形平型$\phi$15cm | ◦音が無く張合いがないが扱いやすく、火力は石油と同程度 |
| プロパンボンベ | 4 | ◦2kg入、軽合金 | ◦$C_3$、$C_4$で使用（3本消化） |
| 石油ストーブ | 7 | ◦スペア×1、インド製×6 | ◦インド製を$C_3$で使うも、目や咽が痛くなったため、ガスのみ使用 |
| 石油 | 160ℓ | ◦カトマンズで購入 | ◦$C_2$は、スペア使用<br>◦$C_1$、B・C、キャラバン中はインド製でも良。ただ、衝撃に弱く破損しやすい。 |
| 石油ポンプ | 3 | | ◦必要 |
| スイスメタ | 20ケース | | ◦ストーブの点火用、多すぎた。 |

| 品名 | 数量 | 規格 | 短評 |
|---|---|---|---|
| 石油タンク | 8 | ・20ℓ入ポリタンク | ・日本から持って行ったが、パッキングの悪いのがあり、自転車のチューブを買って来て作って間に合せた。 |
| コッヘル | 3組 | | ・$C_2$、$C_3$、$C_4$に各1 |
| 大なべ | 2 | ・φ50cm | ・湯専用、B・C、$C_1$、キャラバン中使用 |
| 中なべ | 2 | ・φ40cm | |
| 小なべ | 4 | ・φ30cm | ・B・C、$C_1$、キャラバン中使用 |
| 高圧釜 | 1 | ・インド製 | ・$C_1$とキャラバンで使用 |
| 包丁 | 2 | | |
| ククリ | 1 | ・ネパール製 | ・肉をバラすのに便利、ナタにもなる万能 |
| やかん | 1 | ・5ℓ | ・お茶用 |
| ポリバケツ | 2 | ・水汲用 | ・現地購入であるが良 |
| テルモス | 3 | ・0.5ℓ入 | ・保温力ゼロ、デポ品 |
| ポリタン | 1 | ・4ℓ | ・石油用 |
| 〃 | 4 | ・2ℓ | ・調味料用 |
| 〃 | 2 | ・10ℓ | ・食用油用 |
| 水筒 | 3 | ・アルミ製 | ・飲料用 |
| カップ | 12 | ・アルマイト | ・モーニングティ用 |
| 皿 | 12 | ・ホーロー | ・登攀中は、不足した。もっと多く用意する必要あり |
| 深皿 | 12 | ・〃 | |
| 食器 | 12 | ・ハイゼックス | |
| 茶こし | 4 | | |
| 皮むき | 1 | | ・コックの必需品 |
| フライパン | 2 | | ・プリを作るのに必要 |
| へら | 2 | | |
| ボール | 1 | | |
| スプーン | 12 | | |
| フォーク | 12 | | |
| 袋バケツ | 1 | | ・使用せず |
| 計量カップ | 2 | | ・コックの必需品 |
| テーブルクロス | 1 | ・ビニール　青の花もよう | ・B・Cで使用、気分的に良い |

### (3) 登攀用具

| 品　名 | 数量 | 規　格 | 短　評 |
|---|---|---|---|
| メインロープ | 4 | 9㎜×４０ｍナイロン、ドイツ製 | ・充分であった。 |
| フイックスロープ | 20 | 8㎜×５０ｍナイロン | ・岩稜用 } 漁業用、荷物用の安価なもの |
| 〃 | 18 | 6㎜×５０ｍ　〃 | ・氷雪用 } で良いと思う。 |
| 予備ロープ | 1 | １０㎜×４０ｍナイロン編 | ・使用せず |
| アブミ | 2組 | 3段 | ・使用せず |
| カラビナ | 70 | 軽合金 | ・多すぎた、４０程度で充分 |
| アイスハーケン | 30 | アングル・Ｖ字・スクリュー | ・スクリューは使用せず |
| ロック 〃 | 20 | サウンド・縦・横・木の葉 | ・全部使用 |
| ボルト | 5 | | ・$C_1$ の先の下降に１本使用 |
| ジャンピング | 1 | | |
| スノーバー | 26 | ジュラルミンパイプ１ｍ×２０ | ・完全に埋め込まないと途中から折れる |
| | | Ｖ字６０㎝×６ | ・$C_4$ の氷壁で威力を発揮 |
| アイスメス | 1 | | ・使用せず |
| アイスバイル | 2 | | ・ピッケルの予備も兼ねる。 |
| アイスハンマー | 2 | | |
| ピッケル | 6 | シャルレ×２、門田×２ | |
| | | エバニュー×１、シモン×１ | |
| アイゼン | 6 | １２本爪（出歯） | ・バント固定　扱いやすかった。 |
| 背負子 | 8 | 軽合金パイプ　イギリス製 | ・荒く使うと破損しやすい |
| 安全バンド | 8 | | ・胸と腰　各自まちまち使用 |
| ルート旗 | 100 | 赤のナイロン地　３０×３０㎝ | ・竹は、キャラバン中に入手 |
| 背負子バンド | 8 | 自転車用荷物バンド | ・良かった |

### (4) 個人装備

| | | | |
|---|---|---|---|
| 高所服（上下） | 6 | ・ナイロン、羽毛 | ・あまり使用しなかった。無くてもよい |
| ウインドヤッケ | 6 | ・ナイロンダブル | ・アタックの日に使用 |
| オーバーズボン | 6 | ・ナイロンダブル | |
| カッターシャツ | 6 | | |
| セーター | 6 | | |
| 下着 | 6 | ・ウール | |
| 靴下 | 45 | | |
| 手袋 | 27 | ・毛　５本指 | |
| オーバー手袋 | 24 | ・ナイロン | |
| 目出帽 | 15 | | |
| エアーマット | 6 | ・半身用 | |
| マットレス | 11 | ・全身用 | |
| シュラフザック | 13 | ・羽毛 | |
| シュラフカバー | 17 | ・ビニロン | |

| 品　名 | 数量 | 規　格 | 短　評 |
|---|---|---|---|
| ゴーグル | 24 | ◦鼻カバー付 | |
| 登山靴 | 6 | ◦ダブル×5、シングル×1 | |
| オーバーシューズ | 18 | ●ナイロン | |
| サブザック | 6 | ◦ナイロン | |
| ロングスパッツ | 18 | ●ナイロン | |
| ストッキング | 18 | | |
| サングラス | 11 | | |
| ベルト | 6 | | |
| ジャンパー | 6 | ●ナイロン | ◦HAJ支給、マーク入り |
| 軍手 | 45 | | |
| ナイフ | 6 | ●五徳ナイフ | ●シェルパの分も用意する必要あり |
| タオル | 28 | | |
| 日本てぬぐい | 6 | | |
| 磁石 | 6 | | |
| ヘッドランプ | 15 | | ◦コードが断線しやすい |
| 折たたみ傘 | 6 | | |
| トレーニングウェア | 6 | | |
| ニッカズボン | 6 | | |

### (5) その他

| | | | |
|---|---|---|---|
| トランシーバー | 4 | SONY 500 mw　2チャンネル | ◦ピークの蔭になっても交信でき、片手で扱えるので良い |
| ラジオ | 1 | テープレコーダー付 | ◦テープレコーダーとして多く使用 |
| 温度計 | 4 | 最高最低×1、普通×3 | |
| 乾電池 | 380 | 単1×200、単2×20、単3×160 | ●シェルパに電池は燃やさないよう注意すること。<br>◦単2、単3はアルカリ、単1はヘッドランプ<br>●単2はラジオ、単3は、トランシーバーに使用 |
| 事務用品 | ソロバン×1、大学ノート×10、スケッチブック×2、マジックインキ×10、サインペン×20、セロテープ×2、カーボン紙、ホッチキス、消ゴム、輪ゴム、ものさし、鉛筆×60、赤鉛筆×5 | | |
| 通信用品 | 1 | 便せん、封筒、ハガキ | ●手紙魔(?)がいたので不足した |
| ガムテープ | 10 | カトマンズに5個デポ | ●再梱包に必要、用途多い |
| ハサミ | 1 | | ●事務用として持ったが、主として散髪に使用 |
| トランク | 1 | ジュラルミン | ●金庫として使用 |
| カギ | 30 | | ◦使用せず、ジュムラで売却 |
| 番号札 | 1セット | (1番 ～ 40番) | ●荷物が多くなって不足、他隊から100枚もらったので間に合った。 |

| 品　名 | 数量 | 規　格 | 短　評 |
|---|---|---|---|
| キャンバスバック | 40 | ビニロン（50×30×100cm） | ・購入した食糧を入れるのに多く使用された |
| 整理袋 | 180 | ナイロン　大60、中120 | ・小間物の整理、食糧の袋に重宝 |
| 洗たくバサミ | 20 | | ・テント内で使用、便利 |
| マッチ | 400個 | 4～8個づつビニール真空パック | ・ライター使用のためあまった |
| クレンザー | 5 | 1kg | ・現地でも売っている |
| ゲーム類 | | トランプ、花札、ダイス、等 | ・必要、特にシェルパは喜ぶ |
| 双眼鏡 | 1 | 20倍 | |
| バネ計り | 2 | 50kg、25kg | |
| 靴クリーム | 5 | 小缶 | ・少なすぎた |
| チリ紙 | 16 | 1000枚入り | ・多すぎた |
| 大工道具 | 1 | 釘、針金、ハンマー、ペンチ | ・食堂テントの骨組を作るのに役立った |
| ガスライター | 20 | 100円の使いすて | ・大変良かった |
| 歌集 | 2 | | |
| こいのぼり | 1 | 30cm | ・小さすぎる |
| わりばし | 100 | | ・めん類はやはりハシの方が気分がでる |
| ハーモニカ | 2 | | |
| 歯みがき粉 | 7 | | ・共同使用 |

## 別表2　シェルパ支給品一覧表

| 品　名 | 数 | 品　名 | 数 | 品　名 | 数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 安全バンド | 1 | マットレス | 1 | 軍手 | 3 |
| ゴーグル | 1 | シュラフカバー | 1 | タオル | 2 |
| 靴下（厚手） | 2 | オーバーシューズ | 1 | 石けん | 1 |
| 〃（薄手） | 1 | スパッツ | 1 | ヘッドランプ | 1 |
| 手袋 | 2 | 日焼止クリーム | 3 | ライター | 1 |
| オーバー手袋 | 1 | サングラス | 1 | マッチ | 若干 |
| 目出帽 | 1 | ストッキング | 2 | | |

## 別表3　現地（カトマンズ）購入品一覧表

| 品　名 | (Rs)単価 | 数量 | 備　考 | 品　名 | (Rs)単価 | 数量 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 石油ストーブ | 64 | 2 | インド製 | タバコ | 0.34 | 250箱 | ポーター用20本入 |
| 圧力釜 | 500 | 1 | 〃 | スプーン | 3 | 12 | |
| なべ | 13.3 | 4 | φ 20～30 cm | フォーク | 2 | 12 | |
| 包丁 | 5 | 1 | | ククリ | 15 | 1 | ジュムラ購入 |
| ポリバケツ | 15 | 2 | | ボール | 19 | 1 | |
| 石油ランプ | 175 | 1 | インド製加圧式 | かわむき | 1.5 | 1 | |
| クレンザー | 1 | 5 | 固型 | チャパティ棒・板 | 5 | 1 | 必需品 |
| ネパール国旗 | 11.5 | 2 | | 粉末洗剤 | 2.5 | 1 | |
| 運動靴 | 16 | 24 | キャラバン用、中国製 | ポリタン(10ℓ) | 18 | 2 | 食用油用 |
| 皿 | 2.5 | 12 | ホーロー | 運動靴 | 8 | 40 | ポーター使用せず |
| 深皿 | 2 | 12 | 〃 | 石油 | 1.27 | 154ℓ | |
| ローソク | 2.5 | 25 | 臭くて良くない | 茶こし | 6 | 1 | |
| しゃもじ | 4 | 1 | | | | | |

## 別表4　HAJデポ使用品一覧表

| 品　名 | 数量 | 備　考 | 品　名 | 数量 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|
| バネばかり | 2 | 50 kg、25 kg | 茶こし | 4 | |
| カップ | 24 | | しゃもじ | 3 | |
| 石油コンロ | 3 | スペア×1、インド×2 | へら | 2 | |
| 大なべ | 2 | φ 50 cm | フライパン | 2 | |
| 中なべ | 2 | φ 35 cm | ブラシ | 1 | |
| マットレス | 2 | | 冬テント(4人用) | 2 | |
| テルモス | 3 | 保温力ゼロ | 〃 (6人用) | 1 | 古いので処分<br>替りのテントを置く |
| ジョウゴ | 3 | | ゼルブスト | 1 | |
| やかん | 1 | | 包丁 | 1 | あまり切れない |
| ポリタン | 5 | 2ℓ×4、4ℓ×1 | 石油ポンプ | 1 | |
| 水筒（鉄） | 3 | 1ℓ | 袋バケツ | 1 | |
| 食器 | 12 | ハイゼックス | ザイル（40m） | 1 | 使用せず |

# 食糧について

野村信昭

## 1 食糧計画を作成するにあたって

(1) 基本的考え

普段の山行で私達が使用している献立を主とし、これまでのヒマラヤ遠征による各隊の報告に基づき、嗜好の相違を検討した。また隊員相互の嗜好についても調査をした。

イ) 食べ易さに重点を置き、カロリーについてはあまり考えない。

ロ) 食糧の軽量化をはかる。

ハ) 現地食を積極的に利用する。

ニ) 主食、副食、調味料を含め1人1日の重量は800−900gとする。

(2) 献立について

キャラバン食、B・C食、上部キャンプ食、アタックキャンプ食の4種類を作った。

キャラバン食、B・C食は米、小麦粉を主体とし満足感を得られるように、上部キャンプについては、α米、乾燥食品、インスタント食品を中心とし、軽量化および調理の簡素化に重点を置いた。

以上のような基本的考えに立って計画を進め軽量化をはかったが、西ネパールの特殊性、食糧事情がきわめて悪いことから、日本からの持出食料は予定外に多くなった。

## 2 計画と実際

(1) キャラバン食(往路)

調味料と副食品を日本から持出し、米はジュムラおよびキャラバン途中の村々では購入不可能なので、カトマンズで一括購入した。計画では、1日3食であったが、カトマンズで急きょ現地の習慣に合せ2食に変更した。これについては、国内での勉強不足によるものであった。私達は昼食を軽く済ませるが、現地住民は朝昼兼用食(彼らには朝メシ?)と晩飯の2食をじっくり時間をかけて食べる習慣を忘れていた。シェルパは私達に合わすが、ポーター連中はそれができないからだ。隊員とシェルパは、朝、出発前に紅茶とビスケットを朝食代りに食べた。

朝昼兼用食はプリというチャパティーを油で揚げたものを常食とし、その他2回ほどカトマンズで購入した干ウドンを食べた。麺はまずかったにもかかわらず、隊員の食欲は旺盛であった。満腹感を得るだけ食べさせなければ志気に影響するので、毎日満腹になるまで食べるように配慮した。

米は夕食にのみ使用した。米はカトマンズで購入したものだが、安い米はねばりがあって日本米に近く、高い米はパサパサでねばりがないとのことだ。これはネパール人は現在でもスプーンを使用せず手で食べる習慣があるからであろうか。

米は1食分として150g、粉類は100g使用し、日本で私達が食べるのと比べると1回の量が相当多かった。

キャラバン中は、米、生野菜はまったく購入できなかったが、ジャガイモは豊富であったし、パパロピー(青くさい粉)、ツァンパ(麦コウセン)、山羊、ニワトリ、卵、ミルク(ヤクの乳)等の購入はできた。

(2) キャラバン食（帰路）

基本的には、B・C 食、上部キャンプ食の残った分を充当する計画であり、登山期間が計画を上回った場合を想定し、往路と同じような食糧を１０日分用意した。

登山期間が予想外に短かかったので食糧は大幅に残り、帰路の食糧は不自由しなかったばかりか、ジュムラでは余った食糧をポーターに与えた（主に米類）。

(3) 現地購入食糧

往路では、ワラビがあちこちで採れ、みそ汁に入れて食べた。ネパール人は、ワラビを食べることはないとシェルパは言っていた。

テプリコット村のキャンプ・サイトには、ニラが密生していたため、隊長以下全員で採取じ油いためや、卵とじにして１週間ほど食べた。

帰路のカグマラ峠を下った河原では、スイセンに似た植物の葉を採取して食べた。ニラと同様に調理したが、甘みがあり美味しかった。この植物は、ポーターのひとりがこの草は食べれると、シェルパを通じて私に教えてくれたのでわかったのだが、この植物についてもシェルパは食べたことがないと言い、ポーター達は食べなかったので、どこかの遠征隊が食用にしたのをポーターが覚えていたのであろうか？　後で調べてみたところ、この甘い葉は、ネパールに自生するヒマラヤ蘭の１種であるようだ。

モンスーンが近くなり、種々の雑草が繁るころ、イラクサをシェルパが採ってきて調理していた。まず、溶けるくらい煮て、水でとかした小麦粉を加え塩で味付する。緑色をしたゾル状の物だが、食べると塩味が効いてとってもうまい。

タマネギはどこの村でも購入することができず、ジャガイモはどこの村でも 10～20 kg 程度ならいつでも買えるようであった。

チャウルコットで買った山羊の処理については以下のようにおこなわれ興味深かった。

ポーターのひとりが、ククリで山羊の首を落とす。首を落とした役得として、毛皮が与えられていた。シェルパはニワトリをつぶした時も、首をはねるのは、ポーターにさせていた。血はボールに溜め、翌日まで凝固させてから軽くボイルして、調味料を加えて食べていた。内臓のうち、腸はポーターに与え、心臓、肺、肝臓はシェルパが調理して食べていた。

肺を食べるというので、コックに付きっきりで見ていると、肺の出口を肉片で栓をし、次に麦粉を水でとかし肺の中にまんべんなく注入して入口を肉片で栓をする。次にボイルしてからスライスする。次に油で炒め、しょう油、塩、コショー、トウガラシで味付けする。私も食べたが結構美味しかった。肉は焼いたりして充分食べたが、キャラバン中何の包装もしないで運んでも腐敗しなかった。これは空気が乾燥しているためであろうか。

頭部は毛を焚火で焼いた後、ボイルして皮をはぎ、頭骨を割って脳ミソを食べると言っていたが、その現場は見ることができなかった。

蹄の部分はポーターが焚火で焼いて食べている。

なお、薬剤を投与した代償として現地住民からのプレゼントの卵、ジャガイモ、カブ、大根が相当量あり、食卓をにぎわせてくれた。

(4) B・C食

１日３食とし、昼食は１人１食用レーションを採用し、行動範囲を広げるようにした。キャラバン途中で、B・C用の米の一部を購入する予定であったが、購入不能であったため、アタ、マイタ、パパロピーを購入し代用とした。

計画では、朝、晩米を主食としていたが、米の絶対量が不足していたので、朝食は時どきプリを食べた。B・Cに残っていたリエゾンとキッチンボーイの２人は、登山期間中、朝晩パパロピーを食べて私達の食糧計画の狂いの調整に協力してくれた。

B・Cはブンモ村に近かったため、肉、卵、ジャガイモ、ミルク、ロキシー等を売りに来

たので、予想外にB・C食はうるおった。これはB・Cが当初予定地よりもプンモ村に近いところに建設されたためでもある。B・Cスペシャル食は、休養に下った際、大いに利用した。

(5) 上部キャンプ食とアタックキャンプ食

軽量化と調理の簡便を計るため乾燥食品や、インスタント食品を主体とした。朝晩はもちろんのこと、行動中に食べねばならないため、昼のレーションは飽きがこないように多品目を少量ずつパックした。

米(白米)は、2人で1包とした。隊員達は副食と併せて適量であったが、シェルパ達は量不足であるのか、エベレストの場合は1人で2包当ったと言い出したので、隊員達は務めてシェルパに多く与えた。また、各キャンプにツァンパを上げていたのでトラブルは生じなかった。ツァンパは紅茶の中に入れて食べると腹もちが良い。

アタック・キャンプ食については食べ易い物を多品目揃えたが、高度の影響か予定量を消化できなかった。

乾燥食品のうち野菜類はジフィーズを使用した。仕様にしたがい調理したが、ジャガイモだけは戻すのに表示より長く、時間にして30分ほど水にひたさねばならなかった。他の食品は表示の仕様どおりであった。

## 3 その他

(1) パッキングと使用結果

上部キャンプ食、B.C食のレーションは、基本的に3人・3食／1日のパックで作った。塩辛、つくだ煮は60g、ジャムは70gの重量でポリエチレン袋詰を行った。塩辛は大半が破損していたが、充分食べることができ、味もほとんど変化はなかった。他については、完全な姿であり破損したのは、ごく一部であった。

ハチミツについては、一般に市販されていないが、30gパックのものを特別に依頼し購入した。

海苔のつくだ煮とつけ物は市販の真空パックのものを利用したが、破損や腐敗等がなく有効であり、私達のような小パーティには非常に便利であった。

ベーコン・鯨

市販の500g程度のブロックのまま真空パックされたものを使用したが、まったく完全な製品のままであった。B.Cにてスライスして上部キャンプへ荷揚した分については、4－5日ほどで味が落ちてきた。ブロックのまま荷揚をすると良かったのではないかと思う。

ベーコン・豚

特注で製造したもので、濃い塩水に浸した後、温風乾燥したものである。市販のベーコンに比べると、薫煙加工工程を除いた品物である。薫煙加工してあるものはにおいが鼻について食欲が湧かないとの、他の遠征報告によったからである。

ブロックのまま、真空パックをせず、晒布に巻いたまま輸送した。表面にカビが生えていたが腐敗はせず、カビをふき取って食べたが充分に使用できた。鯨、豚ベーコン共に腐敗した部分は廃棄処分する予定であったが、腐敗せずに利用できた。

(2) チクロの使用

日本では既に使用禁止となっていたが、主にキャラバンで使用するためにチクロを入手した。チクロ2kgで砂糖60kg分の重量を減らせた。これは砂糖の持つ効能よりも財政事情からの軽量化に重点をおかざるを得なかったからである。

現地でコックに、ジャパニーズ・シュガーはネパリー・シュガーより3倍甘いと教え込み、主にキャラバンで利用させた。

(3) ミルク・ティーについて

ネパールでは、ティーと言ったらミルク・ティーであるが、私達はミルク・ティーのこと

などまったく考えていなかった。

カトマンズで食糧購入後、ミルクを買わないのか？　とコックから注文がでて、シェルパ全員が、ミルクを買ってくれともうし入れてきた。私達は総体重量が予定量をオーバーしたので断り続けたが、シェルパ達は執ようにもうし出る。結局、バラ・サーブ命令でミルクは買わない、ただし、キャラバン途中で売っていたら買うと言う条件でシェルパを納得させた。このことで2日間ももめていた。

キャラバン中、数回ヤクのミルクを買い、ミルクティーを飲んだ。飲んでみると意外と美味であった。登山活動に入ると、昼レーションの3種の内の1つにコンデンスミルク小が1缶入っていたが、シェルパ達は行動中飲まないで、キャンプに戻ってから紅茶に入れ、ミルク・ティーを作り飲んでいた。

隊員も $C_2$ 以上ではコンデンス・ミルク を残してミルク・ティーを飲むようになった。

(4)　コックの指導

生水は衛生管理上絶体にキャラバン中飲まないと決めているので、飲料水は一度煮沸させてから水筒に詰めるよう指導すると、コックは「ジャパンは、いつもボイリング・ウォーターを飲む」といってすぐ理解してくれた。夕食後、毎日隊員分の1ℓ用水筒にお湯が運ばれてきた。

調理について

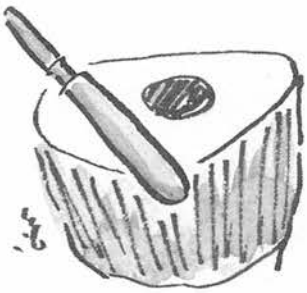
初めは、メニューを教えて任せておいたら教えたメニューとは関係ない料理を作った。「メニュー以外の料理をだれが作れと言った」とコックに問うと、「シェルパ達が食べたいと言ったので作った」といったので、シェルパ全員とリエゾンの前でコックに怒鳴りつけた。「私の言ったとおりのことをしろ私達は食糧をすべて計算して持って来ているんだ」と。

この1件の後は、使用する材料や分量もすべて聞きにくるようになった。また、私達も初めてのメニューの場合は必ず隊員が一緒に作ってシェルパに教え込んだ。

## 4　最後に

今度の食糧計画と実際は全般的に、まあまあのできと思う。ネパールの習慣を忘れ、現地に行ってあわてたこともあったが、それも遠征の一部であると考えている。

食当としては出発前の準備、現地での購入、パッキング、B．Cについてからの食糧の振り分けetc、繁雑な用務であったが顧りみて、一番辛かったことはコックと帰りのキャラバンを終えるまで親しくなれなかったことだった。それは、キャラバン出発前のジュムラで、彼らが勝手に調理したことで、私が遠征の今後のこともあろうと意識的に怒鳴ったのが原因していると思うが、一番仲良くやって行かねばならなかったコックが、最後まで私に対しよそよそしい態度であった。だが遠征が終る頃には仲良くなれてホッとした次第である。



# 現　地　購　入　食　糧

| 品　名 | 購入地名 | 単　価 | 購入量 | 時期 | 販売単位 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 米 | カトマンズ | 2.27Rs／kg | 364Rs／160kg | 3月 | マナ | 1マナ=560cc=3.1合 |
| 〃 | ジュムラ | 3.50Rs／マナ | 10Rs／3マナ | 〃 | 〃 | 粗悪品 |
| 〃 | 〃 | 4Rs／マナ | 20Rs／5マナ | 〃 | 〃 | |
| 〃 | 〃 | 3.50Rs／マナ | 105Rs／30マナ | 〃 | 〃 | 14kg |
| マイタ | カトマンズ | | | 〃 | 〃 | |
| 〃 | ジュムラ | 1Rs／kg | 18Rs／18kg | 〃 | 〃 | |
| 〃 | 〃 | 3Rs／300g | 60Rs／6kg | | カップ | 1カップ=3Rs=300g |
| アタ | カトマンズ | | | | | |
| 〃 | プンモ | 6Rs／kg | 15Rs／2.5kg | 4月 | | |
| パパロピー | 〃 | 5.33Rs／kg | 80Rs／15kg | 〃 | | |
| ツァンパ | 〃 | 7.20Rs／kg | 90Rs／12.5kg | 〃 | | 美味 |
| 〃 | 〃 | | 5Rs／0.6kg | 〃 | | |
| ダル(スープ用豆) | カトマンズ | 3.16Rs／kg | 19Rs／6kg | 3月 | ダルニ | 1ダルニ=2.25 |
| 紅　茶 | 〃 | 10.50Rs／500g | 126Rs／6kg | 〃 | 包 | 500g=1包 |
| 砂糖(白、良質) | 〃 | 4Rs／kg | 160Rs／40kg | 〃 | Kg | 5月中旬から4,60Rs／kg |
| 干ウドン | 〃 | 2.50Rs／450g | 50Rs／9kg | 〃 | 包 | 2包／3人,450g=1包 |
| 塩(白、良質) | 〃 | 0.50Rs／250g | 20Rs／10kg | 〃 | 包 | 250g=1包 バザールで |
| 〃 | ジュムラ | 4Rs／ダルニ | | 〃 | ダルニ | マナ、kg売 岩塩 |
| パイン缶詰 | カトマンズ | 7Rs／500g | 70Rs／5kg | 〃 | 缶 | 500g 1缶／6人 |
| 食用油 | 〃 | 6.80Rs／ℓ | 136Rs／20ℓ | 〃 | マナ | サラダオイルがよい |
| ニンニク | 〃 | | | 〃 | | |
| 唐ガラシ | 〃 | | | 〃 | | |
| ナンバン | 〃 | | | 〃 | | |
| カレー粉 | 〃 | | | 〃 | | |
| ジャム | 〃 | | | 〃 | | |
| コショー | 〃 | | | 〃 | | |
| ジューソー | ジュムラ | 7Rs／500g | 7Rs／500g | 〃 | | |
| 玉　葱 | カトマンズ | | | 〃 | | |
| ジャガイモ | ジュムラ | 2.50Rs／ダルニ | 30.50Rs／12.50ダルニ | 〃 | ダルニ | |
| 〃 | ムニガオン | 〃 | 10Rs／4ダルニ | 〃 | 〃 | 良質 |
| 〃 | ルマ | 2Rs／ダルニ | 6Rs／3ダルニ | 〃 | 〃 | |
| 〃 | リヤンジ | | 6Rs／3kg | 4月 | 〃 | |
| 〃 | プンモ | | 24Rs／20kg | 〃 | 〃 | 良質 |
| 〃 | 〃 | | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 〃 | 〃 | 2.50Rs／ダルニ | 5Rs／2ダルニ | 〃 | 〃 | |
| 〃 | 〃 | | 6Rs／4kg | 〃 | 〃 | |
| 〃 | 〃 | | 20Rs／18kg | 〃 | 〃 | |
| 〃 | 〃 | 1.50Rs／1kg | 26.50Rs／26kg | 〃 | カップ | 1カップ=1kg=1.50Rs |

| 品　名 | 購入地名 | 単　価 | 購入量 | 時期 | 販売単位 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| ジャガイモ | ムニガオン | 2Rs/kg | 4Rs／ 2kg | 5月 | | |
| 〃 | ジュムラ | 3Rs/ダルニ | 6Rs／2ダルニ | 〃 | カップ | 粗悪 |
| 〃 | 〃 | 〃 | 9Rs／3ダルニ | 〃 | | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 33Rs／11ダルニ | 〃 | | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 8Rs／3ダルニ | 〃 | | |
| レモン（大） | テブリコット | 0.50Rs／ 1個 | 5.50 Rs／11個 | 3月 | 個 | 前年からの保存品 |
| カブ大根（大、小） | プンモ | | 3Rs／ 7個 | 4月 | | |
| 野菜（小松菜の様） | ジュムラ | 2Rs／ 200g | 23Rs／12束 | 5月 | 束 | 1束＝200g＝2Rs |
| 〃 〃 | 〃 | 〃 | 9. 50Rs／ 5束 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 〃 〃 | 〃 | 〃 | 4. 10Rs／ 2束 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 〃 〃 | 〃 | 〃 | 15Rs／ 8束 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 卵 | チョッタ | 0.50Rs／ 個 | 50 Rs／19個 | 3月 | 個 | 大、小にかかわらず |
| 〃 | ダーキン | 〃 | 50 Rs／ 9個 | 〃 | 〃 | |
| 〃 | テブリコット | 〃 | 2Rs／ 4個 | 〃 | 〃 | |
| 〃 | ルマ | 〃 | 14Rs／28個 | 〃 | 〃 | |
| 〃 | プンモ | 〃 | 20 Rs／40個 | 4月 | 〃 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 13 Rs／26個 | 〃 | 〃 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 11 Rs／22個 | 〃 | 〃 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 6Rs／12個 | 〃 | 〃 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 8Rs／16個 | 〃 | 〃 | |
| 〃 | リンモ | 〃 | 12 Rs／24個 | 〃 | 〃 | |
| 〃 | フリコット | 〃 | 2Rs／ 4個 | 5月 | 〃 | |
| 〃 | ジュムラ | 〃 | 10 Rs／20個 | 〃 | 〃 | |
| 山　鳥 | ムニガオン | | 20 Rs／ 羽 | 3月 | 羽 | |
| ニワトリ | プンモ | 22Rs／ 羽 | 44 Rs／ 2羽 | 4月 | 〃 | |
| 〃 | ジュムラ | 16.50Rs／ 羽 | 33 Rs／ 2羽 | 5月 | 〃 | |
| 〃 | 〃 | | 18 Rs／ 羽 | 〃 | 〃 | |
| ミルク | チョッタ | | 4Rs／ ℓ | 3月 | | |
| | ジャガイ | | 2Rs／ ℓ | 〃 | | |
| 〃 | プンモ | | 2Rs／400 cc | 4月 | | |
| 〃 | プンモ | | 2Rs／500 cc | 〃 | | |
| 〃 | 〃 | | 〃 | 5月 | | |
| 山　羊 | チャウルコット | | 180 Rs／ 頭 | 3月 | | |
| 〃 | プンモ | | 200 Rs／ 頭 | 4月 | | |
| ヤク | 〃 | 50Rs／足1本 | 50 Rs／足1本 | 〃 | | |
| 〃 | 〃 | 40Rs／ 〃 | 80 Rs／足2本 | 〃 | | |
| 缶詰（魚） | ジュムラ | 20Rs／ 缶 | 40 Rs／ 2缶 | 5月 | | |
| 砂　糖 | 〃 | 10Rs／ kg | 40 Rs／ 4 kg | 〃 | | |
| 濃縮ジュース | カトマンズ | 8Rs／680mℓ | | 〃 | 1　本 | インド製、ビン入 |

| 品　名 | 購入地 | 単　価 | 購入量 | 時期 | 販売単価 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| ビスケット（バター・クラッカー） | カトマンズ | 3.25Rs／1包 | | 5月 | 1　箱 | インド製50枚箱入 |
| 〃　〃 | 〃 | 1.5Rs／1包 | | 〃 | 1　包 | 〃　22枚入 |
| コンデンス　ミルク | 〃 | 4.25Rs／缶 | | 〃 | 1　缶 | 中国製400g入パンダミルク |
| 粉ミルク | 〃 | 1Rs／袋 | | 〃 | 1　袋 | 大スプーン　2－3杯分 |
| 砂　糖 | 〃 | 1.6Rs／1kg | | 〃 | kg | |
| オレンジ | 〃 | | | 〃 | 個 | 大1Rs<br>中70－80P）1個当<br>小50P |
| 食パン | 〃 | 15Rs／1本 | | 〃 | 本 | 日本の角食の如き |
| キューリ | 〃 | 0.65Rs／本 | | 〃 | 本 | 日本のより太くて短い |
| キャベツ | 〃 | 1.50Rs／個 | | 〃 | 個 | |
| ホウレン草 | 〃 | 0.20Rs／500g | 5束12.5kg | 〃 | 1　束 | |
| ササギ | 〃 | 1.50Rs／2kg | 2kg | 〃 | 1　山 | |
| ピーマン | 〃 | 1.50Rs／12個 | 12個 | 〃 | 〃 | |
| 人　参 | 〃 | 0.20Rs／2本 | 2本 | 〃 | | |
| 玉葱（大） | 〃 | 1Rs／10個 | 10個 | 〃 | | |
| シイタケ | 〃 | 1Rs／600g | 1袋　／　600g | 〃 | 1　袋 | |
| チャン | プンモ | | 9Rs／　7ℓ | 4月 | | |
| 〃 | リンモ | | 4Rs／　3ℓ | 〃 | | 良　質 |
| 〃 | カトマンズ | | 10Rs／7.5ℓ | 5月 | | 〃 |
| ロキシー | プンモ | 2Rs／1カップ | 84Rs／42カップ | 4月 | カップ | 1カップ＝約100cc |
| 〃 | 〃 | 〃 | 22Rs／11カップ | 〃 | 〃 | |
| 〃 | リンモ | 1.50Rs／1カップ | 18Rs／12カップ | 〃 | 〃 | 良　質 |
| 〃 | プンモ | 2Rs／1カップ | 70Rs／35カップ | 5月 | 〃 | |
| ハニーロキシー | ジュムラ | 15Rs／750cc | 15Rs／750cc | 5月 | 本 | 1本＝750cc |
| 〃 | 〃 | 〃 | 30Rs／1,500cc | 〃 | 〃 | |
| 〃 | 〃 | 20Rs／750cc | 20Rs／750 | 〃 | 〃 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| ククリラム | ジュムラ | 20Rs／750cc | 320Rs／6,000cc | 5月 | 本 | 1本＝750cc＝40Rs |
| 〃 | 〃 | 〃 | 80Rs／1,500cc | 〃 | 〃 | |
| 〃 | 〃 | 20Rs／300cc | 20Rs／300cc | 〃 | 〃 | 小　瓶 |

## キャラバン食糧表

往路キャラバン　14日／11人

| | キャラバン A | | キャラバン B | | キャラバン C | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 朝 | 米・みそ汁 | 米(1合) 150g<br>みそ汁インスタント1袋<br>ワカメ 10g<br>ジャガイモ 30<br>フレーブ 1g<br>紅茶 3g<br>チクロ 3g<br>漬物 20g | 米・みそ汁 | 米 150g<br>みそ汁インスタント1袋<br>板ふ 5g<br>フレーブ 1g<br>紅茶 3g<br>チクロ 3g<br>漬物 20g | 米・みそ汁 | 米 150g<br>みそ汁インスタント1袋<br>ダル(スープ用豆) 30g<br>フレーブ 1g<br>紅茶 3g<br>チクロ 3g<br>漬物 20g |
| 昼 | チャパティ | 小麦粉 100g<br>バター 25g<br>ジャム 50g<br>紅茶 3g<br>チクロ 3g<br>菓子 50g<br>アメ玉 10g | うどん | 干うどん 140g<br>玉葱 30g<br>肉 30g<br>乾しいたけ 5g<br>メンツユ 17g<br>ほうじ茶 3g<br>菓子 50g<br>アメ玉 10g | | |
| 夕 | 米・野菜煮込 | 米 150g<br>ジャガイモ 30g<br>玉葱 20g<br>切干大根 10g<br>バター 10g<br>醤油 30g<br>フレーブ 1g<br>漬物 20g<br>紅茶 3g<br>緑茶 3g<br>チクロ 3g<br>味の素 1g | 米・みそ汁 | 米 150g<br>玉葱 20g<br>トロロコブ 10g<br>インスタントみそ汁1袋<br>フレーブ 1g<br>味の素 1g<br>漬物 20g<br>紅茶 3g<br>ほうじ茶 3g<br>チクロ 3g | 米・肉野菜の煮込 | 米 150g<br>切干大根 10g<br>肉 30g<br>豆 30g<br>乾しいたけ 5g<br>醤油 30g<br>味の素 1g<br>フレーブ 1g<br>漬物 20g<br>紅茶 3g<br>ほうじ茶 3g<br>チクロ 3g |

**復路キャラバン　10日／11人**

| | | キャラバン A | | | キャラバン B | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 朝 | 米・みそ汁 | 米 | 150g | 米・みそ汁 | 米 | 150g |
| | | インスタントみそ汁1袋 | | | インスタントみそ汁1袋 | |
| | | ワカメ | 10g | | 板ふ | 3g |
| | | ジャガイモ | 30g | | 漬物 | 20g |
| | | 漬物 | 20g | | フレーブ | 1g |
| | | フレーブ | 1g | | 紅茶 | 3g |
| | | 紅茶 | 3g | | チクロ | 3g |
| | | チクロ | 3g | | | |
| 昼 | チャパティ | 小麦粉 | 100g | | | |
| | | バター | 25g | | | |
| | | ジャム | 50g | | | |
| | | 紅茶 | 3g | | | |
| | | 緑茶 | 3g | | | |
| | | チクロ | 3g | | | |
| | | 菓子 | 50g | | | |
| | | 肉またはソーセージ | 30g | | | |
| 夕 | 肉・野菜の煮込 | 米 | 150g | | 米 | 150g |
| | | 切干大根 | 10g | | インスタントみそ汁1袋 | |
| | | 豆 | 30g | | ワカメ | 10g |
| | | 乾しいたけ | 5g | | 玉葱 | 30g |
| | | バター | 10g | | フレーブ | 1g |
| | | 醤油 | 30g | | 紅茶 | 3g |
| | | フレーブ | 1g | | ほうじ茶 | 3g |
| | | 紅茶 | 3g | | チクロ | 3g |
| | | ほうじ茶 | 3g | | 漬物 | 20g |
| | | チクロ | 3g | | | |
| | | 漬物 | 20g | | | |

※キャラバン食については、現地にて計画を変更し昼と夕の2回としたため、この計画は大幅に変わった。
また、昼食用の〃うどん〃も現地の品物はまずいという事なので、昼はほとんど小麦粉の料理とする。

※食糧表は1人1回分のメニュー内訳である。

## ベースキャンプ及び前進キャンプ食糧表

### B・C 及び $C_1$

| | B・C A | | B・C B | | B・C C | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 朝 | おじや | 米 150g<br>乾燥玉葱 4g<br>〃 ピーマン 2g<br>お茶漬ノリ 7g<br>フレーブ 1g<br>塩 2g<br>佃煮 10g<br>漬物 20g<br>紅茶(tea bag 1/2枚) 2g<br>砂糖 50g | 味噌汁 | 米 150g<br>ジャガイモ 30g<br>ワカメ 5g<br>インスタントみそ汁 12g<br>フレーブ 2g<br>佃煮 10g<br>漬物 20g<br>紅茶( tea bag 1/2枚) 2g<br>緑茶( 〃 〃 ) 2g<br>砂糖 50g | インスタント・ラーメン | インスタント・メン 100g<br>フレーブ 2g<br>佃煮 10g<br>漬物 20g<br>紅茶( tea bag 1/2枚) 2g<br>砂糖 50g |
| 昼 | レーション | 乾パン 150g<br>乾燥果実 50g<br>サラミ・ソーセージ 60g<br>ドロップス 12g<br>甘納豆 50g | レーション | あられ 50g<br>ビスケット( 1個づつセロファンにくるんである物) 100g<br>乾燥果実 50g<br>プロセスチーズ 30g<br>鯨ベーコン 50g<br>氷砂糖 30g | 乾燥果実<br>リンゴ、パイン、アンズ、ティツ。レーズン<br>ビスケット<br>6種類でサンドイッチになっている物<br>甘納豆は50gポリ袋にパックしたが乾燥して硬くなったものが多く隊員の1人は、甘納豆をカジッテ、虫歯が割れた。 | |
| | カ | 米 150g<br>カレー・ルー 20ℓ | 米 | 米 150g<br>シチューの素 30g | チ | 米 150g<br>チャーハンの素 5g |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 夕 | レー・ライス | 乾燥玉葱 | 4g | ・シチュー | 乾燥玉葱 | 4g | ヤーハン・スープ | 乾燥玉葱 | 2g |
| | | 〃 人参 | 2g | | 〃 人参 | 2g | | 〃 ピーマン | 2g |
| | | ジャガイモ | 30g | | ジャガイモ | 30g | | 肉 | 30g |
| | | 肉 | 50g | | 肉 | 70g | | インスタント吸物 | 350g |
| | | 塩 | 3g | | 漬物 | 25g | | 紅茶( tea bag 1枚) | 4g |
| | | 漬物 | 25g | | 紅茶( tea bag 1枚) | 4g | | 緑茶( 〃 1/2枚) | 2g |
| | | 紅茶( tea bag 1枚) | 4g | | 緑茶( 〃 1/2枚) | 2g | | 砂糖 | 50g |
| | | 緑茶( 〃 1/2枚) | 2g | | 砂糖 | 50g | | 塩 | 3g |
| | | 砂糖 | 50g | | 塩 | 3g | | | |

B・C スペシャル・ボックス

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| ウイスキー(角サン) | 3 本 | 緑 茶 | 3 本 | 塩 | 2 袋 |
| インスタントメン | 20 個 | ほうじ茶 | 3 本 | 砂 糖 | 3 〃 |
| ホットケーキ・ミックス | 2 袋 | コンデンス・ミルク(大) | 2 缶 | 醤 油 | 1 ℓ |
| 南部センベイ | 2 〃 | 梅 干 | 1 包 | み そ | 6 Kg |
| 豆 菓 子 | 5 〃 | ナメコ瓶詰 | 3 瓶 | インスタント・ジュース | 2 袋 |
| カレー・ルー( 6人前) | 5 包 | 江戸ムラサキ | 2 瓶 | 紅 茶 | 1 Kg |
| コンソメ・スープ | 30 個 | 塩辛(イカ) | 2 〃 | 塩 辛 | 2 瓶 |
| クノール・スープ | 6 袋 | トロロ・コブ | 10 袋 | マッチ(大箱) | 3 箱 |
| 乾燥玉葱 | 5 〃 | 粉ワサビ | 1 缶 | 昆 布 茶 | 3 缶 |
| 〃 ピーマン | 5 〃 | 唐ガラシ | 1 瓶 | α 米 | 6 袋 |
| インスタントコーヒー | 2 瓶 | コショウー | 1 〃 | フレーブ | 2 袋 |
| 〃 ココア | 10 袋 | ポ ン 酢 | 1 〃 | 味 の 素 | 1 袋 |

Camp 2. Camp 3

| | キャンプ食 A | | キャンプ食 B | | キャンプ食 C | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 朝 | インスタントメン | インスタントメン 100g<br>チューインガム 8g | 米・みそ汁 | α米(1/2pkg) 70g<br>インスタントみそ汁1袋 12g<br>乾燥豆腐 4g<br>トロロコブ 2g<br>お茶漬のり 7g<br>ふりかけ 10g<br>チューインガム 8g | 米・お吸物 | α米(1/2pkg) 70g<br>インスタントお吸物 3.5g<br>お茶漬のり 7g<br>ふりかけ 10g<br>チューインガム 8g |
| 昼 | レーション | 乾パン 100g<br>乾燥果実 50g<br>ソフトサラミ(缶詰) 60g<br>ジャム 50g<br>コンデンスミルク1缶 100g<br>蜂密 30g<br>オボスポーツ 25g<br>アメ玉 30g | レーション | アラレ 50g<br>クラッカー 50g<br>乾燥果実 50g<br>鯨ベーコン 50g<br>蜂密 30g<br>甘納豆 50g<br>オボスポーツ 25g<br>アメ玉 30g | レーション | ビスケット 50g<br>カリントウ 50g<br>鯨ベーコン 50g<br>ジャム 50g<br>蜂密 30g<br>オボスポーツ 25g<br>アメ玉 30g |
| 夕 | 米・ポタージュ | α米 70g<br>ポタージュの素 18g<br>乾燥玉葱 4g<br>〃 ピーマン 2g<br>〃 人参 5g<br>〃 肉 15g<br>塩 5g<br>フレーブ 1g<br>紅茶(tea bag) 8g<br>緑茶( 〃 ) 4g | 米・ポテトサラダ | α米 70g<br>マッシュ・ポテト 50g<br>乾燥鶏卵 10g<br>コンビーフ 50g<br>マヨネーズ 30g<br>佃煮 20g<br>漬物 20g<br>塩 5g<br>フレーブ 1g<br>紅茶(tea bag) 8g | カレー・ライス | α米 70g<br>ビーフカレーの素(肉野菜入) 20g<br>乾燥ジャガイモ 5g<br>塩辛 20g<br>漬物 20g<br>塩 5g<br>フレーブ 1g<br>紅茶(tea bag) 8g<br>緑茶( 〃 ) 4g<br>砂糖 100g |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 漬物 | 20g | | 緑茶(　〃　) | 4g | |
| | | 砂糖 | 100g | | 砂糖 | 100g | |

## アタック・キャンプ食

| | | | |
|---|---|---|---|
| 朝 | | インスタントラーメン | 120g |
| 昼 | レーション | ビスケット | 50g |
| | | 〃　baby foods | 30g |
| | | オボスポーツ | 50g |
| | | ソフトサラミ(缶詰) | 120g |
| | | ソーセージ(缶詰) | 100g |
| | | 乾燥果実 | 50g |
| | | 氷砂糖 | 30g |
| | | コンデンスミルク | 100g |
| | | 蜂密 | 60g |
| 夕 | 味付米・みそ汁 | 味付α米 | 120g |
| | | インスタントみそ汁 | 12g |
| | | 〃　お吸物 | 4g |
| | | ノリの佃煮 | 25g |
| | | 果実缶詰 | 425g |
| | | 紅茶( tea bag) | 8g |
| | | 緑茶(　〃　) | 8g |
| | | 塩 | 5g |
| | | 砂糖 | 100g |

## Camp 2 スペシャル・ボックス

| 品　名 | 数量 | 重量 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| インスタントメン | 10 個 | 1,000g | |
| 羊かん | 3 本 | 1,290g | |
| 缶詰(さんま味付) | 2 缶 | 420 | |
| 〃 (白桃) | 2 缶 | 1,600 | 現地購入予定であったが購入できず |
| 〃 (みかん) | 2 缶 | 566 | 〃 |
| するめ | 5 枚 | 750 | |
| チューイングボン | 3 本 | 270 | |
| インスタント・コーヒー | 2 瓶 | 300 | |
| 〃　ジュース | 1 袋 | 480 | |
| コンデンス・ミルク(大) | 2 缶 | 796 | |
| 昆布茶 | 1 袋 | 100 | |
| ポン酢 | 1 瓶 | 150 | |
| 醤油(顆粒状) | 450 cc | 150 | |
| バター(缶入) | 1 缶 | 400 | 現地購入できず |
| うに塩辛 | 2 瓶 | 200 | 高値の為中止 |
| 味塩 | 1 箱 | 500 | |
| フレーブ | 1 瓶 | 80 | |
| コショー | 1 瓶 | 50 | |
| 味の素 | 1 瓶 | 90 | |
| マッチ | 5 箱 | 250 | |
| お茶漬ノリ | 6 袋 | 42 | |
| お吸物 | 5 袋 | 20 | |
| 小女子佃煮 | 3 袋 | 300 | |

# 会計報告

野村信昭

当初、総額６００万円を予定したが、食糧の寄附や装備と食糧の低価格での購入、および、隊員の航空運賃と隊荷の輸送費の割引などがあり、約５４３万円でまかなうことができた。そして、そのうち約４２万円をこの公式報告書の発行費の一部として残すことができ、ほぼ満足すべき結果であったといえる。

このことは多くの方々のご協力の賜物であったと感謝している。

収入のうち約４６０万円は隊員の個人負担金であり、１人平均７５万円となっている。

支出のうち装備費が他の隊に比較して若干少ないのは、ＨＡＪカトマンズ・デポ品を利用できたことや、個人装備は極力、隊員が通常使用しているものでまかなったからである。印刷費には計画書や帰国後すぐに発行した、カンジロバ遠征隊帰国報告書の発行費が含まれている。

現地での支出のうち、主なものはポーター費などの人件費とジュムラ――カトマンズ間のチャーターフライト代である。滞在費はエクスプレス・ハウスを利用したので比較的少なかった。

## 収支明細

| 収入 | | | 支出 | |
|---|---|---|---|---|
| 科目 | | 金額(円) | 科目 | 金額(円) |
| 隊員負担金 | | 4,617,000 | 事務費 | 40,440 |
| 寄付金 | | 683,125 | 通信費 | 56,783 |
| 雑収入 | 売却(装備,食糧) | 107,220 | 会合費 | 49,344 |
| | 預金利子 | 19,655 | 負担金及び手数料 | 330,056 |
| 計 | | 5,427,000 | 装備費 | 911,302 |
| | | | 食糧費 | 222,283 |
| | | | 交通費及び輸送料 | 1,161,891 |
| | | | 医療費 | 15,300 |
| | | | 謝礼 | 39,816 |
| | | | 印刷費 | 66,000 |
| | | | ドル買入 | 2,439,888 |
| | | | 戻入(円買入) | △331,208 |
| | | | | 2,108,680 |
| | | | 雑費 | 2,600 |
| ※残額422,505は報告書作成費用等に充当 | | | 預金雑高 | 422,505 |
| | | | 計 | 5,427,000 |

## ドル収支明細

| 収入 | | 支出 | |
|---|---|---|---|
| 科目 | 金額($) | 科目 | 金額($) |
| 買入 | 9,245 | 輸送費 | 1,777 |
| 寄付 | 10 | ルピー買入 | 6,160 |
| | | 円買入 | 1,258 |
| | | 雑費 | 60 |
| 計 | 9,255 | 計 | 9,255 |

# 留守本部雑感

阿部　淳

## (1) 送り出して・・・

雪多い北海道千歳空港から隊員を送りだしたときそれは子の長旅を見送る親の心境に似ていた。多くの懸念が心の隅を横切った。M社とのフライト交渉はうまく運ぶかという現実問題、この準備期間中なお煮詰めておくべきこと ー とくに隊や隊員の問題意識 ー はなかったかという反省、現地でのデポ品やフライトなどの現地処理はうまくいくかとか登山ルートはうまく発見できるかという取り越し苦労、それにアクシデントやトラブルがなく良いエクスペディションができるかという心配・・・・そんなことが胸中に案ずるというよりは祈る気持で往来した。見送りに来たかたがたも同じ心境であったに違いない。その懸念は終局的にはたとえばピークに立てなくとも充分に山にぶつかり事故を起こさずに帰ってきてくれ、という消極的な願いにまで圧縮されながら、遠ざかる機影を追いかけていた。そのときから私の役割は実行委員から留守番役へ変ったことを知ると共に、やっと目的である「登山」の課題がクローズアップしその結果を「待つ」にすぎない身であることを知った。

晴れやかな笑顔で飛び発った6人。いずれも精神的にも技術的にも申し分のない強者揃いである。この個々の技術をいかにして安全かつ充分に発揮できるよう体制を作り課題を解決していくかがパーティの役割であり、要求される諸々の総合的機能をいかにして作り上げるかが送り出す母体の役割なのであろう。ふりかえってみるとこれまでの計画準備の中でいくつかの課題があった。出発3日前の反省会で最も大きく取り上げられたことは、エクスペディションを考える場合の各個人の、「思考ベース」についてであった。ひとつには、遠征全体の中での「登山」の位置づけが当初まちまちであったこと、もうひとつは各担当の問題提起に対してディスカッションをするためのベースがまちまちだったことが挙げられる。分担機能はともするとその担当者に一任する格好になり勝ちであるが、一方、提起された課題を討議できるだけのある一定レベルまで全般的基礎知識を集積していなければならない。この点で当初は課題についての価値判断や決定が特定個人に委任される形となることがままあった。これは基礎データの集積が分野によっては遅れがあったことにも原因があるが、登山・遠征の基本的考え方とそれに基づく方法論があらかじめ十二分に検討されずに進んだことにも原因があるように思われる。それは各隊員が基礎知識や方法論を持っていなかったということではなく、パーティという一段高いレベルまで共通のものとして集約されずに進んだということである。したがって今回は具体的な課題が提起され解決していく過程の中で結果として集約が行なわれる形となった。実際にはその方がより具体的で実のある研修ができようが時間的余裕があるならば登山の各ケースを徹底的に究明し合い思考上の基本ベースを作っておく方法を取りたいと思う。これらのことは、遠征の発想の段階でパーティレベルとして共通に持ち合った段階で、山の選定、計画作成、各担当の任務分担を決めることが基本原則になろう。担当が決まったあとではどうしてもその担当分野に執着し勝ちになり理想的に運ばなくなる傾向がある。

この隊にはヒマラヤ登山の経験者はいなかったがそれにしてはよく問題を処理したと思う。試行錯誤は準備過程の中で避けられない要素であるが、決定的錯誤がなかったのは隊長の問題処理が適切だったことと、常に「最悪の事態」を設定しなが

ら問題提起を行なって処理していったてんにあろう。これらに要する基礎知識は、長い間の個人の事例集積のほかに、ＨＡＪを中心とした諸資料の検討またＨＡＪの集会やこのパーティがコンタクトできた多くの協力者から多くの「生の情報」を得たことが大いに役立っている。

隊員は登山そのものの流れからみると２つの山岳会の流れに属しているが、ヒマラヤ登山のパーティというレベルではＨＡＪで育ちＨＡＪで生まれたとも言える。その点で単にＨＡＪとしてまとまったのではなく、ＨＡＪの機構と機能を充分に活かしてでき上ったエクスペディションであることを再確認しておきたい。大きな遠征は行く人ではなく押し出す人と母体が重要であることも……。

## ⑵ 現 地 通 信

はじめはメール・ランナーを2回予定としてはＢ・Ｃ着およびルート状況確認後と登頂の成否結果の通信として使用することにしていた。実際にはジュムラからキャラバンを始めてからは、ルート状況の連絡、登攀の中間報告の２回で、登頂については外信で知り、のち東京で、帰国した隊長から直接報告を受けた。

留守番役としてはこの間とくに心配することも発生せず、技術的には信頼していたので次の通信を安心して待つことができたいへん気が楽であった。状況はすべて順調に進んでいたからである。カトマンズでは隊員すべてがたいへん意欲的に行動を開始すると共に体調もよく、毎日進行状況と翌日の行動を確認し合っていたこと。当時、心配していたリエゾンオフィサーにサーダー，チョタレが昇格起用され、隊長も先年のトレッキングで顔見知りだったこと。そのためにシェルパ管理が非常にスムーズに運んだこと。ジュムラへのチャーター機使用は遅れたが登山活動にはまったく支障がないこと（ブンブン・コーラ探査は縮まるが）。パーティモラルが上がり結果が大へん良いこと。せっかち気味の隊長も現地事情にペースを合わせて悠々と処理し、シェルパ管理も柔硬とりまぜて士気を上げていること（トラブルがまったく発生していない）。４月５日付けの通信（４月２８日着）で懸念されていた下部ルートも見通しがついたこと……。などあとは純粋に登山行動に専念すれば頂上は落とせると考えていた。

前記通信の内容の要約を関係者、家族のかたがたへ郵送した次の日、４月３０日夜の１２時にさしかかろうという時、北海道新聞社社会部からカンジェラルワ峰登頂の外信が入ったという連絡を受け、ついで各社の電話取材を受けた。詳しい内容は不明であるが第1次、第２次ともに成功したということで満足すると共に重い肩の荷を下し安緒の気持ちでいっぱいになった。その夜、祝盃をあげたことは言うまでもない。

通信の最終便は4月25日付のもので$C_3$からC4へのルート工作を上部アイス・フォールに行なうところであったが札幌へ着いたのは５月中ごろであった。５月１９日、隊長からカトマンズへ戻った旨の電報を受けとり留守番役が実質上終了したことを実感した。と同時にカンジェラルワ峰に取りついて隊員たちがやや喰い足りなさを感じたのではないかという懸念を持ったが、後で詳細な報告を聞くに及んでみな充実感を得ていることを知り満足した。

余談であるが、私は５月２８日からネパールへでかけた。当初、出発時に同行する予定であったが本部と打ち合わせた結果、何かのアクシデントやトラブルが発生した場合すぐ現地へ飛べるよう用意しておいたものである。カトマンズでシェルチャン氏やキラン君、ランジャン氏らに再会でき懐しさを覚えた。まだ帰国せずに残っていた隊員たちも元気であった。

登山課ではシュレスタ課長が「今期最初の初登頂、おめでとう」と祝ってくれたのも嬉しかった。ＨＡＪとネパール合同による1974年のラムジュン登山の交渉もシュレスタ氏が好意を示してくれたが残念なことにすでに英国隊が単独で許可を入手していることを知った。しかし、同年のポスト・モンスーンにHAJ隊はラムジュンにむかい第2登をはたした。ミスター・チョタレとは４年半ぶりに対面し、再会を喜び合った。今回はジュムラまで飛びカンジロバ山群をこの目で一目見たいと思っていたのだがすでにモンスーンが訪れて終日雲の中にあることを知って断念した。私にとって今回のカンジロバ・ヒマールは終了した。

# 第 Ⅳ 部



# ❖Kanjiroba—Himal 入山各隊の行動概要

## ～日時を中心に～

阿部　淳

a．この資料はこの遠征隊の研究資料として本遠征隊出発前に調達したものである。したがって整理されていないところも多いが、"ナマ"のデータとして集めたものなので何かの参考になると思い、ここに附録としてあげておいた。本遠征隊後（1973年ポスト以後）の遠征隊についても簡単にまとめておいた。

b．15万分の1地図は、Tysonの地図(G.J.No.133)をもとに作成したものに従う。

c．各隊に部分的に使用したものは、この地図の該当場所をそのままCopyした。
60万分の1地図は、吉永定雄氏作図によるものに従った。（1970年まで）
～あかね書房・無名峰の聳える国＋附録「ネパール北西部」～

d．その他のものについては、それぞれ出典を明らかにした。

e．15万分の1地図については、その後、吉沢一郎氏作図のものにより照合し、確認した。

f．各隊の行動概要の出典は〈参考文献〉として掲げた。

g．各拠点へのアプローチ日時を把握するために作ったものである。

h．当初、公表するつもりはなく、また掲載することになってからも書き改める暇がないために、乱筆・乱文を顧りみず、そのまま採用ということになった。ご了承いただきたい。

j．不統一な用語、勝手な省略語もあるが、適宜、推測していただきたい。

# 〈1953〉 オーストリア H・Tichy (ジャグドゥラ・コーラ周辺の山)

文献-「無名峰の登る回」(あの山書房). 福田宏年訳.

Sherpas: Pasang-Dawa-Lama (Sirdar), Ajiba, Pemba Puter, Gyaltsen

Approach: Kathmandu～Tsarka～Barbang Kh.～Tibrikot～Balangra-La～(Kaigaon (10日目) (4日あけた五人).

Kaigaon～Jagdula Kh～岩塞 (4,000m)-BC.

10日目. すぐ南の5,600mの低い尾根いっぱいモレーンでヴイバーク.

2日目. 前山から更に6,000m峰の間からなだにクレバスで失敗.

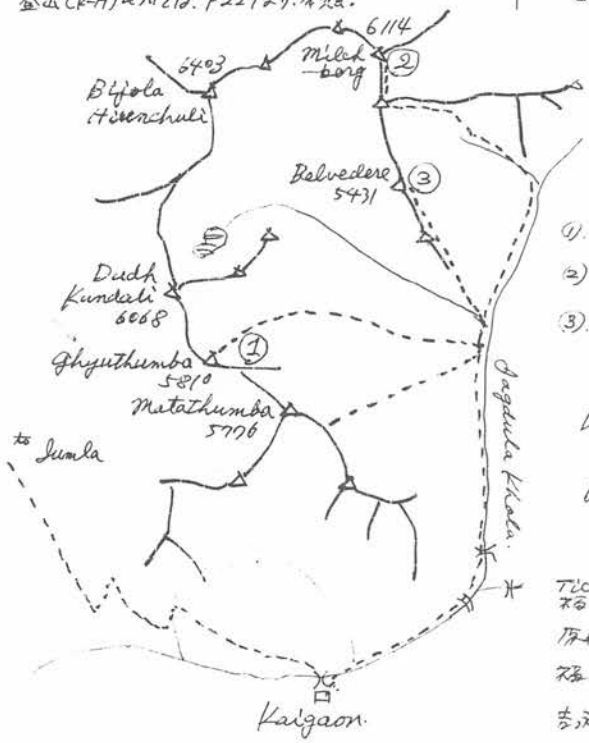
3日目. 今度は、北西より上にテント……6,386m登7頂. Pasang Peak と命名。谷の奥にテントを予す.

次の日. 6,200m峰へ登る. Milch-berg.

更に、Duital-Chuli (6100m)へ登る. 頂上の上の山へのルートを発見したが果たせず.

(帰路) Kaigaon～(西へ)～Jumla～Talkot～

登山(K-H)については、P229より、参照.




「Tichyの記述はあいまいで、そのルートを正確に辿ることは困難」(福田宏年). 更に、英語の、日本語も不明であり、後に、Tysonが現地名、探査を改訂した.

(1). Pasan Peak (6,386m)
= Ghyuthumba 5,816m. (現地名)
(Butter Mountain の意). (A.J. No.304)

(2). Milchberg (6,200m) → 6,114m.

(3). Dui-Tal-Chuli (6100m)
→ Belvedere. 5,431m. (展望台)

△ 福田宏年氏の上書訳. および諏訪田英成氏. (上書のおとがき)は、Tichyは、D.T.-Cに登ったとしている.

△ 吉永定雄氏(同書、年表)、(澤田久吉(この高峰)では、D.T.-Cでなく、Belvedereに登ったとする.

△ 「6,100mのBelvedereに登った。その頂上から二つの頂に挟まれた美しい山が見えた。彼はそれを、ネパール語でデュイ・タル・チュリと名ずけた」(澤田)

△ Tysonによると、(A.J. No.304)
Dui-Tal-Chuliは北西名でDudh-Kundali (=Pond of Milk)のようである。と指摘している.
英語文の和訳では、
D.T.-C = Bigala Hiunchuli. と指摘。

〈結 局〉

— Tichyが登った山は. —

(1). Ghyuthumba 5,816m. (バター山)

(2). Milch-berg. 6,114m (ミルクの山)

(3). Belvedere. 5,413m. (展望台)

— 目的あった山は. —

Dui-Tal-Chuli (二つの頂に挟まれた山)
= Dudh Kundali (乳の池)

Bigala-Hiunchuli は、更に北の山。

〈参考文献〉

Tichy 「無名峰の登る回」(あの山書房)
原典は、"Land der Namenlosen Berge".
福田宏年. 「同書」～あとがき.
吉永定雄. 「同書」～H-K探検登山史年表」
澤田久吉. 「ヒマラヤの高峰」(要書社)、第2巻.
J.A.C「山岳」51年、委状和夫「ダウテ・ヒウチュリの試登」
H.J. Vol.23, A.J. No.304. H.W '62～'63. Tyson.

# 〈1958〉 川喜田二郎隊（3名）（トルボ地方に入る）

9/12. Pokhara ～ 9/15. Tsarka ⇄ Muket-Himal. 9/8. Tsarka ～ Mo-La (4820m) ～ Zhanga. 9/9. Mugukarnali ～ 9/10 ～ Tinghegu (3,400) ～ Hegimen (3780) ～ Komakhola ～ Komani (4030) ～ Namda (3860) = Nangongkhola ～ 5,010m峠 9/14. Phijor (3920) 9/17発 ～ Yabkal-Lai (4650) ～ 9/18. Poe = Phopa (3920)

9/21. Poe ～ Langu River のコルビュに泊まず ～ 9/23. Poe. 9/26発 ～ セのSegiakkhola に 9/27. ～ 4500mC. 9/28. 5170m峠 ～ 10/1. 3泊す. ～ 10/3. Poe. 10/6発 ～ 10/24. Tsarka.

(注) Pokhara 25日 Tsarka 7日 Phijor 3日 Poe. 18日? Tsarka

参考文献：山岳. 54年（西北ネパールの旅）、光文社「黒幕の国」.
巻と雪3号（西北ヒマール遠征記録）小方金3.

〈1963〉. 北大隊. Napaljanjから. 22日で. Chakhure Lekh. 峠 (4405m). 26日で Jumla.

〈1968〉 京都学芸大（田村善次郎ら7名. シェルパ4名. ポーター. 2名）
Kathmandu 3月27日 Surket (11月末経) — 4月3日 K. Dailekh — (Karnali River) — Chilkha — 12月中半. Jumla着. Muguへの許可取れず — 3日間ヒナバコナ — Tibrikot — 4/5. Pungmo — ソオ.
(注) 輸送・帰国上のトラブル多い.
参考文献：山と渓谷. 361号 (3ページ)、「NEPAL. ネパール冬の旅」. (山と渓谷は輸送・帰国を取上げている)



## <1961> J.B.Tyson隊（3名）（ジャグドゥラ・コーラ周辺の山）

Sherpas: Ang Dawa, Hingma Tsering, Ang Temba III, Ang Temba (Cook)

Approach: 4/5. Nepalganj ～ 4/10. Sallyana ～ 4/13. Jagarkot ～ 4/17. Kaigaon (22日)
---測量調査（隊に合う）----
5/3. Kaigaon 発 ～ 5/4. BC（高原牧場、1階建家屋）

Climbing: B.Cから3日予定で偵察～ 合流でSisneの支流（左股）を見るべく、2日目、900m登って
J.Kh. 引返す。（「この谷は登れない（かし、ポーターは任務なつう」）

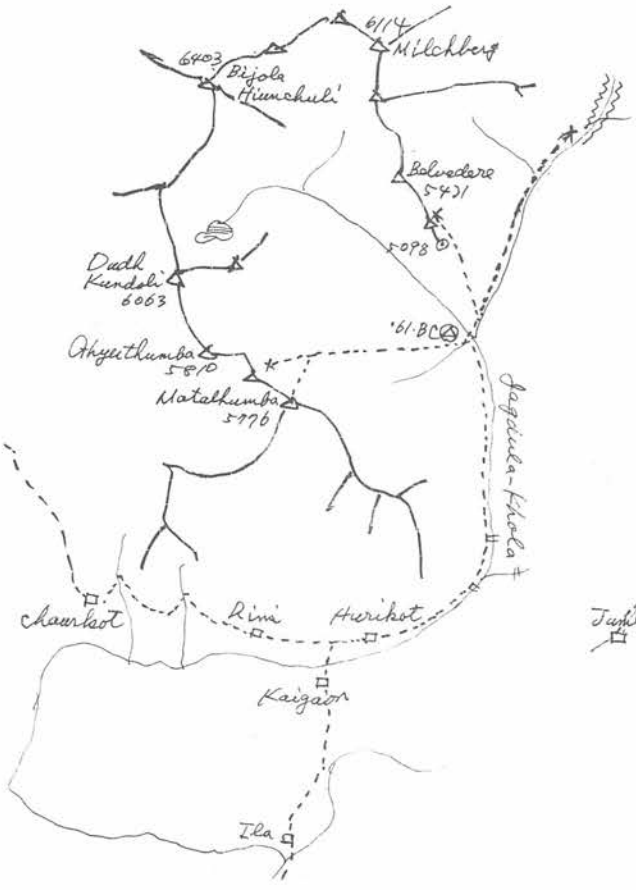
Mata. 5/13. 3人とシェルパ3人発 ～ 5/14. Matathumba gl. モレーンにC1 ～ 5/15. 北西尾根にC2 ～
続いて、M七Gのコルから、Mを狙ったが失敗。 5/16. Mathathumba 北西尾根ルート ～
急な雪の斜面も超えて登頂。（BCから、C2、3日で登頂。）

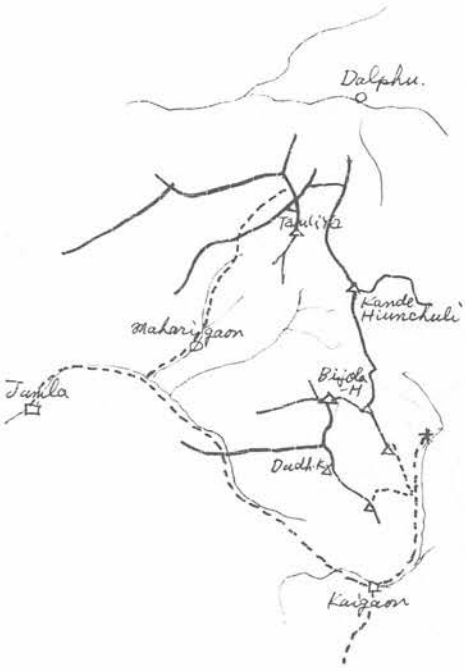
J.Kh. ここから、Dolphuへ抜ける道があると言うので偵察：—— 隊長2名、シェルパ3人、ポーター4人（3泊4日）
BC ～ Jagdula Kh の奥へ……某性ずし、3日目に引返す。（1日 1miles = 1.6 km）

Sisne. B.Cから西へ……
10日間でMaharigaon ～谷とつめて、Col ～ Sisne.Hの雪峰へC1、2泊の日アタック
---- Taulija？または、その周辺（6,400m？）

（注）. Jagdula-Khola 上流について
は、H.J. or A.J. すと書いた。
Earleの引用

<参考文献>
(1) H.J. vol. 23. & A.J. 304
(1962)
(2). 深田久弥「ヒマラヤの高峰」第5巻



# 〈1962〉 D·Gravind (6名) 英 Ladies Exp

〈1962. D. Gravind. 〉6名 英 Ladies Exp. （ガルプン・コーラ周辺の山） ～No 4.

Sherpas: Dawa Tenzing. Pemba Norbu-I. Mingma Tsering. Ang Dawa. Ang Temba. Pemba Norbu II. Pasang Sonar. Katcheri; (ムロ.)

Approach: 3/6. Napalgang. ～ 4/14 Kaigaon.（19日間）～ 4/5. Tysoni B.C. ～ 4/6. 谷をわたってC.（谷沿登攀）

B.C入: (Hanging Valley は危険（危険）～ 4/19. 戻もどる. Tysonの C. ～ 4/20. Tysoni B.C へもどる.
(4/21.) Garpung Khola へ入る ～ 4/23. 合流. Kh 下部へBC（谷の右岸）～ Lha-Shamma の南東南の 4,100 mに上部 BC.

Climbing:
ムス偵察: 4/24. Lha-S 稜線 col に C1 ～ この辺は（この右）はおそろめ ～ Ice fall 上部に C2（5580 m）
～ 50度の雪の斜面、ザイルがウクス ～ C3（5950 m）～ キックステップで上る ～ 疲労で C3 もどる。急水量なくBC1。

ムス登頂: 5/10 発 ～ C2（2日間天気待ち）～ 5/13 - C3 ～ 5/14 ～ 北のピナクル ～ おそ 簡単に頂. (6555 mだった)
5/15. 第2登.

J. Kh入: (第1隊). 隊全2. ニルバ1. /西南稜で C1 の上のコルを越え. Jagdula谷へ下る. Maidon.
K-L入: (第2隊). BC へ下り. 3日休んで. Kagmara へ向かう. K-I 1. 氷壁を出つが 巻き道にせげられる.
次に. C-I から 北面の急斜面に入り. 2日目. 5/23. 隊員4人登頂 ～ C2 へ下る.
次いで. K-II. K-III のコルへ上り. K-II. K-III に登頂. Triangle Peak にも登る.

Go-back: 本隊は Kaigaon へ ……
別隊は ～ Garpung Kh ～ Chibetton Col = Kagmara-La ～ Phoxsundo Tal ～ Thuri-Bheri で合流 ～ Barbung Khola ～ Kakkot ～ Mu-La (6/17) ～ Tuksche ～ Phokara (7日目の宿). → 6/3. Dunei に合流.

〈参考文献〉. A. J. vol. 706. 及 H. J. vol 24. (Evans).
渡辺久次. 「ヒマラヤの高峰」. 第5巻.

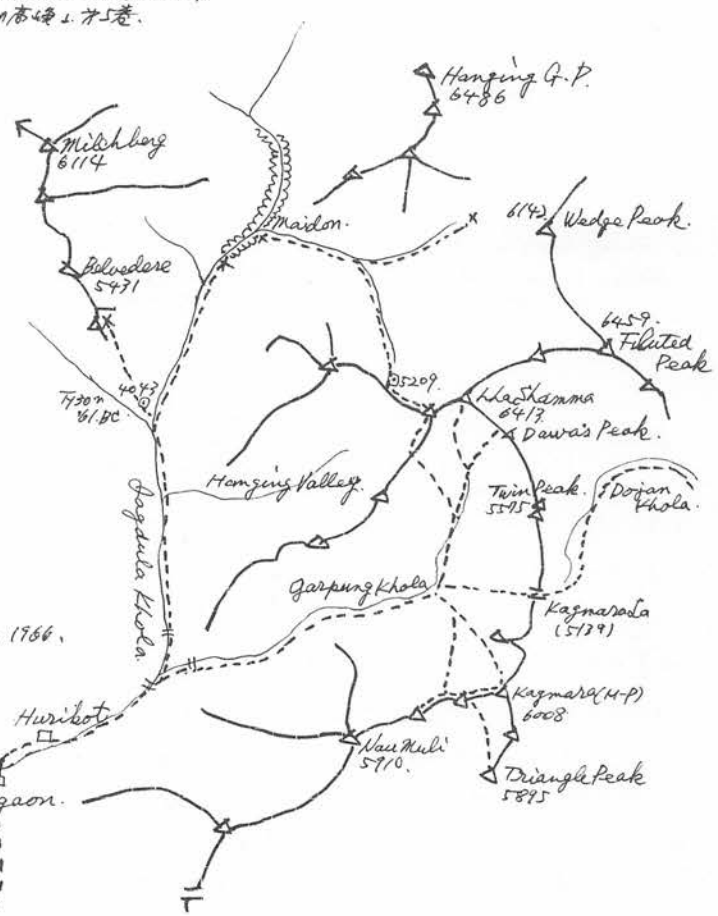
≪ J. Scarr によると…≫

Ladies Exp が登った山.

1. Belvedere (4877)
2. Dawa's Peak (5721)
3. Twin Peak (5782)
4. Lha Shamma
5. Kagmara-I (5952)
6. Triangle Peak (5791)
7. Kagmara-II (5639)
8. Kagmara-III (5760)

以上は. 標高米.
"Four Miles High"
by Josephine Scarr.
Victor Gollancz Ltd. London 1966.
に載っていると書かれるもの.
(注. 山と渓谷. 340号)

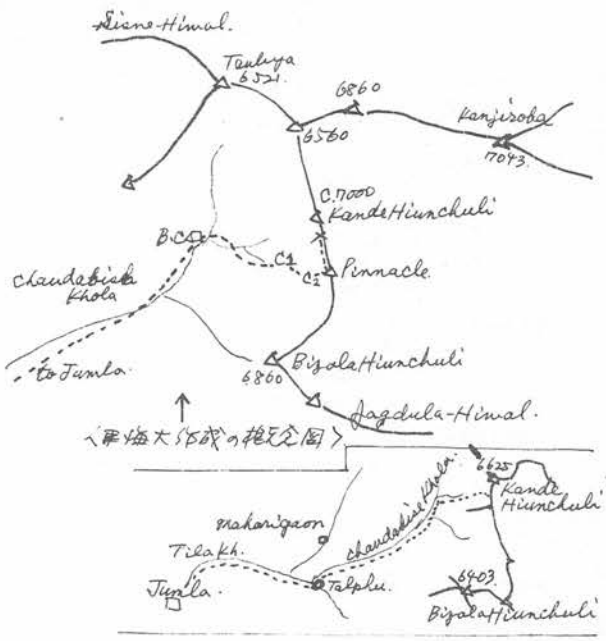
1964年 本巻頭にする Tyson の地図とは標高が異なる.



# 〈1963〉 東海大隊（長沢和俊・星野紀夫・河内豊英）

〈1963. 東海大〉 長沢和俊、星野紀夫、河内豊英。 （カンデヒウンチュリ試登） No.57
Sherpas: Ila Namgyal, Pasang Temba, Nawan Sangye. L.O.




Approach: India の風景. Tikonia で、隊員と荷物分離して、到着せず、50日後).
Jumla へ { 9/8. Tibonia 発 — Rajapur — Chisapani (四万里) — 9/15. ドウツル (マルラ王朝古都)
ここで半月すぎる。ここまでは自由でよい。— 8/10. Jumla. 〈途中、病重で脱落1名〉

B.C へ. { 9/3. Jumla ～ Tila Khola ～ Chaudabish Khola ～ ピエします (食糧は入れ、2の先走人).
9/5 発 ～ 9/7. B.C.

Attack. { 9/8. 1度偵察し荷物デポ。— 9/9. C1. ～ 9/10. 50mの雪壁、雪氷の急 — C2. (こゝから2時間、下すでなだれ.
9/11. ～大氷壁に5時間～ピナクル下まで上る～ 9/12. 休養し荷上げのみ).
9/13. ピナクルまで3時間、このピナクルの南コルの氷壁登りとりかゝる。七七コルに向かって急斜面トラバース.
(途中泊1ヶ) ～ クレバス2ヶ所で技術につく。おしりダラダラ。サミット眺望最高。C2へ後10時下りる.

〈注〉. 荷物 20kg × 8 = 240kg. (テント3、ザック3、ネガ1、三脚、高所服、食糧 60人分)

Jorkach. 11/13. ゴーリ — 11/14. ヨコ沢 (3,000m、周囲 20km で落石の危険) — セルに向かい、5日村、ムルマ村
— ゲム — 11/19. ムグ (チェックポスト). 国境近い — タルフ (2450m) — ピンコルガオ上.

〈参考文献〉. 山岳. 39年; 河川書店「ネパール横断紀行」.

〈注〉. 上記の通り、Tyson の地図と、東海大の撤収図は、大体に於いて違う。
なぜ、神戸商大が Kande-H を初めて、東海大の記録のファイナルを右折したか、
東海大の地図だけからすると、Tyson の地図の Kande-H ではなく、その南方の Patrasi-H
ではないか? 6157 や 6127 あたりを登ろうとしたとも考えられる。神戸商大は、東海大隊より
更に上流について、Kande-H のやゝ南方の稜線に登っている。

# 〈1964〉 J・B・Tyson (5人＋L・O)

—No.6.

1964. John. B. Tyson 入. 5人. ＋L・O (北面からカンジロバ試登)

Sherpas: Ang Temba('61), Minzma Tsering('61), Bhutarry, Ang Dorje, Kancha, Dhami(コック)

Approach: 8/26. Pokhera 発 — Tukuche — Tserka — Tarap — Phoksumdo Tal —
— 9/2. 着地 — 9/24. Kanjiroba 北東に隣接したリッジのコル (Kagmara-La と思われる) ～
(このコル手前でポーター、ストと会い解雇) — 9/25. えらび Garpung Khola へ沿い進み ～ G-Kh へ BC. (4269m)
～途中、測量作動にいるので通常の時間より遅れている ～

Climbing:
K-I. (I). Kagmara-Lekh 北壁下に C1. (5,180m). — C2 (5,480m) — Kagmara-I へ全員登る.
～難所は1ヶ所. 60mの氷壁斜面にガッティング. ～ここで測量活動

II・IIIへ (II). Kanjiroba-Himal の南面偵察 (北方32kmまで進む計画).
Lha-Shamma の西稜を越えて Jagdula-Khola へ下る. 「独りは大変よりが、山の基部に至るまでのゴルジュの最後の10kmはシーフとするほど難しい。サポートや、クーリは無理だろう」

II・IIIへ (III). Lha-Shamma アタックへ (2日間予定). 1日目. 5,800mの西稜に C (荷重なし). 2日目＝ピナクルニ
右リ南壁下部 北側にトラバースして、氷雪斜面を300m登れば。あと150mだが降雪でもどる.

Turning: Kanjiroba-H の北面へ登る.

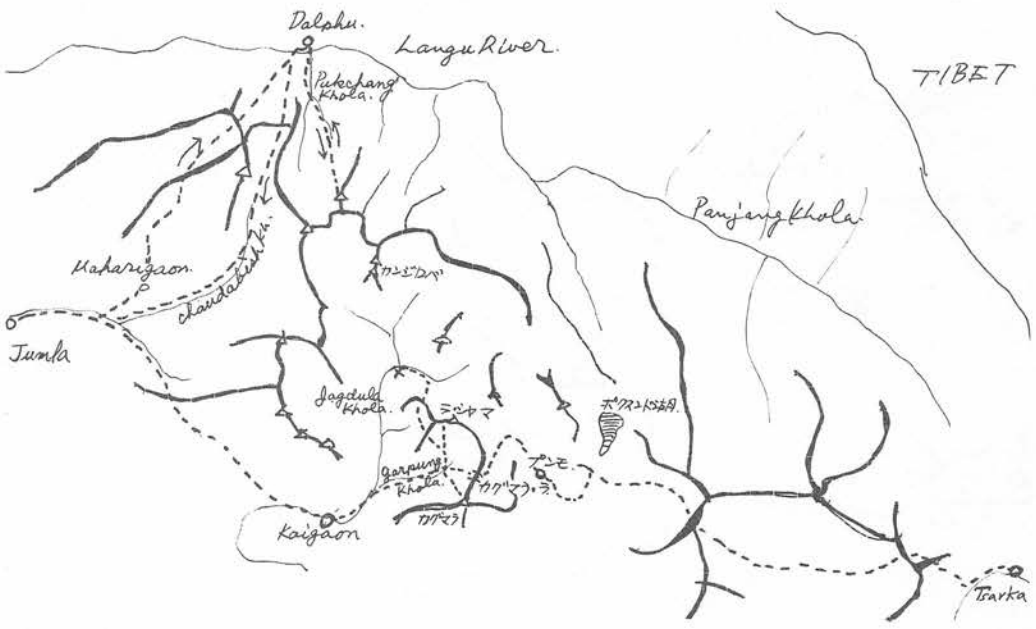
北面へ Garpung Khola ～ Kaigaon ～ Jumla ～ Maharigaon ～ 10/2. Dalph (16km離れた ミフのピークが見える) ～ Langu River ～ 10/5. 支流ゴルジュ合流点 (3350m = Pukchang Kh.)
～僅かな灌木 ～ 岩 ～ 氷河 ～ 両岸ともトラバース ～ ハンゴより ～ 指導中 — 10/26. Langu の

Bhulu-L. 8～9km南. 4260mに C. (「ヌヌなみ」から 5～6km離れている) ← 10/27. 北壁下部の短いガレ場～
5,000mに C. — 氷河 ～ コルの真下の氷地に C — 10/30. 5,800mの雪の肩.
10/31. 急雪斜面 — 深雪 — もろい岩 — 雪のナイフリッジ — 氷の斜面に カッティング (500m) ～ 雪の頂.
= Bhulu Lhasa. 主峰は、東南 8kmにあった.

Go-back: 4日間で ～ Chaudabish Khola を通り Jumla へ3泊4日. アメリカンアロム村 を立ち、4日後下国境.

(注). Garpung Khola から Jagdula-Khola へのコース、及び Kagmara-I へのルートは、1962年の Ladies Exp と同じ. また、Lha Shamma へもほぼ同ルートと思われる.
Kanjiroba-H へのルート偵察目的と共に、測量目的 をもつため、登攀は従であったと思われる.

〈参考文献〉. A.J. Vol.311. A-J. Vol.133. CH.J. Vol.2613. (A.J と同じ)



# 〈1967〉 J・Hoordyk（オランダ 7名）

〈1967. J. Noordyk〉（オランダ）7名。（カンジロバ・ヒマール東部へ入る）　—No.17.

Sherpas: Phu Dorji 五、Mingma Tsering、Penuri（cook）、Tenzing Jyaltso.

course: 9月. Nepal入り—10/4.（飛）Pokhara—Beni（Kali Gandaki を渡る）〜Mayandi khola〜3,600m峠〜Dharpatan（Pokharaから9日目。ヤボット部族300人定着。）〜4,350mの峠を二つ越える〜Dang La（4500m. Dharpatanから3日目）〜Bheri khola〜Tarakot.

Lang La で登降りポーター・トラブル。雇よく妻を、高バーティを雇う〜Dunai（軍のチェック・ポスト）〜Bheri River を渡り、Suli Gad をさかのぼ〜Ruhagaon（牛飼方り）〜2日泊る。リンゴを登り、Ringmo（4日目）〜Phoksundo Tal.（=lake）

Go back. 〜Bheri River〜Dhaulagiri 北側登山許可を得〜Barbung khola〜Mukut-H〜Tukche.

※. 話の本筋に、二つの山名があり.（現地人の呼び方による）

① 西の方を. Kang Tyga（=Snow Saddle 雪の鞍）←Bugar La（=Basya Bhanjyang）の上.

② 東の方を. Norbu Kang（=Snow Jewel 雪の宝石）←Numa La（=Numala Bhanjyang）の東.鞍コル.

この二つの峰高は、約6,400mと定める。5,500mのスロープで写真をとる。

Ringmoへのルンビより. Tysonが6660mとした. Kang Teralwa.

※. 目的は"Phoksimde Lake"周辺の探険、昆虫採集、写真撮影.

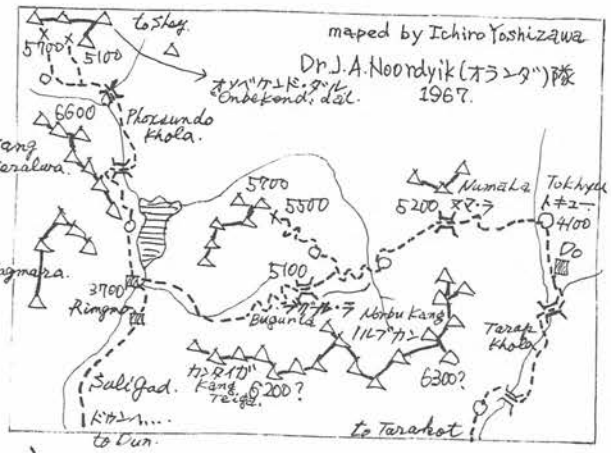
名づけて:"Scientific Trakking Tour".

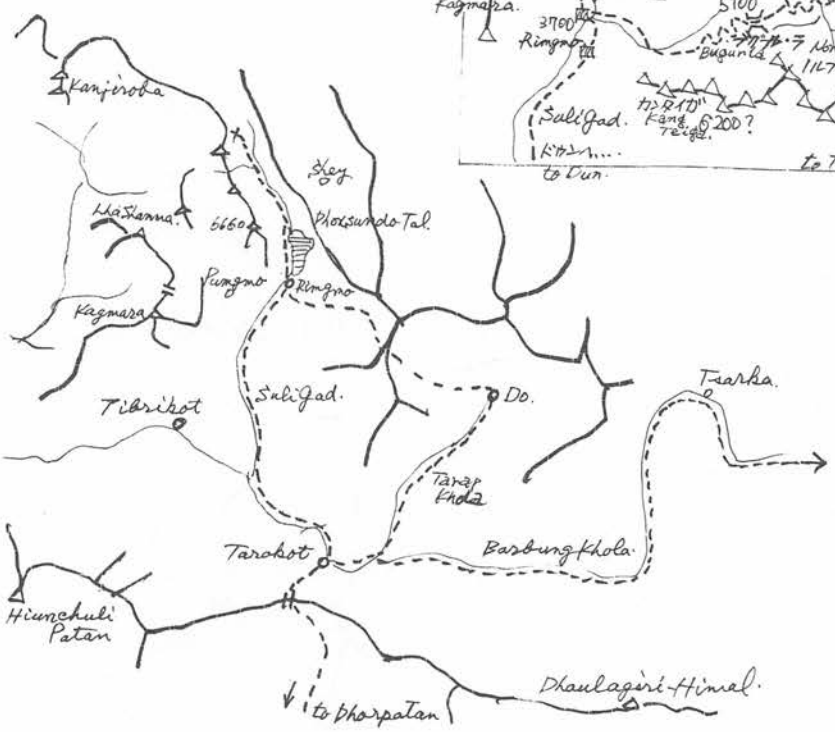
正式名. Netherlands Himalayan Expedition 1967.

〈参考文献〉

H. J. vol. 28.（by. Noordyk）

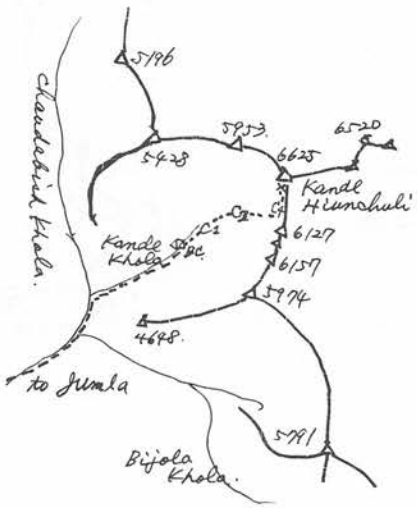
岩と雪. No.17.（吉祥一郎）（p.15）



# <1969> 神戸商大（伊藤 稔ら５名）(カンデヒウンチュリ試登)

Sherpa: Tsering Tarukei · Ang Chhotare · Dawa Orgyu · (他荷上げ人)




*. 日本から Nepal まで:
8/1. 神戸 — 8/6. Bombay — 8/9 発 — 汽車 2.5日 — Patna 8/29 — 人力車
Raxaul 着 8/31. Birganj —— 9/1 発 定期バス — Kathmandu.

*. Kathmandu — Jumla (飛行機)
Royal Flight の予定のでる. Lukla で故障.
Nepal Army の使用許可 (1,700 kg 積) をチャーター
1回. 9,000 Rs × 2回.
L officer · 6 O.R. Pant氏と · ゴラケットマン · セルダル氏の世話.
Jumla. Airport は草ぼうぼうで · よよっと雨が降ったら ·
無線で着陸不能との連絡が Kathmandu にくる ·
7時頃 · 9/15 · 7:30頃 · 9/25 · で一週間の時間差あり.

approach: 9/27. Jumla 発 (Chaudabisi Khola) — 9/29. Pickle (彼岸の村) — ここでポーター6名雇集め —
膝まで不順で7日で着つく一面で描ける1:50万流失 — 等高線だけで地図作成.

積雪: 10/5. 前進 — 10/8. C1 (雪渓末. 4,600 m) — 予測より ルート選択困難 — 大ピナクルをはさむ. 雪上クレバス.
— 氷塔 — 雪崩 — 氷壁ルート — 1度 C2 (5,850 m) へ (2日で 40 m) — 10/12. C3 (6,350 m) — 氷壁を
西面から巻く — ヒドンクレバス. ブロック雪崩に注意 — 2次的な反衝ルートとる. 10/20. 積雪最低コルにおよぶ.
— 10/22. C4. (5,800 m. 積雪2m)

アタック: 10/25. (サルダクラック) 2時発 — 大雪壁を3分登って引返す. 10/26. 雪.
10/27. (サルダクラック) 3時発 — 9:00. 主稜台で前回到着点 — スタカット · 全. 水平距離の2/3.
ウインチ, クラスト. 地等に風強 (雪吹). 12:00 セチリ. 3:00 ウスバニク主決める.
(カンパン · 携炊班 · 飲みもの — 被害多い).
12/28. 6:30 発 — 9:00 丘 (南の峰) 6,500 m. この先 · 水平距離で 2粁 · 高度差 100~150 m
南5名69. 精神的疲労で断念.

Go-back. 11/6. ~ Jumla ~ Chilkha ~ Mabu La ~ Dailekh ~ Surkhet (11/20).
11/24. 空路で Kathmandu.

<断念の理由>. ① Jet-stream の吹出しで暴風すさまじい. 退路が絶たれる (大阪)
② もう一つ前進キャンプを出すに人員の回転がつかない. (隊長 · ヒエルパ頭).
③ 日程を消化しつくした.

<参考文献>. 岳人 · 281号. (345. 11).

「西部ネパール・パトラシヒマール
遠征報告書」
(神戸商大山岳部・後援山岳会)
※ 小型 (A5版) 年が5大冬
よくまとまった報告書である.

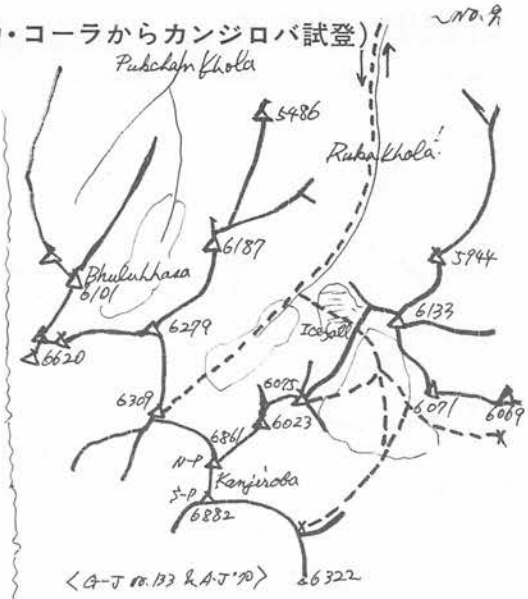


## 〈1969〉 J・B・Tyson (北面ルカ・コーラからカンジロバ試登)

(4名+L・O)



〈A-J '70の地図〉



〈A-J 誌.133 & A.J.'70〉

Sherpas: Nima Dorje. Mingma Tsering ('61, '64). Passang Kami. Passang Tendi.

Approach:
- R.Kh.: Kathmanduから Jumlaへ航空予定だったが車輪故障でスペアタイヤ待ちなどでシガールより先へ行かない。英国大使館の助力で Royal Flight は DC 三で Surkhet まで飛び、更に Jumla へ飛ぶ。Jumlaでは第一 Dalphu への道は雪で塞がっていたが、Mugu Karnali の道は開いていたとのこと。
- BCへ: 4/27. Jumla 発 — 5/4. Dalphu 着 (8日目). — 5/7頃 Langu にまず三つの指導村。人ふれず、アルミの ハエコ、18m 橋有。6番目のクロスは難関だが Ruka-Khola の峰につく。Pukchan Kh. より 3km 先。
- 5/12. Kanjiroba のセ峰より見える。3,800m. ロードの約1/3セ地点にBC。6861mからセ壁よく見える。

セ西稜 - 初め、セ西リッジへの試登、一般に急度の雪の斜面へセの頂へ鋭く走るアレートが続き、難しいと判断。支氷河左、セ東リッジの東側にためそうである。1週間後この氷河を偵察。

北東稜 - 越: 5/7 BCから、反対側の
5/22 — モレーン〜岩のリブ〜オーバーハング〜雪。急登しい雪崩危険多く避けリッジを辿れる。
5/23. 東セ峰に、6,100mの4峰をそう手近な、Neve のエッジの上に出る。セ東リッジを登る計画に望みをかけ Neve を越える。リッジ越えに、6,100m の頂の人ハニスが家。難しい登り 傾斜の 800mのの ち、リッジに続くかすかな石。一方、Neve の南側は、700mあまり、ガケと Icefall の上に落込み、山の東側リッジに続く。悪い氷河である。この上に南東リッジがあり、直接最高ピークの頂に続いている。
この日、涯と Icefall を調べてルートを討ち込む。

東南稜: そこで計画は二度、変更した。120mのフィックスで氷河へ下る。これが'61年に試みようとした北稜の麓である。モレーンに小エなスラブへ雪が降る。前方に丁字型氷河と横切り、2400m級上の南東リッジの頂がある。これに最後の望みを託す。荷運びは、村人雇用と難しい、700mの涯と Icefall がある。
7日雪の中を、700m登ってC。翌の日、300m登ってC。更に進んでCamp が東南リッジの峰に作られた。
5/31. 西 Nepal 全域を、5000mの雲海が覆う。雪と風。リッジの全キャンプも撤収する。〜上部の登稜は殺にかすかなそれをでまう。時々と雪が危なと1週間与えなと。いかに残すまた。望みは去った……

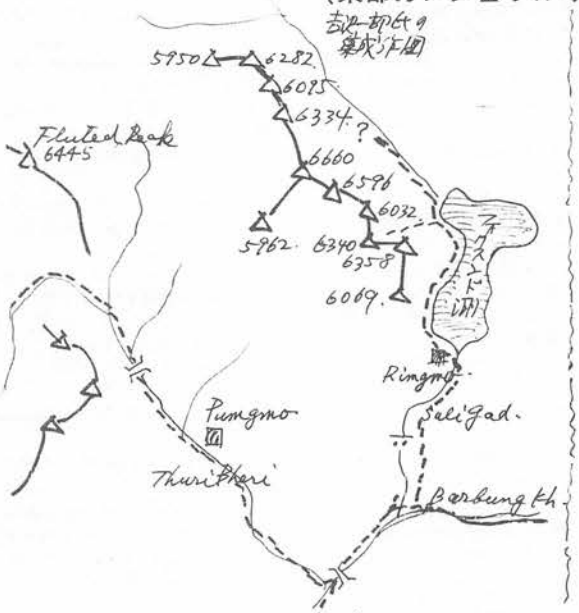
Go-back: 2週間後、Langu River よりもどる。川は、Khopa 以上で足跡がなくなる〜
Phijor 〜 chhapa Khola にもって帰る〜 Tomosom へ……

参考文献: A-J.'70.(No. 319.), A.A.J.'70 (Climbs and Exp.)
↳ by John. B. Tyson. "Return to Kanjiroba."

同上訳「山と渓谷」・昭和46年5月号〜6月号 (吉沢一郎 訳)

# <1969> 岩友会（船木 亘ら５名）

（東部カンジェラルワ山群のピーク登頂）







Sherpas: Mingma, Pasang Nimma, Sona, Gyaltsen, 他二名.

〈日本～Nepal〉

3/6. 羽田発 → 4/5. 陸路羽田発 ～ カルカッタ

4/14. カルカッタ発 ～ 4/16. 羽田着 ～ Kathmandu.

* Calcutta は、日本航空機の故障でスムーズに行かず、資材の一部は1ヵ月後に到着.

Approach: 4/15. Kathmandu 発 車35台 Pokhara（ポカラ村）～ポーター208名雇用. 4/27 発 ～ 4/29. ドゥビラ（半島、最少村）～Kusma ～ 5/3. Muna (2890m) ～ 7/4. 4360m峠 ～ Dharpatan (3890m, 8日目) ～ ベラタリ・ポーター雇う ～ 5/9 発 ～ 4975m峠 ～ 雪どけフル ～ Ghustang Khola ～ 5/10. Pharma ～ 5/11. トバラ・ポーター最終確認、休み. 5/15 発 ～ 5/16. Jangla Pass (5360m) 展望. 峠は雪 ～ Thenggo Pass ～ Tarakot ～ 5/18 ～ Dure (ドゥレ村) ～ Rakagaon ～ 5/21. Ringmo (Phoksumdo Tal の前). 15 BC. 4525m. (Pokhara より 25日).

Survey……(1). Kanjiroba 東南のふところ, (2). 北西の東面&北東面. (偵察, 西側に回る. 探査)

climbing: 5/24 発 ～ 高所 (4780m) ～ BC. (4930m) ～ ネパルフォル・コマ岩塔. 降雪 (南方洞) ～ 5/25 ～ 岩稜基部 ～ C1 (5620) 5/26. (一日). 降雪とネパルフォル偵察 ～ 岩稜～雪壁 ～ 乾け雪斜面 ～ 未踏雪稜 (降雪と南方洞) ～ 下南峰手前の稜線に C2 (5926m) 吹雪、ラクり (一泊) ～ 更に雪壁 ～ 岩どん ～ 雪の岩稜に C3 (6220m) 到着. 四方の雪. 5/28. 雪と停滞 (ミニマット高度順応). 5/29. ～ 岩稜 (難場) ～ 氷上岩 ～ C4 (6235m). 二日間吹雪、ブリ材. 5/30 ～ 岩と雪、スタカット ～ 雪庇は注意 ～ 雪壁 ～ 氷雪 ～ 岩壁 ～ 下南峰頂上 (6445m)

Go-back: 5/31. C4 ～ BC. 6/1. BC ～ Ringmo. 6/5 発 ～ 6/7. ～ Kagmara La (高度計 6000m) ～ Kaigaon へ. 6/8. Jagdula Kh 左岸 ～ Kaigaon. 6/9 ～ 6/13. Gotam ～ 6/14. Rukumkot ～ 6/28. Tansen 着 6/30. Kathmandu.

(注)1. 登攀 一覧は登山とピークなど（次ページ）. その他、ブリ、ヒマラヤ二三題.

(注)2. この隊の言う Kanjiroba 南峰 6445m は、オランダ隊（原図）のものとも、食すらず.

△ この山脈は、オランダ隊は、Kang Jeralwa としている.

△ Kanjiroba 南峰の呼称も、一般には適用されない.




参考文献: 登人269号「カンジロバ・ヒマール南峰」

なお、S46年、大阪府岳連の調査により、この山は、6,000米峰のひとつであるだろうという推定がなされている。

また、1970年、大阪市大隊には岩友会隊が加わり、確認されている。

△ Approach:

Nepal へ: 先発 7/4(2名) 羽田 —飛— Calcutta 、7/5. Nepal
中発 8/2(2名) 羽田 —飛— Bangkok 8/3. Calcutta — 8/4. 1時. Nepal — 8/17 ルクラ 8/4. Nepal.
後発 8/20(3名) 羽田 —飛— Calcutta 8/21. Nepal.

Jumla へ:
9/1. 先発. Kathmandu —Surket (Royal Army DC-3), ポーター集金 (1日分) 3人. Jumla まで1人 70 Rs.
9/3. 後発. —Surket 着 9/6 発 — 9/8. Dailekh (ポーターストライキ) 、9/10. 発 … (2,940m). (2,230)
9/12. Mahuta (2,260m) — 9/13. Chilkka (2,190m) 9/14. Ranchulla (2,030m) — 9/15. Tatopani 泊
9/16. Jumla (2,300m). →ポーター: ストライキ等で 1人500 Rs ほどより ~ ポーターの交代で 1人 12 Rs もする。

B.C へ:
9/17. (先発) Jumla 発 ~ Talphi (休養日、悪心吐た). 9/18 後発 ~ 9/19. 合流する。 9/20 猪泊り. (3540m)
9/21. 九本猫, 高老生やフィックスで退せず. (3,240m) 9/22. 猪泊り. 9/23. 猪泊り. C. Kh と B. Kh の分岐
9/24. C. Kh の猪泊り. ~ B. Kh へ入る (3510m). 9/25. Patrasi-H 見える ~ B.C (3810m、草地) 猪あり.

△ Climbing: (Jumla から 8日、Surket から 20日のキャラバン)

C4 (B.H):
9/26. 休み、ヒエルパ装備の不満受け。 9/27. 交渉、5名上げ開始、 9/28. 北斜モレーン ~ C1 (4,300m 決定)
10/3. C1 (6人用夏天、冬天、4人用夏天) 、10/17. 登、10/20 (-10℃) 積雪 70cm ラッセル、5,060m まで 5名交代、夏天消滅)
10/9. (-9℃) 急斜面 ~ セラック クレバス帯 ~ C2 (4,800m) 10/11. B.C から 17日目、C3 (5,440m)
10/12. Jagdula Kh への下降偵察. 1,400m の落差、10/16. Ga. Kh へ下る。 10/17. C4 (4,900m) 4日. 第2の B.C

Attack:
11/2. attack 前夜. 雪氷とセラック帯 ~ クレバス帯 ~ C5 (5,320m) 11/4. C6 (5,500m) 東面稜へのリッジ. 楽
11/6. C6 主 5,800m に設す。 11/7. (-11.5℃) 2ビバーク 4.5°の登稜 ~ 頂上. ~ 6,500m でビバーク (ストーブも火もなし)
発. C4 ~ C5. はアイスフォール、その上、広い雪原 ~ ピラミッド ~ 頂上。 ビバークのため、第2次アタックやむ。

Jumla へ:
11/8. ~ C5 へ. 11/9. ~ C4 へ. 東面調査. 11/13. ~ C3 へ. 11/15 ~ C1 へ. 11/16. BC 着。 Patrasi-H 調査.
11/22. BC 撤収. 11/23. Kande-H 小屋泊 ~ 11/25. Talphi — 11/30. Jumla.

K へ: 飛行機: 数日の予定 2 (12/2. 政府の陰!) 12/4. 02年ぶり2回... 12/5. 第1次 ~ Kathmandu 、12/7. 第2次. Kathmandu へ
12/9. 第3次. Kathmandu へ.

△ Trecking: 11/27. Talphi 発 (陸えず. ヒエルパ1人、ポーター6人、引揚荷予定) 11/28. ~ スイラエヤ峠 (3,020) ~ Chotta 村 (2870 m)

Phoksundo へ:
12/27. マクレー峠 (3690m) ~ Matathumba, Jhyuthumba, Saipal 見える. 2890m.
11/30. ~ Chaurkot (2790) ~ Rimi (2750) ~ Kaigaon (2450) 12/1 ~ Hurikot ~ Jarpung Khola ~
12/2. ~ 奥の右股 nd 入口 (4,025m). 12/3. ~ Kagmara 峠 (5,420m) すごい景色 ~ Fluted peak と Jagdula-Lekh 見える ~ 3540m. 12/4. Kangri ~ Pungmo (3200) ~ Ringmo の手前の Suli-Gad にて (3200). 12/5 ~ Ringmo ~ Phoxsund Tal. 湖は白濁に C. 「Nepal の青い宝石」.

引返す:
12/6. 北部湖全 ~ Phoxsundo Khola (氷流) ~ 落水台、6,660m 峠に見える。
12/7. 6,660m 北部支流氷河が、左白部の湖全。2日ぶり合ナ。 2日は、Shey Gonpa への近道見える。
(西方) 西北の果ての高い山並全。これと 6,660m 峠山と連つている ことを確認。 ← Tsangla P. 見える

Jumla: Kathmandu へ:
12/9. ~ 落水台 (2840) ~ 12/10. La gaon (2870) ~ 下り 90m. 12/10. ~ Tibrikot (2,080m)
12/12 ~ Para ~ カーリバンヤオ (2790 = Kagmara Lekha 手前). 12/13. Balangla La ~ Kaigaon.
12/14 ~ Chaurikot 、12/15. マクレー峠 ~ ネコットオオ. ~ 2,840. 12/16 ~ 2900 m峠 ~ Jumla.
12/17 Jumla ~ Kathmandu.

〈登山情況〉 気温は起床時でマイナス.

B.C へ:
9/6. 曇、好雨時々. 9/7. 曇、1時晴. 9/8. 曇のち快晴、好雨. 9/9. 曇、1時小雨. 9/10. 快晴後曇後、時々雨.
9/11. 雨、一時雪. 9/12. 曇、1時雨. 9/13. 曇のち、時々雨. 9/14. 曇、夜、晴 9/15. 晴、1時小雨、後曇.
9/16. 曇、時々小雨、 9/17. 晴、尺強. 9/18 晴のち曇、1時小雨. 9/19. 日晴、1時小雨、 9/20. 昨夜のち曇.
9/21. 曇、未明1時雨好晴. 9/22. 快晴のち曇 午後1時雨. 9/23. 曇のち晴、一時雨. 9/24. 小雨のち晴のち雨
9/25. 曇.

C4 へ:
9/26. 曇、利候雨3弧. 9/27. 晴のち曇、夜小雨. 9/28. 快晴のち曇、白と. 9/29. 快晴のち雪 (-2℃) 9/30. 快晴のち曇、4時小雨 アシ.
10/1. 快晴のち曇 (朝空) 10/2. 快晴のち晴. 10/3. 快晴のち曇、1時小雪. 10/4. ガス、小雪 時々. 10/5. 雪、午後、時々雪. (-2℃)
10/6. 終日 強雪と許雪 (5cm) 10/7. 曇、夜快晴 10/8. 快晴のち降雪 (-10℃). 10/9. 快晴、1時雪 (-9℃). 10/10. 快晴のち夜、夜、晴 (-8℃)
10/11. 快晴のち時、1時ガス. 10/12. 快晴のち時 10/13. 快晴のち曇 (-17℃). 10/14. 快晴のち曇 (-20℃). 10/15. 快晴、午後雪、夜晴、
10/16. 快晴. (-8℃) 10/17. 快晴、午後雪. 10/18. 快晴. (-8.5℃) 10/19. 快晴、午後曇. 10/20. 快晴、午後雪、
10/21. 快晴のち曇. (次2. 快晴、風強 (-12℃) 10/23. 快晴. 10/24. 快晴、風強 10/25. 快晴、午後、雲、
10/26. 快晴. 10/27. 快晴.

アタック B.C へ:
10/28. 快晴のち小雪. 10/29. 快晴のち曇、雪. 10/30. 快晴、午後、曇. 10/31. 快晴. 11/1. 快晴. (-11.5℃)
11/2. 快晴. 11/3. 快晴、未明、1時雪. 11/4. 快晴、1時ガス (-17℃) 11/5. 快晴. (-20℃) 11/7. 快晴のち放、夜、雪.
11/8. 快晴. 11/9. 快晴のち曇、時々小雪. 11/10. 快晴. 11/11. 快晴. 11/12. 快晴. (-11℃)
11/13. 快晴、のち晴. 11/14. 快晴. (-14℃) 11/15. 快晴. (-17℃). 11/16. 快晴. 11/17. 快晴.
11/18. 快晴. 11/19. 快晴. 11/20. 快晴. 11/21. 快晴.

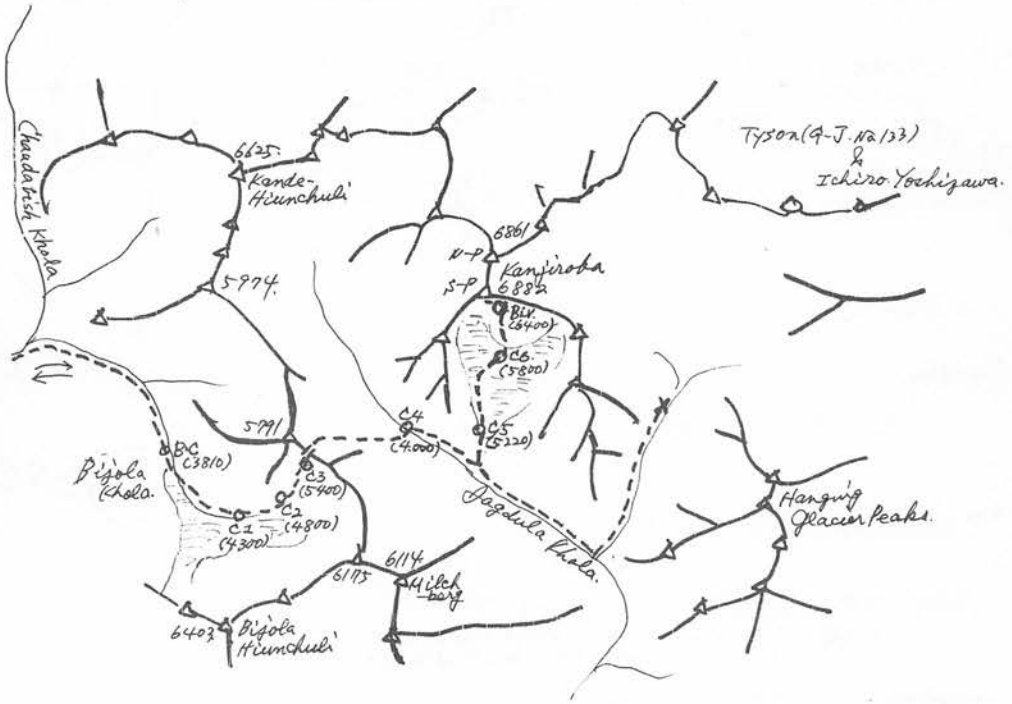
カルマ峠へ:
11/22. 快晴 (-10℃) 11/23. 快晴. 11/24. 快晴のち晴. 11/25. 快晴、 11/26. 快晴のち曇 (-11℃)
11/27. 快晴のち晴. 11/28. 快晴. 11/29. 快晴. 11/30. 曇のち晴. 12/1. 晴.
12/2. 快晴. 12/3. 快晴、午後、風. 12/4. 快晴. 12/5. 快晴、午後、風少し. 12/6. 快晴、午後、雪.
12/7. 快晴. 12/8. 快晴、午後風. 12/9. 快晴.

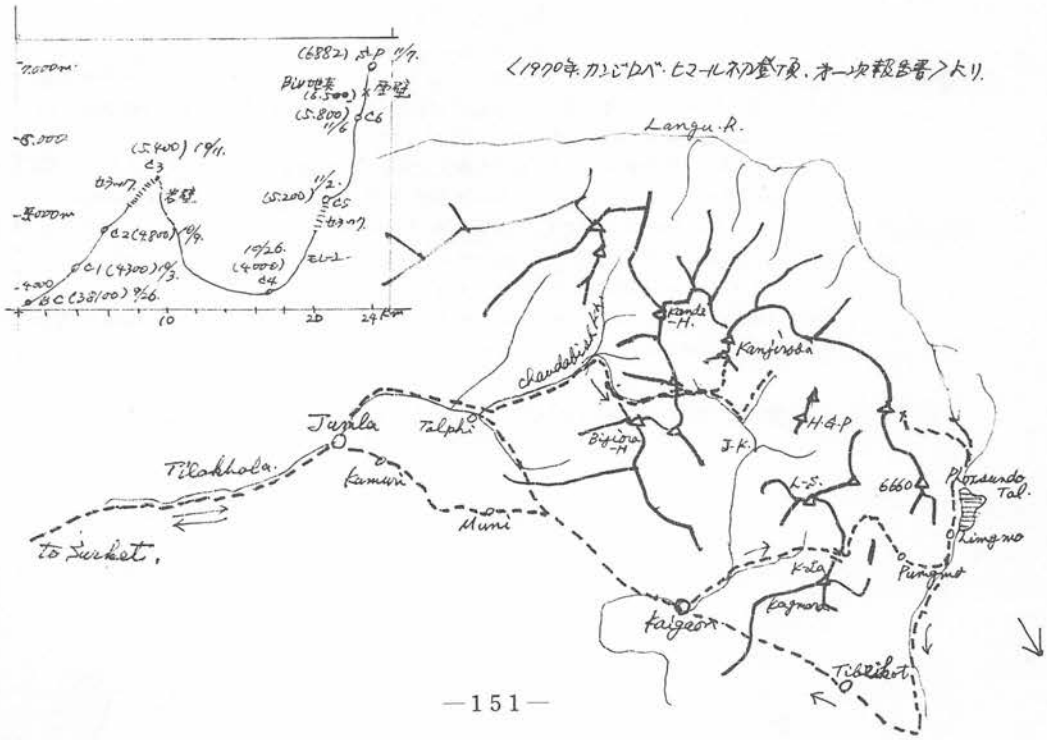
ルンラ コンダ経由:
12/10. 快晴. 12/11. 快晴. 12/12. 快晴. 12/13. 快晴. 12/14. 快晴のち雲.
12/15. 快晴のち曇. 12/16. 快晴、1時雪. 12/17. 快晴.

〈参考文献〉 カルビンバ・ヒマール初登頂・第1次報告書; 山と渓谷 (346. 4月号).
カンジロバ・ヒマール初登頂 — 1970年ポストモンスーン (ぶなり. 11月) 大阪市大山岳会
ヒマラヤ点と行 — カンジロバ・ヒマール初登頂 (常原和久), 岩と雪 22号 「カンジロバ・ヒマール 周辺の山群 (宇喜、スケッチ、地図重複)
山岳 第66号 「カンジロバ・ヒマール 主峰初登頂」 (常原和久)

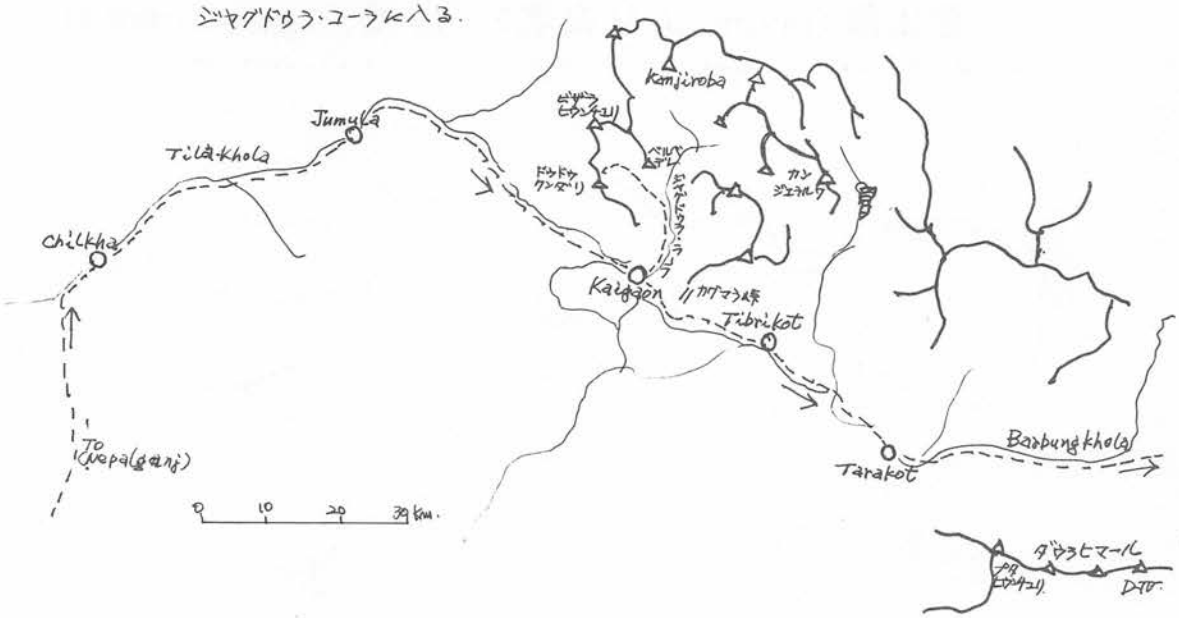
## <1970> 大阪市大（常慶和久ら７人、日本・ネパール合同登山隊<Nepalより２名>＋L・O）（カンジロバ初登頂）

Sherpas: Ang Babu, Phurkipa, Tsering Vangyal, Passang Nima, Nima Kantsa (cook).



<1971. フレ> 弘前パーティ (佐藤・横方 2名)
ジャグドゥラ・コーラに入る.




Party. 佐藤正敏・横方亮. Sherpa. Gyaltsen Norbu.
※目標. ① ジャグドゥラ・コーラ (バンドゥクタリ、ビダウヒクンチュリの初登)
② カンジェラルワ山群の頂峯と未上西峰を探る.

Approach. 3/11. 羽田発. 3/14. Kathmandu.
3/27. K.発 フライト Dang (Surkot行の席とれず) ジープ Nepalgunj. (ポーター集めで3日. カートン1個盗まれる.)
3/30. N. ジープ Chisopani (泊) チャクラバン ポーター5人 4/5. Surkot.
4/6. ~Dailekh (ポーター 9Rs/day を Jumla まで 60kgで募集) (Charpung)
Jagdula-kへ. 4/4 ~Jumla. 4/17. J. 発 ── 4/21. Jagdula-khola へ入る. ~ガルプン・Khola と出合.
4/23. ~左俣. ティッセーの岩小屋. 4/24. ビダウ・Hの東南面、切岸、尾根の末端、氷地へBC.
4/25. <Dudhkundali へ向かう> 4/27. 酒月. 4600m m. ABC.
5/2. <読図> 北東面から. ※シェルパ便宜. 隊員(先不振もあり中止、(そうこ・チャンプ以降)
5/7. BC撤収. 5/9. Garpung-khola 出合. (ポーター待ち) 5/11. Kalagaon.
Dhula-H へ. 5/12. 発 ~Balangra La 越え. (※最大限で最初調査は中止)
5/13 ~Tibrikot ~Dune (3日. ポーターばう) 5/17. Tarakot
※ ダウラヒマール北面から、カリガンダキへ向かう.
5/21. Mukut-khola から ~Mukut (村) ~オーストリアロ隊BCへ ~Mukut 越え.
5/27. Kali Gandaki にいる ~Jomson. 6/2. Pokhara.

<参考文献>. 「岩と雪 31号」(昭48年6月). 『西北ネパールの山旅』(佐藤正敏)

〈1971 ポスト〉 大阪府岳連隊（ツオカルポ・カン初登頂）（旧「カンジロバ峰」）
（阿部和行隊長ら4名）




Sherpas. Anu Sherpa
Passang Namgyal

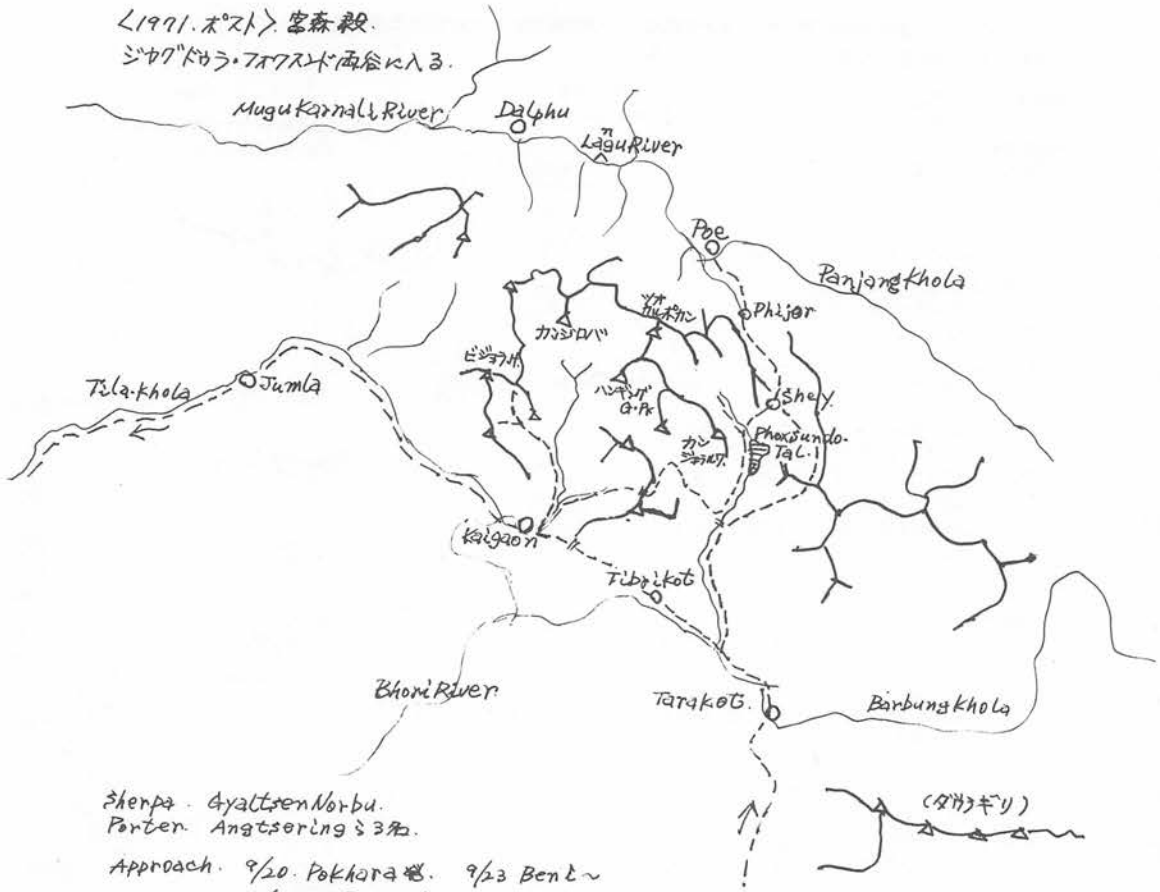
Approach.
8/22. 大阪発. 8/23. Kathmandu
8/29. Pokhara
※ カンジロバ・ヒマール全域の許すをもらう.
9/4. Pokhara発（ポーター35名）
9/8. Beni 9/10. Sibang.
ここから山地となる.
9/13. Jarja-La 越え.
9/14. Dhorpatan（ここから（ばら）人家なくなる）
9/15. プクアネ（4000）越える
ポーター1人づつ 2
（1日の距離短い（猪狩並み）
とりあえず雪むと谷む
9/18. ヤマカール（6名を除き・ポーター帰る）
2日かかって ポーター集め（27名）
9/23. Jangla Bhanjyang 越え（4547m）
9/24. Dunai（ポーター4人ふえる）
9/28. Ringmo（ここから北上する）

Climbing.
9/30、BC（4410）Pokharaから27日目着す.
10/4. C1（5602）=ABC.
Tsho Karpo（氷河）の北西 1.5km の台座
→ 北氷河の左氷縁 雪壁（上部危険で断念）
南氷河中神から岩稜ハシゴ・大氷原にとりつく
10/14 C2（5720m）南氷河の末端.
※ 10/8〜18. 降雪. C2に1.2m.
C1へのスカイル・デポ3mのラブリひき返し出す.
10/23. C3（5547）岩稜上.
10/25. C4まで雪を中止して登行〜大氷原〜頂稜〜2名登頂
※ C3から8時間・1000m. 全行程 苦しかった.
11/3. BC（お坂ポーター〜深雪に悩まされる）
11/5. BC発. 11/8. Tibrikotで.
11/13. Balangra-La 越え（3840）〜Kalagaon.
10時間半歩でポーターどなる. Kalagaonで給与もらえ
11/18. Jumla 11/24.（2名・セスナで Kathmandu へ.
11/26. 本隊・チャーター（Twin Otter）で Kathmandu へ.

〈特記事項〉この隊は、T. Tyson が地図を作成（発表）している未踏白部と思われていた〜
Kanjiroba 山群・東部の地形を解明した。これについては〈参考文献〉
の ③「山岳」に記録されている。また、この地点からの写真も貴重である.

〈参考文献〉 ①「1971年カンジロバ・ヒマール登山報告」（大阪府岳連ネパール・ヒマラヤ登山隊）
②「山岳・第67年（1972）」ー「カンジロバム部未踏の部分」（阿部和行）
③「岳人・297号（08年7月3日号）」ー「ツオカルポカン峯登頂」（阿部和行）ー含.グラビア
なお、上記②には、東部を含めた「KANJIROBA HIMAL」地図全図（5万図）として加えられている.（吉永定雄氏作図）
また、Phoksundo Khola 東部に位置する、Torbo 地方の概念図が
日本ヒマラヤカラコルム会議「カラコラム」にある（吉永定雄氏作図）
※. この書に収録されている「カンジロバ・ヒマールのことども〜発見から登頂までの展望」（吉永定雄氏）は、貴重な労作である。

<1971. ポスト> 宮森 毅.
ジャグドゥラ・フォクスンド両谷に入る.




Sherpa. Gyaltsen Norbu.
Porter. Angtsering ほか3名.

Approach. 9/20. Pokhara 発. 9/23 Bent ~
9/28(?) Darpatan.
10/5. Jangla Banjyang (4350) 越え.
~ Tibrikot
10/8. Kaigaon (Pokharaから20日目)
Jagdula K. 10/11. Jagdula Khola へ入る
10/12(?) Tyson の BC. ~ ホピーから周辺を偵察.
10/12. Kaigaon へもどる
Poe へ. (10/25) Kagmara-La 10/26. Ringmo → Phoksundo Tal ~ Poe へ
11/2. Ngand-La (5285) — Phijor.
11/5. ヨンブ村 (4700).
11/6. Poe. 11/10. Poe 発. ~ Tra (来たコースより東の谷に入る)
~ Sola. Munchung (5063) ~ Bagar-La ~ Ringmo.

※ リンモから ~ マユブパス ~ ダイレク ~ スルケット へ抜ける.
(ジュムラ)

<総券文献>. 「岳人. 301号」(昭47年7月号). 「西ヒマラヤの山旅 <上>」
「岳人. 302号」(昭47年8月号). 「西ヒマラヤの山旅 <下>」.

〈1972・ネパール〉

東京山岳倶楽部

カンデヒウンチュリ(6623m)初登頂

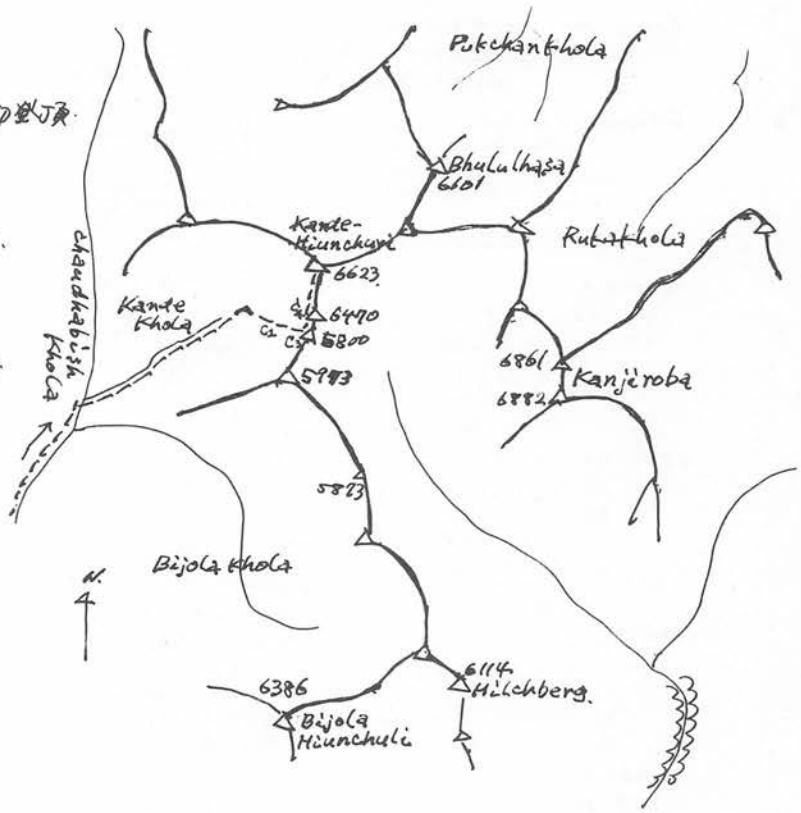
西野広隊長ら4名

Sherpas: Anu Sherpa
(Cook) Ang Namgyal
他. Victory Rana

(注)本隊は、この山を別名「カニ・ヒウンチュリ」とし、標高を6627mとしている。

また、Kande Kholaを別名「カニ・コーラ」としている。

※ルートは、ほぼ神戸商大隊と同様である。




Approach. 8/29. 神田発
8/30. Kathmandu (モンスーンの遅れで、Jumlaへの着陸不能や荷外出故障で遅れ)
9/20. Jumla (Twin Otter). 荷物1.3トン、ポーター集め(27名)
9/22. キャラバン(Chaudhabish Khola を遡る)

Climbing. 9/30 ポートコーラ支流のKande Khola 3800mにBC(1969. 神戸商大のBCと同じ)
↳新資料 = Chaudhabish Kholaの上流.
10/1. Kande Kholaをつめて、3960mにデポ地
10/3. 神戸商大ルートに近って4600mにC1.
そこから、氷河末端～ヒラック峰～氷壁～雪原(4日)を辿る～
10/10. C2(5200m)
10/12 ～稜線最低コル(5800)に達す。C2にて下痢会議.
10/13. コルにC3(5800)…ダブル・ボッカで最も疲れた最終面行動
10/14. シェルパ頭痛。5休養. 10/15. late雪カッティング～大雪壁
10/17. C4(6470). (雪洞壊れず、ツェルトによる)フォーカスト・ビバーク. 1名雪盲.
天候悪化(ガスと強風). 3強風でデポ3回なさず. トランシーバーも交信不能
10/18. アタック。南峰からガスと強風～スタカットで登る。北峰頂上～C3.
10/20. 全員BC。

※その後と隊は2分し、のPhoxsundo 河(往復). ②北側. Rangu Kholaへ.(往復)

〈参考文献〉「岳人」313号(昭48年7月号)—「カンデヒウンチュリ登頂」(東京山岳倶楽部)
「岩と雪」30号(昭48年4月)—「ネパール・ヒマラヤ1972年」(羽根)
※「岳人」313号にはグラビア(桑畑 欽).

〈1973・ポスト〉. 北里大学隊
セルン・ドルマ初登頂.
河村栄二隊長ら6名

Sherpas. Anu Sherpa, Dorje
Phurba Tenzing.
(Cook) Ang Namgi.
Ang Nima

※ 当初. Hanging Glacier Pks を目標.




〈下記報告書による〉

Approach.
7/30. 先発. 羽田発. 8/16. 本隊羽田発.
8/17. 本隊 Kathmandu.
※ 例年は9月末でないと雨ばかりの事、当初 Surke から キャンバスを狙った
9/6-7. Jumla へ飛ぶ (Cessna Twin Otter).

〈先発〉 9/9. 2名先発. 9/16. Punphun khola 出合.
9/17. この谷から偵察 — C (3890)
9/18. 本日の Punphun La (5322m).
ここから北のピークのナイフリッジ難儀した.
9/19. 左手の Junction La (5230). ここから ハンギングバレーへの下りは頗る急斜面で 難儀しい. 従ってこの谷からは便理と判断し. Phoksumdo Khola に決める.

〈本隊〉 9/12. Jumla 発 (ポーター73名. 30kg 毎. 15Rs/day. 9/19. Jagdula-Khola 出合.
※この間. フリコットでポーター賃上げ要求とフリコットポーター雇用拒否
四当 (8Rsとし、9名以外チェンジ (48人). 輸送にソワル頭雇う.
9/21. Kagmara La ~ Punphun Khola 出合. (山羊の下りのキャンプしてから. 頭痛や目難しが多い)
9/24. プンモ・ポーターにチェンジ. セク数頭雇う. 9/25. Ringmo. 9/26. Phoksumdo Tal.

Climbing.
9/28. Tsokarpo (4375) ~ セルン. BC (4395m). ※ 9/29から11日間雪、10/5から3週間快晴. (ヒマラヤ級すず)
10/1. Phoksumdo Khola を遡り. 南氷河へ取りつく. 中継地点. 4590m.
10/6. ABC (4980m). 10/15. 南氷河からアプローチ出て. C1 (5200). ~深雪で苦するず.
10/16. Phoksumdo La (5480m) から. 目標の山を見る
10/19. 全員ABC集合. Hanging Glacier Pks のルート計画を検討. (全期間を敗定 (変かず).
10/21. コルの上に. C2 (5480). H.G. Peaks を中止. 目標の1つである 最高峰 (6227) を狙う.
10/25. C3 (5600). 北壁北壁の下部. 10/27. 登頂隊員決定.
10/28. アイスフォール、雪壁をトラバースして. 北西稜へ出る。 10/29. C4 (5815m) 北西稜上. (この日・5715mの北稜に到達).
10/30. 深雪~クラスト~コセピーク。3時間で登頂. (隊員2名+シェルパ). ~C3 へ下る.
11/4. 全員BC. Serku Dholma と命名.
11/13~11/20. Phoksumdo Tal. の東部及東南部地域を踏査 (概略一貫章な調査である).
11/23. Manduwa 出発. 11/29. Balangra La ~ Kaigaon 12/3. Jumla.
12/7~11. Kathmandu.

〈参考文献〉「カンジロバ・ヒマール登山隊報告 (その1部)」— 北里大学ヒマラヤ登山隊
「岳人」322号 (昭49年4月号) — 「カンジロバ山群の未踏峰・セルン・ドルマに登頂」
「岳人」323号 (昭49年5月号) — 「未知のネクスンド湖東部」.
※ 322号に・カラーグラビア.

〈1974. アレ〉. 山形大学隊（遠井英二隊長ら7名） ビジョラ・ヒウンチュリ初登頂.

Sherpas. Anu Sherpa (Sirdar). Dorje. Dawa Tenjing. (Cook) Ang Kami, Dawa Norbu.

※. L.O. Kashab Prasad Mainali.

Approach.

3/25. 先発隊発. 3/8. 本隊羽田発

3/9. Kathmandu. Box（食料）（個給失. ビエルパの健康診断.

※ Jumlaへの定期便は4/8まで予約満席.

3/17. 第1便 Jumlaへ（Twin Otter）. 人を含み2 tonの（食料. 装備. 各1 Con）

3/19. 第2便（その他. 残大隊）. 3/17. Twin Otter手配つかず. セスナ2機で第3便.

Climbing

3/29. キャラバン. ～Kaigaon ～Jugdula Khola.

4/5. 夢J. TysonのBC跡. 4/7. Milchberg Glacier. モレーンの基部にBC（4200）

※ ルートエ5年の結果. パーパールタ・コーラをつめ. 南面から支稜を辿って東稜に取りつくルート. ←採用.

4/12. 南面取りつき点にC1（4400） 4/17. C2（4900）

4/23. 東稜～北西雪原にC3（5400） ※東稜七仙の森から氷河を経て東稜へ

4/25. C4（5800）. 上部のルートエ5年

4/27. 第1次登頂（隊員2名とサーダー）ほか. 6隊員4名

4/28. 第2次登頂（3名） 4/29. BC

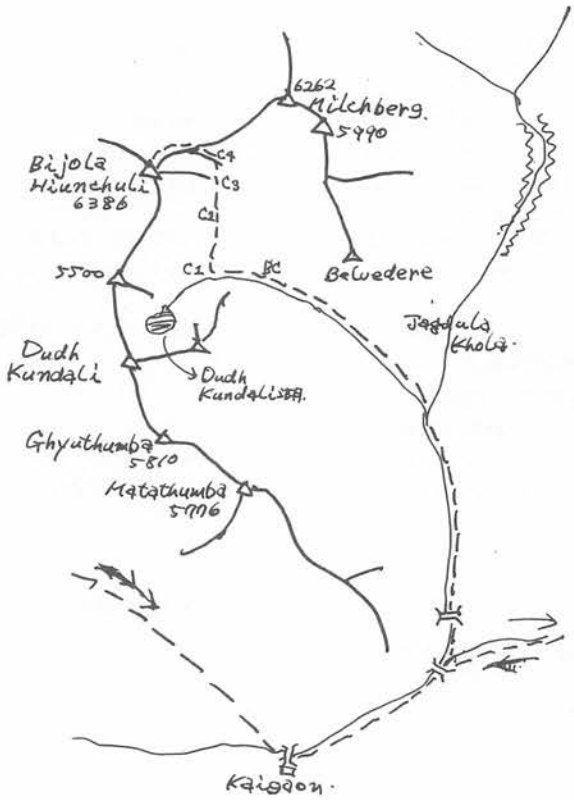
5/2頃. 帰りのキャラバン（Pokharaへ向かう）

5/9. Jangla Banjyangを越える

5/14. Dorpatan.

※. オーターイエジ. 高6頭. ロバ2頭.（7025）.

5/23. Pokhara.



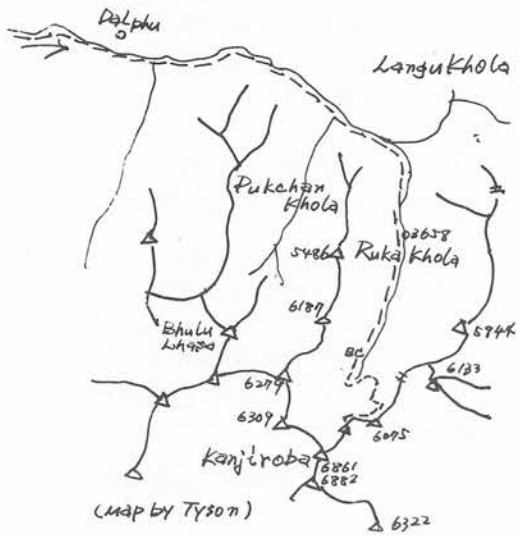

※ 標高は. この隊の次報告書による

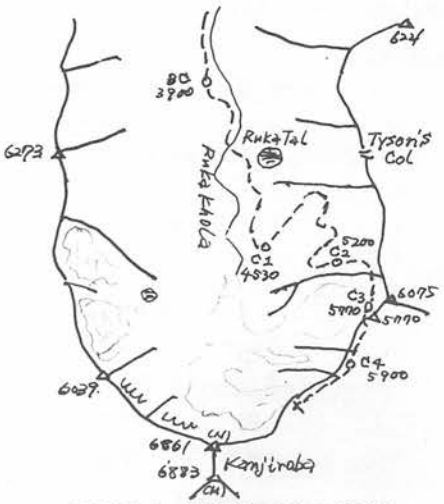

〈参考文献〉

「カンジロバ ヒマール遠征仮報告書」
～ビジョラ・ヒウンチュリ初登頂～

「岩と雪・39号」（NB49年10月）
～「ビジョラ・ヒウンチュリ初登頂」～
※ グラビア5ず.

〈1975・ポスト〉 月稜会隊（北面からカンジロバを狙う） ※1969. T. Tysonのルートを採用.
～滝口明隊長ら7名～




（月稜会作図. 岩と雪・48号に掲載）

Sherpas. Anu sherpa (birder) など4名. (cook) Dawa 、ポーター55名

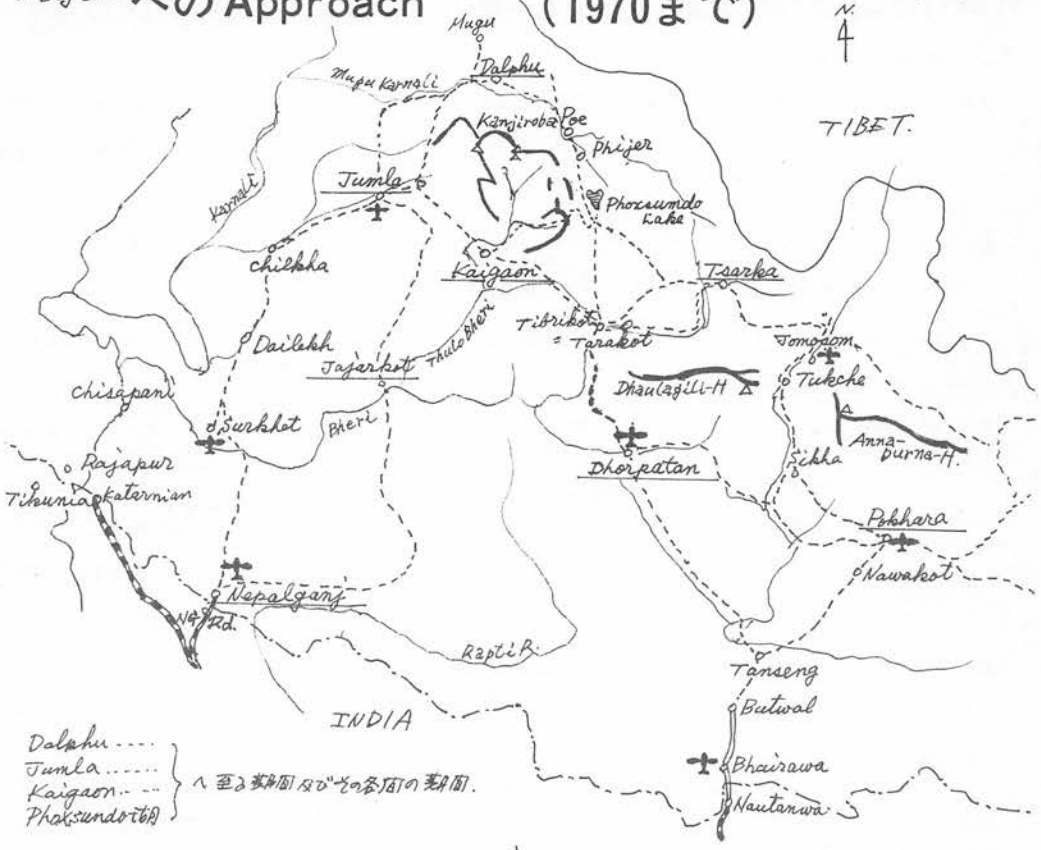
Approach. 9/2. Jumlaからキャラバン. 9/23. ナムル集 ～ ブムラ(3500)
9/4. ガッナムル集(3320)～ピナ 9/25. ～タルポコーラに沿いた …… 捲き道.
9/17. Langu Khola分岐集 9/29. Dalphu. (ルポの西北西最奥の部落)
この先険悪なコースのため. ポーター4エレベ. に25kg. 20kg+燃料2本。51名)
10/2. Langu Kholaへ下る. ※ポーター賃上げスト(25kgに5百上げ)
解下ずさい. 高捲きで滑の上下回立くり返す (10/4). ナムリアンピりっぴりで渡る
10/6. 最稜工作に10ポンク 10/7. コヤンパラ～岩場トラバース. Ruka Khola出合(3740m)
10/8. Ruka Khola に入る
Climbing 10/9. BC(3900m)その岸段丘状の台地. ※の方. BC五. 4200mに移動(Tysonのキャンプ跡)
(10/13?). C1(4530m). 北氷河末端近 C2(5200m) 北氷河の中央
10/23. 七段の棚状の氷河を突破して稜線に C3(5770m)
この先. 鋭峰盛の氷稜と. Anuは高欲喪失し不調でBCに下ってきり.
10/31. 稜線上の広い地集にC4(5900) 11/4. 最稜にC5予定地(6300m)
※氷稜のアイスエンジで. もつれたロープ直すため解いたとき1名雪と崩れて転落(死亡)
11/16. BC撤収

〈参考文献〉.「岩と雪・49号」(昭51年6月)－「1975. カンジロバへの道」（※コース・マップ詳しい）
「岩と雪・48号」(昭51年4月)－「記録篇・ネパール－カンジロバ・ヒマール」

# アプローチの検討・Kanjiroba-Himal
## Kanjiro. へのApproach (1970まで)

'46. 4. 21.

N. 4




〈南からのアプローチ〉

'61. Tyson. Nepalganj 9日 Jajarkot 15日 Kaigaon (24)
'62. Iravind Nepalganj 19日 Kaigaon (19)
'63. 北大. Nepalganj 14日 Jajarkot 12日 Jumla (26)
'67. 神戸商大 (飛) Surkot 15日 Jumla
'69. Tyson. — ( Jumla 8日/4日 Dalphu )
'70. 大阪市大 (飛) Surkot 11日 Jumla.
'69. 岩友会(帰) ← Tanseng ← 20日 Kaigaon

〈'63. 同志社大の横断行〉(西→ホバニティルク)
11/9. Mugu 1日 11/10. Dalphu 3日 11/13. 5300㍍ 7日
11/10. Phijer 2日 11/12 Shey 1日 11/13. Phoksundo 5日
12/8. Tarakot 9日 12/15. Dhorpatan 8日 12/23. Pokhara (T. 40日)

(注) 報告書(文)のうち、日時を明確にしたもの抜く.
特に外国隊のものは、記載が乏しい.
従って、明確に判明できるものだけに限った.
* Nepalganj からのApproach、及びトルボ ← Pokhara 間辺については、岳人 211 号 212号で報告されている(高塚夫)

〈東からのアプローチ〉

'58. 川西田隊. Tsarka 7日 → Phijor 5日 → Pol.
↳ ( Pokhara 25日 Tsarka は途中調査)
'64. Tyson. Pokhara 30日 途中測量 Kagmara La. (30)?
'67. Noordyk. Pokhara 9日 Dorpatan 11日 ? Phoksundo (20)?
'69. 岩友会. Pokhara 8日 Dorpatan 17日 Phoksundo (25)
(D→Pは、ポーターバファル・両度で7日ロス)

〈内域の周辺〉

'61. Tyson. Kaigaon 9日 → Dalphu
'69. Tyson. Jumla 8日(推定) (帰りは4日) → Dalphu
'70. 大阪市大 (ヘリコプター) Jumla 5日 → Kaigaon 5日 → Phoksundo
2.5 4.5 2.5
'70. 大阪市大 (ヘリコプター) Jumla ← 3日 Kaigaon ← 5日 Phoksundo
~Tibrikot 迂回~
'69. 岩友会 ← Kaigaon ← 1日 Kusa ← 3日 Phoksundo

# Kanjiroba-Himal 登山に要した日数&キャンプ数

<A> Jugdula-Lekh.

'53. Tichy. Ghyuthumba.(BCより2回目). BC — ①C1 — T頂 — ②BC (Matathumbaより.C1まで行)
Belvedere. (BCより2回目). BC — ①C1 — T頂 — ②BC. (Ghyuthumbaより.C1まで行)
Milch-berg. 詳しい日不明.

'61. Tyson. Mothathymba (BCより4回目). BC — ①C1 (モレーン) — ×C2 (氷河) — ②C3 (コース変更) — T頂 — ③BC.
— 正味3回目 —
Jagdula Khola 奥の頂稜(BCより5回目に引返す)

'62. Gravind Kaigaon —1日→ 牧牧場 (ほぼ Tichy. Tyson 同) BCと同じ. はぶいた1日)
↳ J.Kh.の奥さく頂稜. 4回目に引返す.

<B> Garpung Khola 周辺の山.

'62. Gravind. Llaskamma.( BCより第四日目). BC — ①BC — ×C1 (南東稜) — ②C2 (アイスホール経由) — ③C3 (西稜) — ④T頂(→BC)
— 正味4回目 —
Kagmara-M.P. (BCより第四日目) BC — ①C1 (K.Kh.gl) — ×C2 (西稜下部) — ②C3 (北壁下) — ③T頂(→C2?)
— 正味3回目 —
Kagmara-II. III. &. Triangle Peak. Twin Peak については詳しい日不明.

*. Kaigaon 1日 J.Kh.牧 牧場 1日 G.Kh 1日 BC. (すぐ.G.Khに入れば2日?)

<C> Kande-Himchuli

'63. 東海大. Jumla 5日 Kande Khola BC.
BC — ②C1 — ③C2 — ⑥頂上直下まで. (但し. Kande-H主峰 課題12か?)

'69. 神奈川大. Jumla 8日 薬莱. Kande Khola BC
BC — ④C1 — ⑬C3 — ⑱C4 — 頂上直下まで. 21 22 23

<D>. Kang Jelalwa 山群

'69. 岩友会. BC — ②C1 — ③C2 — ④C3 — ⑥C4 — ⑦T頂 — ⑧BC. (6447m峰?)

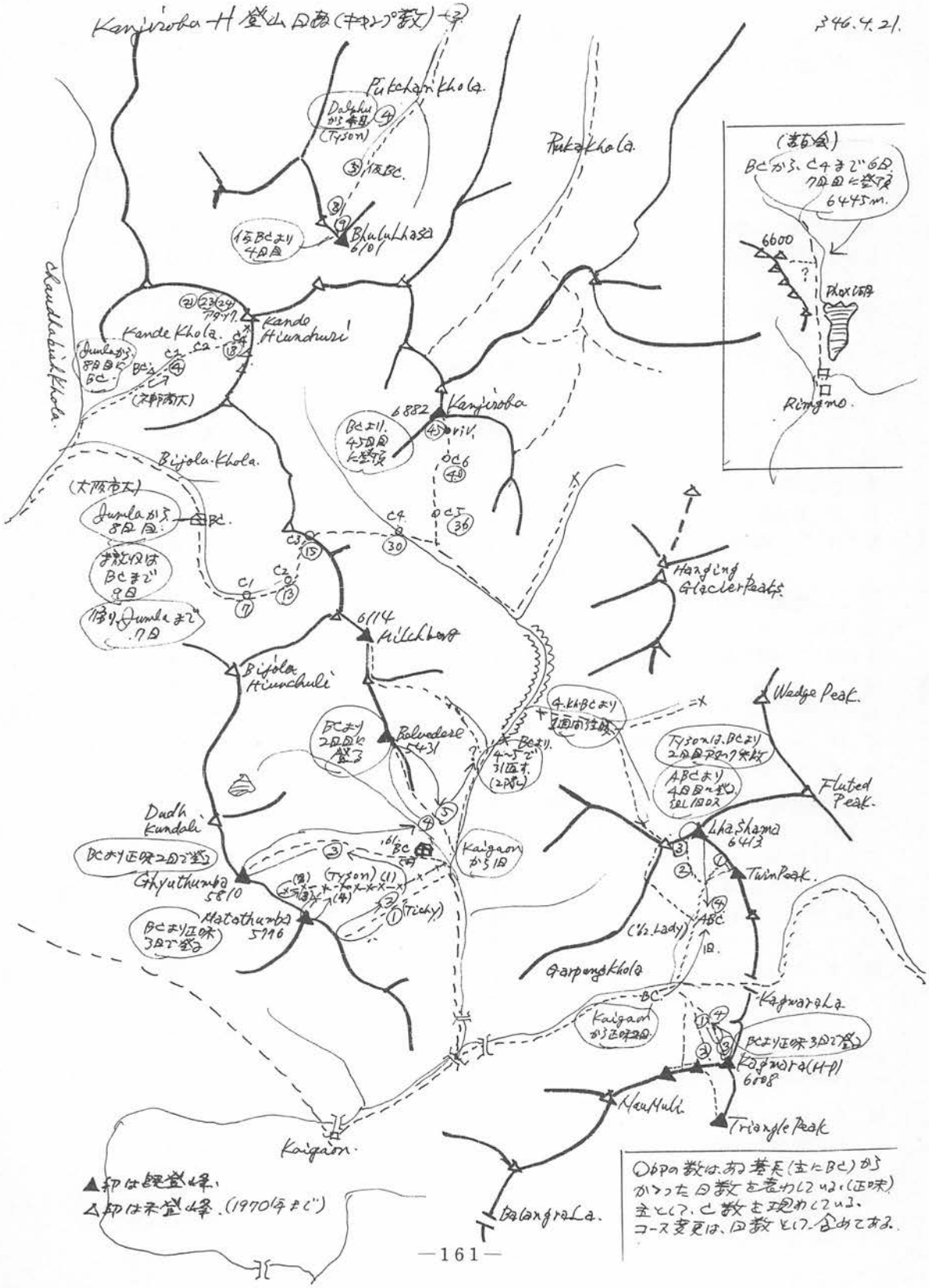
<E> (K-H) Dhulu Lhasa.

'64. Tyson. Dalphu 3日? Pakchang Kh. 1日 ロードの中間地点 1日 氷河BC 9日目 B.L.

<F>. Kanjiroba 主峰.

'70. 大阪市大. Jumla 8日. 悪路. Bijola Khola. BC.
B.C — ⑦C1 — ⑰C2 — ⑬C3 (RHコル) — 下降 — ㉚C4 (J.Kh) — ㊱C5 (氷河末端) — ㊵C6.
— T頂 ～ ヒマラヤ. (43) — 9日 — BC.

(注). ○印は. 拠点 (主として. BC) からの往還日数を示す.
BCまでは "Approach" 工頂の周辺周辺の基点 (Jumla, Kaigaon, Dalphu など) からの. 経路 にて示した. (但し. 基点の出発日より).
推測もあるので. 厳密な日数 を示していない。「行動報告書」又は「文献」参照のこと.


Kanjiroba 北登山口案(中ネパール)
'46.4.21.
Pukakhola
Pukakhola
Dalphu から4日 (Tyson)
3 1st BC.
2
1
Bhulullhasa 6101
1st BCより 4日目
Kaudhakhola
Kande Khola.
Kando Hiunchuli
Jumlaから 8日目 BC
(大阪市大)
Kanjiroba
6882
Bcより 4,5日目に登頂
BC6
BC5
C4
C3
C2
C1
Bijola-Khola.
(大阪市大)
Jumlaから 8日目 BC.
お荷役は BCまで 9日
帰りJumlaまで 7日
6114 Milkbow
Bijola Hiunchuli
Hanging Glacier Peaks
Wedge Peak.
Fluted Peak.
Lha Shama 6413
Twin Peak.
ABC
(1/2 Lady)
Karpong Khola
BC.
Kagwara La.
Kagwara(H.P) 6008
Triangle Peak
Mau Huli
Kaigaon.
Kaigaonから正味2日
BCより正味3日で登り
Kaigaonから1日
Palangra La.
Rolwaling
5431
BCより2日目に登り
BCより4~5で引返す。(2P登)
4. kh BCより 又面向う注攻
Tysonは、BCより2日目及び下攻攻
ABCより4日目より、頂上ロス
BC
Dudh Kundali
Ghyuthumba 5810
Matathumba 5746
BCより正味2日で登り
BCより正味3日で登り
(Tyson)
(Tricky)
(2)
(4)
(1)
(3)
(5)
(6)
(7)
(8)
(9)
(10)
(11)
(12)
(13)
(14)
(15)
(17)
(18)
(19)
(20)
(21)
(22)
(23)
(24)
(27)
(30)
(36)
(40)
(45)
(48)
(登頂会)
BCから C4まで6日
7日目に登頂
6445m.
6600
?
Phoxtoba
Ringmo.
▲印は既登峰、
△印は未登山峰。(1970年まで)
○印の数は、あの著者(主にBC)から かかった日数を表わしている。(正味)
主として、この数を現わしている。
コース変更は、日数として含めてある。

# ご協力者ご芳名

（アルファベット順）

阿部悟郎様　北海道立図書館職員ご一同様
阿部和行様
阿地政美様
安藤久男様
アルプステント様

江原光夫様
遠藤登様
えぞ山岳会様
藤江幾太郎様
藤井毅様

萩千夏子様
花崎洋様
畠中茂様
速水潔様
林茂樹様
平林克敏様
平野明様
北海道教育委員会様
北海道山岳連盟様
北海道撮影社様
北海岳友会様
北峰岳朋会様
堀内弘知様
星山美弥様
ホテル・アカシヤ様

一原有徳様
憩（いこい）様
池島信吉様
今村朋信様

稲葉英夫様
稲田定重様
石崎貞子様
岩水竜峰様

自治労全道庁本部ご一同様
自治労全道庁教育庁支部様
自治労全道庁札幌総支部ご一同様
自治労全道庁図書館支部様
常慶和久様
加藤彰様
勝山良三様
ＫＫ地崎組様
小林美和子様
小林年様
小島六郎様
黒川篤様

増田秀穂様
三原洋子様
森美枝子様
棟方亮様

中川紘一様
中西喜和男様
日本山岳協会様
岡紀江様
大崎正信様

Ｂ．ランジャン様

酒井昌三様
札幌市役所山岳会様
佐藤中山様
佐藤一良様
沢田宗博様
島田吉之様
清水一行様
清水澄様
清水徹男様
清水敏一様
塩原輝昭様
菅田臣子様
寿原薬粧ＫＫ様
資延憲英様

高橋照様
高橋秀子様
竹沢昭治様
滝口明様
田辺郁男様
谷津公様
督永進様
東京ＡＢＣ様
東京都山岳連盟様

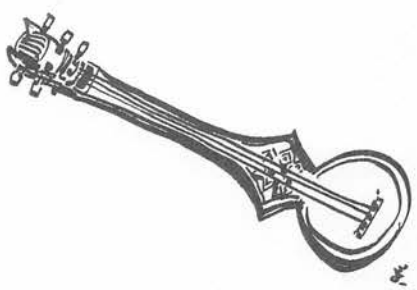
山田雅昭様
山本秀夫様
山本武様　北海道教育委員会職員ご一同様
山里寿男様
米山利男様
吉永定雄様
吉沢一郎様

# 英 文 梗 概

Expedition of Kanjiroba Himal

——Climbed Mt. Kanjeralwa——

by Fumihito Watanabe



# Expedition of Kanjiroba Himal
## - Climbed Mt. Kanjeralwa -

by Fumihito Watanabe

Within the range of materials at hand, Kanjiroba, the main peak, was supposedly 7,043m high, and Kangde Hiunchuli 7,000m high, at the time we - 1973 Japan Kanjiroba Expedition - set Kanjiroba Himal as our goal. A map of those days showed us much of the space left unprinted. It seemed really mysterious to us that the area remained with unconquered peaks of 7,000m height class and unknown mountains.

But later when another map made by Mr. Tyson, an Englishman, was recognized, height of the peaks in those areas was totally lowered to below 7,000m. In 1970, Osaka City University Himalayan Expedition succeeded for the first time in conquering the main peak of Kanjiroba Himal in their unique plan of crossing over Patrashi Himal. And in 1971, Himalaya Expedition of Osaka Prefecture Alpine Federation succeeded in the first ascent of unnamed peak, which had been in question to be the second highest in the eastern part of the area. They named it Tso Kharpo Kang. These two glorious successes helped to make clear more about the veiled Kanjiroba Himal.

When we were told of the latter success, we brought focus onto Kanjeralwa, for the height of the peak is next to the main peak and much of the mountainous area untouched. Frankly speaking, we felt somewhat sorry to hear that there was a party already approached to the eastern part of Kanjiroba Himal. But Kanjeralwa was constantly fascinating and mysterious to us, because it still remained a group of virgin peaks including an unsurveyed valley named Pung Phung Khola.

At first, we had no idea of the shape of the mountains or what they are made of. Later, we could know the condition of the upper part of mountains in the photographs offered by Mr. Sawada of Osaka City University Himalayan Expedition, and Mr. Abe and Mr. Yoshinaga of Himalaya Expedition of Osaka Prefecture Alpine Federation, however, we could not know at all about the lower part but to infer about the climbing route or the Base Camp site from the materials about the two valleys on the south face given by Mr. Abe and Mr. Yoshinaga. We were scheduled to climb from this face, including investigation around Pung Phung Khola valley, though it turned out to be impossible or almost difficult on-the-spot survey. Therefore, we had to attack the summit from the ridge placed between the two above-mentioned valleys. About an approach to Dhorpatan we were thinking of a chartered airplane as our transportation means, and to make a caravan then afterwards.

However, there was a pass on its way about 4,500m high and it seemed impossible to fly over there in a pre-monsoon season. That compelled us to start and return from Jumla.

It was March 12 when we entered Kathmandu, we were the last expedition in the pre-monsoon season. It is said that an import licence has been needed for a portable baggage since this year, and took another day to finish these customs clearance.

We had to carry to Jumla with twelve people including six members, a liaison-officer, sherpas and baggage weighting approximately 1.5t. We dealt with twice of a chartered plane of Twin Otter (cost about $67 for one time), capable of 1.1t. and another twice of regular lines (Monday, Tuesday). The regular line costed 360 Rs for one person but was reduced to 26 Rs on its way back from there.

Mr. Chotare became our liaison-officer, who once served as a Sardar Of JAC Everest Expedition in 1970. We enjoyed ourselves with this good fortune. He was but also a sherpa I trekked with 5 years ago in Solo Khumbu district. So it was a happy reunion for me, too. He entered an army this year and became a second lieutenant in charge of training mountain soldiers. We were helped so much by the way he used to think things on the standpoint of a party and he worked harder than that of Sardar. This often becomes a problem which many parties have to confront with about a liaison-officer. This is a story taken place afterwards. We gave him unnecessary mountaineeing equipment all we had after the expedition. We hoped to be of some help to make his dream come true of establishing a mountaineeing training school for sherpas. Good sherpas will benefit us, all of the expedition, in the long run. I want to ask other expeditions of doing in the same way, if I am allowed to use some space here for it.

Our party were divided into two groups and flew to Jumla on March 21. We hired 52 porters at Jumla. Head of porters demanded us to supply food plus 15 Rs of daily wages, so we convinced them of additional 2 Rs.

On March 23, the caravan started. On March 26, we got to Kaigaon, a historical place in Kanjiroba Himal mountaineeing, through Kumri, Munigaon, Chotta, Maure La, and Rimi, without causing any troubles with the notorious Jumla porters. Villages on its way were poor as we had expected. They sold only eggs except potatoes. On our way at Maure La, 3,600m high, much snow was left on its northern side, however, we passed there without difficulty while the snow was firm in the early morning.

Entering from Kaigaon to Garpung Khola and thence to cross over Kagmara La was nearer, however, to cross over a pass 5,100m

high would be rather difficult if after in May. We came to Tibrikot after crossing Balangra La (3,900m). We had to stay there for another day to exchange some porters who insisted on saying that they would go back by all means. Then they requested us to raise wages because the price of food materials would cost higher after there. We agreed to pay 17 Rs for a day.

On March 31, we arrived at the junction of Suli Gad through Para, Ruma, without stopping by Dunei. The road from Suli Gad was really a narrow and rough one, winding up and down along valleys. We were relieved when we got to the junction of Dojam Khola. Ringmo is near at hand from here. After a long journey, we enjoyed the evening camping out in an open field. In front commanded a magnificient view of the needle of Fluted Peak. Kanjeralwa invisible from here, though, it came in sight in the distance while on our way to Suli Gad.

On April 4, we met with the reconnaissance party preceded from Tibricot, at the foot of a middle ridge between Zarazan Khola where we later located B.C.(3,700m high), and Naure Khola. Thus we put an end to the lengthy caravan.

As I said above, we were supposed to reach the top from Pung Phung Khola. For this purpose, the reconnaissance party was sent to see its possibilities. The result was as follows:

1. Pung Phung Khola is an open ravine giving an impression of somewhat light.
2. Mountains sorrounding are composed of rocks and ice, and the west face of Kanjeralwa alone forming Himalayan creases.
3. Gully reaching from the col between the summit and the pinnackle is so steep and dangerous on account of a threatening avalanche from upward.
4. There is one way to come out to the ridge way by approaching from a branch stream, though it is too far to reach the summit.

The reconnaissance party entered Naure Khola seeking further possibility, however, retreated because of hindrance of gorge. Moreover, they ascended the middle ridge between Naure Khola and Zarazan Khola. They went up as far as the point (later C1), where the huge ridge changed to a craggy ridge. There at first, they commanded a whole view of Kanjeralwa. Two routes were set to reach the upper ice-wall. One was to go on the craggy ridge reaching up to the ice-wall. The other was to descend down to the fountain-head of Naure Khola on its halfway on the craggy ridge, and then break through the icefall blocking overhead.

On the other hand, Zarazan Khola seemed almost impassable as a route because it was covered with a huge Slab at the upper part and with a conspicuous gorge at its lower part.

When we thought of climbing from the Pung Phung Khola side,

we were to use the route above-mentioned in number 3. But as this turned out to be impossible, we could but to choose the other way. And that, even if we reached the ridge from the branch stream as is said in number 5, the precentage to win success by traversing a lengthy knife-edge would be by no means large. After all, I decided to adopt the middle ridge route expecting surer success. But I regret to say that there was no glacier nor mountains around the B.C.

On April 7, all the members with 25 porters except sub-leader at B.C., started for C1. The show of yesterday was entirely disappeared, though, it was uneasy to walk on a steep slope. Mr. Chotare heading before porters, opened the way by cutting bush with a hatchet in his hand called "Kukuri".

Going up a steep alope, and ascending to the left on a vast ridge, we stood on the side near Naure Khola to find Kanjeralwa right before our eyes. Apparently, I judged I could manage, however, I could not catch sight of the craggy ridge in question from here. We pitched a provisional C1, where the grass ridge changed to a rocky one. I with Mr. Chotare and sherpas went back to B.C. and the other members including the cook stayed at C1.

On April 8, members stayed at C1 made a route on the ridge to C2. The sub-leader and all sherpas went up to C1. On the occasion of communication at noon, we were suspended by a violent thunder for a time. The thunder often annoyed us since then. On April 9, we moved the provisional C1 (4,600m high) slightly upward, at the same time we continued route finding to C2. In a communication in the evening, they transmitted to us that the craggy ridge was fragile and technically difficult to climb, and that they would like to change to explore the Naure Khola side. Next day, members of C1 were exchanged to each other properly. One party moved C1 upward, and the other explored the Kar at the fountainhead of Naure Khola.

After a communication, we decided to establish C2 at the upper part of Naure Khola and to take a route on the icefall. As I was recovering from my old sprain, I ascended to C1 the next day.

On April 11, Kyogoku, Goshima, and Mingma Tenzing moved up to the provisional C2. The rest of the members transferred to C1. When they all finished moving, I arrived at C1. Soon I climbed up a small peak above C1 to see the condition. I could see a small provisional C2 below my eyes, with an icefall hanging over it. It really seemed rough. On the other hand, the craggy ridge seemed certainly fragile as they said, though, I found out that they gave up advancement at about a half of a 2 kilometer craggy ridge in full length. This was a result of mistaken routing without making exploration beforehand.

Therefore, we, including Sardar, tried to climb the craggy ridge again, considering to choose difficulty for safety rather than danger in an icefall. Kyogoku and the other member stayed at the provisional C2 reconnoitered around the gully to find a route to the gap of the craggy ridge.

The next morning, Kyogoku communicated to me that as the gully was full of falling rocks, so they changed to explore the ice-fall. The party of sub-leader, Sakamoto, Sardar and Pasang reached to the lower part of the ice-wall unexpectedly early at 1p.m. after climbing up on the craggy ridge. The other icefall exploration party tried hard, however, they had to return to C2 because of a crevasse on their way upward.

This brought about a conclusion of the route-finding. Even if we got over the crevasse of an icefall in a short time, this route would need an extra camp and there was no telling when the icefall itself would break down. On April 13, Sakamoto who experienced a new altitude yesterday were feeling bad. I descended to B.C. with him. The other people remained taking for a rest.

Next day on April 14, we moved the provisional C2 (4,900m high) in Naure Khola to on the craggy ridge. Three members stayed there at C2 except Goshima who descended to C1. Hattori and Sardar continued route-making. I went up to C1. A snowstorm towards the evening.

On April 15, the three stayed at C2 extended the route to the scheduled C3. Members at C1, after loading up to C2, descended to B.C. with Chotare who came up to C1 in the afternoon. Sakamoto recovered and entered C1.

On April 16, Kyogoku and Nomura reinforced the route to C3, descending to B.C. later. Mingma Tenzing returned to C1 from C2 to load up to C2. Sakamoto and three sherpas tayed at C2. The next day, the four members of C2 established C3 (5,300m high) and Sakamoto and Sardar stayed there. Two sherpas loaded twice up to C3 from C2. Hattori and Goshima entered C2 from B.C. I returned to B.C. On April 18, Sakamoto and Sardar explored a route to C4. The four members at C2 went up and down between C2 and C3 to carry loads up. Kyogoku and Nomura ascended to C1. I explored Zarazan Khola with Mr. Chotare whether it was unable for porters as their descent route, but abandoned because it needed some more construction.

On April 19, Hattori and Goshima at C2, including Sardar at C3 conducted reconnaissance around C4 (5,800m high) and its upper part. Sakamoto regained C2. Kyogoku and Nomura went up to C3. Mingma Tenzing and Passang went to and fro between C2 and C3. I to C1.

On April 20, Kyogoku and Nomura started to make a route to the upper part of C4. We loaded up to C4 from C2 and C3. This evening, I decided the first attacking members and the second ones.

To make certain of success I combined the members and sherpas strong in altitudes. Those sherpas were technically well-trained. Thus, I organized the first attacking party by some members in good physical condition and sherpas. They were Kyogoku, Goshima, Sardar and Mingma Tenzing. The second party with Hattori, Nomura, Sakamoto and Passang.

The following on April 21. The first attacking party of four entered C4 receiving support by the second party, and then started to make their way upward.

On April 22, the first attacking party started C4 at 6 a.m., awaiting till the wind fell. Yesterday's steps cut were almost unseen in snow, though, they went on the way until they reached the end of the fixed rope at &:30 a.m. Hereafter, they chose a route to the left on an icefall seemingly in a good condition. They continued to climb, looking in their back with Churen Himal and Putha Hiunchuli that had just been brightened in the morning sun. Before long, they were hindered their way by a huge crevasse.

The snow-bridge over the crevasse was cut off in the way. It didn't reach to the other side. There was no way but to walk on it, so they did.

After that, they wound to the right greatly to climb the lower part of an ice-wall. Again they came out on a ridge. The craggy tower beside C1 was visible afar off. After ascending a small ice-wall, they appeared on a spacious snow field, noticing a peak looking like the summit in the back.

They reached the peak in a cloud just started to grow, however, the real peak was far inside. After crossing over a small crevasse, then climbing an ice-wall, they finally reached the summit at 12:30.

They spent half an hour at the summit, then tried hard to descend to C3 in a snow just began to fall. The second attacking party was awaiting at C4, prepareing for the tomorrow.

On April 23, despite in a bad weather and in no visibility, the second attacking party achieved success. The first party unloaded a part of equipment to C1.

The following on April 24 and 25, we had porters ascend to C1 again and finished withdrawal of everything.

On April 28, we entered Pung Phung Khola. From the junction of Naure Khola, traces were left windingly on the broad ridge ranging from the Pinnacle. In summer they put yak to grass and the way must be made before it is known. The purpose of investigation of Pung Phung Khola was whether it was easy to cross over to Phoksundo Khola from Pung Phung Khola.

Spring had already come in the open and light Pung Phung Khola and the snow was entirely faded away if compared with the time of the first investigation. We walked about three hours from the junction, the path along the left side vanished in a stream.

Two branch streams came in from the ridge stretched from Kanjeralwa. Around the junction was large and covered with debris. At a distance from here there was a big lake, reflecting creases of the west face of Kanjeralwa. On the east of its lake, that is, on the left bank of the valley, to find a tectonic earth was an unexpected discovery.

The stream from the lake disappeared on the earth and a heap of dried rocks were burying the valley. In front, Wedge Peak and unnamed peaks of 6,000m class were towering. There are two lakes above and three in all in this valley.

After about an hour's walk from the lake, Pung Phung La stretched to a col with a snow on a slope of moraines which was not so steep. It seemed easy to climb. The route to the col of Jagdula Khola appeared rather tough with a sharp icefall at the lower part. Towering Fluted Peak was full of icefalls here and there and seemed to be considerably tough, too, though, never seemed impossible. Anyway, Pung Phung Khola was really a beautiful valley sorrounded by rocks, iced peaks unconquered and three lakes.

Weather became worse. As I was afraid of the return flight, we left B.C. On May 2 and set out for caravan. We took a different way via Kagmara La to go back. Snow was fairly deep. So I negotiated with Head of porters of Pungmo to get Jumra in a week with eight days wages (17 Rs a day). After all I was settled with ten days wages.

It's impossible to cross over Kagmara La in a day. A narrow valley at first became gradually opened and took a whole day to reach a pleasant pasture called Korokusan among mountains. The way ahead was completely covered with remaining snow and debris, and indeed a pass above 5,000m. Porters from Pungmo worked very hard. In the morning of May 5, we could arrive at a village Hurikot near Kaigaon, even if there were rainy days or the days when we couldn't work fully because of snow blindness. The natives seemed to pronounce it "Yurikot".

Hence the road parted from Garpung Khola. We trod on a ridge way looking down on Kaigaon and Rimi to the left. From between the two passes of Naire La, and Gotei La ranging from Maure La, where we had to make efforts to climb on our way, commanded Chaurkot below our eyes. Standing on Gotei La, I could see Ghythumba towering shapely in the distance, and Choruta Khola flowing in a broad field in its back.

Further steps on a pleasant road along Choruta Khola led us to the junction of Maure La, where we came across the same course we had once came. It was 6th day, on May 7, when we arrived at Jumla.

# 編　集　後　記

一つのエクスペディションが終ったとき、何らかの転機を迎えることが少なくない。この隊もそうであった。帰国してしばらくは、報告会、写真のまとめ、仮報告書づくりなど一連の定形通りの作業のあと、二、三の隊員に環境変化があったこともあって全体の総括が遅れやや長い自由な時間の経過を見た。それは結果的に今後に対処するための道標づくりの機会にもなった反面、自分たちの行為を冷静に見返すことにもなった。報告書についてもその意義づけや性格づけなどの点で意見の集約に若干の時間を必要とした。　エクスペディションの体験者が増え、多くの報告書が出版されている今日、単に６０００m峰に登頂したという報告では意味が乏しいことも事実であった。もう一度自分たちのスタートをふり返ってみて今後海外登山をおこなう人たちが、どういうデザインのもとにどういう準備を進めたらよいかという課題を設定し、できるだけ生の資料を提供することに意味を見出したのであった。この報告書で、研究段階の諸作業のプロセスを掲げ、現地での生の声を収録しまた各項で計画と実際の相違を示したのもそのためであるが、結果は意図通りに課題を明確にできたかどうかは疑問の残るところである。

この間、隊員の動きも活発であり、京極、野村はソ連のカフカズ、アラスカのブラックバーンに出かけて成果を挙げ、坂本は今後のより大きな計画に歩を進めるなど、このカンジロバの意欲と成果をさらに拡張していることは、今回のエクスペディションが登山を目ざす者の一つのステップであるという最初の考え方を実証するものであり、嬉しく思うとともになお今後が楽しみである。また日本ヒマラヤ協会としても、北海道地区例会で数回にわたって結果の報告や討議をおこなったが、その後、本部としても1974年ラムジュン、1975年ガルワールなど、研究から実践へと地道ながらも着実に歩んでおり、今後より大きな目標へと向かうことになろう。

私の個人的な感慨として、この報告書をもって計画から事務局、留守番という一連の役割を終了するわけであるが、実現への過程の中で発生してきた多くの障害の中で得た皆さまの支えは、その克服以上に大きな精神的な力を与えてくれるものであった。その方々へこの報告書をもってお礼の意を表わすことができることを隊員とともに喜びとする次第である。

（阿　部　　淳）

遠征の余韻がさめればさめるほど、つまり時がたつにつれて、私の遠征の主観的評価が相対的に冷静化されてきたのであった。

たかだか6000$m$クラスの山に、何もおおげさぶって「報告書」なるものを出さなくたっていいんじゃないか、当時は未知の要素が大であったが、その後、日本隊ばかり数隊も入っている、いまさら“知られざるカンジロバ”でもあるまい、こんな思いが怠惰な私を一向に報告書作成に向かわせなかった。

しかし、報告書を発行し、私達の登山について詳細を知っていただくことにお世話になったかたがたへの礼儀でもあるし、それに、自分達自身にとっても必要なことである。いろいろ思い直して本気になってとりかかったが、それはもう1975年の暮になっていた。

内容の大要と、執筆者はとっくに決めていたから、あとは原稿の催促と私の担当分を書くだけであったが、なかなか簡単には進まなかった。

ものを書いたり整理するのは、余韻のあるうちでなければ、覚めた眼でみつめすぎるので、なんとも客観的になりすぎるのであろうか。

最初に意図したものと、大要はそう変っていないはずなのだが、できあがった中身は相当に薄くなっていることは否めない。それもこれも、いろんなことを口実に、刊行を遅らせてしまったのは私の責任である。

（渡　辺　文　仁）



# カンジェラルワ初登頂
## 1973年カンジロバ・ヒマール遠征報告書


発　行　1976年10月10日
発行所　日本ヒマラヤ協会（Himalayan Association of Japan）
東京事務所　〒164 東京都中野区中央3丁目45—18　沢本ビル1F　振替　東京6—164655
名古屋事務所　〒468 名古屋市天白区一つ山1丁目44—7　振替　名古屋21645
発行者　柴田金之助
編集　渡辺文仁　阿部淳
編集協力　北海道コスモ舎・中川勝　HAJ・沖允人
印刷所　(資)岐阜タイプライター　〒500 岐阜市高野町3—10

## 入会のおすすめ

日本ヒマラヤ協会は下記のような主旨に基づき、各種の行事を計画しております。わが会の主旨にご賛同いただき、日本ヒマラヤ協会の会員に加わっていただきたくご案内申し上げます。入会申込書に必要事項をご記入の上、入会金・年金をそえて**名古屋事務所**までご送付下さればすぐ、会則その他参考資料をお送りいたします。
年令・性別・経験を問いません。
名古屋事務所 〒468 名古屋市天白区一つ山1丁目44−7 TEL (052) 801−4414 振替名古屋21645番

日本ヒマラヤ協会会則（抜すい）

第3条　本会はヒマラヤをあらゆる分野において理解し、その活動を基にしてヒマラヤ地域の国と日本の文化交流と協力および親善に寄与することを目的とする。

第7条　会員を分って下記の二種とする。

(1) 普通会員，入会金2,500円および会費4,000円を納める者。ただし夫婦会員の入会金は3,000円とする。（会費は月刊誌「ヒマラヤ」の年間購読料に当てます）

## HAJ出版物リスト

※印在庫あり

| 資料名 | 発行日 | 判型 | 頁数 | 頒価 | 編・著者 |
|---|---|---|---|---|---|
| ＜ヒマラヤ・ライブラリー・シリーズ＞ | | | | | |
| (1) ネパール王国旅行案内　初版 | 44. 5. | B6 | 36 | 200 | 沖允人 |
| (2) ネパール王国旅行案内　第2版 | 45. 6. 25 | B6 | 36 | 200 | 〃 |
| (3) カトマンズとその周辺 | 45. 6. 25 | B6 | 50 | 300 | 〃 |
| (4) エベレストの麓へ | 45. 8. 1 | B6 | 95 | 400 | 〃 |
| ※(5) カシミールの街と山 | 50. 5. 15 | B6 | 66 | 600 | 〃 |
| (6) インド・ヒマラヤ・トレッキング | 49. 5 | B6 | 39 | − | AIR INDIA |
| ※(7) ネパールの旅 | 50. 11. 1 | B6 | 66 | 600 | 沖，佐々木正 |
| ＜ヒマラヤ研究・シリーズ＞ | | | | | |
| (Ⅰ) 第1回東北ヒマラヤ研究会報告書 | 46. 11. 25 | B5 | 135 | 800 | 稲田定重 |
| (Ⅱ) トレッキングのすべて | 47. 7. 1 | B5 | 163 | 900 | 沖允人 |
| (Ⅲ) ネパールヒマラヤの旅報告（地図1葉つき） | 47. 8. 1 | B5 | 174 | 1,200 | 〃 |
| (Ⅳ) 第2回東北ヒマラヤ研究会報告書 | 47. 10. 1 | B5 | 170 | 1,100 | 稲田定重 |
| (Ⅴ) ブータン研究　200部限定（ガリ版） | 47. 11. 28 | B5 | 123 | 1,000 | 沖允人 |
| (Ⅵ) ワハン研究　200部限定（〃）（谷川哲夫訳） | 47. 12. 15 | B5 | 64 | 800 | 〃 |
| ※(Ⅶ) チベット・ラダック研究 | 48. 9. 1 | B5 | 64 | 1,000 | 〃 |
| (Ⅷ) 第3回東北ヒマラヤ研究会報告書 | 48. 12. 10 | B5 | 168 | 1,400 | 稲田定重 |
| (Ⅸ) EXPEDITION Ⅰ | 49. 10. 1 | B5 | 348 | 2,000 | 山田康雄 |
| ※(Ⅹ) ヒマラヤを歩き、そして登るために | 50. 11. 1 | B5 | 274 | 2,400 | 沖，小島，加賀 |
| ＜紀行・記録・研究・調査・個人的なもの、など＞ | | | | | |
| シェルパリスト　概要 | 48. 3 | B5 | 84 | 600 | 沖允人 |
| ※ シェルパリスト　第2版 | 50. 8. 1 | B5 | 76 | 900 | 山下政一 |
| カシミールの山，HAJ　1971年隊報告 | 47. 3. 20 | B5 | 56 | 600 | 空昌昭 |
| ※ HAJカンジロバ隊帰国報告書 | 48. 7. 20 | B5 | 14 | 300 | 渡辺文仁 |
| 長野ヒマラヤ研究会報告 | 48. 5 | B5 | 22 | 100 | 竹沢昂 |
| ※ 秘境小チベット・ラダック（地図3葉つき） | 50. 8. 1 | B5 | 132 | 2,400 | 沖允人，空昌昭 |
| ※ ヒマラヤの桃源境　ブータン・シッキム・アッサム | 50. 9. 20 | B5 | 159 | 2,200 | 沖允人 |
| ネパールの旅　1968.10〜11　札幌グループ | 44. 10. 30 | B5 | 40 | − | 阿部淳 |
| ヒンズークシュ踏査隊報告 1969富山教職員隊 | 45. 8 | B5 | 91 | 300 | 橋本広 |
| ヒマラヤの旅　第7回ゴラパニグループ | 47. 5. 5 | A6 | 35 | − | 山下政一 |
| ランタン谷 1971.12〜1972.1 冬期踏査隊 | 48. 4. 1 | B5 | 154 | 1,400 | 稲田定重 |
| ラダック日記　1975.7〜8（ガリ版） | 50. 11. 7 | B5 | 34 | − | 石川，宗綱 |

# 日本ヒマラヤ協会（HAJ）出版物（特約書店）

Himalayan Association of Japan（HAJ）

名渓堂（東京）海南堂（京都）アカデミー書店（広島）
成美堂（札幌）

## ■チベットとラダック

西川一三・木村肥佐生・野本甚蔵「チベットの話」
HAJラダック研究会「ラダックの歴史・風習などなど」

（絶版）

B5・64P
1973・9
1,000円
〒200円

## ■第3回ヒマラヤ研・報告

パネル討議「ヒマラヤ登山と事故」「高度順応」ほか
桐生稔「インド・ヒマラヤ諸国をめぐる国際情勢」

（絶版）

B5・168P
1973・12
1,400円
〒200円

## ■ヒマラヤを登り歩くために・第4・第5回ヒマラヤ研・報告

パネル討議高処登山の問題（中島寛、浅見、村井他）
インドヒマラヤの登山、通関、高処ポーター、現地事情

B5・200P
1975・11
2,400円
〒300円

## ■EXPEDITION I

第I部「遠征とは何か…」「遠征をめぐる諸問題」
第II部「実践への試み・ラムジュンヒマール」など

（絶版）

B5・348P
1974・10
2,000円
〒300円

## ■カシミールの街と山

カシミールの旅行・トレッキング案内・スリナガールの観光を中心にまとめたもの・ハンディなポケット判

B6・66P
1975・5
600円
〒100円

## ■シェルパリスト.第2版

ネパールのシェルパで活動している者ほとんど全員をリストアップした。顔写真、登山歴など

B6・76P
1975・8
900円
〒200円

## ■ヒマラヤの桃源境
ブータン・シッキム・アッサム

めずらしい写真と紀行を中心にまとめた楽しいものダージリン周辺のトレッキングも含む

B5・130P
1975・8
2,200円
〒300

## ■秘境小チベット・ラダック

インドの北西、チベットの西にある秘境ラダックへ戦後初めて入った記録。民族・歴史など。地図三葉つき

B5・122P
2,400円
〒200円
1975・8

## ■ネパールの旅（新版ガイド）

ネパールを訪れる人のためのガイド
カトマンズの街や周辺の旅行案内

B6・65P
1975・11
600円
〒100円

## ■月刊誌「ヒマラヤ」

ヒマラヤ情報がいっぱい。毎月一日発行五〇〇円〒五〇円

問合せ　日本ヒマラヤ協会名古屋事務所
〒四六八名古屋市天白区一つ山一丁目四四―七　振替名古屋二一六四五番